

志木市遺跡群 9

中野遺跡第43地点
富士前遺跡第15地点
田子山遺跡第47地点
田子山遺跡第48地点
田子山遺跡第49地点
中道遺跡第41地点
城山遺跡第34地点
城山遺跡第35地点
西原大塚遺跡第36地点

1999

埼玉県志木市教育委員会



城山遺跡128号住居跡出土の緑釉陶器・布目瓦



城山遺跡128号住居跡出土の銅印



城山遺跡130号土坑（铸造土坑）



城山遺跡134号土坑（溶解炉）



発掘調査風景



127号住居跡遺物出土状態



城山遺跡第34地点の調査区全景



富士前遺跡第15地点

はじめに

志木市教育委員会
教育長 秋山 太藏

現在、志木市における周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の数は、平成5年度に新規に登録された大原遺跡を加え、16遺跡にのぼります。

本来、これらの貴重な文化財は現状のまま後世に伝えるのが望ましいのですが、土木工事等で現状保存が困難な場合は、代替措置として記録保存のための発掘調査を行うことになっています。

しかし、事業者が個人であって、その人が専用に用いる住宅建設などは、その発掘調査の費用負担などについて、困難な問題がありました。そのため、志木市では、1987（昭和62）年度から国庫及び県費の補助金の交付を受けて調査を進めております。

平成8年度は、確認調査・発掘調査を併せ、19地点の調査を実施しました。そして、本書は、この平成8年度に実施しました市内の個人専用住宅建設に伴う発掘調査の成果を調査報告書としてまとめたものです。

今回は、城山遺跡の平安時代の住居跡から「冨」という文字が刻まれた銅製の印章が出土したことや文献には登場してこない近世の鋳造遺構が初めて発見されたことが特筆すべき発見につながりましたが、他にも多くの貴重な発見が相次ぎました。

これにより、志木市の歴史にまた新たなる1ページが追加されたことは大変喜ばしいことであり、同時に本書が郷土の歴史研究のために広く活用されますよう切に願っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、ご指導ご協力いただきました文化庁、埼玉県文化財保護課及び関係者、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の多くの方々に対し、心から厚くお礼申し上げます。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市内に所在する遺跡群の、平成8年度の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び整理作業は、志木市教育委員会が主体となり、国庫及び県費の補助金の交付を受け、平成8年4月1日より平成9年3月31日まで実施した。
3. 本書の作成において、執筆は尾形則敏・深井恵子が分担して行い、編集は尾形が行った。なお、城山遺跡第35地点の鑄造関連の遺構・遺物については、東京国立博物館の原田一敏氏、時枝 務氏、埼玉県埋蔵文化財事業団の赤熊浩一氏、瀧瀬芳之氏、嵐山町教育委員会の村上伸二氏からご教示を賜った。中・近世の遺物全般については、野沢 均氏からご教示を、さらに第11章3は玉稿を賜った。

尾形則敏 第1章、第2～4・7～10章第1節・第2節の遺物、第10章の鑄造関連、第11章
深井恵子 第6章、第2～4・7～10章第2節の遺構（第10章の鑄造関連は除く）

4. 富士前遺跡第15地点・中道遺跡第41地点・城山遺跡第35地点の自然科学分析については、下記の方々に依頼し、その結果を付編に併載するものである。

西本豊弘（国立歴史民俗博物館） 新山雅広（株式会社パレオ・ラボ）
植木弥生（株式会社パレオ・ラボ）

5. 遺物の実測は、尾形・深井の指導の下、太田敦子・鎌本あけみ・高田美智子・星野恵美子・松浦恵子が行い、遺構・遺物のトレースは深井が行った。写真撮影は尾形が行った。
6. 本書の遺構・遺物の挿図版の指示は、以下のとおりである。

○挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

○遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。

○ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また同一遺構内にあるピットでも、おそらく後世のピットと思われるものには、数値を省略した。

○遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示し、その番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する

○遺構の略記号は、以下のとおりである。

Y = 弥生時代末葉～古墳時代初頭の住居跡 H = 古墳時代・平安時代住居跡 D = 土坑
M = 溝跡 W = 井戸跡 P = ピット

○遺物挿図版中の網点スクリーントーンは、以下の内容を示す。

土器…赤色顔料の範囲を示すが、遺物番号下に黒彩とあるものは、黒色土器の黒彩範囲を示す。

陶器…平安時代の灰釉・緑釉陶器の施釉範囲、中世陶器の施釉範囲を示す。

鑄型…城山遺跡第35地点の鑄造関連の鑄型では、還元され灰色に変色した部分の範囲を示す。

7. 調査組織

調査主体者 志木市教育委員会（生涯学習課文化財保護係）

教 育 長 秋山 太蔵

教育総務部長 川目 憲夫

生涯学習課長 鈴木 重光

生涯学習課長補佐 尾崎 健市（～平成10年3月31日）

文化財保護係長 岡本 孝（～平成9年3月31日）

文化財保護係長 関根 正明
文化財保護係主査 佐々木保俊
文化財保護係主任 清水あや子
文化財保護係主任 尾形 則敏

志木市文化財保護委員（5名）

神山健吉（委員長）・井上國夫（副委員長）・尾崎征男（～平成10年3月31日）・高橋長次・
高橋 豊・内田正子

8. 発掘調査及び整理作業参加者

○田子山遺跡第48地点

調査担当者 佐々木保俊
発掘調査員 内野美津江
発掘協力員 大平祐子・砂川はる子・高杉朝子・永井真理・二階堂美知子・久留浪子
整理協力員 鎌本あけみ・高田美智子・星野恵美子・松浦恵子

○中野遺跡第43地点 富士前遺跡第15地点 田子山遺跡第47・49地点 中道遺跡第41地点 城山遺跡
第34・35地点 西原大塚遺跡第36地点

調査担当者 尾形則敏
発掘調査員 深井恵子
発掘・整理協力員 太田敦子・鎌本あけみ・高田美智子・星野恵美子・松浦恵子・丸山恵美子

9. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った 記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課・埼玉県立博物館・埼玉県立歴史資料館・埼玉県立さきたま資料館・朝霞市教育委員会・新座市教育委員会・和光市教育委員会・朝霞市博物館・富士見市立考古館
志木市立郷土資料館・志木市立志木第三小学校・志木市立宗岡小学校

浅野晴樹・荒井幹夫・石井 寛・飯田充晴・井上洋一・上田 寛・梅沢太久夫・江原 順・柿沼幹夫
加藤秀之・片平雅俊・隈本健介・小出輝雄・肥沼正和・小滝 勉・小島清一・小宮恒雄・笹森健一・
斯波 治・鈴木一郎・鈴木重信・鈴木敏則・隅田 眞・高橋 学・田中広明・照林敏郎・時枝 務・
並木 隆・根本 靖・野沢 均・原田一敏・早坂廣人・廣田吉三郎・福田 聖・藤波啓容・牧田 忍
松本 完・松本富雄・水口由紀子・三田光明・村上伸二・山田尚友・和田晋治

中野遺跡第43地点（開発主体者 個人）

富士前遺跡第15地点（開発主体者 個人）

田子山遺跡第47地点（開発主体者 個人）

田子山遺跡第48地点（開発主体者 個人）

田子山遺跡第49地点（開発主体者 個人）

中道遺跡第41地点（開発主体者 個人）

城山遺跡第34地点（開発主体者 個人）

城山遺跡第35地点（開発主体者 個人）

西原大塚遺跡第36地点（開発主体者 個人）

目 次

はじめに

例言／目次／挿図目次／表目次／図版目次

第1章 平成8年度の調査成果	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 調査に至る経過	4
第2章 中野遺跡第43地点の調査	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 検出された遺構と遺物	8
第3章 富士前遺跡第15地点の調査	16
第1節 遺跡の概要	16
第2節 検出された遺構と遺物	17
第4章 田子山遺跡第47地点の調査	22
第1節 遺跡の概要	22
第2節 検出された遺構と遺物	23
第5章 田子山遺跡第48地点の調査	28
第1節 遺跡の概要	28
第2節 検出された遺構と遺物	28
第6章 田子山遺跡第49地点の調査	33
第1節 遺跡の概要	33
第2節 検出された遺構と遺物	33
第7章 中道遺跡第41地点の調査	38
第1節 遺跡の概要	38
第2節 検出された遺構と遺物	39
第8章 城山遺跡第34地点の調査	45
第1節 遺跡の概要	45
第2節 検出された遺構と遺物	46
第9章 城山遺跡第35地点の調査	59
第1節 遺跡の概要	59
第2節 検出された遺構と遺物	60
第10章 西原大塚遺跡第36地点の調査	93
第1節 遺跡の概要	93
第2節 検出された遺構と遺物	94
第11章 ま と め	104

付 編 自然科学分析

I. 富士前遺跡第15地点の1号住居跡出土炭化材の樹種同定	113
II. 富士前遺跡第15地点から出土した大型植物化石	115
III. 中道遺跡第41地点の23号住居跡出土炭化材の樹種同定	117
IV. 中道遺跡第41地点から出土した大型植物化石	119
V. 城山遺跡第35地点から出土した炭化材の樹種同定	120
VI. 城山遺跡出土動物遺体	126

挿 図 目 次

第1図	市域の地形と調査地点 (1/20000) ……	2	第45図	125号住居跡出土遺物 (1/4・1/3) ……	49
第2図	周辺の地形と調査地点 (1/5000) ……	7	第46図	126号住居跡 (1/60) ……	52
第3図	遺構分布図 (1/200) ……	8	第47図	126号住居跡出土遺物 (1/4・1/3) ……	53
第4図	64号住居跡 (1/60) ……	8	第48図	127号住居跡 (1/60) ……	54
第5図	64号住居跡カマド (1/30) ……	9	第49図	127号住居跡出土遺物 (1/4・1/3) ……	54
第6図	64号住居跡遺物出土状態 (1/60・1/9) ……	9	第50図	129号土坑 (1/60) ……	56
第7図	64号住居跡出土遺物 (1/4) ……	10	第51図	遺構外出土遺物 (1/3) ……	56
第8図	2号井戸跡 (1/60) ……	12	第52図	遺構分布図 (1/100) ……	59
第9図	包含層出土遺物 1 (1/3) ……	13	第53図	4号住居跡 (1/60) ……	61
第10図	包含層出土遺物 2 (1/3) ……	14	第54図	4号住居跡出土遺物 (1/3) ……	61
第11図	周辺の地形と調査地点 (1/5000) ……	16	第55図	128号住居跡 (1/60) ……	63
第12図	遺構分布図 (1/200) ……	17	第56図	128号住居跡カマド (1/30) ……	63
第13図	1号住居跡 (1/60) ……	18	第57図	128号住居跡出土遺物 (1/4・1/3) ……	64
第14図	1号住居跡遺物出土状態 (1/60・1/9) ……	19	第58図	129号住居跡 (1/60) ……	66
第15図	1号住居跡出土遺物 (1/4・1/3) ……	20	第59図	129号住居跡遺物出土状態 (1/60・1/9) ……	67
第16図	周辺の地形と調査地点 (1/5000) ……	22	第60図	129号住居跡出土遺物 1 (1/4) ……	68
第17図	遺構分布図 (1/200) ……	23	第61図	129号住居跡出土遺物 2 (1/4・1/3) ……	69
第18図	51号住居跡 (1/60) ……	23	第62図	130号住居跡 (1/60) ……	73
第19図	52号住居跡 (1/60) ……	24	第63図	130号住居跡出土遺物 (1/4) ……	74
第20図	住居跡・遺構外出土遺物 (1/4) ……	25	第64図	土坑 1 (1/60) ……	76
第21図	住居跡出土鉄製品・石製品 (1/3) ……	25	第65図	土坑 2 (1/60) ……	77
第22図	203号土坑 (1/60) ……	26	第66図	土坑出土遺物 (1/4) ……	77
第23図	遺構外出土遺物 (1/3) ……	26	第67図	16号井戸跡 (1/60) ……	78
第24図	遺構分布図 (1/200) ……	28	第68図	鋳造関連の遺構・遺物分布図 (1/80) ……	79
第25図	53号住居跡 (1/60) ……	29	第69図	130号土坑 (1/30) ……	81
第26図	53号住居跡遺物出土状態 (1/60・1/9) ……	29	第70図	132号土坑 (1/30) ……	81
第27図	53号住居跡カマド (1/30) ……	30	第71図	130号土坑出土遺物 (1/3・1/6) ……	82
第28図	53号住居跡出土遺物 (1/4) ……	31	第72図	132号土坑出土遺物 (1/3) ……	84
第29図	遺構分布図 (1/200) ……	33	第73図	134号土坑 (1/30) ……	85
第30図	54号住居跡 (1/60) ……	34	第74図	134号土坑出土遺物 1 (1/3) ……	86
第31図	55号住居跡 (1/60) ……	34	第75図	134号土坑出土遺物 2 (1/3・1/6) ……	87
第32図	55号住居跡出土遺物 (1/4) ……	35	第76図	1号ピット・その他の遺物 (1/3) ……	88
第33図	遺構外出土遺物 (1/3) ……	35	第77図	遺構外出土遺物 (1/3・1/4) ……	91
第34図	土坑 (1/60) ……	36	第78図	周辺の地形と調査地点 (1/5000) ……	93
第35図	周辺の地形と調査地点 (1/5000) ……	38	第79図	遺構分布図 (1/200) ……	94
第36図	遺構分布図 (1/200) ……	39	第80図	141号住居跡 (1/60) ……	95
第37図	23号住居跡 (1/60)・カマド (1/30) ……	40	第81図	142号住居跡 (1/60) ……	96
第38図	23号住居跡・1号ピット出土遺物 (1/4) ……	41	第82図	143号住居跡 (1/60) ……	98
第39図	16号溝跡 (1/60) ……	42	第83図	144号住居跡 (1/60) ……	100
第40図	遺構外出土遺物 (1/3) ……	43	第84図	住居跡出土遺物 1 (1/4) ……	100
第41図	周辺の地形と調査地点 (1/5000) ……	45	第85図	住居跡出土遺物 2 (1/3) ……	101
第42図	遺構分布図 (1/200) ……	46	第86図	遺構外出土遺物 (1/3) ……	102
第43図	125号住居跡 (1/60) ……	47	第87図	1号住居跡出土炭化材の樹種分布 (1/40) ……	114
第44図	125号住居跡カマド (1/30) ……	48	第88図	23号住居跡出土炭化材の樹種分布 (1/40) ……	118

表 目 次

第1表	平成8年度調査地点一覧 ……	5	第6表	23号住居跡出土炭化材の樹種同定結果 ……	118
第2表	鋳型の出土状況 ……	80	第7表	イネ炭化胚乳計測値一覧表 ……	120
第3表	1号住居跡出土炭化材の樹種同定結果 ……	114	第8表	城山遺跡第35地点出土炭化材の樹種同定結果 ……	122
第4表	大型植物化石一覧表 ……	115	第9表	城山遺跡第35地点出土炭化材の遺構別出土樹種 ……	123
第5表	イネ炭化胚乳計測値一覧表 ……	116			

図版目次

- 図版1 中野遺跡第43地点
1. 調査区近景 2. 確認調査風景
3・4. 64号住居跡遺物出土状態
5. 64号住居跡 6. 64号住居跡カマド
7. 64号住居跡カマド(掘り方) 8. 2号井戸跡
- 図版2 中野遺跡第43地点
1. 64号住居跡出土遺物 2. 遺構外出土遺物
- 図版3 富士前遺跡第15地点
1. 調査区近景 2. 発掘調査風景
3~6. 1号住居跡遺物出土状態 7. 1号住居跡
8. 1号住居跡貯蔵穴
- 図版4 富士前遺跡第15地点
1号住居跡出土遺物
- 図版5 田子山遺跡第47地点
1. 確認調査風景 2. 発掘調査風景
3. 調査区全景 4. 51号住居跡遺物出土状態
5. 住居跡・遺構外出土遺物
6. 住居跡出土鉄製品・石製品 7. 遺構外出土遺物
- 図版6 田子山遺跡第48地点
1. 発掘調査風景 2・3. 53号住居跡遺物出土状態
4. 53号住居跡カマド
5. 53号住居跡出土遺物
- 図版7 田子山遺跡第49地点
1. 調査区全景 2. 発掘調査風景
3. 205・206号土坑 4. 54号住居跡
5. 55号住居跡・204~206号土坑
6. 55号住居跡貯蔵穴 7. 55号住居跡出土遺物
8. 遺構外出土遺物
- 図版8 中道遺跡第41地点
1. 確認調査風景 2. 発掘調査風景
3~6. 23号住居跡遺物出土状態
7. 23号住居跡炭化種子出土状態
8. 23号住居跡カマド(掘り方)
- 図版9 中道遺跡第41地点
1・2. 16号溝跡 3. 16号溝跡土層断面
4. 23号住居跡出土遺物 5. 1号ピット出土遺物
6. 遺構外出土遺物
- 図版10 城山遺跡第34地点
1. 調査区近景 2. 確認調査風景 3. 調査区全景
4. 125号住居跡貯蔵穴
5. 125号住居跡カマド(掘り方)
6. 126号住居跡貯蔵穴
7. 126号住居跡遺物出土状態
8. 127号住居跡遺物出土状態
- 図版11 城山遺跡第34地点
1・2. 125号住居跡出土遺物
3・4. 126号住居跡出土遺物
5. 127号住居跡出土遺物 6. 遺構外出土遺物
- 図版12 城山遺跡第35地点
1. 確認調査風景 2. 129号住居跡発掘風景
3~5. 129号住居跡遺物出土状態 6. 129号住居跡
7. 128号住居跡 8. 128号住居跡カマド
- 図版13 城山遺跡第35地点
1. 130号住居跡 2. 130号住居跡遺物出土状態
3. 142号土坑 4. 16号井戸跡
5. 130号土坑(精査前)
6. 130号土坑遺物出土状態
7・8. 130号土坑土層断面
- 図版14 城山遺跡第35地点
1~3. 130号土坑遺物出土状態
4. 130号土坑鉄塊出土状態
5. 130号土坑粘土露出状態
6・7. 130号土坑掛木出土状態 8. 130号土坑掘り方
- 図版15 城山遺跡第35地点
1~4. 134号土坑遺物出土状態
5. 134号土坑発掘風景 6. 134号土坑土層断面
7. 134号土坑掘り方 8. 土師質土器出土状態
- 図版16 城山遺跡第35地点
1. 4号住居跡出土遺物 2. 129号住居跡出土遺物
- 図版17 城山遺跡第35地点
1. 129号住居跡出土遺物 2. 128号住居跡出土遺物
- 図版18 城山遺跡第35地点
1. 128号住居跡出土遺物 2. 130号住居跡出土遺物
3. 135号土坑出土遺物 4・5. 141号土坑出土遺物
- 図版19 城山遺跡第35地点
130号土坑出土遺物
- 図版20 城山遺跡第35地点
134号土坑出土遺物
- 図版21 城山遺跡第35地点
134号土坑出土遺物
- 図版22 城山遺跡第35地点
1. 132号土坑出土 2. 1号ピット出土遺物
3. 3号ピット出土遺物 4. その他の遺物
- 図版23 城山遺跡第35地点
遺構外出土遺物
- 図版24 西原大塚遺跡第36地点
1. 調査区全景 2. 141号住居跡炭化材出土状態
3. 141号住居跡遺物出土状態
4. 142・143号住居跡
- 図版25 西原大塚遺跡第36地点
1. 144号住居跡 2. 144号住居跡貯蔵穴A
3. 141号住居跡出土遺物 4. 142号住居跡出土遺物
5. 143号住居跡出土遺物 6. 144号住居跡出土遺物
7. 遺構外出土遺物
- 図版26 富士前遺跡第15地点
1号住居跡出土炭化材
- 図版27 富士前遺跡第15地点
出土した大型植物化石
- 図版28 中道遺跡第41地点
23号住居跡出土炭化材(1)
- 図版29 中道遺跡第41地点
23号住居跡出土炭化材(2)
- 図版30 中道遺跡第41地点
出土した大型植物化石
- 図版31 城山遺跡第35地点
出土炭化材(1)
- 図版32 城山遺跡第35地点
出土炭化材(2)
- 図版33 城山遺跡第35地点
出土炭化材(3)
- 図版34 城山遺跡第35地点
出土炭化材(4)
- 図版35 城山遺跡第35地点
出土炭化材(5)
- 図版36 城山遺跡第35地点
129号住居跡出土動物遺体

第1章 平成8年度の調査成果

第1節 市域の地形と遺跡

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.7 km、東西4.7 kmの広がりを持ち、面積は9.06km²、人口6万4千の自然と文化の調和する都市である。

地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が広がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬岸川の3本の川が流れている。

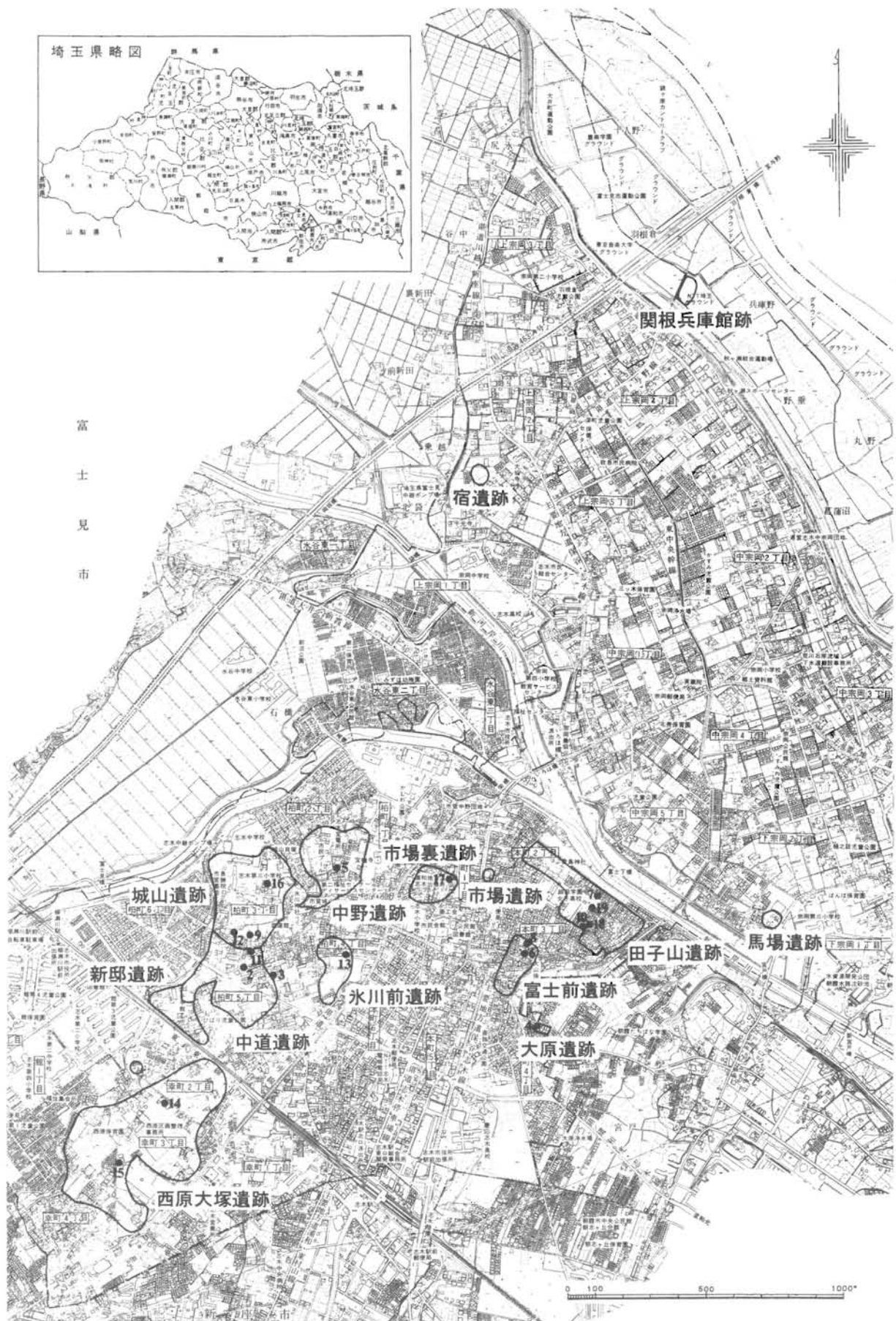
こうした自然環境の中で、西原大塚遺跡をはじめ市域の大部分の遺跡は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に存在している。遺跡は柳瀬川上流から、西原大塚遺跡・中道遺跡・新邸遺跡・城山遺跡・中野遺跡・氷川前遺跡・市場裏遺跡・市場遺跡・田子山遺跡・富士前遺跡・大原遺跡の順に名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡・宿遺跡・関根兵庫館跡のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、市内の遺跡総数は、現在前述した14遺跡に塚ノ山古墳、城山貝塚を加えた16遺跡である（第1図）。

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

志木市内に最初に人が住みついたのは、旧石器時代からで、この時代の遺跡としては、柳瀬川右岸の西原大塚・中道・中野遺跡がある。中道遺跡では、立川ローム層のIV層上部・VI層・VII層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパー・ナイフ形石器や安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。最近では、平成5年度以降区画整理事業に伴う発掘調査が進められている西原大塚遺跡でも、石器集中地点が確認されており、ナイフ形石器をはじめとする石器類が発見されている。これらの資料は、現在整理中である。

縄文時代になると、草創期では、城山遺跡から爪形文系土器1点、田子山遺跡から有茎尖頭器1点が出土している。早期では、田子山遺跡から撚糸文・沈線文・条痕文系土器、富士前・城山遺跡から撚糸文系土器が数点出土している。住居跡としては、西原大塚遺跡の前期黒浜式期のものが最古に位置付けられる。また、黒浜期には新邸遺跡で貝層をもつ住居跡が1軒確認されている。平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。遺跡が最も増加するのは、中期後葉の勝坂式～加曾利E式期である。西原大塚遺跡では、多くの住居跡が環状に配置する可能性のあることが指摘されている。その他、中道・城山・中野・田子山遺跡からも住居跡・土坑などが発見されている。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されているのみである。さらに後期では住居跡も皆無で、唯一遺構から発見される例は、田子山遺跡184号土坑である。この土坑からは、下層から称名寺I式期の土器、上層からII式の特徴をもつ土器が出土している。晩期になると、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では遺跡の空白期を迎えることになる。

弥生時代では、現在のところ、前・中期に遡る遺跡は存在しない。大部分が後期末葉から古墳時代前



第1図 市域の地形と調査地点 (1/20000)

期にかけての遺跡であろうと考えられる。その中で、田子山遺跡21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、志木市史にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。今回の富士前遺跡の報告は、その時のすぐ隣地での調査であった。これにより、古墳時代前期の住居跡1軒が確認され、特に出土遺物としては、東海地方の元屋敷式系統の完形の高坏が出土していることに注目される。西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が200軒近く確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは、全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。また、当時の墓域の可能性として、方形周溝墓が、昭和62（1987）以降、西原大塚・市場裏・田子山遺跡の3遺跡から相次いで確認されており、集落跡との関連の中で今後注目されるであろう。古墳時代前期では、特に西原大塚遺跡10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に、畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する。中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。特に中道遺跡第19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、市内最古のカマドをもつ住居跡として注目される。5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後半から7世紀後葉にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡で比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で120軒を越え、次いで中野遺跡で50軒、中道遺跡で15軒を数える。また、田子山遺跡では、6世紀後半以降に比定できるものと考えられる4.1×4.7mのやや不整形で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、田子山遺跡は、この時代の代表とする遺跡として挙げるができる。この遺跡では、住居跡の他、掘立柱建築遺構、溝跡、100基を越える土坑群が確認されている。遺物としては、土器・灰釉陶器の他、腰帯の一部である銅製の丸柄、鉄製の紡錘車・刀子などが出土している。また、平安時代の城山遺跡128号住居跡からは、印面に「富」1文字が書かれた銅製の印章が出土したことに注目される。この住居跡からはその他、須恵器坏6点、緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点が出土している。中道遺跡9号住居跡出土の猿投産の灰釉陶器（長頸瓶）は、焼成・作り共に逸品である。

中・近世では、柏の城跡、関根兵庫館跡が代表される遺跡である。特に、柏の城跡内での数次にわたる発掘調査により、『館村旧記』にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。また、頭部及び上半部を欠く馬の骨が、土坑から検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）が出土しており、特に、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。さらに、本報告にもあるように、鑄造関連の遺構も検出された。130号土坑については鑄造土坑、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鑄型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。明治時代以降の遺跡では、田子山遺跡の富士塚築造に関連するローム採掘遺構が検出されており、地域研究の重要な資料であると言える。

第2節 調査に至る経過

志木市は、都心から25km圏内に位置し、東武東上線志木駅－池袋間を急行で20分という交通の便に恵まれ、都心近郊のベッドタウンとして発展してきた。近年の都市化に伴い、各種の開発行為も増大してきたが、とりわけ住宅建設の占める割合が高く開発による遺跡破壊が進行する状況にある。また、遺跡の集中する本町・柏町・幸町地区は都市化の最も進展する地域になっていることも遺跡破壊の事態を一層大きくしていると言える。

こうした状況の中、志木市教育委員会では文化財保護行政を進めていくために、埋蔵文化財を保護・保存していくことが重要な課題となっている。しかしながら、開発により遺跡の現状保存が困難な状況であり、記録保存という処置によって対処しているのが現状である。

ここで、志木市における発掘調査の経過を振り返ってみると、まず、1973（昭和48）年に西原大塚遺跡において発掘調査が実施されたのが最初の調査であろう。そして以後、1982（昭和57）年までは、志木市史編さん事業に伴う学術的な発掘調査が実施されていた。1983（昭和58）年には、志木市において遺跡調査会が組織され、1985（昭和60）年には当市にとって最大規模の調査となった城山遺跡第1地点（サンマンション建設工事）の調査が実施された。この調査は、市内における発掘調査体制の本格的組織化の契機となり、以降志木市の埋蔵文化財保護を推進する上で大きな転機となったと言える。

そうした中、当市における開発行為、特に住宅建設については小規模のものが多いことから、こうした小規模の開発にも対応する必要があるがあった。しかし、小規模な開発の当事者は個人で、その個人が専用に使用する住宅の建設についての記録保存の実施については、費用の負担など記録保存を進める上で困難な点が多かった。そのため、1987（昭和62）年以降、国・県よりの補助金の交付を受け、志木市教育委員会を主体とした発掘調査を実施することになったのである。さらに、民間・公共事業を問わず確認調査については、すべて公費で対応し、開発事業者の負担軽減と埋蔵文化財包蔵地の詳細な分布状況の把握を積極的に進めている。特に、発掘調査件数及び面積が、1987（昭和62）年以降急激に増加しているのは、こうした理由によるものと考えられる。

最近では、昭和40年前後の人口増加が始まった頃に建設された個人住宅の建て替えも多くなってきており、平成2年度以来、個人住宅建設に伴う調査件数が増加してきている。また、平成8年度は全体の調査件数及び面積が激減しているが、教育委員会で行った発掘調査の件数については逆に過去最高の8件を越え9件のぼり増加したという現象が生じた。これについては、平成7年度に調査対象区域の見直しを行ったことが影響したものと考えられる。その見直しの内容は、今まで「遺跡の存在する可能性が高い地域」でも発見が全く無かった地域を過去の調査成果により割り出し、その地域については「将来遺跡が発見される可能性ある地域」に変更したというものである。なお、平成9年度より、遺跡の現状保存を目的とするため、遺跡の盛土保存を適用とした制度を導入するに至っている。

平成8年度は、19地点の調査（確認調査17地点、前年度からの継続調査2地点）を実施した。そのうち、志木市教育委員会が実施した発掘調査は9地点で、志木市遺跡調査会が実施した発掘調査は3地点である。

工事内容の内訳件数は、個人専用住宅13件、共同住宅2件、分譲住宅2件、防火水槽設置工事1件、区画整理事業1件である。

番号	調査地点	所在地	面積(m ²)	確認調査日	調査期間	備考
1	西原大塚遺跡 (区画整理事業)	幸町3丁目	1,858.70		平成8年6月13日～ 平成9年3月17日	平成5年度からの継続事業 発掘調査は志木市遺跡調査会が実施
2	中道遺跡 第38地点	柏町5丁目 2950-1・35	1,019.82	平成7年12月8日	平成8年3月13日～ 5月17日	平成7年度からの継続事業 発掘調査は志木市遺跡調査会が実施
3	中道遺跡 第40地点	柏町4丁目 2715-3、1の一部	203.07	平成8年5月15日		遺構・遺物は検出されなかった
4	大原遺跡 第3地点	本町4丁目 1017-1の一部	348.33	5月22日		遺構・遺物は検出されなかった
5	中野遺跡 第43地点	柏町1丁目 1509-4	212.06	5月30日	6月3日～ 6月7日	後述第2章参照
6	富士前遺跡 第15地点	本町3丁目 1859-4	239.63	6月3日	6月4日～ 6月11日	後述第3章参照
7	田子山遺跡 第46地点	本町2丁目 1689-2	125.43	6月4日		遺構・遺物は検出されなかった
8	富士前遺跡 第16地点	本町3丁目 1853-28	108.68	6月11日		遺構・遺物は検出されなかった
9	城山遺跡 第33地点	柏町3丁目 2646-4	30.00	6月12日		遺構・遺物は検出されなかった
10	田子山遺跡 第47地点	本町2丁目 1733-4	114.32	6月12日	6月14日～ 6月19日	後述第4章参照
11	中道遺跡 第41地点	柏町5丁目 2952-4	394.54	6月25日	6月26日～ 7月2日	後述第7章参照
12	城山遺跡 第34地点	柏町3丁目 2640-1	162.00	7月12日	7月15日～ 8月1日	後述第8章参照
13	氷川前遺跡 第7地点	柏町4丁目 2696-2、10	356.55	8月9日		遺構・遺物は検出されなかった
14	西原大塚遺跡 第35地点	幸町3丁目 3231-1他	2,540.00	4月24日～ 4月26日	7月16日～ 平成9年1月9日	発掘調査は志木市 遺跡調査会が実施
15	西原大塚遺跡 第36地点	幸町3丁目 3146-3の一部	248.75	10月11日	10月15日～ 10月25日	後述第10章参照
16	城山遺跡 第35地点	柏町3丁目 2620-1	84.40	11月15日	11月18日～ 12月25日	後述第9章参照
17	市場裏遺跡 第8地点	本町1丁目 2509-8	56.23	11月22日		遺構・遺物は検出されなかった
18	田子山遺跡 第48地点	本町2丁目 1374-31・32	74.15	12月4日	12月9日～ 12月16日	後述第5章参照
19	田子山遺跡 第49地点	本町2丁目 1732-13	133.47	平成9年1月9日	1月13日～ 1月17日	後述第6章参照
合計			8,310.18			

第1表 平成8年度調査地点一覧

[参 考 文 献]

- 志木市史編さん室 1984『志木市史 原始・古代資料編』
1986『志木市史 中世資料編』
1987『志木市史 近世資料編』
1990『志木市史 通史編 上』
- 井上国夫・宮野和明・谷井 彪他 1975『西原・大塚遺跡発掘調査報告書』志木市の文化財第4集 志木市教育委員会
- 佐々木保俊・尾形則敏 1985『西原大塚遺跡第3地点 中野遺跡第2地点発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第1集
1986『新邸遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第2集
1988『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第4集
1988『中道遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第5集
1989『志木市遺跡群Ⅰ』志木市の文化財第13集 志木市教育委員会
1990『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集 志木市教育委員会
1991『西原大塚遺跡第7地点 新邸遺跡第3地点 中野遺跡第7地点 中野遺跡第8地点 城山遺跡第6地点発掘調査報告書』志木市の文化財第15集 志木市教育委員会
1991『志木市遺跡群Ⅲ』志木市の文化財第16集 志木市教育委員会
1991『中道遺跡第12地点 中道遺跡第13地点 田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点発掘調査報告書』志木市の文化財第18集 志木市教育委員会
1993『志木市遺跡群Ⅴ』志木市の文化財第20集 志木市教育委員会
1995『志木市遺跡群Ⅵ』志木市の文化財第21集 志木市教育委員会
1996『城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点発掘調査報告書』志木市の文化財第24集 志木市教育委員会
- 佐々木保俊・尾形則敏・深井恵子 1996『志木市遺跡群Ⅶ』志木市の文化財第23集 志木市教育委員会
1997『志木市遺跡群Ⅷ』志木市の文化財第24集 志木市教育委員会
- 尾形則敏・深井恵子 1992『志木市遺跡群Ⅳ』志木市の文化財第17集 志木市教育委員会
- 佐々木保俊 1987『新邸遺跡第2地点 西原大塚遺跡第4地点発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第3集
1988『城山遺跡長勝院地点発掘調査報告書』志木市の文化財第11集 志木市教育委員会
1998『西原大塚の遺跡 西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査概報』志木市遺跡調査会 西原特定土地区画整理組合

第2章 中野遺跡第43地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

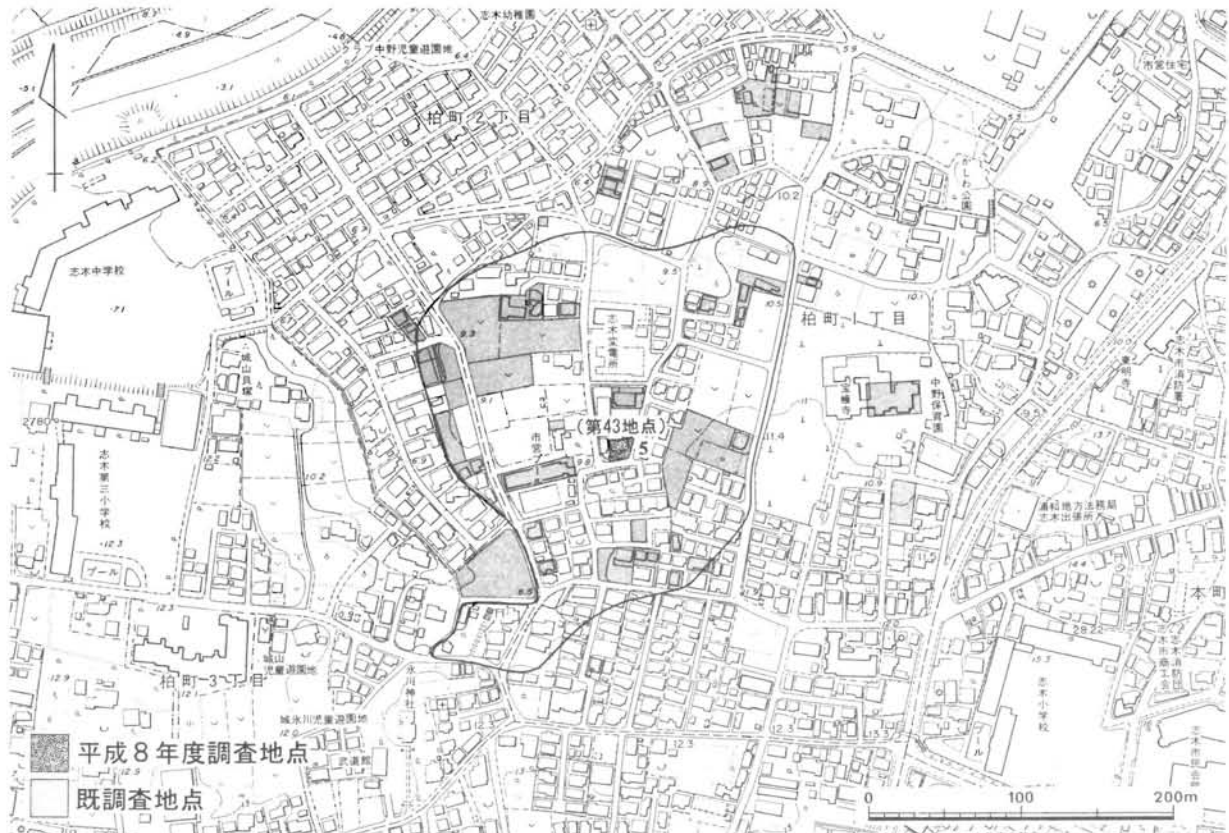
中野遺跡は、志木市柏町1丁目を中心に広がる遺跡である。遺跡は北方に柳瀬川を、西方に小支谷を臨む台地上に位置する。標高は北端で約9m、南端で約11mを測り、台地縁辺では際立った断崖もみられないままゆるやかに北側の低地に移行する。低地との比高差は約3mである。遺跡の現状は、宅地化が急速に進行している地域で、畑地は減少している。

本遺跡は、昭和60年に第1回目の発掘調査が実施され、以後の調査により、旧石器時代、縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代中・後期、平安時代、近世の複合遺跡であることが判明している。

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成8年5月30日に実施した。調査区域内ほぼ東西方向に2本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぐ。同時に遺構確認作業を行った結果、平安時代のものと思われる住居跡が1軒確認された。依頼者との協議の結果、教育委員会が発掘調査を行うことに決定したため、ただちに遺構のプランを確認するため、周囲の表土剥ぎを行った。残土置場については、調査区域内にその場所を確保することができた。

人員導入による発掘調査は6月3日から実施した。まず調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行

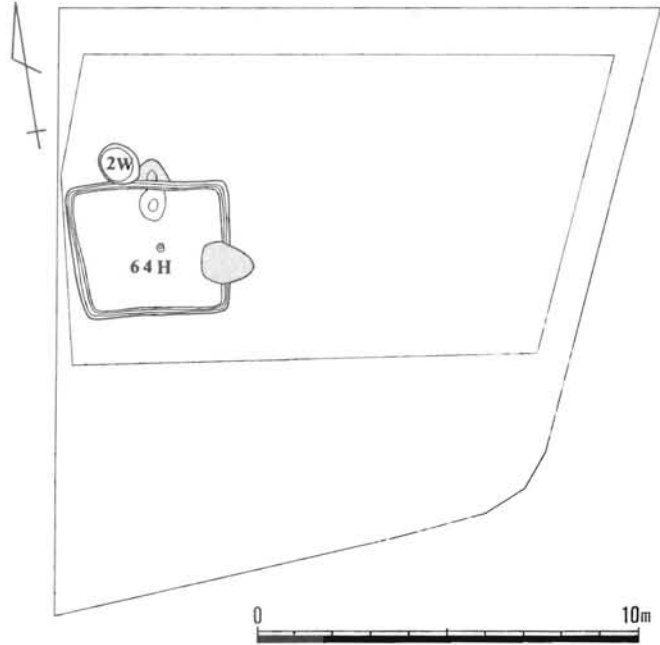


第2図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

平成9年3月31日 現在

い、午後には遺構の精査を開始した。遺構は出土土器から平安時代の住居跡（64H）であることが判明した。また、ローム上層に厚さ10cm程の暗茶褐色土層が堆積しており、そこから縄文時代後期の堀之内式土器が比較的まとまって出土した。

5日には64Hの遺物出土状態の写真撮影を行い、実測を開始した。また、64Hを切る井戸跡（2W）を検出したため、確認面より2m程掘り下げた後、実測を行った。6日は遺構の写真撮影をし、64Hのカマドの実測を開始した。7日には実測・写真撮影をすべて終了し、器材搬出と同時に埋め戻しも行った。これにより、すべての調査を完了する。

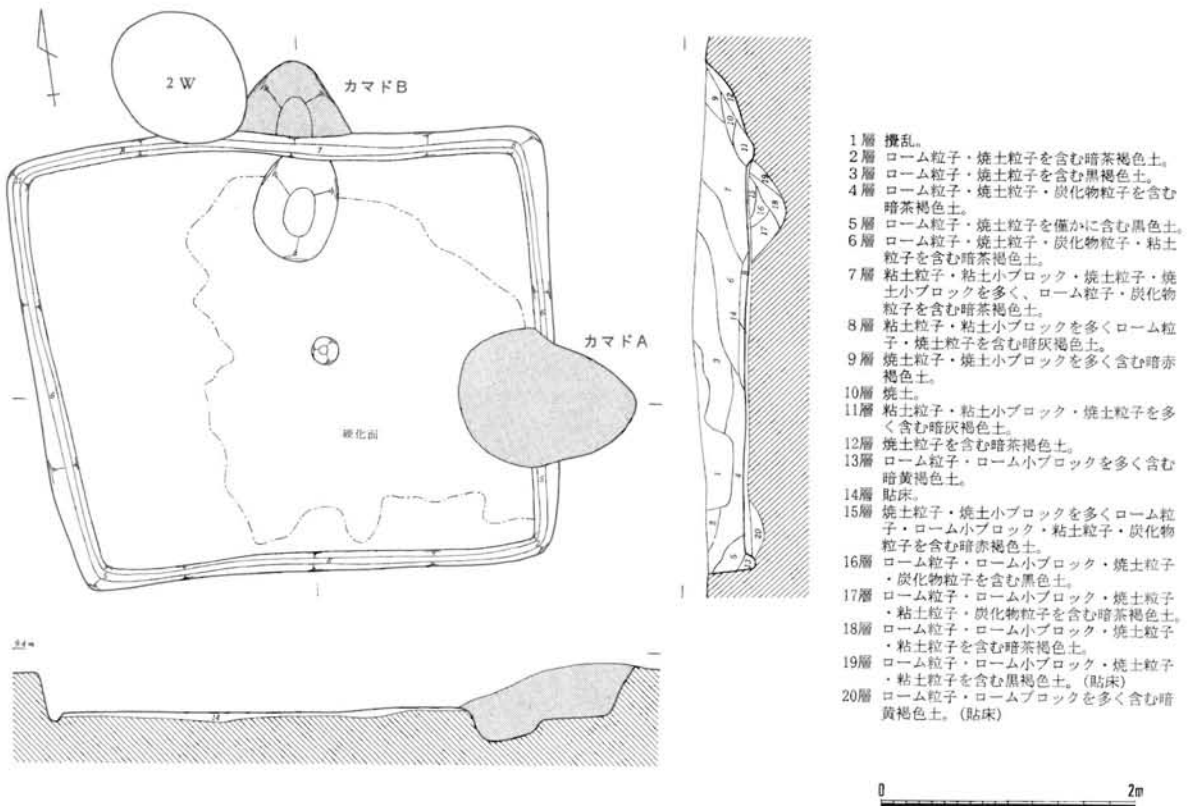


第3図 遺構分布図（1/200）

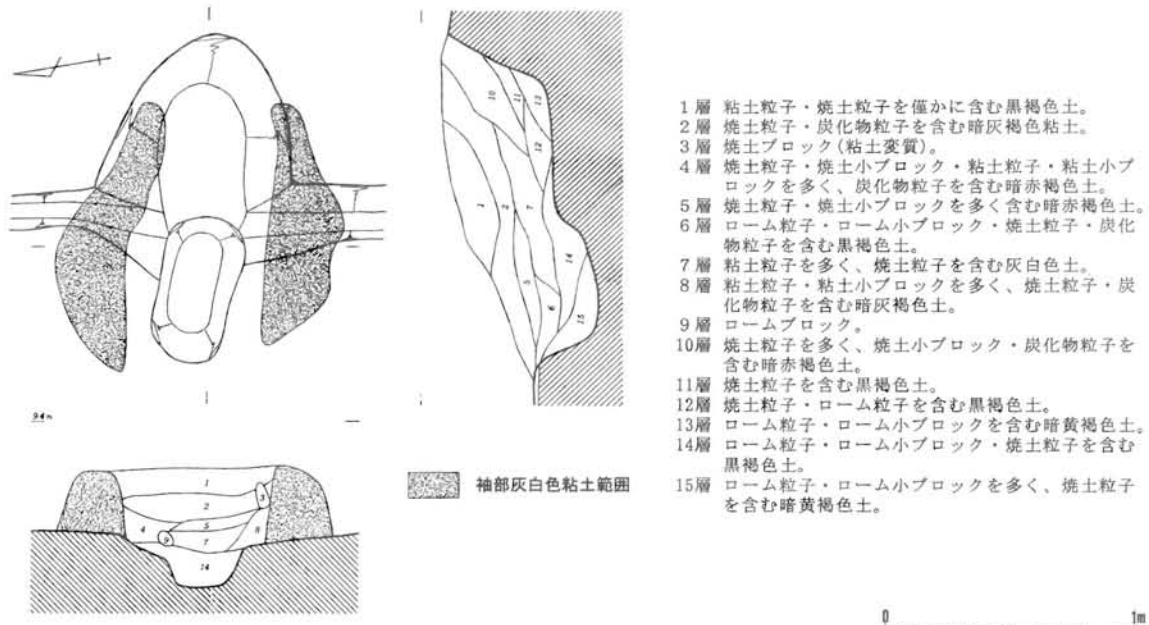
第2節 検出された遺構と遺物

(1) 住居跡

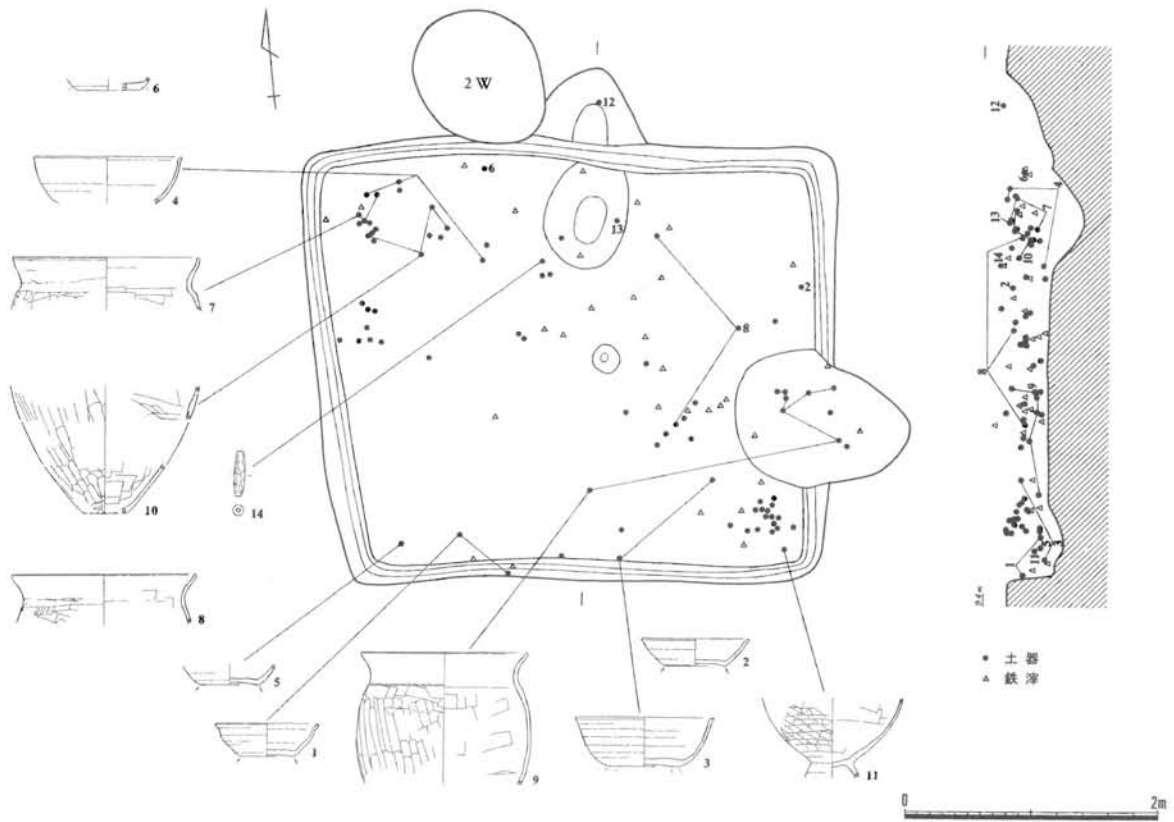
64号住居跡（第4～6図）



第4図 64号住居跡（1/60）



第5図 64号住居跡カマド (1/30)



第6図 64号住居跡遺物出土状態 (1/60・1/9)

〔住居構造〕 2号井戸跡に切られる。(平面形) 隅丸方形。(規模) 4.20×3.50m。(壁高) 24～43cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 上幅14～24cm・下幅4～8cm・深さ5～11cmを測り、全周する。(床面) カマドの前面から住居中央にかけて、硬く踏み固められている。貼床が2枚確認できたが、カマドが2ヶ所に設けられていることから、カマドを作り替える際に床面も新しく貼られたものと思われる。(カマド) 東壁と北壁の2ヶ所から検出された。〈カマドA〉は東壁の中央よりやや南に偏って位置し、長さ140cm・幅113cm・壁への掘り込み60cmを測る。壁溝の一部を黒色土で埋め戻した後に構築されている。両袖部は灰白色粘土で作られており、天井部と思われる暗灰褐色粘土も良好に残っていた。煙道は60°程の勾配で立ち上がる。〈カマドB〉は北壁のほぼ中央に位置し、長さ160cm・幅90cm・壁への掘り込み60cmを測る。粘土の残りが悪く構築の様子が窺えないことと、燃烧部の上部には薄く床が貼られていることから旧カマドと思われる。煙道は30°程の勾配でゆるやかに立ち上がる。(柱穴) 確認できなかった。(覆土) カマドBの覆土を除き、8層に分層される。

〔遺物〕 土器、土錘などの他に鉄滓(スラッグ)が多く出土した。

〔時期〕 平安時代(9世紀前半)。

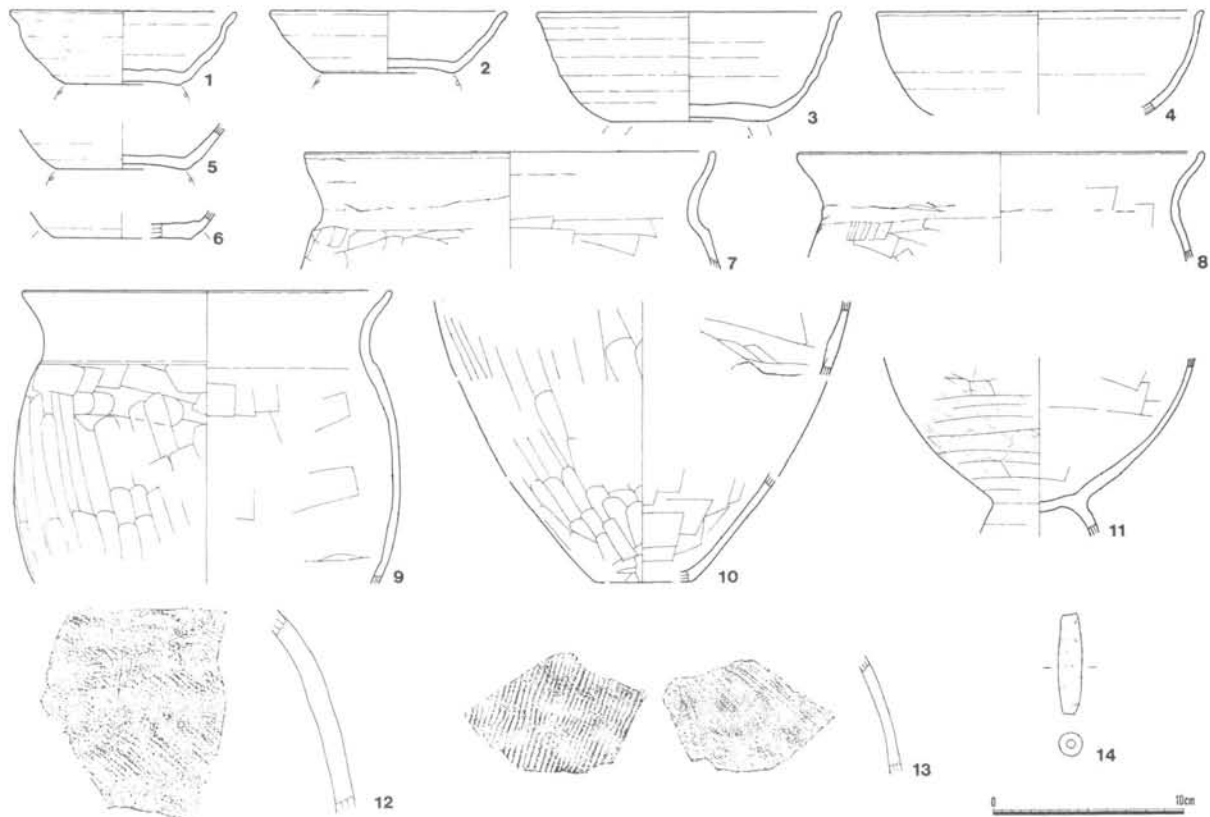
〔所見〕 鉄滓(スラッグ)が多く出土していることから、鍛冶関連の遺構である可能性がある。

64号住居跡出土遺物(第7図)

須恵器坏形土器(1～6)

1は器高3.9cm、推定口径12.0cm、推定底径6.2cm。ロクロ回転は右回転。底部には回転糸切り痕を残す。色調は灰褐色を呈し、胎土中には白色針状物質を僅かに含む。南壁近くの床面上6～18cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/4程である。

2は器高3.3cm、口径12.5cm、底径7.0cm。ロクロ回転は右回転。底部には回転糸切り痕を残す。色調



第7図 64号住居跡出土遺物(1/4)

は口縁部が灰褐色、以下暗茶褐色を呈する。胎土中には砂粒を僅かに含む。カマドAの左横の床面上20cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/3程である。

3は器高5.9cm、推定口径16.0cm、底径8.2cm。ロクロ回転は右回転。底部は回転糸切り後、周辺ヘラ削りが施される。色調は灰褐色を呈し、胎土中には白色針状物質・砂粒・小石を含む。南壁近くの床面上2～15cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/5程である。

4は現器高5.5cm、推定口径17.3cm。ロクロ回転は右回転。色調は灰褐色を呈し、胎土中には白色針状物質・砂粒を含む。カマドBの左横の床面上2～28cm浮いた覆土中からの出土で、口縁部から体部下半にかけてを1/5程遺存する。

5は現器高2.5cm、底径7.0cm。ロクロ回転は右回転。底部には回転糸切り痕を残す。色調は口縁部が灰褐色を呈する。胎土中には白色針状物質・砂粒・小石を含む。住居北西コーナーの床面上14cm浮いた覆土中からの出土で、底部から体部下半のみ遺存する。

6は現器高1.4cm、推定底径7.2cm。底部は全面ヘラ削り調整である。色調は口縁部が灰褐色を呈する。胎土中には白色針状物質を多く含む。カマドBの左横の床面上16cm浮いた覆土中からの出土で、底部から体部下半かけてを1/3程遺存する。

土師器甕形土器（7～11）

7は現器高6.3cm、推定口径21.8cm。口縁部は内湾ぎみに開く。色調は暗茶褐色を呈し、胎土中には砂粒を含む。口縁部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は横方向のヘラ削りが施される。住居北西コーナーの覆土中から散漫に出土した。遺存度は口縁部から胴部上半にかけて1/3程である。

8は現器高5.9cm、推定口径21.5cm。7の土器に比べ、口縁部が大きく開く。色調は暗茶褐色を呈し、胎土中には砂粒を含む。口縁部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は横方向のヘラ削りが施される。カマドA前面の覆土中から散漫に出土し、遺存度は口縁部から胴部上半にかけて1/3程である。

9は現器高16.4cm、推定口径19.3cm。胴部中位に最大径をもち、口縁部は内湾ぎみに外反する。色調は暗茶褐色を呈し、胎土中には砂粒を含む。口縁部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は胴部上半が横方向のヘラ削り、胴部中位以下が縦方向のヘラ削りが施される。カマドA内を中心として出土し、遺存度は口縁部から胴部下半にかけて1/4程である。

10は現器高14.9cm、推定底径5.2cm。色調は暗茶褐色を呈し、胎土中には砂粒を含む。内面は横方向のヘラナデ、外面は縦方向のヘラ削りが施される。住居北西コーナーの覆土中から散漫に出土した。遺存度は底部から胴部中位にかけて1/3程である。

11は台付甕で、現器高9.5cm。色調は暗茶褐色を呈し、胎土中には砂粒を含む。胴部内面は横方向のヘラナデ、外面は斜方向のヘラ削り後横ナデが施される。脚部は内外面横ナデが施される。住居南東コーナーのほぼ床面上からの出土で、遺存度は胴部中位から脚部にかけて2/3程である。

須恵器甕形土器（12・13）

12は胴部破片である。色調は暗灰茶褐色を呈し、胎土中には白色針状物質・砂粒・小石を含む。内面はナデ調整、外面は叩き後軽くナデが施される。カマドB内の坑底上23cm浮いた覆土中からの出土である。

13は胴部小破片で、色調は灰褐色を呈する。胎土は精練されており、目立った砂粒を含まず、白色・黒色微粒子を含む。内面ナデ、外面は叩き後軽くナデが施される。表面には薄く釉がかかっている。カマドBの前面の床面上28cm浮いた覆土中からの出土である。

土製品 (14)

土錘である。長さ5.4cm、最大径1.3cm、孔の直径0.4cm、重さ7.2g。カマドBの前面の床面上35cm浮いた覆土中からの出土で、完形品である。

(2) 井戸跡

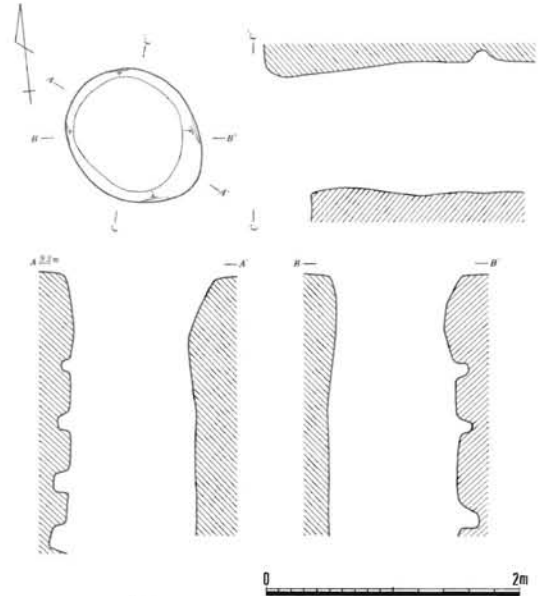
2号井戸跡 (第8図)

[構造] 64号住居跡を切る。平面形は楕円形を呈し、長径1.16m、短径1.00mを測る。断面形は上端部でやや漏斗状を呈するが、深さ40cm程の位置からはほぼ垂直に垂下する。また、壁面にはA軸上で左側に、B軸上では右側に比較的多く足掛穴と思われる掘り込みが確認された。(覆土) ローム粒子・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 不明。

[所見] 本遺構の精査は、危険防止のために確認面から深さ2m程で断念した。



第8図 2号井戸跡 (1/60)

(3) 包含層出土遺物 (第9・10図)

時代的には縄文時代早期から近世までの遺物が出土しており、1～8群に分類された。

第1群 縄文時代早期後葉の条痕文系土器 (1・2)

1・2ともに外面に貝殻条痕文が施されるもので、胎土には繊維を含む。1の色調は内外面が赤褐色、2は内面は暗茶褐色、外面は赤褐色を呈する。

第2群 縄文時代前期後葉の黒浜式土器 (3)

小破片であるが、胎土中に多くの繊維を含み、外面には粗い縄文が施されていることから、黒浜式土器と思われる。

第3群 縄文時代中期前葉から中葉にかけての五領ケ台式～勝坂式土器 (4～8)

4は外面に輪積み痕を残すもので、1条の結節文を垂下させている。補修孔が観察される。5は口唇部内面から口縁部外面にかけて1条の隆帯を垂下させ、口縁部内面には1条の沈線まわる。6は刻みをもつ隆帯の下端には斜行する沈線文が施文される。7は懸垂する刻みをもつ隆帯に沿って沈線が施される。8は隆帯に沿って角押文が施される。

第4群 縄文時代中期後葉の加曾利E式土器 (9～18)

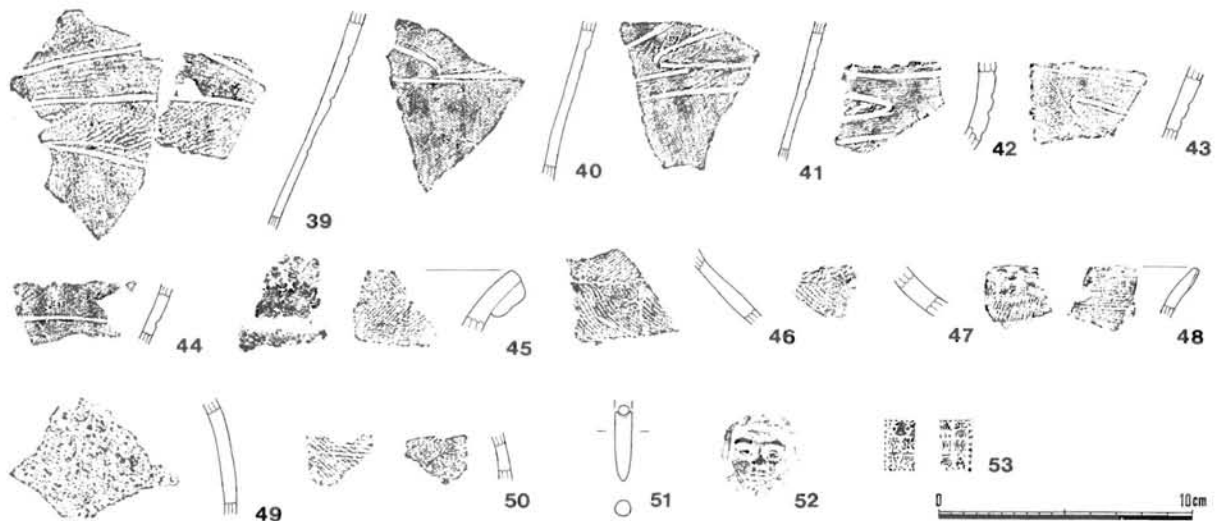
9・10は口縁部破片で、9は口縁部直下に比較的に太い沈線がまわるものである。10は口縁部に太い沈線を施すことにより、下端を隆帯に作出し、そこに斜行する隆帯を連結させている。

11～18は胴部破片である。11～15は縄文を地文に隆帯や沈線による懸垂文が施されるもので、そのうち12・14・15は磨消縄文を伴うものである。16～18は条線を地文とするもので、16は蛇行する条線文が、17は縦位の条線を地文とし、1本の沈線による懸垂文が施文される。

第5群 縄文時代後期前葉の称名寺式～堀之内式土器 (19～44)



第9図 包含層出土遺物1 (1/3)



第10図 包含層出土遺物2 (1/3)

19～22は口縁部破片で、19は渦巻き状の突起をもつもので、口縁部直下には沈線で区画された中に刺突文が充填される文様が施文される。20は内湾肥厚する口縁部を呈し、直線文で区画された中に単節斜縄文が充填されている。21は曲線的な文様、22は直線的な文様が施文される。

23～26は胴部小破片で、23はスペード文の先端部と思われる文様、25・26は曲線的な文様、24は懸垂文が施される。

27は口縁部小破片で、口唇部内面には1条の沈線がまわり、外面には単節斜縄文が施される。28・29・31～36は沈線文あるいは沈線区画内に刺突文が施文されるもので、28は曲線的な懸垂形態の文様のものである。29は口縁部直下のくびれ部に小突起と押捺をもつ隆帯が装飾され、胴部文様は複数沈線を波状に連結させている。31・32は刺突列を伴う杵状区画文が施文される。33・34は沈線による曲線的な蛇行文が施文されるが、33は2本一組による平行線文であることから、施文具には半截竹管が使用されたものと思われる。35・36は直線的な懸垂形態の文様のものである。

30は現器高18.9cm、推定口径23.4cm。37・39～41は同一個体と考えられる。器形は朝顔形を呈し、色調は黒褐色を基調とする。口縁部には複雑な形を呈した小突起が付され、口縁部内面には2条、口唇部には1条の沈線がまわる。外面は口縁部直下に押捺をもつ隆帯と横位文様帯が施文される。38・42～44についても同様の文様であろう。

以上、19～26は称名寺式、27～44は堀之内式土器と考えられる。

第6群 弥生時代後期の土器 (45～50)

45～47は壺形土器。45は折り返し口縁を呈する口縁部小破片で、複合部端部にはRLの単節斜縄文、口縁部内面にはRL・LRの単節斜縄文が羽状に施される。外面の複合部直下にはハケ目痕が顕著に残る。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には橙色粒子・砂粒を含む。46は肩部の破片で、文様帯は端末結節を伴う単節斜縄文が羽状に施される。色調は暗橙色を呈し、胎土には茶褐色微粒子・砂粒を含む。47は羽状の単節斜縄文が施されるもので、色調は暗黄褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を僅かに含む。

48・49は甕形土器。48は口縁部小破片で、内外面の調整と口唇部外面の刻み目はハケ状工具により施される。色調は全体に黒褐色を呈し、胎土には黄褐色・橙色微粒子を僅かに含む。49は胴部小破片で、色調は内面が黒褐色、外面は暗橙色を呈し、胎土には暗黄褐色を多く含む。内面はヘラナデ、外面はハ

ケ目調整が施される。

第7群 縄文時代の石製品 (51)

垂飾品である。現全長2.8cm、最大幅0.7cm、推定穿孔径0.4cm、重さ1.8gである。

第8群 近世の土製品 (52・53)

泥面子である。52は縦3.1cm、横2.9cm、重さ7.1g。53は縦2.1cm、横1.3cm、重さ50.8g。

[参 考 文 献]

- 佐々木保俊 1989「第3章中野遺跡第6a・6b地点の調査」『志木市遺跡群Ⅰ』志木市の文化財第13集
志木市教育委員会
- 1990「第6章 中野遺跡第9地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集 志
木市教育委員会
- 1991「第4章 中野遺跡第7地点の調査」『西原大塚遺跡第7地点 新邸遺跡第3地点
中野遺跡第7地点 中野遺跡第8地点 城山遺跡第6地点』志木市の文化財第15集
志木市教育委員会
- 1991「第5章 中野遺跡第8地点の調査」『西原大塚遺跡第7地点 新邸遺跡第3地点
中野遺跡第7地点 中野遺跡第8地点 城山遺跡第6地点』志木市の文化財第15集
志木市教育委員会
- 1996「第6章 中野遺跡第16地点の調査」『城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原
大塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田
子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点
市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点』志木市の文化財第24集 志木市教育委員会
- 佐々木保俊・尾形則敏 1985『西原大塚遺跡第3地点 中野遺跡第2地点』志木市遺跡調査会報告第1
集
- 尾形則敏 1992「第3章 中野遺跡第12地点の調査」『志木市遺跡群Ⅳ』志木市の文化財第17集 志木
市教育委員会
- 1993「第3章 中野遺跡第18地点の調査」『志木市遺跡群Ⅴ』志木市の文化財第20集 志木
市教育委員会
- 1996「第5章 中野遺跡第11地点の調査」『城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大
塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山
遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場
裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点』志木市の文化財第24集 志木市教育委員会
- 尾形則敏・深井恵子 1997「第9章 中野遺跡第41地点の調査の調査」『志木市遺跡群Ⅷ』志木市の文
化財第25集 志木市教育委員会

第3章 富士前遺跡第15地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

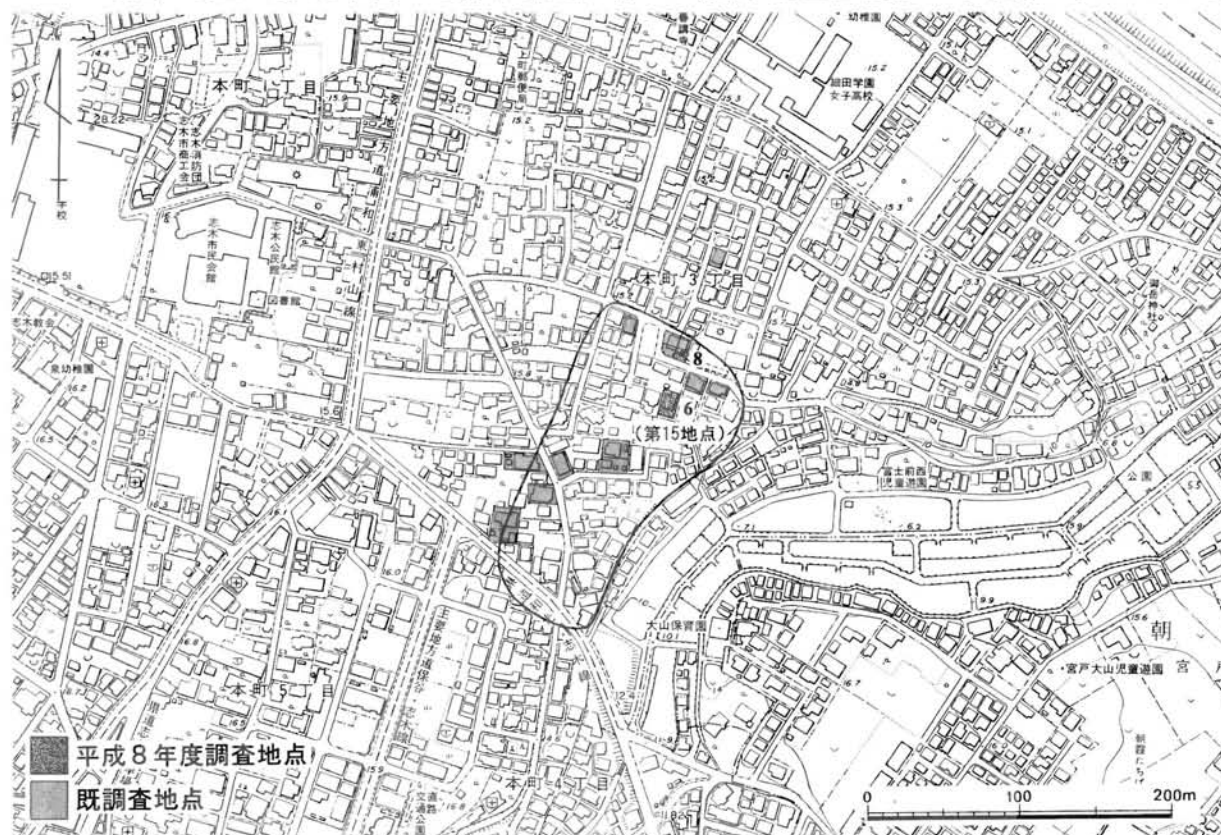
富士前遺跡は、志木市本町3丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北方約1kmに位置している。遺跡は、新河岸川の右岸流域に分布する遺跡群の一つではあるが、細かくみると、遺跡の東側の朝霞市に向かって大きな谷津が存在することから、本遺跡の北側の田子山遺跡東部から本遺跡の南側の大原遺跡にかけての地域一帯は、この開析谷に面して形成された遺跡であると言える。

遺跡の標高は、南端の高い所で約15.9m、北端の低い所で約14.8m、低地との比高差は10m前後である。遺跡の現況は、古くから個人住宅が密集しており、畑地は極めて少ない。

本遺跡の調査は、過去の確認調査により遺構・遺物が検出されなかったため、今回の第15地点が初の発掘調査の実施となった。なお、本遺跡出土の弥生時代後期の土器として、すでに志木市史に掲載されている資料については、発掘調査によるものではなく、不時の発見によるものである。そして、今回の第15地点は、その不時の発見がなされたすぐ南隣の宅地での調査であるために注目されよう。

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成8年6月3日に実施した。調査区域内ほぼ南北方向に2本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぐ。同時に遺構確認作業を行った結果、調査区北隅から住居跡と考えられる遺



第11図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

平成9年3月31日現在

構を1基確認した。その後、継続してプランを確認しながら周辺の表土剥ぎを行ったが、遺構の大部分は調査区域外にあるものと考えられ、調査区域内ではその遺構の南西コーナー部しか検出できなかった。表土剥ぎ作業は、翌4日の午後にもう半日行い、その作業を終了した。残土置場については、調査区域内にその場所を確保することができた。

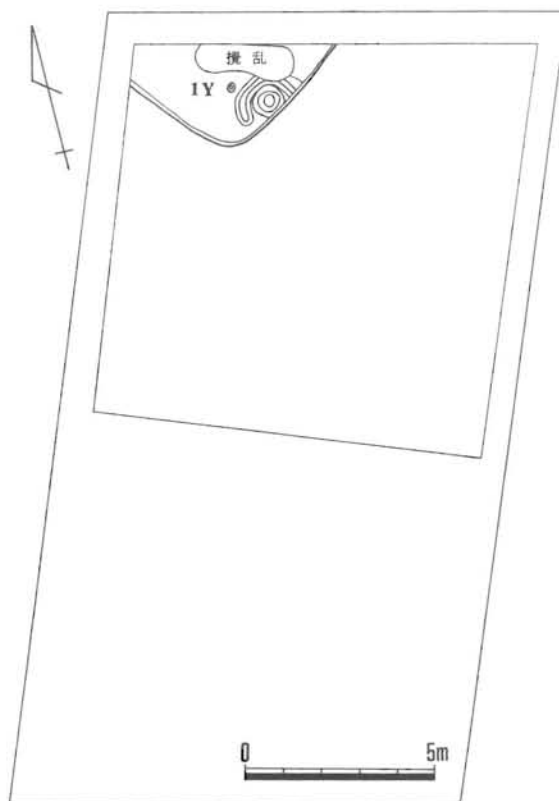
人員導入による発掘調査は6日から実施した。まず、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行い、その後、遺構の精査を開始した。遺構は覆土全体が多量の焼土により、真っ赤な色を呈していることから、焼失住居と判断できた。

7日、床面上からまとまって土器と炭化材が検出され始めたため、焼土検出範囲とともに遺物出土状態の写真撮影を行った。住居跡は出土土器から弥生時代後期の所産のものと判明した。

10日、床面まで覆土をすべて除去し、遺物出土状態の写真撮影を行い、その後遺物出土状態の平板実測を開始し、土器の取り上げ作業まで終了した。また、併行して貯蔵穴の精査を開始した。

11日、炭化材の出土状態の平板実測を終了後、サンプリングを行う。その後、貯蔵穴の実測を完成させ、土器の取り上げ作業を終了した。午前中には柱穴も掘り終え、遺構の写真撮影を終了する。午後からは、遺構の平板実測を開始し、終了、器材搬出作業を済ませ、すべての調査を完了した。

13日には埋め戻し作業を終了した。



第12図 遺構分布図 (1/200)

第2節 検出された遺構と遺物

1号住居跡 (第13・14図)

[住居構造] 南西コーナー以外は調査区域外にあるため、詳細は不明である。(壁高) 20cm前後を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 検出できなかった。(床面) 壁際を除いて、良く踏み固められていた。(柱穴) 主柱穴と思われるものが、1本検出された。大きさは径20cm、深さは79cmを測るが、掘り方の部分を含めると大きさは90×84cmを測る。(貯蔵穴) 南壁の南西コーナーに偏って位置する。平面形は隅丸方形を呈し、規模は84×72cm、深さは40cmを測る。覆土は上層がローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子・焼土粒子を含む暗茶褐色土、下層はローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土を基調とする。北側には高さ3～5cmの馬蹄形状の凸堤が巡っている。(覆土) 11層に分層される。覆土全体が多量の焼土により、真っ赤な色を呈しており、焼土は壁際が厚く、中央に行くほど薄くなっている。

[遺物] 床面上及び覆土中から土器が多く出土した。

[時期] 古墳時代前期。

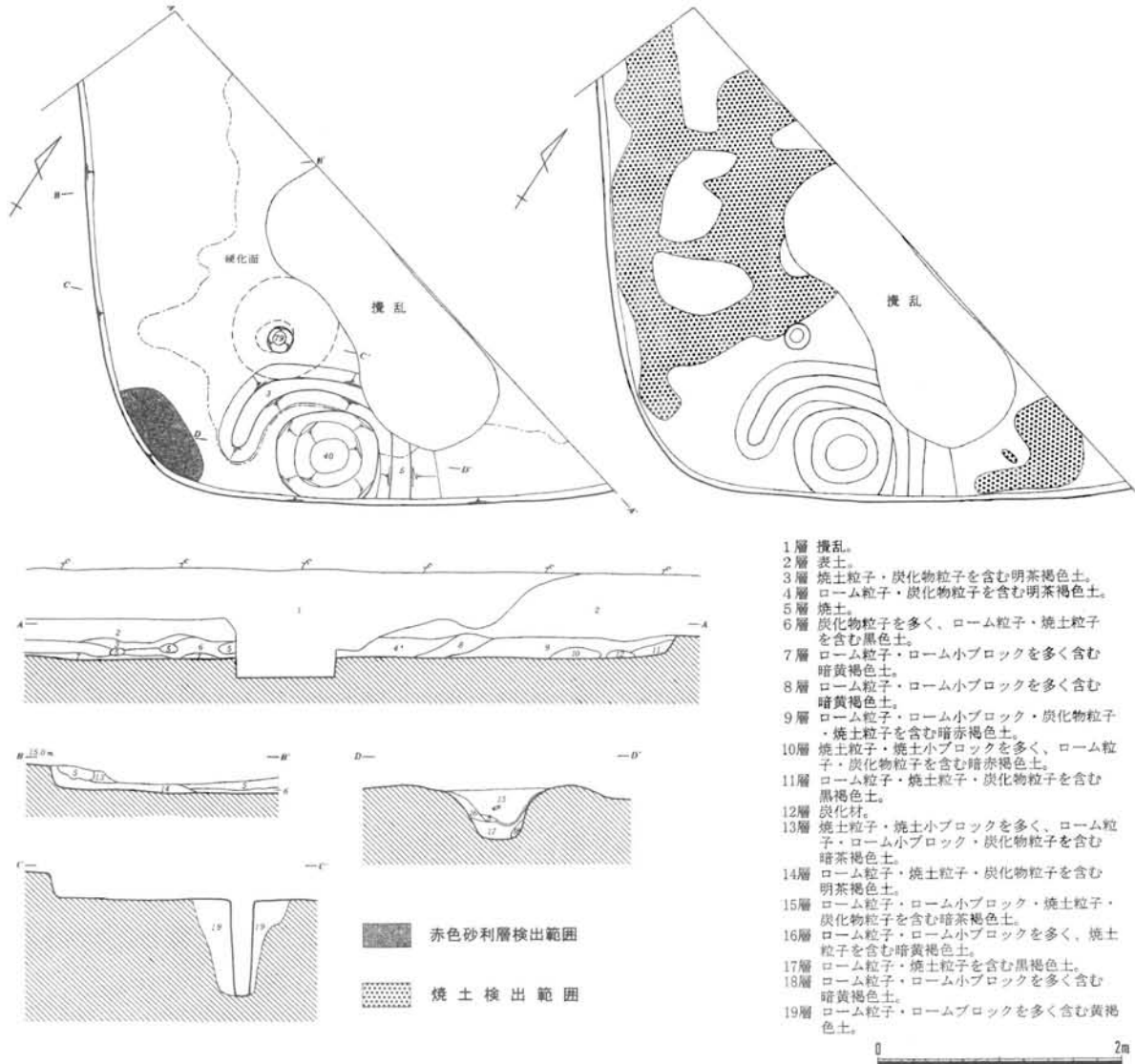
[所見] 覆土中から焼土と炭化材が多く検出されたことから、焼失住居であると考えられる。

1号住居跡出土遺物 (第15図)

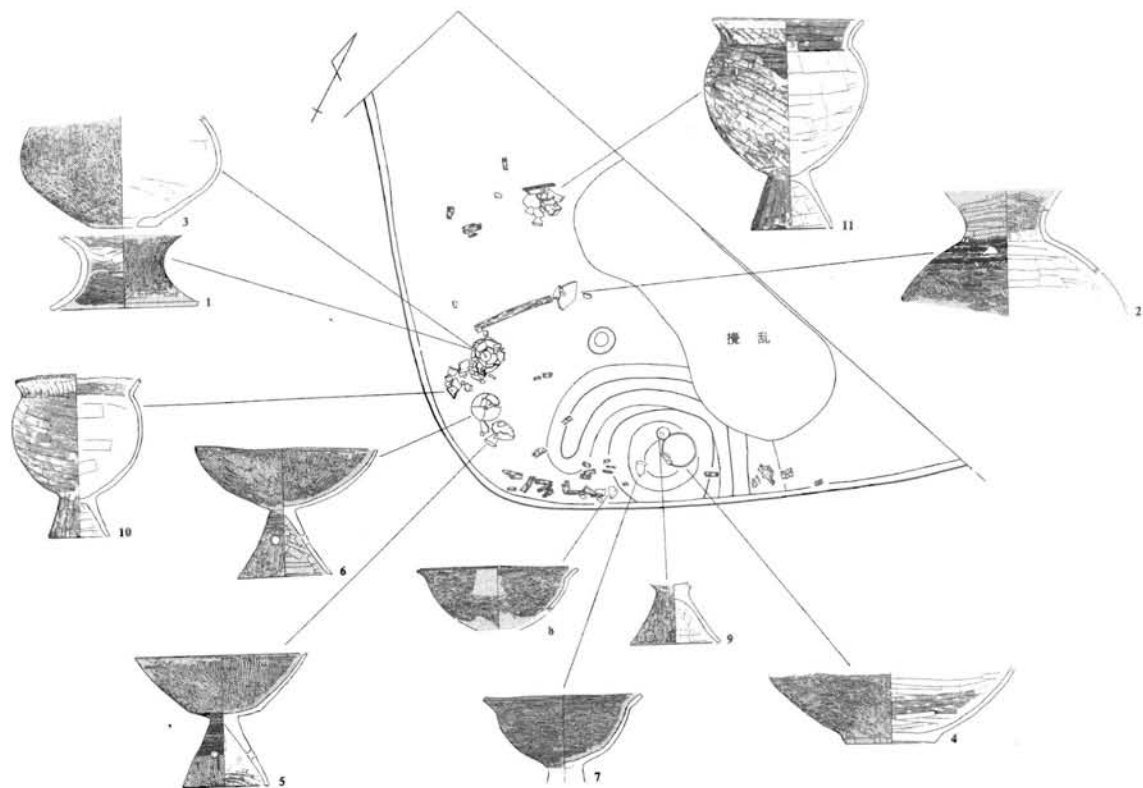
壺形土器 (1~4・12)

1は現器高9.0cm、口径17.6cm。胴部から頸部にかけて大きく外反する。胎土には黄褐色・橙色粒子を多く含む。内面は口縁部が横方向のヘラ磨き、以下ハケ目調整、外面は縦方向のヘラナデ後ヘラ磨き調整が施される。赤彩は内面口縁部及び外面に施される。住居南西コーナーの床面上から、口縁部を逆さにし、その上に3の壺をのせた状態で出土した。3の土器をのせる台として使用されたものと考えられる。口縁部から胴部上半にかけてのみ完形である。

2は現器高15.2cm。肩部で屈曲し、頸部は大きく外反する。肩部の文様帯にはRL・LRの単節斜縄文を交互に施し、上から2段目と3段目との間と末端には3条1単位の自縄結節文がまわる。また、肩部屈曲部には2個1組のボタン状貼付文が、そして文様帯内には2段の円形赤彩文が上下千鳥状に施文される。胎土には大きめ(1~3mm程)の黄褐色粒子を多く、砂粒・小石を含む。内面は頸部がヘラ磨き、以下横方向のヘラナデが施され、外面は頸部がハケ目調整後横方向のヘラナデ、肩部文様帯下はハケ目調整後ヘラ磨きが施される。柱穴付近の床面上の出土で、頸部から胴部中位にかけてを1/2程遺存



第13図 1号住居跡 (1/60)



第14図 1号住居跡遺物出土状態 (1/60・1/9)

する。

3は現器高13.6cm、底径8.0cm。底部穿孔の壺である。穿孔は焼成後に穿たれている。胎土には黄褐色・茶褐色粒子を含む。内面は横方向にヘラナデ、外面は縦方向にヘラ磨き調整が施される。赤彩は外面に施される。1の土器の上ののった状態で出土しており、甑として使用された可能性がある。底部から胴部中位にかけてのみ完形である。

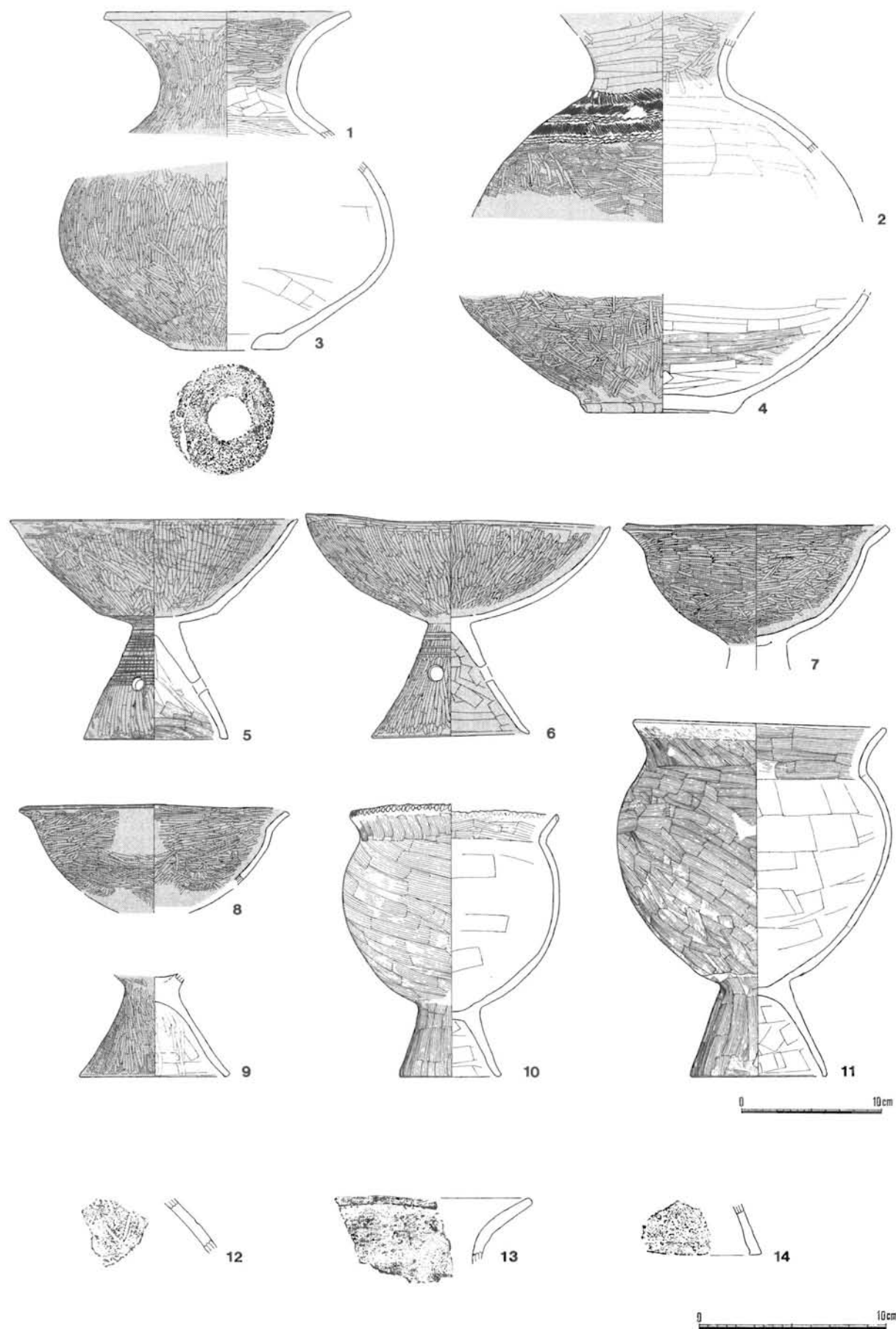
4は現器高8.5cm、底径10.6cm。胎土には黄褐色・橙色・茶褐色粒子を多く、砂粒・小石を含む。内面はハケ目調整後ヘラナデ、外面はハケ目調整後ヘラ磨き調整が施される。赤彩は外面に施される。貯蔵穴中からの出土で、底部から胴部下半にかけてのみ完形である。

12は肩部の小破片である。文様はR Lの単節斜縄文を施した後、磨消手法による鋸歯文が描かれ、その下端には2・3条の自縄結節文がまわっている。胎土には黄褐色粒子を多く含む。内面はヘラナデ、外面は無文部が赤彩後ヘラ磨き調整が施される。覆土中からの出土である。

高坏形土器 (5～9・13)

5は器高15.8cm、口径20.7cm、底径10.4cm。坏部底部に稜を有する、いわゆる有稜高坏と呼ばれるものである。深身の坏部(7.4cm)は底部から口縁部にかけて直線的に外傾し、口唇部は面取りが施されシャープである。脚台部(8.4cm)は長脚で、全体にハ字状を呈するが、裾部はやや膨らみをもち内湾する。また、坏部直下の脚台部上半から中位にかけては、17・18本の凹線文がていねいに施され、透し孔は3個穿たれている。胎土には茶褐色粒子を多く含む。色調は全体に黒く煤けている状態であるが、脚台部内面を除く全面が赤彩されているものと考えられる。坏部内外面はハケ目調整後ヘラ磨き調整、脚台部は内面がハケ目調整、外面はハケ目調整後ヘラ磨き調整が施される。

6は5の土器に比べ、坏部底部の稜は無くなり、脚台部は裾部にかけて大きくハ字状に開いている。



第15图 1号住居跡出土遺物 (1/4 · 1/3)

坏部直下の凹線文の数も少なく4～6本程度である。坏部内外面はヘラ磨き調整、脚台部は内面がヘラナデ、外面はヘラ磨き調整が施される。赤彩は全面に施されているものと考えられる。住居南コーナーの床面上からの出土で、ほぼ完形である。

7は現器高8.6cm、口径19.0cm。脚台部を欠損するが、坏部は体部中位に膨らみをもち、口縁部は外反する。口唇部は平坦に面取りが施されている。内外面赤彩後ヘラ磨き調整が施されるが、ハケ目痕が僅かに残る。貯蔵穴付近の床面上からの出土で、坏部を2/3程遺存する。

8は現器高7.9cm、口径19.4cm。7の土器に類似するものである。内外面赤彩後ヘラ磨き調整が施されるが、僅かにハケ目痕が残る。貯蔵穴付近の床面上からの出土で、坏部を1/2程遺存する。

9は現器高7.4cm、底径10.6cm。ハ字状を呈する脚台部のみ遺存である。内面ヘラナデ後ヘラ磨き(的)調整、外面はハケ目調整後ヘラ磨き調整が施される。赤彩は外面に施される。貯蔵穴中からの出土で、脚台部のみ完形である。

13は口縁部の小破片である。器形としては、7・8の土器に類似するが、同一個体ではない。胎土には黄褐色粒子を多く含む。内外面赤彩後ヘラ磨き調整が施される。覆土中からの出土である。

甕形土器 (10・11・14)

10は器高19.6cm、口径15.0cm、底径7.4cm。小型の台付甕である。胴部最大径を胴部上半に測り、頸部はく字状に屈曲し、口縁部は外傾する。口唇部外面にはやや右上がりの刻み目が施され一周している。脚台部は直線的なハ字状を呈する。胎土には黄褐色粒子・砂粒を多く含む。内面は口縁部がハケ目調整、以下脚台部を含めヘラナデ、外面は全面ハケ目調整が施される。住居南コーナーの床面上からの出土で、ほぼ完形である。

11は器高25.5cm、口径18.2cm、底径9.8cm。10の土器に比べ、大型のもので、口唇部には刻み目が施されていない。胎土には黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む。内面は口縁部ハケ目調整、以下脚台部を含めヘラナデ、外面は全面ハケ目調整であるが、その後口縁部には軽く横ナデが施される。住居中央からやや西壁に寄った床面上からの出土で、完形である。

14は脚台部の小破片である。胎土には黄褐色粒子を含む。内面はヘラナデ、外面は縦方向のハケ目調整が施される。覆土中からの出土である。

[参 考 文 献]

- 小久保 徹 1984『志木市史 原始・古代資料編』志木市史編さん室
市毛 勲 1990『志木市史 通史編上』志木市史編さん室

第4章 田子山遺跡第47地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

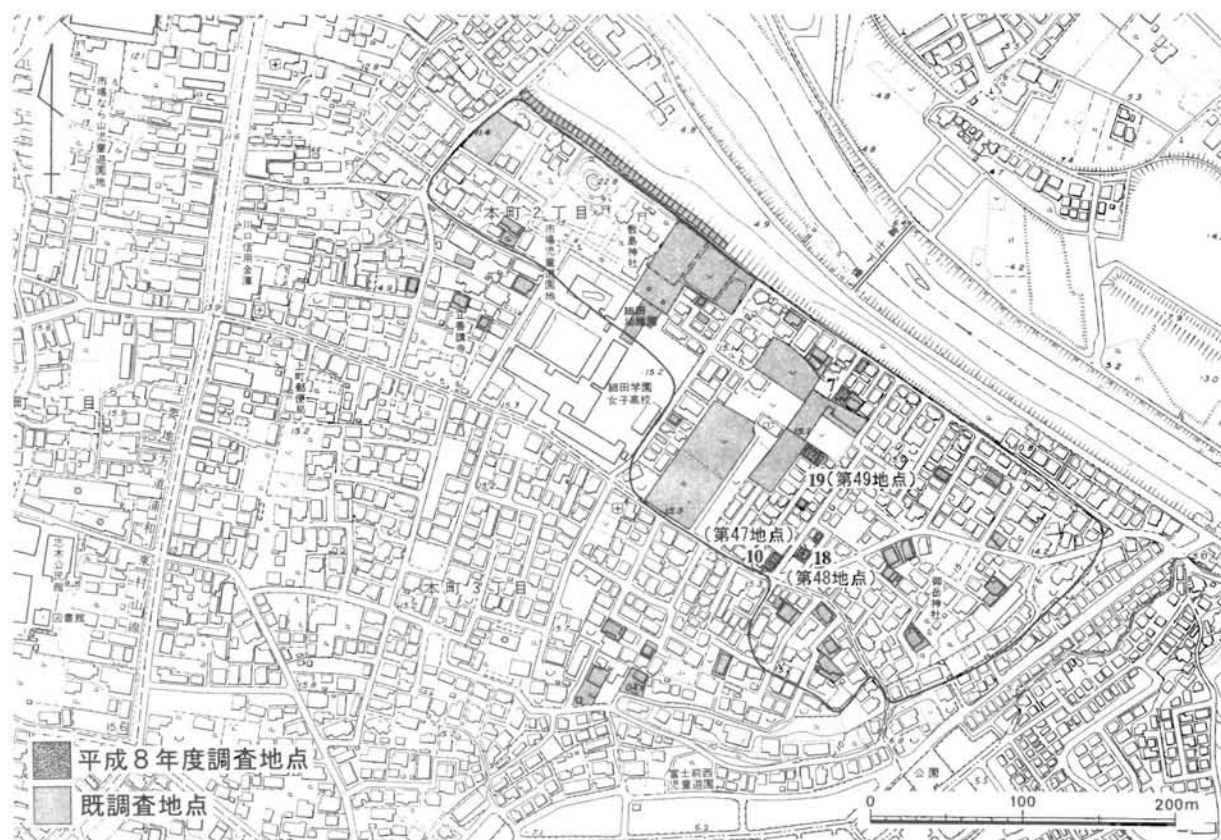
田子山遺跡は、志木市本町2丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北東約1.3 km に位置している。遺跡は、北東方向に新河岸川を臨む台地上に立地し、標高約15mの平坦部に南北約100m、東西約500mの範囲に広がっている。遺跡の現況は、古くから個人住宅が密集している地区であるが、最近ではアパート・マンション建設といった中規模開発も盛んに行われ、畑地は極端に減少している。

本遺跡の第1回目の発掘調査は、昭和63年に実施され、以後の調査により、縄文時代早期・中期・後期、弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代、近世の複合遺跡であることが判明している。

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成8年6月12日に実施した。調査区の長軸方向に合わせ、中央に1本のトレンチを設定し、バックホーで表土を剥ぐ。同時に遺構確認作業を行った結果、調査区北端から住居跡と思われる遺構を1基確認した。その後、継続してその遺構のプラン確認をしながら周囲の表土剥ぎを行った。残土置場には、調査区の南半部の遺構が確認されなかった場所を当てることにした。

人員導入による発掘調査は14日から開始した。まず、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行った。その結果、新たに住居跡と思われる遺構を1基確認した。同日には、調査区北端の遺構の精査を開



第16図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

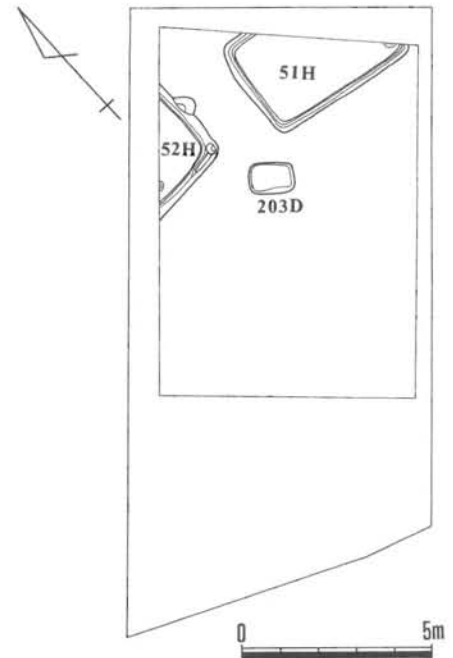
平成9年3月31日現在

始し、出土土器により平安時代の住居跡（51H）であることが判明した。

17日、51Hの遺構写真撮影を行い、その後平板実測を終了する。また、新たに確認された遺構についても精査を開始し、出土土器により平安時代の住居跡（52H）であることが判明した。

18日、調査区全体の写真撮影を行う。その後、51Hについては土層図実測を行い、52Hについては平板実測を開始する。また、51Hの南側に土坑が1基（203D）確認されたため、精査を開始する。

19日、52Hの平板実測終了後、掘り方の精査を行う。また、203Dは掘り終了後、実測を行い、写真撮影を終了する。同日、すべての調査を終了し、翌20日には、埋め戻しを完了した。



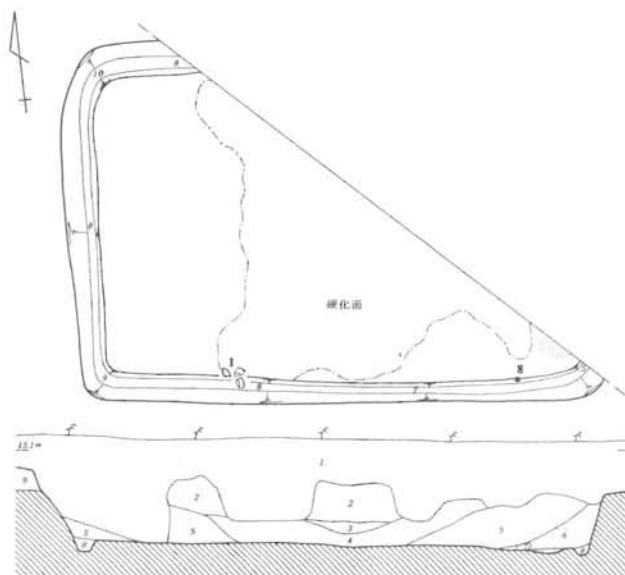
第17図 遺構分布図（1/200）

第2節 検出された遺構と遺物

（1）住居跡

51号住居跡（第18図）

〔住居構造〕住居北東コーナーは調査区域外にあるものと思われる。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×2.88m。（壁高）21～44cmを測り、ゆるやかに立ち上がる。（壁溝）確認できる範囲では全周する。上幅14～28cm、下幅5～10cm、深さ5～10cmを測る。（床面）全体的に硬化しているが、中央付近は特に良く踏み固められている。（カマド）カマドは検出されなかったが、南東コーナー付近に粘土ブロックや焼土が比較的多くみられることから、東壁にカマドが設けられている可能性がある。（柱穴）検出さ



- 1層 表土及び攪乱。
- 2層 ローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土。
- 3層 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子を僅かに含む黒褐色土（2層よりやや明色）。
- 4層 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む黒色土。
- 5層 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子をやや多く含む暗茶褐色土。
- 6層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・粘土粒子を含む黒色土。
- 7層 灰白色粘土ブロック。
- 8層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。
- 9層 暗黄褐色土（漸移層）。



第18図 51号住居跡（1/60）

れなかった。(覆土) 7層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

[遺物] 須恵器坏・甕形土器が1点ずつと用途不明の鉄製品が1点出土した。

[時期] 平安時代(9世紀後半)。

51号住居跡出土遺物(第20図1・6、第21図8)

第20図1は須恵器坏形土器である。器高3.7cm、口径11.9cm、底径5.5cm。ロクロ回転は右回転。色調は青灰褐色を呈し、胎土中には白色砂粒を含む。底部には回転糸切り痕を残す。南壁の壁溝上層からの出土で、遺存度は4/5以上である。

6は須恵器甕形土器の胴部破片である。色調は灰褐色を呈し、胎土中には白色針状物質を含む。内面はヘラナデ、外面はナデが施される。覆土中の出土である。

第21図8は用途不明の鉄製品である。厚さ8mmでL字状を呈している。重さは24.4gである。

52号住居跡(第19図)

[住居構造] 南東コーナー付近以外は調査区域外にあるため、詳細は不明である。(壁高) 43~51cmを測り、ゆるやかに立ち上がる。(壁溝) 確認できる範囲では全周し、南東コーナー付近に一部テラス状の段をもつ。上幅24~38cm、下幅6~8cm、深さ4~10cmを測る。(床面) 住居内側の一部が硬化していたが、その他は軟弱であった。厚さ10~18cmの貼床が、住居中央を除いて施されており、土層図の14・15層が相当する。(カマド) 東壁に幅62cm・壁への掘り込み30cmを測るカマドの残存部を検出した。カマドの作り替えが行われ、そのうちの旧カマドと思われる。(柱穴) 検出されなかった。(覆土) カマド残存部の覆土を除き、12層に分層される。

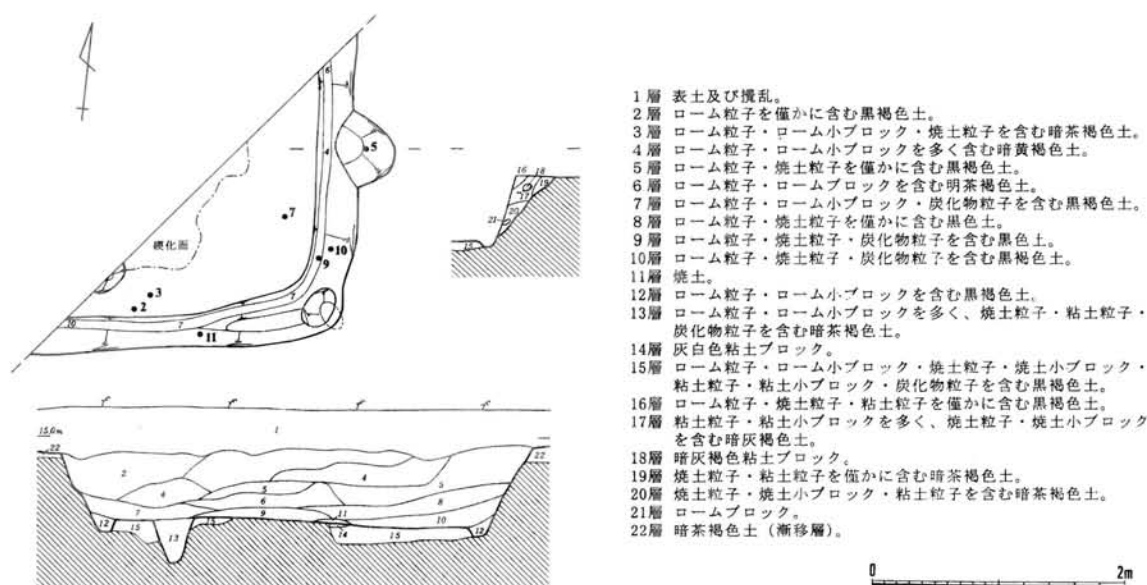
[遺物] 床面上及び覆土中から土器・刀子・砥石が出土した。

[時期] 平安時代(9世紀後半か)。

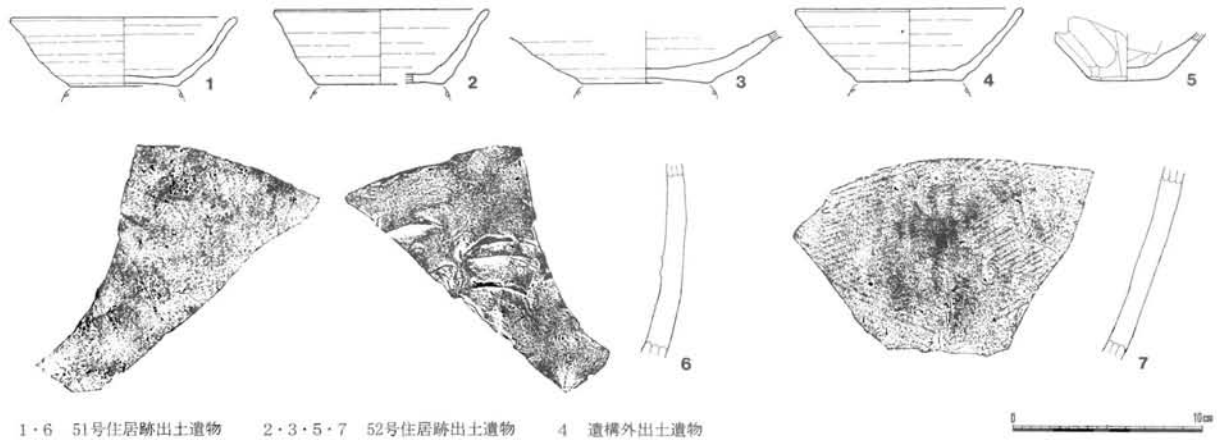
52号住居跡出土遺物(第20図2・3・5・7、第21図9~11)

第20図2・3は須恵器坏形土器である。

2は器高4.0cm、口径11.9cm、底径5.5cm。ロクロ回転は右回転。底部には回転糸切り痕を残す。色調



第19図 52号住居跡(1/60)



1・6 51号住居跡出土遺物 2・3・5・7 52号住居跡出土遺物 4 遺構外出土遺物

第20図 住居跡・遺構外出土遺物（1/4）



8 51号住居跡出土遺物 9-11 52号住居跡出土遺物

第21図 住居跡出土鉄製品・石製品（1/3）

は灰褐色を呈し、胎土中には砂粒・小石を含む。全体に粗雑な土器である。南壁近くの床面上53cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/2程である。

3は現器高2.8cm、底径7.0cm。ロクロ回転は右回転。底部には回転糸切り痕を残す。色調は灰褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。南壁近くの床面上10cm浮いた覆土中からの出土で、底部から体部下半にかけてを2/3程遺存する。

5は土師器甕形土器の底部破片である。底径は4.0cm。色調は暗茶褐色を呈し、胎土中には砂粒を多く含む。内面はヘラナデ、外面は縦方向にヘラ削りが施される。カマド内からの出土である。

7は須恵器甕形土器の胴部破片である。色調は内面が灰褐色、外面が茶褐色を呈する。胎土中には白色砂粒・小石を含む。内外面ともにナデられているが、外面には平行叩き目の痕跡が残る。西壁近くのほぼ床面上からの出土である。

第21図9・10は鉄製品である。9は刀子で刃部先端を欠損する。現全長9.3cm。10は鉄鏃の一部か。

11は砥石である。全体に剥落が見られるが、使用面と思われる平滑な面は5面に確認できる。よく使用されたものと思われ、弓状にカーブが強い。南壁近くの床面上20cm浮いた覆土中からの出土である。

（2）土坑

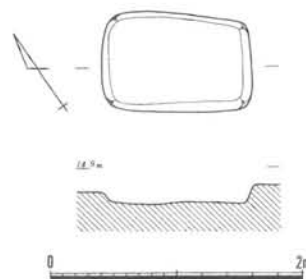
203号土坑（第22図）

[構造]（平面形）長方形。（規模）118×79cm（長軸方位）N-55° -W。（深さ）14cm前後を測る。坑

底は平坦で、ほぼ垂直に立ち上がる。(覆土) ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 覆土中から平安時代の土器片が僅かに出土したが、図示できるものはなかった。

[時期] 平安時代か。



第22図 203号土坑 (1/60)

(3) 遺構外出土遺物 (第20図4、第23図)

遺構外からは、縄文時代の土器の小破片が6点と平安時代の須恵器坏形土器が1点検出されている。時代的に縄文時代は早期前葉・後葉、前期前葉の3群と平安時代の1群に分類された。

第1群土器 縄文時代早期前葉の撚糸文系土器 (第23図1・2)

いずれも胴部小破片で、撚糸文は縦位方向に施される。

1は色調が黄褐色を呈し、胎土には砂粒・黄褐色粒子を含む。

2は色調が茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く、金雲母を含む。

第2群土器 縄文時代早期後葉の条痕文系土器 (第23図3～5)

3は口縁部破片である。口唇部はやや平坦に作られており、色調は黄褐色を呈し、胎土には僅かに繊維を含む。条痕文は弱いは、内外面に施されている。

4・5は同一個体であろうか。底部近くの胴部下半の破片と思われる。色調は内面が黒褐色、外面は黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。条痕文は内外面縦位に施される。

第3群土器 縄文時代前期前葉の黒浜式土器 (第23図6)

6は口縁部破片である。口縁部はやや外反する器形になろう。文様は半截竹管による平行沈線文が施される。色調は暗赤褐色を呈する。

第4群土器 平安時代の須恵器坏形土器 (第20図4)

器高3.9cm、口径12.0cm、底径5.3cm。ロクロ回転は右回転。底部には回転糸切り痕を残す。色調は灰褐色を呈し、胎土中には砂粒・小石を含む。遺存度は2/3程で、時期は9世紀後半から末葉か。



第23図 遺構外出土遺物 (1/3)

[参 考 文 献]

- 佐々木保俊 1990「第3章 田子山遺跡第1地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集
志木市教育委員会
- 1992「第4章 田子山遺跡第6地点の調査」『志木市遺跡群Ⅳ』志木市の文化財第17集
志木市教育委員会
- 1992「第5章 田子山遺跡第7地点の調査」『志木市遺跡群Ⅳ』志木市の文化財第17集
志木市教育委員会
- 1992「第4章 田子山遺跡第4地点の調査」『中道遺跡第12地点 中道遺跡第13地点 田
子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点発掘調査報告書』志木市の文化財第18集 志
木市教育委員会
- 1992「第5章 田子山遺跡第5地点の調査」『中道遺跡第12地点 中道遺跡第13地点 田
子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点発掘調査報告書』志木市の文化財第18集 志
木市教育委員会
- 1996「第8章 田子山遺跡第10地点の調査」『城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西
原大塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点
田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原遺跡第21地点
市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点』志木市の文化財第24集 志木市教育委員会
- 尾形則敏 1995「第3章 田子山遺跡第29地点の調査」『志木市遺跡群Ⅵ』志木市の文化財第21集 志
木市教育委員会
- 1996「補説 田子山遺跡第31地点の調査」『田子山富士』志木市の文化財第22集 志木市教
育委員会
- 1996「第10章 田子山遺跡第13地点の調査」『城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原
大塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子
山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原遺跡第21地点 市場裏
遺跡第2地点 中道遺跡第26地点』志木市の文化財第24集 志木市教育委員会
- 尾形則敏・深井恵子 1996「第5章 田子山遺跡第32地点の調査」『志木市遺跡群Ⅶ』志木市の文化財
第23集 志木市教育委員会
- 1996「第6章 田子山遺跡第37地点の調査」『志木市遺跡群Ⅶ』志木市の文化財
第23集 志木市教育委員会
- 1997「第4章 田子山遺跡第39地点の調査」『志木市遺跡群Ⅷ』志木市の文化財
第25集 志木市教育委員会
- 深井恵子 1997「第5章 田子山遺跡第41・42地点の調査」『志木市遺跡群Ⅷ』志木市の文化財第25集
志木市教育委員会

第5章 田子山遺跡第48地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

第4章 田子山遺跡第47地点の調査(22ページ)を参照。

(2) 発掘調査の経過

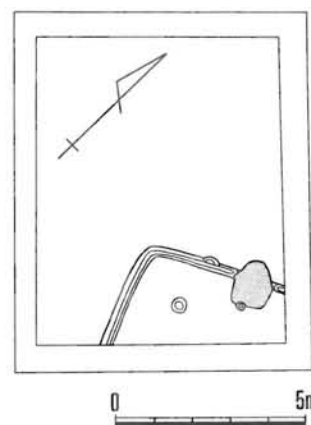
確認調査は、平成8年12月4日に実施した。調査区の長軸方向に合わせ、2本のトレンチを設定し、バックホーを使用して表土を剥ぐ。同時に遺構確認作業を行った結果、住居跡と思われる遺構を1基確認した。その後、継続して遺構のプランを確認しながら、周囲の表土剥ぎを行った。残土置場については、遺構の分布しない調査区北半部にその場所を確保することができた。

人員導入による発掘調査は、12月9日から開始した。まず、調査区内の整備と細部の遺構確認作業を行い、同日には遺構の精査に入る。

10日、住居床面近くから炭化材が多く検出された。遺構は出土土器から、古墳時代後期の住居跡(53H)であることが判明した。

12日、遺構の写真撮影を行い、その後平面図・断面図の実測を終了する。

13日、カマドの精査を開始し、16日には終了する。これによりすべての調査を完了し、17日には埋め戻しを終了した。



第24図 遺構分布図(1/200)

第2節 検出された遺構と遺物

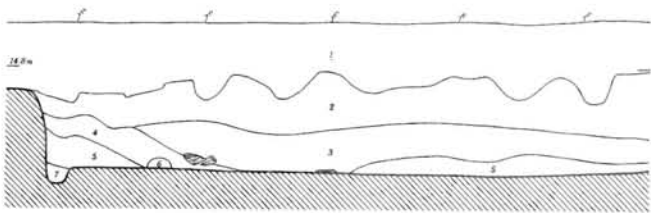
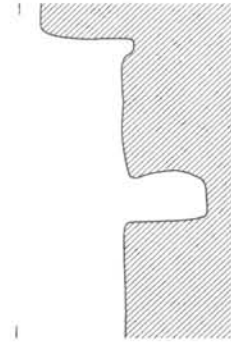
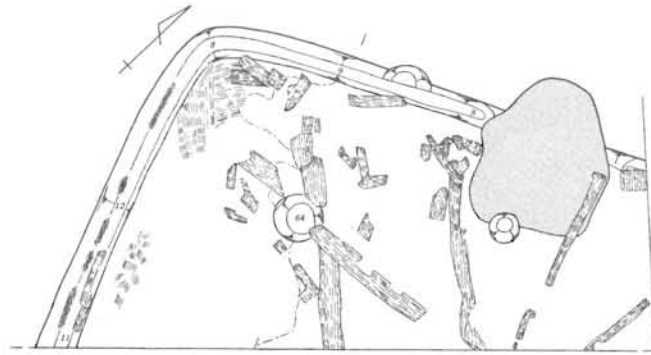
53号住居跡(第25~27図)

[住居構造] 南半部の大部分は調査区域外にあるため、詳細は不明である。(壁高) 65cm前後を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) カマド部分を除き、確認できる範囲では全周する。上幅20cm・下幅10cm前後・深さ8~12cmを測る。(床面) カマド前面を中心に硬化した床面が確認された。(カマド) 北壁に設置される。主軸方位はN-37°-W。長さ128cm・幅108cm・壁への掘り込み80cmを測る。大部分が崩落しているため詳細は不明であるが、両袖部はロームを馬蹄形状に残し、その上部と天井部には粘土が被覆していたと思われる。煙道部は30°程の勾配で立ち上がっている。燃烧部にあるピットは後世のものと考えられる。(柱穴) 北西コーナーのものが支柱穴の1本に該当するものであろう。深さ64cmである。(覆土) 6層に分層され、レンズ状の堆積状態を呈する。

[遺物] 土器は住居全面の覆土中から散漫的に出土している。また、床面上からは炭化材が多く検出されている。その他、炭化種子(ヤマモモ5点)と刀子1点が出土している。

[時期] 古墳時代後期(7世紀末葉)。

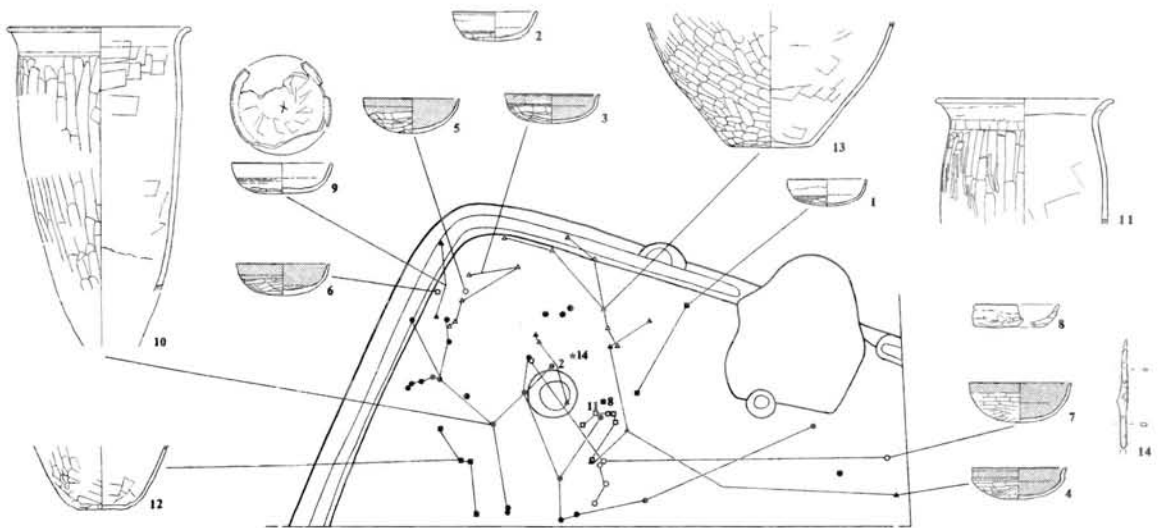
[所見] 床面近くから、多くの炭化材が検出されたことと、4層以下にローム粒子・ローム小ブロック



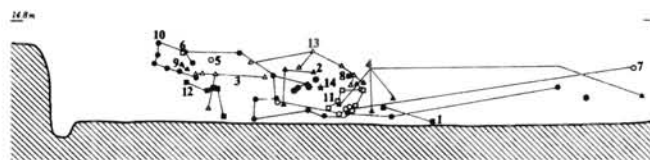
- 1層 耕作土。
- 2層 炭土粒子・炭化物粒子を僅かに、ローム粒子を含む黒褐色土。
- 3層 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く、炭化材を含む暗褐色土。
- 4層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。
- 5層 ローム粒子を多く含む暗茶褐色土。
- 6層 ロームブロック。
- 7層 ローム粒子を多く含む暗黄褐色土。



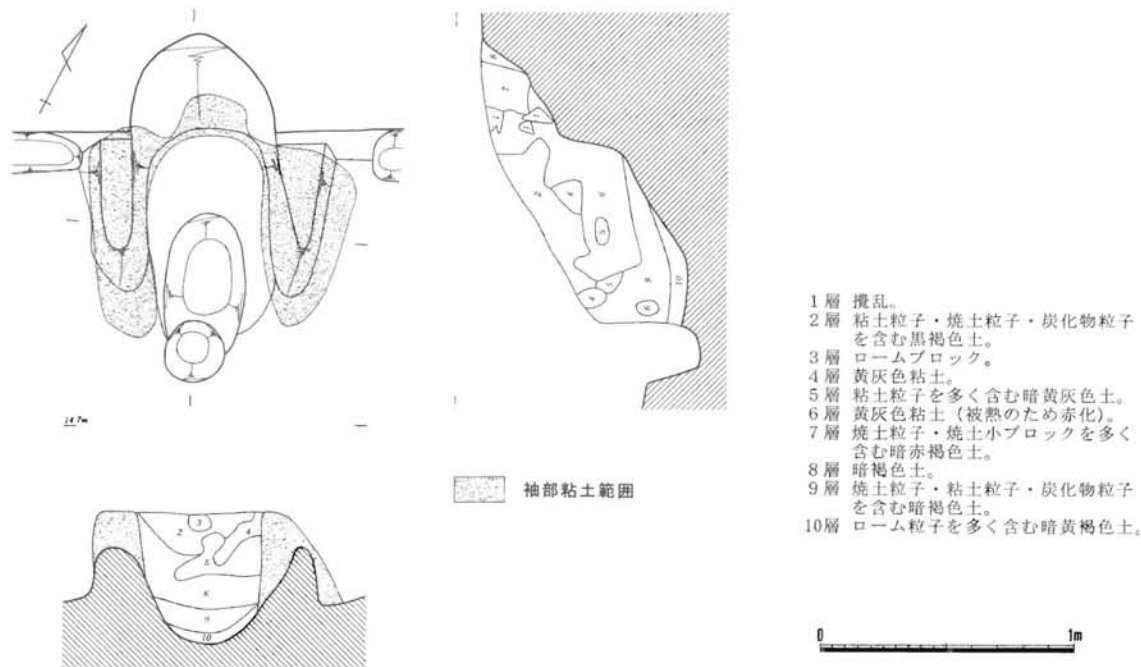
第25図 53号住居跡 (1/60)



● 炭化種子



第26図 53号住居跡遺物出土状態 (1/60・1/9)



第27図 53号住居跡カマド（1/30）

を多く含むことから、本住居跡は焼失後、人為的な埋め戻しが行われた可能性がある。同時に土器についても、その出土状態から、埋め戻しに伴い廃棄された可能性がある。

53号住居跡出土遺物（第28図）

土師器坏形土器（1～9）

1は器高3.2cm、口径9.3cm。小型のもので、非常に器厚が薄い土器である。口縁部と底部との境は横ナデにより作出された沈線がまわり、口縁部は内湾する。色調は全体に黒味かかった暗橙色を呈し、胎土には砂粒を含む。内面及び外面口縁部はヘラ状工具による横ナデ、以下外面はナデられるが、顕著にヘラ削り痕が残る。カマド左横の覆土中からの出土で、ほぼ完形品である。

2は器高3.4cm、口径9.9cm。底部と口縁部との境は1の土器と同様に横ナデにより作出された沈線がまわり、口縁部は内湾ぎみに外傾する。色調は暗橙色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。内面及び外面口縁部はヘラ状工具による横ナデ、以下外面は粗くヘラ削りが施され、全体に粗雑な作りの土器である。柱穴付近の覆土中からの出土で、遺存度は2/3程である。

3は器高3.4cm、口径11.0cm。口縁部と底部との境にはヘラ削りにより作出された弱い稜を呈し、口縁部はゆるやかに外反する。内面口唇部直下には幅1mmの沈線がまわる。胎土には砂粒・茶褐色粒子・小石を多く含んでいる。内面及び外面口縁部は赤彩が施されるが、それ以外の色調は赤味の強い茶褐色を呈する。内面及び外面口縁部はヘラ状工具による横ナデ、以下外面は粗くヘラ削りが施される。北西コーナー付近の覆土中からの出土で、完形品である。

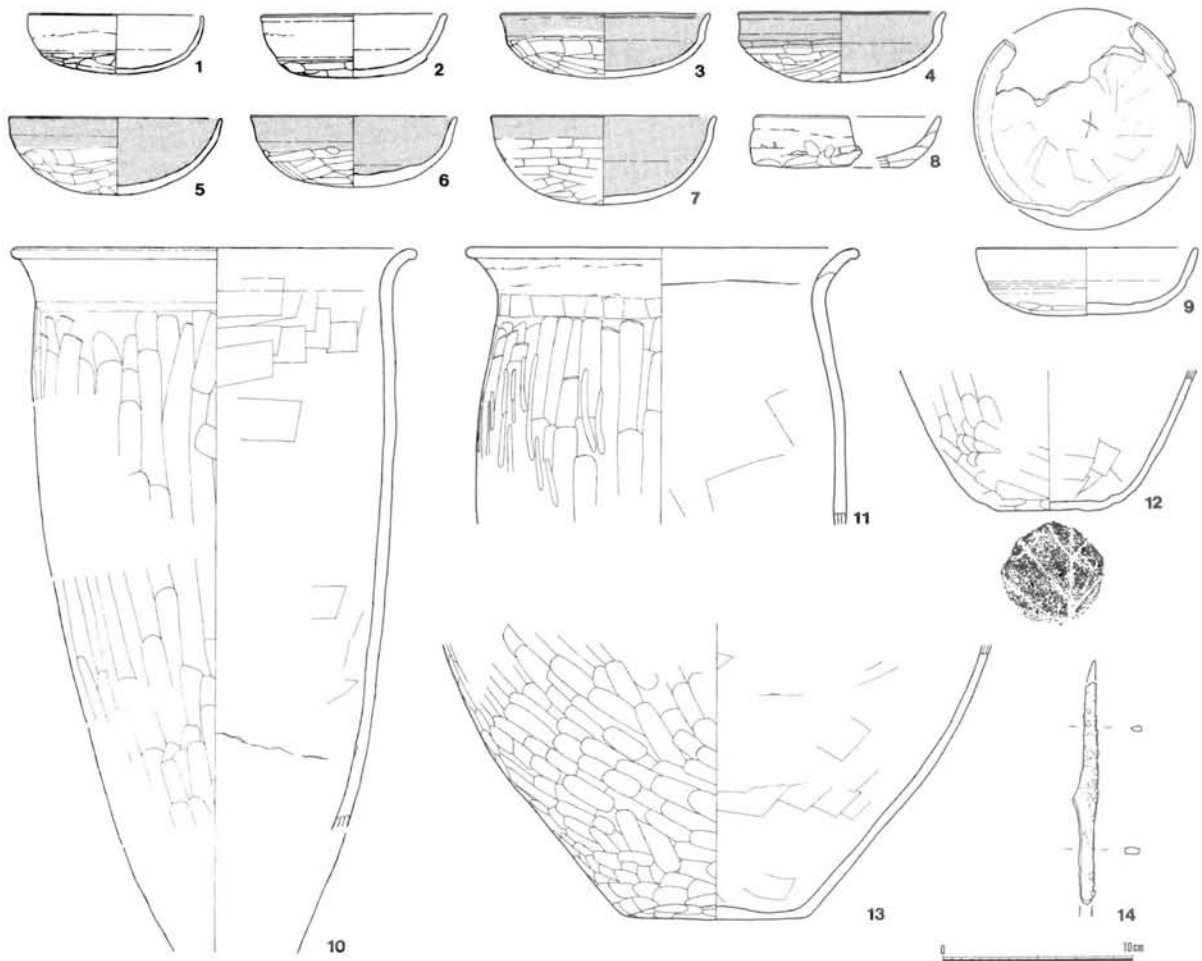
4は器高3.8cm、口径11.0cm。3に比べ、やや口縁部の外反が強いが、ほぼ同形のものである。胎土には砂粒・茶褐色粒子・小石を多く含んでいる。内面及び外面口縁部は赤彩が施されるが、それ以外の色調は赤味の強い茶褐色を呈する。口縁部内外面はヘラ状工具による横ナデ、以下内面はヘラ磨き調整、外面は粗くヘラ削りが施される。カマド前面から北東コーナーにかけての覆土中からの出土で、遺存度は3/4程である。

5は器高4.1cm、口径11.2cm。3・4の土器に比べ、底部から口縁部にかけて碗状を呈するものである。胎土には砂粒・茶褐色粒子を含む。内面及び外面口縁部は赤彩が施されるが、それ以外の色調は赤味の強い茶褐色を呈する。内面及び外面口縁部は横ナデ、外面底部はヘラ削り痕を顕著に残す。また、内面底部には左回りの渦巻き状の成形痕が観察される。北西コーナーの床面上から48cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は4/5程である。

6は器高3.8cm、口径10.9cm。5の土器に類似するが、やや口縁部が外反する。胎土には砂粒を含む。内面及び外面口縁部は赤彩が施されるが、それ以外の色調は赤味の強い茶褐色を呈する。内面及び外面口縁部は横ナデ、外面底部は粗くヘラ削りが施される。内面底部に観察される左回りの渦巻き状の成形痕は5の土器より顕著に観察される。北西コーナーの床面上から53cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は4/5程である。

7は器高4.7cm、推定口径12.0cm。6の土器よりやや大きく深身のものである。胎土には砂粒・茶褐色粒子を含む。内面及び外面口縁部は赤彩が施されるが、それ以外の色調は赤味の強い茶褐色を呈する。内面及び外面口縁部は横ナデ、外面底部はヘラ削り痕を顕著に残す。カマド前面から北東コーナーにかけての覆土中からの出土で、遺存度は1/4程である。

8は器高2.8cm。小破片のため、全体の大きさは不明である。外面には輪積み痕を顕著に残す粗雑な作りの土器である。色調は全体に黒味かかった暗黄褐色を呈し、胎土は精錬され砂粒をあまり含まない。口縁部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は粗くヘラ削りが施される。柱穴付近の床面上から36



第28図 53号住居跡出土遺物（1/4）

cm浮いた覆土中からの出土である。

9は器高3.6cm、口径11.7cm。底部と口縁部との境は1・2の土器と同様に横ナデにより作出された弱い沈線がまわり、口縁部は内湾ぎみに外傾する。色調は黄橙色を呈し、胎土には砂粒・茶褐色粒子を多く含む。内面及び外面口縁部はヘラ状工具による横ナデ、外面底部は粗くヘラ削りが施される。また、内面底部には「×」印が刻されている。北西コーナー付近の覆土中からの出土で、遺存度は2/3程である。

土師器甕形土器 (10~13)

10は最大径を口縁部に測り、胴部は上半から下半にかけてゆるやかにすぼまっている。口縁部は外反し、口唇部は外側に丸味をもつ。色調は黄橙色を呈し、胎土には砂粒・茶褐色粒子を多く含む。口縁部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。北西コーナー付近の覆土中からの出土で、口縁部から胴部下半にかけてを1/2程遺存する。

11は最大径を口縁部に測るが、10の土器に比べ、胴部上半のくびれがやや強く、胴部に膨らみをもつ。口縁部は大きく外反し、口唇部は外側に丸味をもつが、やや形が崩れている。色調は暗黄橙色を呈し、胎土には細かい砂粒を含む。口縁部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。柱穴付近の覆土中からの出土で、口縁部から胴部中位にかけてを1/2程遺存する。

12は胴部下半以上を欠損する。平底の底部には木葉痕が付される。色調は黄橙色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、金雲母を僅かに含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。西壁近くの覆土中からの出土で、底部から胴部下半にかけてを1/4程遺存する。

13は胴部中位以上を欠損する。平底の底部には木葉痕が付される。色調は明橙色を呈し、胎土には砂粒・小石を多く含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。カマド左横の覆土中からの出土で、底部から胴部中位にかけてを2/3程遺存する。

鉄製品 (14)

刀子である。刃部先端と茎部端を欠損する。現全長は11.8cm。柱穴付近の床面上28cm浮いた覆土中からの出土である。

第6章 田子山遺跡第49地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

第4章 田子山遺跡第47地点の調査(22ページ)を参照。

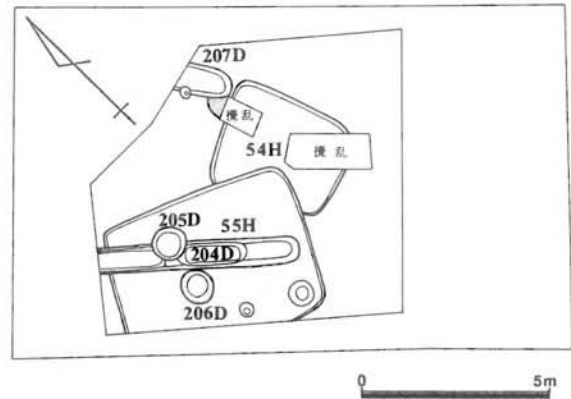
(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成9年1月9日に実施した。調査区の長軸方向に合わせ、2本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぐ。同時に遺構確認作業を行った結果、住居跡と思われる遺構を2基確認した。その後、継続して遺構のプランを確認しながら、周囲の表土剥ぎを行った。残土置場については、遺構の分布しない調査区域内にその場所を確保することができた。

人員導入による発掘調査は13日から実施した。まず、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行い、その後遺構の精査を開始する。遺構は出土土器により、平安時代の住居跡(54・55H)であることが判明した。また、55Hを切る土坑(204D)が確認されたため、その遺構の精査を開始する。

16日、新たに土坑(205~207D)が確認されたため、すぐに精査を行い、午後には全体写真・各遺構の写真撮影を終了した。土坑については出土遺物がないために、時期の比定は難しいが、覆土の観察から、近世以降の可能性はある。

17日には、各遺構の平板測量を開始し、午前中にはすべての実測を完了した。午後からは器材の搬出作業を行い、18日には埋め戻しを完了する。



第29図 遺構分布図(1/200)

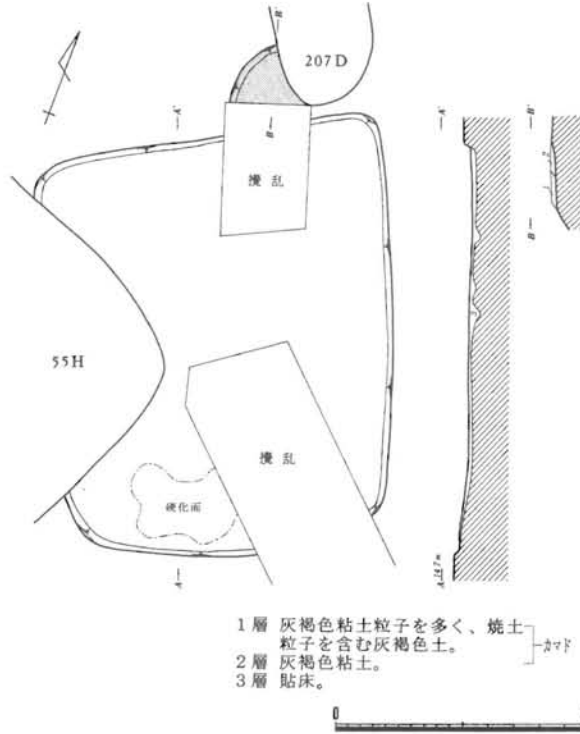
第2節 検出された遺構と遺物

(1) 住居跡

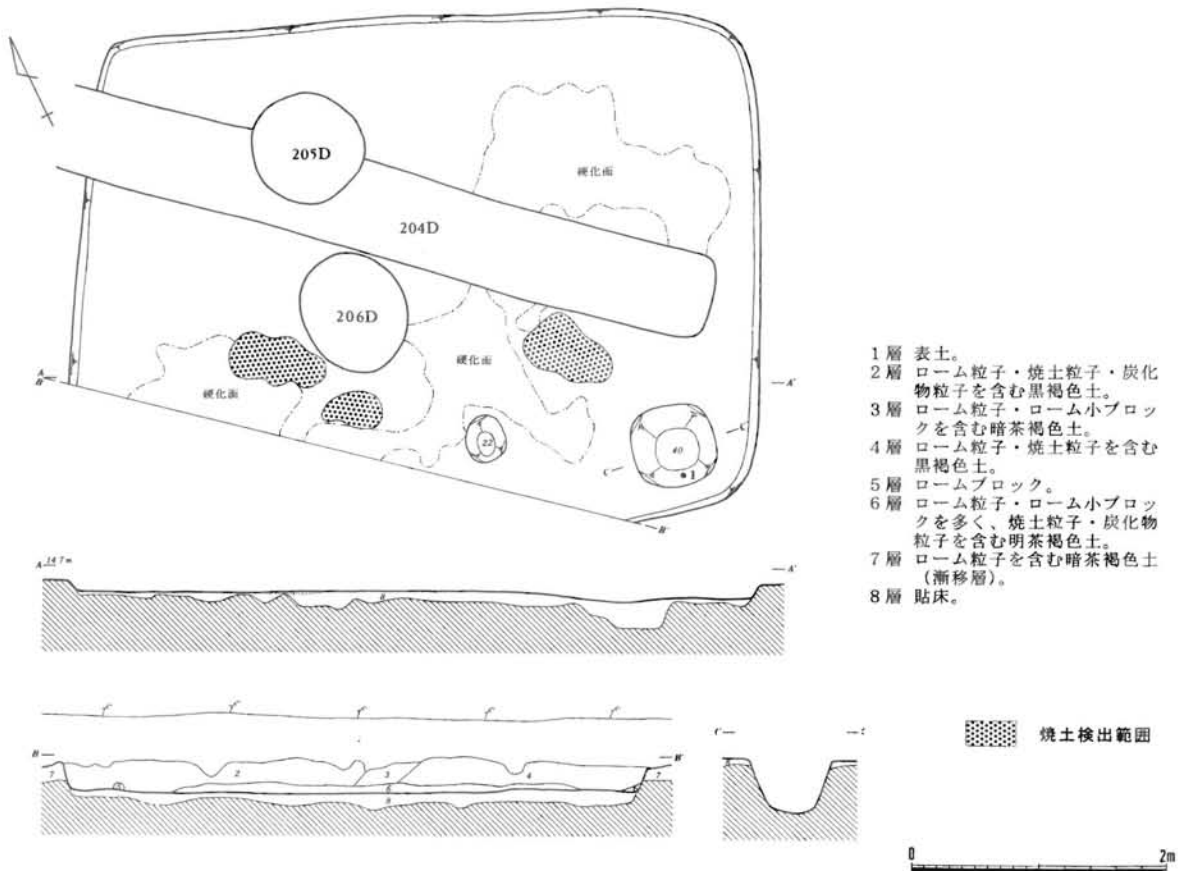
54号住居跡(第30図)

[住居構造] 55号住居跡と207号土坑に切られ、一部攪乱に破壊されている。(平面形) 隅丸方形。(規模) 3.34×2.78m。(壁高) 4~11cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 南側の一部に硬化した面を確認したが、全体的には軟弱である。貼床の厚さは薄く10cm未満である。(カマド) 北壁の中央よりやや東に偏って位置すると思われるが、207号土坑と攪乱により破壊されてるため、詳細は不明である。(柱穴) 検出されなかった。(覆土) ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 覆土中より土器小破片が出土したが、実測できるものはなかった。



第30図 54号住居跡 (1/60)



第31図 55号住居跡 (1/60)

[時期] 平安時代。

55号住居跡（第31図）

[住居構造] 南西コーナーから南壁にかけては調査区域外にあるものと考えられる。54号住居跡を切り、204～206号土坑に切られる。（平面形）隅丸長方形。（規模）5.40×4.10m。（壁高）8～11cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）中央付近に、しっかり硬化した床面が確認された。貼床が3～24cmの厚さで施されている。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）南東コーナーに位置し、平面形は隅丸方形を呈し、規模は67×64cm・深さ40cmを測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。（覆土）5層に分層される。

[遺物] 覆土中から土器が出土した。

[時期] 平安時代（10世紀中葉から後葉）。

[所見] 床面上から炭化材が検出され、また数ヶ所に焼土が見られることから焼失住居と考えられる。

55号住居跡出土遺物（第32図）

須恵器坏形土器（1・2）

1は器高4.0cm、推定口径12.4cm、推定底径6.6cm。ロクロ回転は右回転。底部には回転糸切り痕を残す。色調は暗茶褐色を基調とし、胎土には金雲母・砂粒を僅かに含む。内面底部には黒色の煤状のものが付着している。貯蔵穴からの出土で、遺存度は1/5程である。

2は現器高1.0cm、推定底径4.4cm。ロクロ回転は左回転。底部には回転糸切り痕を残す。色調は黄褐色を基調とし、胎土には砂粒を僅かに含む。覆土中からの出土で、底部の1/4程を遺存する。

土師器甕形土器（3・4）

3は現器高6.9cm、推定口径12.0cm。小型甕の口縁部から胴部にかけての破片である。胴部上半に膨らみをもち、口縁部は「く」字状に短く外反する。胎土には砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は縦方向のヘラ削り後、粗く磨かれている。覆土中からの出土である。

4は現器高19.6cm、推定口径21.9cm。胴部上半に膨らみをもち、口縁部は「く」字状に短く外反する。全体として器厚が分厚く重量感のある土器である。色調は黒褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は縦方向のヘラ削り調整が施される。覆土中からの出土で、口縁部から胴部下半にかけてを1/5程遺存する。



第32図 55号住居跡出土遺物（1/4）

第33図 遺構外出土遺物（1/3）

(2) 土坑

204号土坑 (第34図)

[構造] 55号住居跡・205号土坑を切る。北西側は調査区域外にあるものと思われる。細長い溝状を呈し、確認できる範囲での長さは5.30m、上幅70cm前後を測る。(長軸方位) N-49°-W。(深さ) 確認面であるローム面より43~80cmを測る。幅10cm程の鋤などで掘られたと思われる工具痕がみられる。

(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。

[遺物] 覆土中から、磁器小片が3点出土した。

[時期] 近代~現代。

[所見] 形状からイモ穴と思われる。

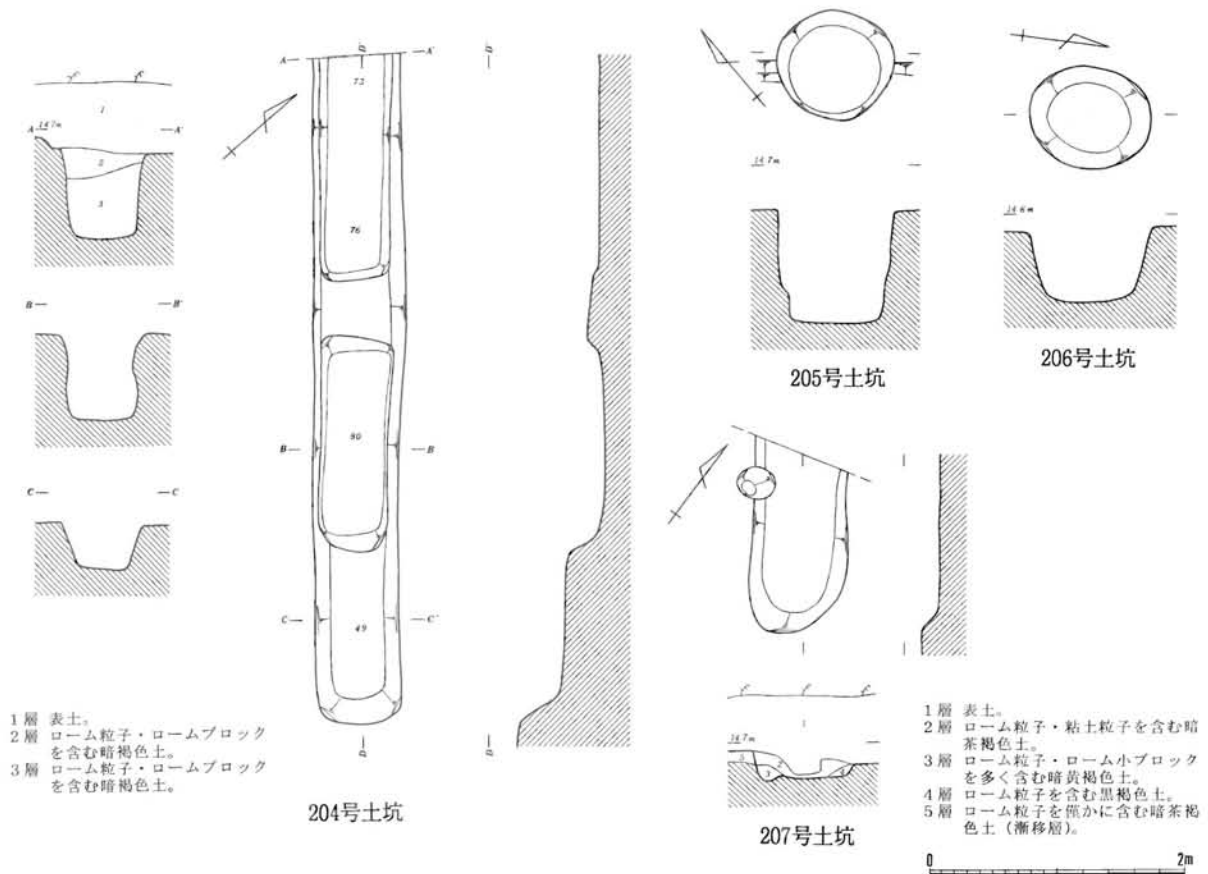
205号土坑 (第34図)

[構造] 55号住居跡を切り、204号土坑に切られる。(平面形) 円形。(規模) 94×90cm。(深さ) 確認面であるローム面より103cmを測る。坑底は平坦である。(覆土) 上層がローム粒子を含む暗褐色土、下層はローム粒子・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 中世以降か。

206号土坑 (第34図)



第34図 土坑 (1/60)

[構造] 55号住居跡を切る。(平面形) 楕円形。(規模) 97×82cm。(長軸方位) N-S。(深さ) 確認面であるローム面より70cmを測る。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 中世以降か。

207号土坑 (第34図)

[構造] 54号住居跡を切る。北側は調査区域外にあるものと思われる。(平面形) 楕円形か。(規模) 不明×76cm。(長軸方位) N-36°-W。(深さ) 10cmを測る。(覆土) 3層に分層される。

[遺物] 平安時代の土器小片が少量出土したが、図示できるものはなかった。

[時期] 平安時代か。

(3) 遺構外出土遺物 (第33図)

縄文時代早期前葉の撚糸文系土器の小破片が2点出土している。

1は色調が暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含んでいる。

2は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含んでいる。

第7章 中道遺跡第41地点の調査

第1節 遺跡の概要

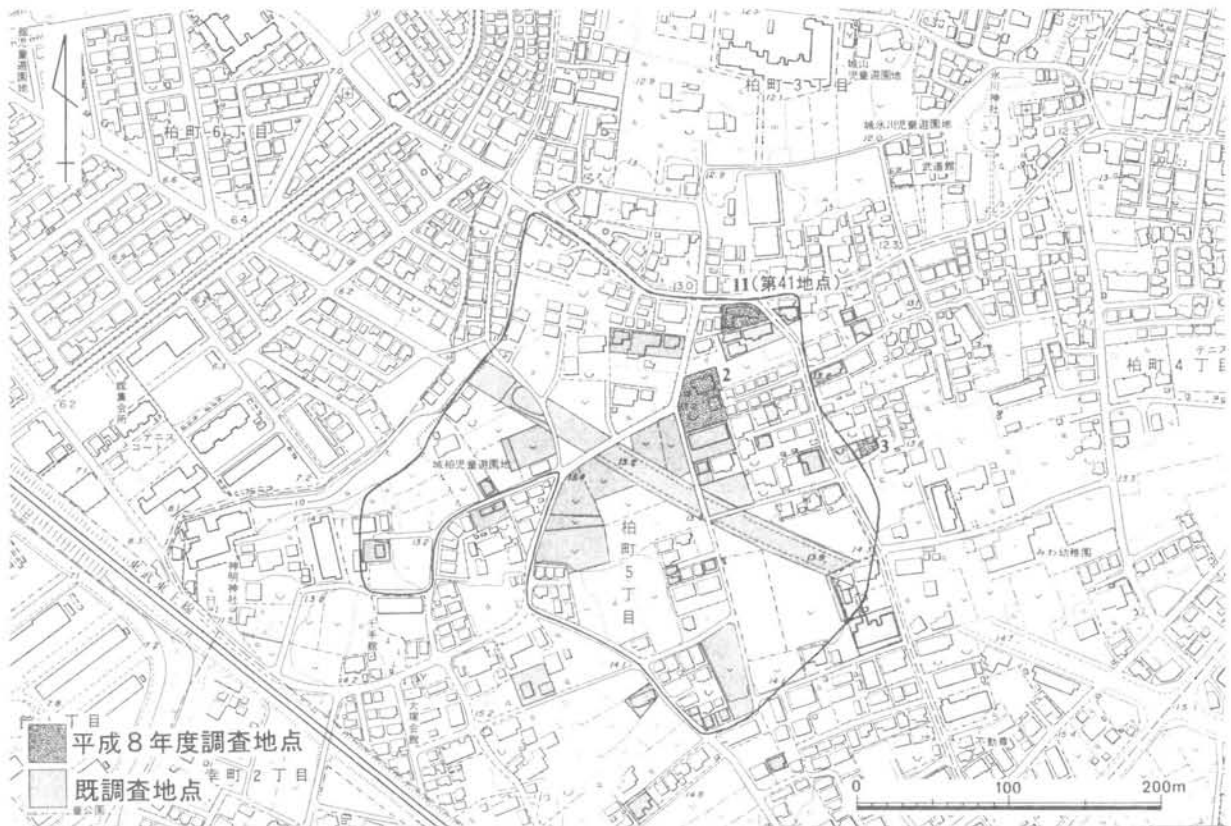
(1) 立地と環境

中道遺跡は、志木市柏町5丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北西約1kmに位置している。遺跡は、柳瀬川流域右岸の台地上に立地しており、標高は北端で約13m、南端で約14m、低地との比高差は約7mである。遺跡周辺の現況は、都市計画道路富士見・大原線の開通とともに各種開発が激増しており、それに伴い畑地は急激に減少している。

本遺跡の発掘調査は、昭和62（1987）年の都市計画道路富士見・大原線建設に伴う調査（第2地点）を契機に本格的に実施され、以後の調査により、旧石器時代、縄文時代中期、古墳時代中・後期、平安時代、中・近世の複合遺跡であることが判明している。

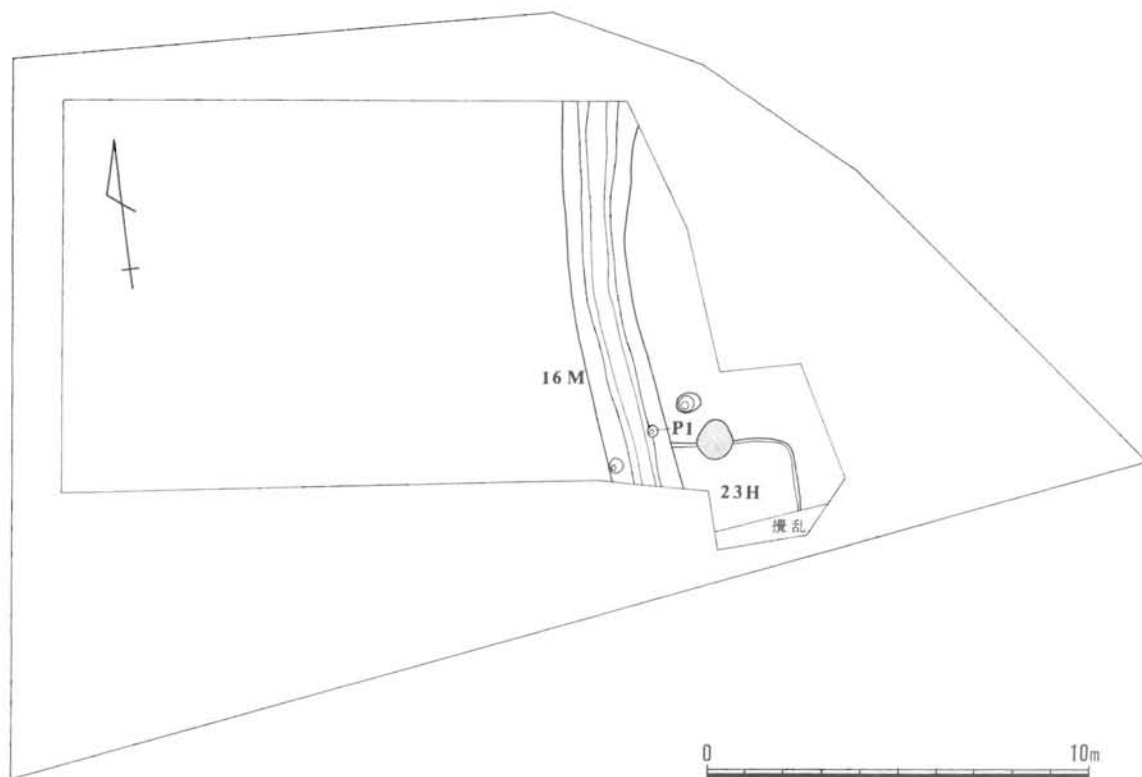
(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成8年6月25日に実施した。調査区の長軸方向に合わせ、2本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぐ。同時に遺構確認作業を行った結果、溝跡1本を確認した。その後、継続してその遺構のプラン確認を行ったところ、調査区南東隅から新たにカマドをもつ住居跡を1軒確認した。遺構確認及び表土剥ぎ作業は、翌26日に終了した。また、残土置場については、遺構の分布しない調査区西半部にその置場を確保することができた。



第35図 周辺の地形と調査地点（1/5000）

平成9年3月31日現在



第36図 遺構分布図 (1/200)

人員導入による発掘調査は27日からは実施した。まず、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行い、午後には溝跡と住居跡 (23H) の精査を開始する。溝跡については、南側に隣接する第21地点で検出された16Mと方向性が合うため、ここでは同一遺構と判断し16Mとした。時期については、図示できるものはなかったが、最新の出土遺物から平安時代に比定される可能性がある。また、住居跡の時期は16Mに切られるものの、出土遺物からやはり平安時代に比定されるものである。

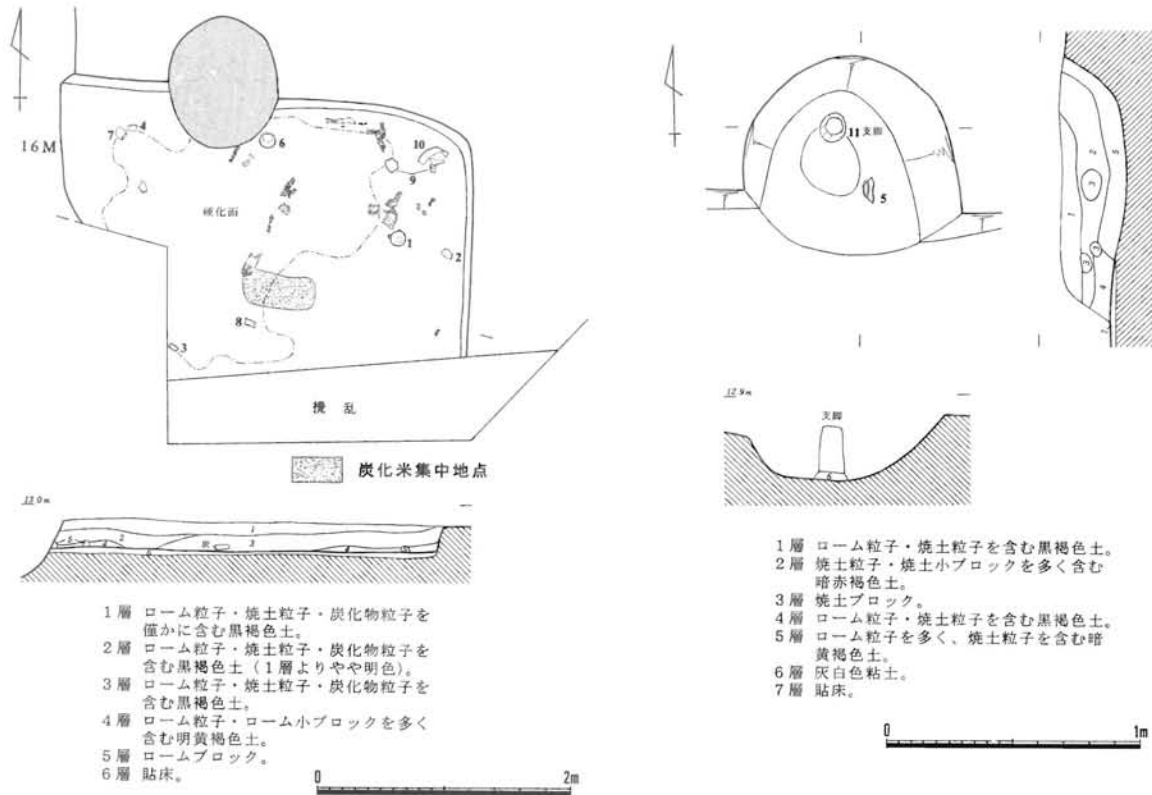
28日、16Mの土層図の実測終了後、写真撮影を行い、その後、平板実測・断面図等の実測を終了する。7月1日、23Hから炭化材・炭化種子が検出される。特に炭化種子は塊状で検出され、分析の結果イネであることが判明した。同日、遺物出土状態の写真撮影を行い、平板実測を終了、遺物を取り上げる。2日、23Hの遺構の平板実測を終了後、カマドの精査を開始、同日には実測も終了し、すべての調査を完了する。4日には埋め戻しを完了する。

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 住居跡

23号住居跡 (第37図)

〔住居構造〕住居の南半部は攪乱により破壊され、同時に調査区域外にあるものと考えられる。また、西側は16号溝跡に切られている。(壁高) 12~20cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 確認されなかった。(床面) 全体的に軟弱であるが、カマドの前面は灰白色粘土が薄く貼られており、よく踏み固められていた。(カマド) 北壁に設置されている。長さ79cm・幅86cm・壁への掘り込み60cmを測る。煙



第37図 23号住居跡 (1/60) ・カマド (1/30)

道は40°程の勾配で立ち上がる。カマドの奥側から、灰白色粘土の上に立てられた支脚が検出された。カマドの構築に使用されたとされる粘土はほとんど確認できなかった。(柱穴) 検出されなかった。(覆土) 5層に分層される。床面上から炭化材と炭化種子が検出された。

[遺物] 床面上及び覆土中から土器・灰釉陶器が出土した。

[時期] 平安時代 (10世紀前半)。

23号住居跡出土遺物 (第38図1~11)

須恵器坏・埴形土器 (1・2・5・6)

1は器高4.2cm、口径13.8cm、底径5.8cm。ロクロ回転は右回転。底部には回転糸切り痕を残す。色調は灰白色を基調とするが、半分以上に黒斑が残る。胎土には砂粒・小石を含む。東壁近くのほぼ床面上からの出土で、完形である。

2は器高4.4cm、推定口径13.6cm、推定底径6.0cm。ロクロ回転は右回転。底部には回転糸切り痕を残す。色調は暗橙色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。東壁近くのほぼ床面上からの出土で、遺存度は1/3程である。

5は器高5.4cm、推定口径14.2cm、底径5.8cm。ロクロ回転は右回転。内面はへら磨き調整が施される。底部には高台をもち、回転糸切り痕を残す。色調は全体に明橙色を呈し、胎土には砂粒を含む。カマド内からの出土で、遺存度は1/2程である。

6は器高5.6cm、口径15.0cm、底径6.8cm。ロクロ回転は右回転。内面は黒彩後へら磨き調整が施される。底部には高台をもち、回転糸切り痕を残す。色調は全体に暗灰褐色を呈し、胎土には黄褐色・茶褐色粒子・砂粒を含む。カマド前面のほぼ床面上からの出土で、完形である。

灰釉陶器（3・4・7）

3は現器高3.1cm、推定口径16.0cm。胎土には黒色粒子を含み、色調は灰褐色を呈する。灰釉は薄い黄緑色を呈し、施釉は内面である。住居中央付近のほぼ床面上からの出土である。

4は現器高4.3cm、推定口径16.6cm。坏形土器の破片である。胎土には黒色微粒子を含み、色調は灰白色を呈する。灰釉は薄い黄緑色を呈し、施釉は外面体部下半を除く全面である。カマド左横の床面上11cm浮いた覆土中からの出土である。

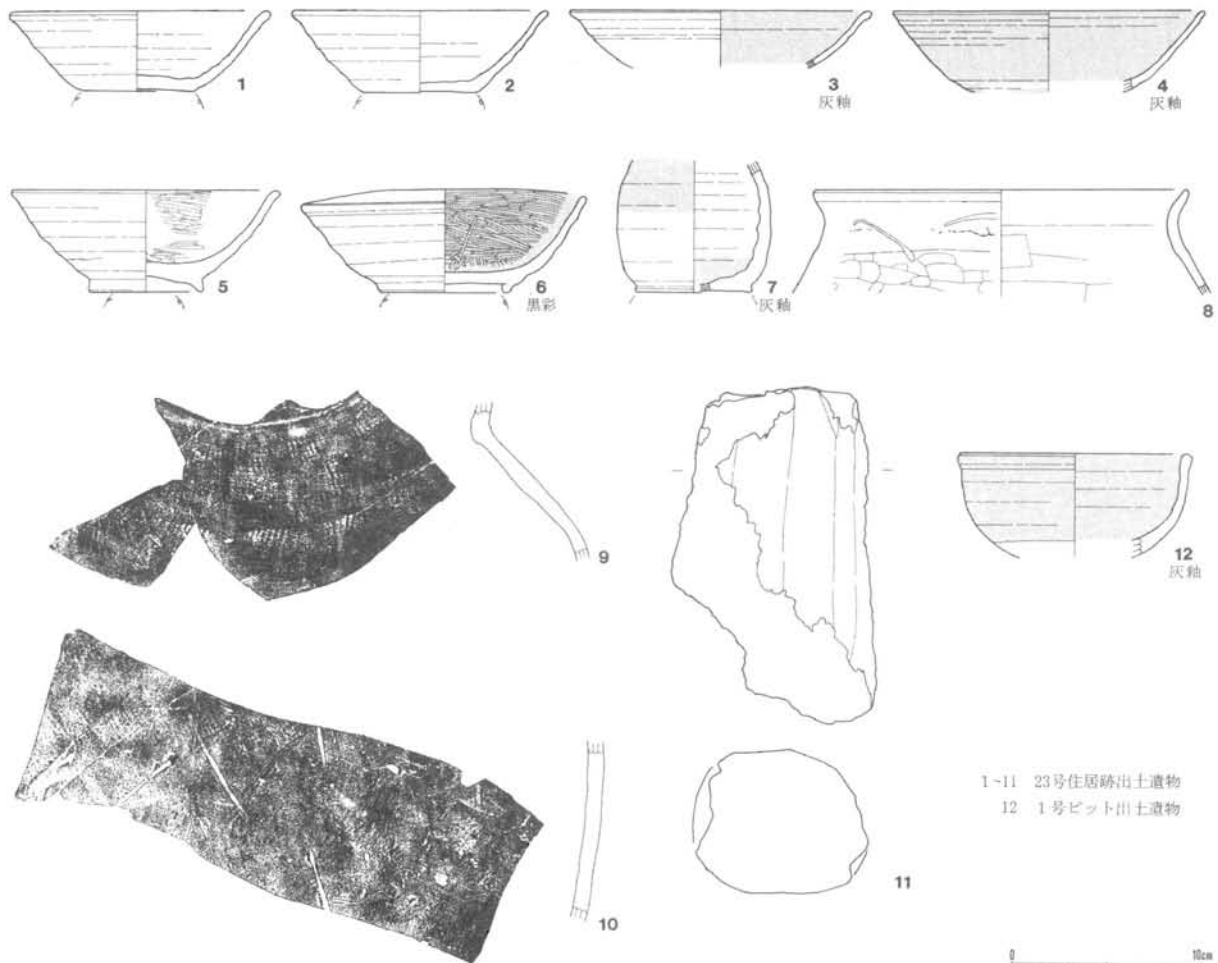
7は現器高7.0cm、推定底径6.0cm。胴部上半には緑色の灰釉がハケ塗りされているが、内面底部は自然釉であろう。色調は灰褐色を呈し、胎土には白色砂粒を含む。カマド左横の床面上11cm浮いた覆土中からの出土で、底部から胴部上半にかけてを1/2程遺存する。小瓶である。

土師器甕形土器（8）

現器高5.5cm、推定口径19.9cm。口縁部から胴部上半にかけての破片である。胎土には砂粒を含む。内外面口縁部横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は横方向のヘラ削り調整が施される。住居中央付近のほぼ床面上からの出土である。

須恵器甕形土器（9・10）

9は頸部から肩部にかけての破片である。色調は暗灰褐色を基調とし、胎土には白色微粒子を含む。内外面はナデ調整が施されるが、外面には叩き目痕が残る。住居北東コーナーのほぼ床面上からの出土



1-11 23号住居跡出土遺物
12 1号ピット出土遺物

第38図 23号住居跡・1号ピット出土遺物（1/4）

である。

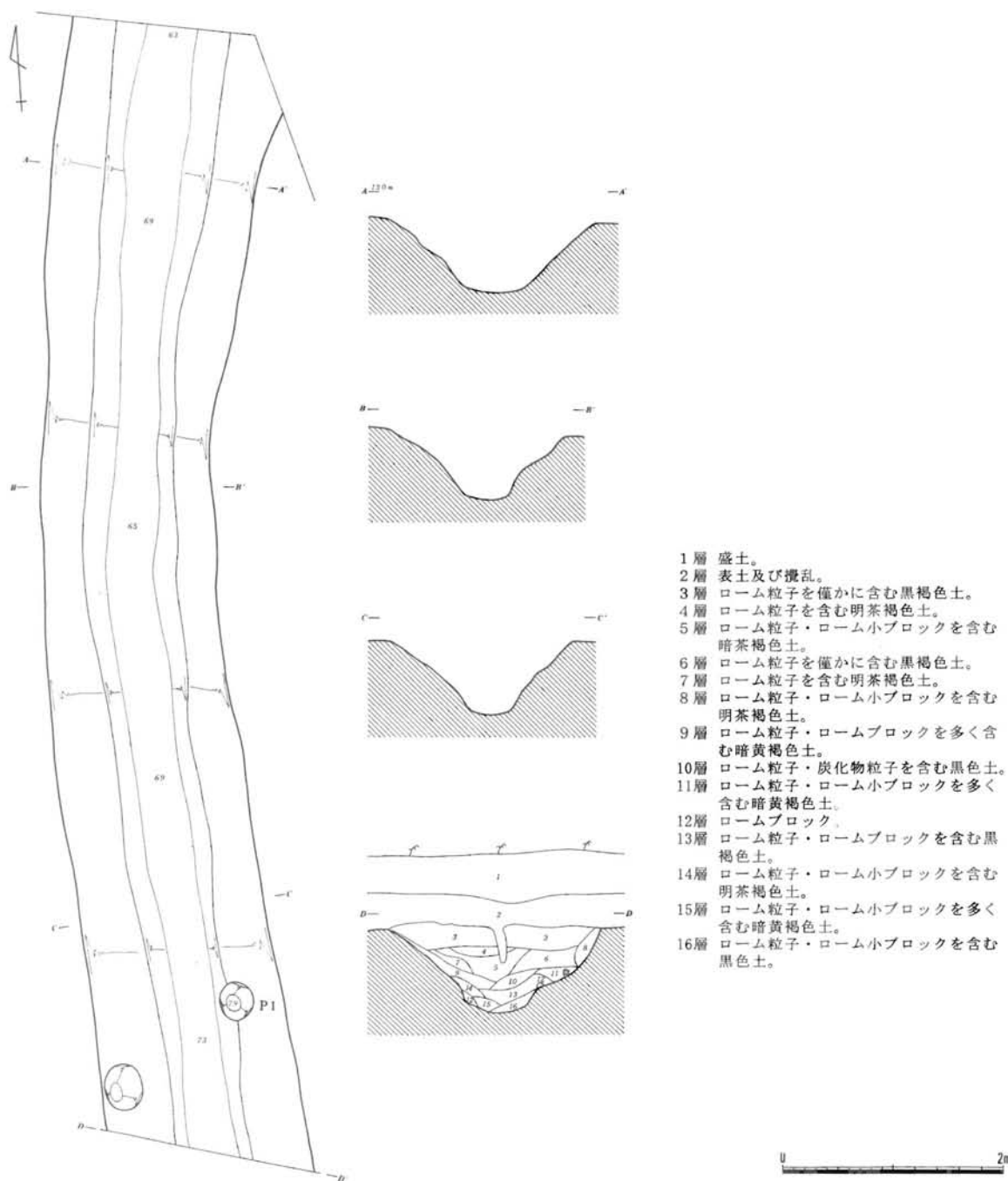
10は胴部破片である。色調は灰褐色を基調とし、胎土には砂粒・小石を含む。内外面横方向のナデ調整が施されるが、外面にはその後縦方向の細長い磨き的な調整が施される。住居北東コーナーのほぼ床面上からの出土である。

土製品 (11)

支脚である。現全長17.9cm、最大幅10.5cm。カマド内からの出土で、遺存度は2/3程である。

(2) 溝跡

16号溝跡 (第39図)



- 1層 盛土。
- 2層 表土及び攪乱。
- 3層 ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。
- 4層 ローム粒子を含む明茶褐色土。
- 5層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。
- 6層 ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。
- 7層 ローム粒子を含む明茶褐色土。
- 8層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む明茶褐色土。
- 9層 ローム粒子・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土。
- 10層 ローム粒子・炭化物粒子を含む黒色土。
- 11層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。
- 12層 ロームブロック。
- 13層 ローム粒子・ロームブロックを含む黒褐色土。
- 14層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む明茶褐色土。
- 15層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。
- 16層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒色土。

第39図 16号溝跡 (1/60)

[構造] 23号住居跡を切り、ほぼ南北方向に走行する。確認できる範囲での長さは10.3m、上幅150～200cm、下幅35～57cm、深さ63～73cmを測る。溝底はほぼ平坦である。断面形は薬研堀状を呈し、西側に比べ東側の方が急斜に立ち上がる。(覆土) 14層に分層される。

[遺物] 古墳時代後期から平安時代にかけての土器小破片が出土したが、図示できるものはなかった。

[時期] 平安時代か。

[所見] 本地点の南隣である中道遺跡第21地点でも15・16号溝跡が2本確認されているが、今回はその16号溝跡の延長上にあるものと考えられるため、遺構名を同じ16号溝跡とした。ただし、中道遺跡第21地点の報告中では16号溝跡の時期について、覆土の観察から中・近世に比定しているが、今回の調査により、平安時代まで遡る可能性がでてきた。しかし、確証できる遺物はまだ出土していないために、この問題については今後の課題とするべきであろう。

(3) ピット

1号ピット (第39図)

[構造] 16号溝跡を切る。36×32cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは79cmを測る。

[遺物] 灰釉小鉢が1点出土した。

[時期] 近世中葉以降。

1号ピット出土遺物 (第38図12)

瀬戸の灰釉小鉢である。現器高5.5cm、推定口径12.3cm。胎土は黄褐色を基調とし、黒色微粒子を僅かに含む。灰釉は黄緑色を基調とし、施釉は外面底部を除く全面である。遺存度は1/5程である。

(4) 遺構外出土遺物 (第40図)

縄文時代の土器の小破片が4点検出されている。時期的には早期後葉、前期後葉、後期前葉の3群に分類された。

第1群土器 早期後葉の条痕文系土器 (1・2)

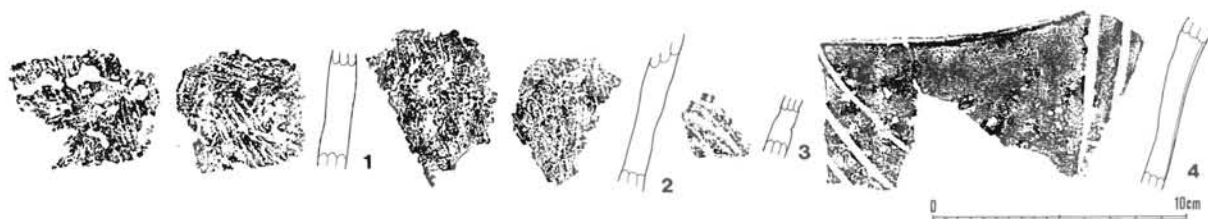
いずれも胴部小破片で、表裏ともに縦位を基本とした方向に条痕文が施され、胎土中には繊維を含んでいる。

第2群土器 前期後葉の浮島・興津式土器 (3)

貝殻腹縁により連続押捺文が施される土器である。胎土中には細砂粒・黄褐色粒子を含む。

第3群土器 後期前葉の堀之内式土器 (4)

頸部と胴部との境界には沈線をめぐらし、以下は複数沈線により懸垂文を描き、それを斜行文で連結させる構成になるものと思われる。胎土中には砂粒・小石を含む。



第40図 遺構外出土遺物 (1/3)

[参 考 文 献]

- 佐々木保俊・尾形則敏 1988『中道遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第5集
- 佐々木保俊 1996「第13章 中道遺跡第21地点の調査」『城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第13地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点』志木市の文化財第24集 志木市教育委員会
- 尾形則敏 1989「第4章中道遺跡第6地点の調査」『志木市遺跡群Ⅰ』志木市の文化財第13集 志木市教育委員会
- 1992「第2章 中道遺跡第12地点の調査」『中道遺跡第12地点 中道遺跡第13地点 田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点発掘調査報告書』志木市の文化財第18集 志木市教育委員会
- 1992「第3章 中道遺跡第13地点の調査」『中道遺跡第12地点 中道遺跡第13地点 田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点発掘調査報告書』志木市の文化財第18集 志木市教育委員会
- 尾形則敏・深井恵子 1996「第3章 中道遺跡第33地点の調査」『志木市遺跡群Ⅶ』志木市の文化財第23集 志木市教育委員会
- 1997「第6章 中道遺跡第36地点の調査」『志木市遺跡群Ⅷ』志木市の文化財第25集 志木市教育委員会
- 1997「第7章 中道遺跡第37地点の調査」『志木市遺跡群Ⅷ』志木市の文化財第25集 志木市教育委員会
- 野沢 均・尾形則敏 1996「第13章 中道遺跡第26地点の調査」『城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第13地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点』志木市の文化財第24集 志木市教育委員会

第8章 城山遺跡第34地点の調査

第1節 遺跡の概要

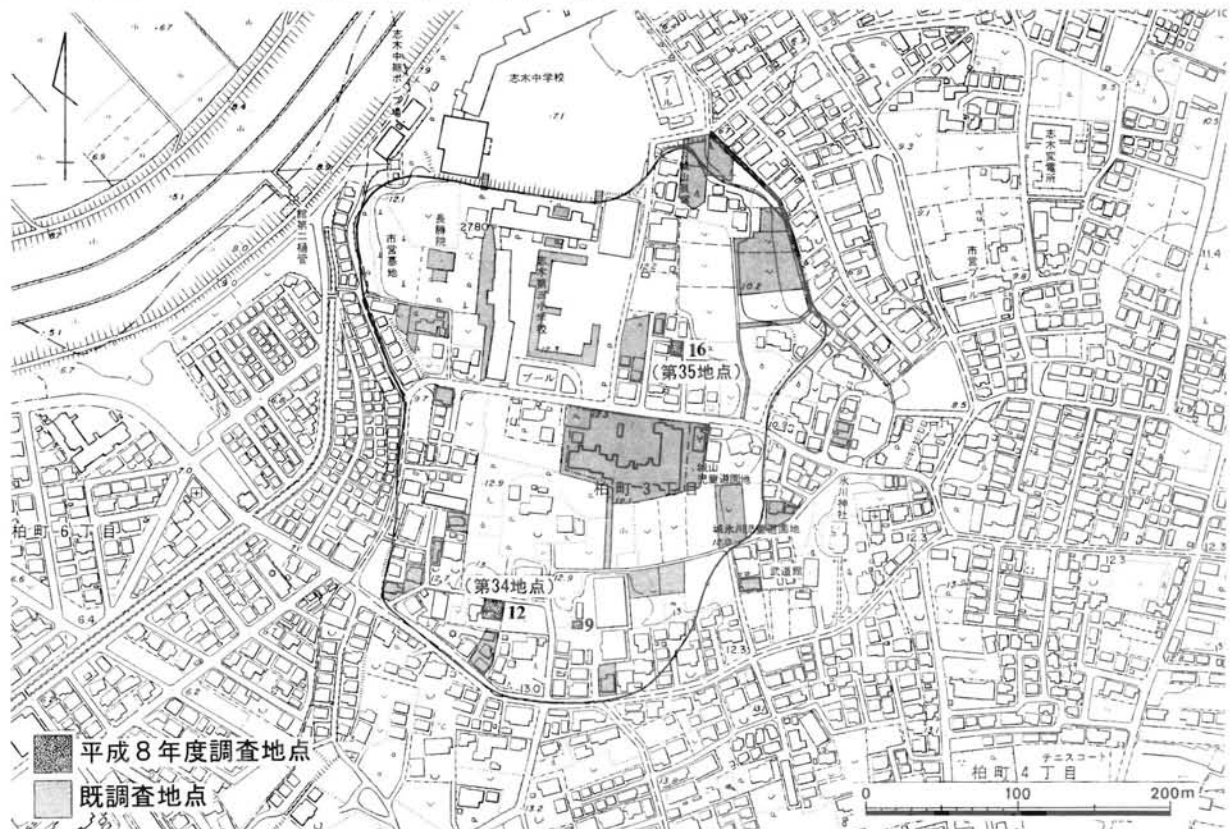
(1) 立地と環境

城山遺跡は、志木市柏町3丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北西約1kmに位置している。遺跡は北西に柳瀬川を望む台地上にあり、標高は約12m、台地下の柳瀬川に開析された低地との比高差は約5mである。遺跡の現況は、住宅地を主とするが、小学校・神社・墓地などがあり、市内の台地上では比較的緑地を多く残している地区である。また、畑地もまだ僅かに散在するが、今後、住宅建設を中心とする各種開発行為の増大が予想される。

本遺跡は、昭和49年に第1回目の発掘調査が実施され、以後の調査により、縄文時代前・中期、弥生時代後期、古墳時代前・中・後期、奈良・平安時代の集落跡、中世の城館跡であることが判明している。

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成8年7月12日に実施した。調査区の短軸方向に合わせ、2本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぐ。同時に遺構確認作業を行った結果、ほぼ調査区域全面にわたり住居跡と思われる遺構が確認された。その後、継続して遺構のプラン確認を行ったところ、遺構は住居跡が3軒重複して分布しているものと考えられた。残土については、調査区内での処理は不可能と判断し、午後から、残土をダンプに積載し、調査区域外に搬出することとし、同日にはその作業を完了した。



第41図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

平成9年3月31日現在

15日からは人員導入による発掘調査を開始した。まず、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行い、終了後住居跡（125H）の精査を開始した。また、125Hを切る土坑（129D）が1基検出されたため、ただちに精査を行った。

16日、125Hは126Hに切られていることが判明した。同日、126Hの精査を開始する。両住居跡は出土遺物から7世紀以降の古墳時代後期の所産のものと考えられる。17日、第2回目の残土搬出作業をバックホー、ダンプを使用し実施する。

18日、125Hから炭化種子（ヤマモモ）が8点検出され、22日には、126Hの遺物出土状態の写真撮影を行い、その後、平板測量終了後、遺物を取り上げる。125Hについては出土遺物を平板測量でドットに落とすことにした。

24日には、125・126H両住居跡に切られる127Hの精査を開始する。この住居跡は出土遺物から6世紀前半の古墳時代後期の所産のものとして判明した。同日、125・126Hの床面をもう一度細かく精査し、柱穴・貯蔵穴を確認、掘り始める。

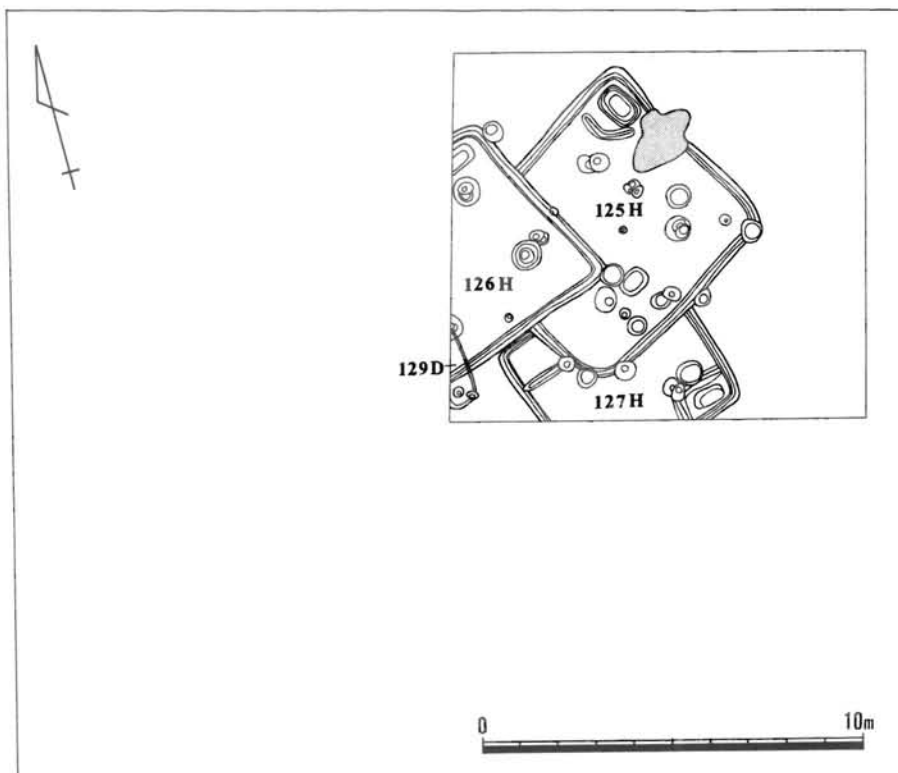
29日には、125～127Hの遺構の平板測量、断面図等の実測を終了し、30日には、遺構全体の写真撮影を行う。終了後、掘り方の精査を開始する。

8月1日、125Hのカマドの精査を開始し、同日には完了、すべての調査を完了する。午後からは器材の搬出作業を終了し、翌2日には埋め戻しを完了する。

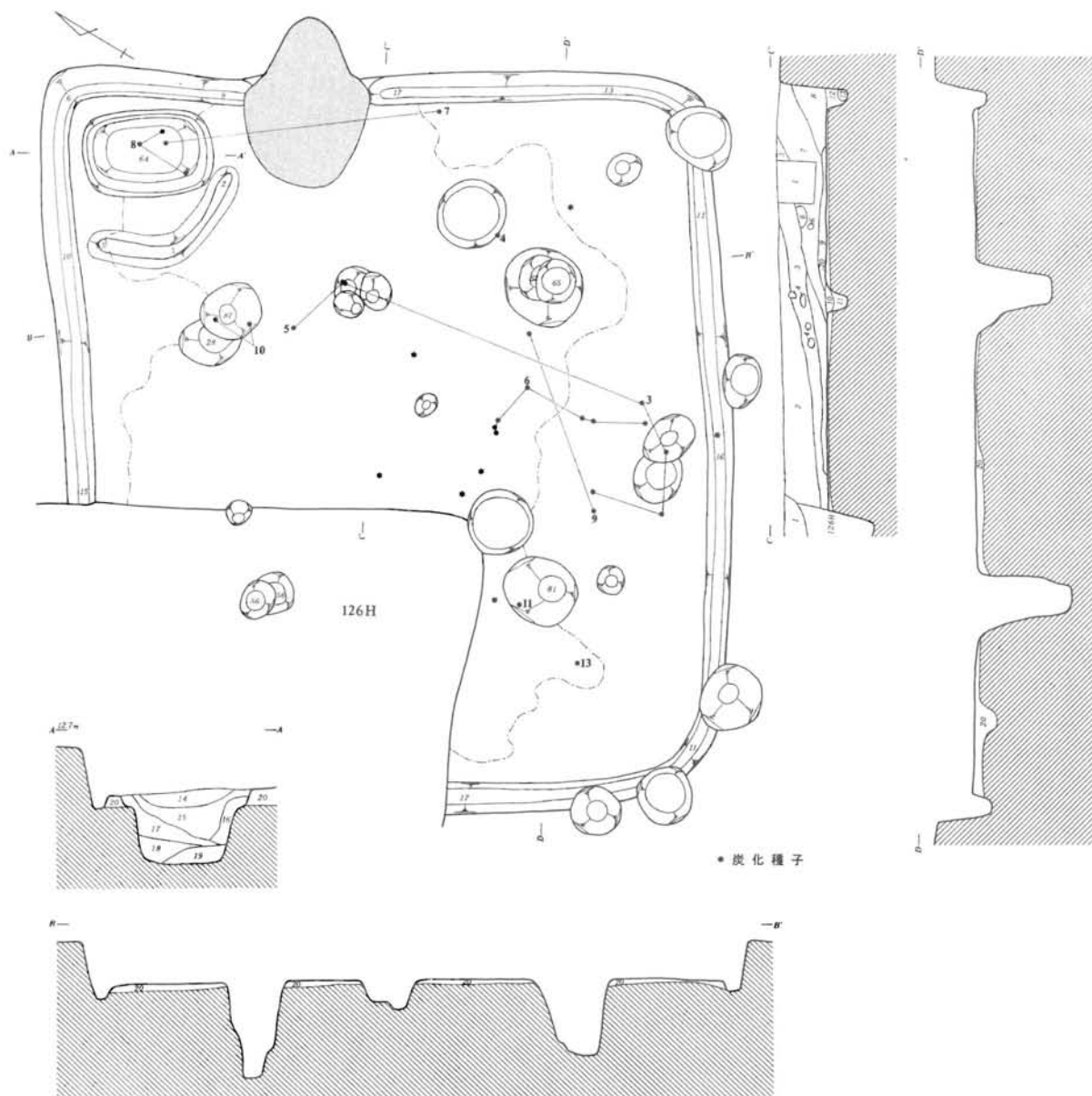
第2節 検出された遺構と遺物

（1）住居跡

125号住居跡（第43・44図）



第42図 遺構分布図（1/200）

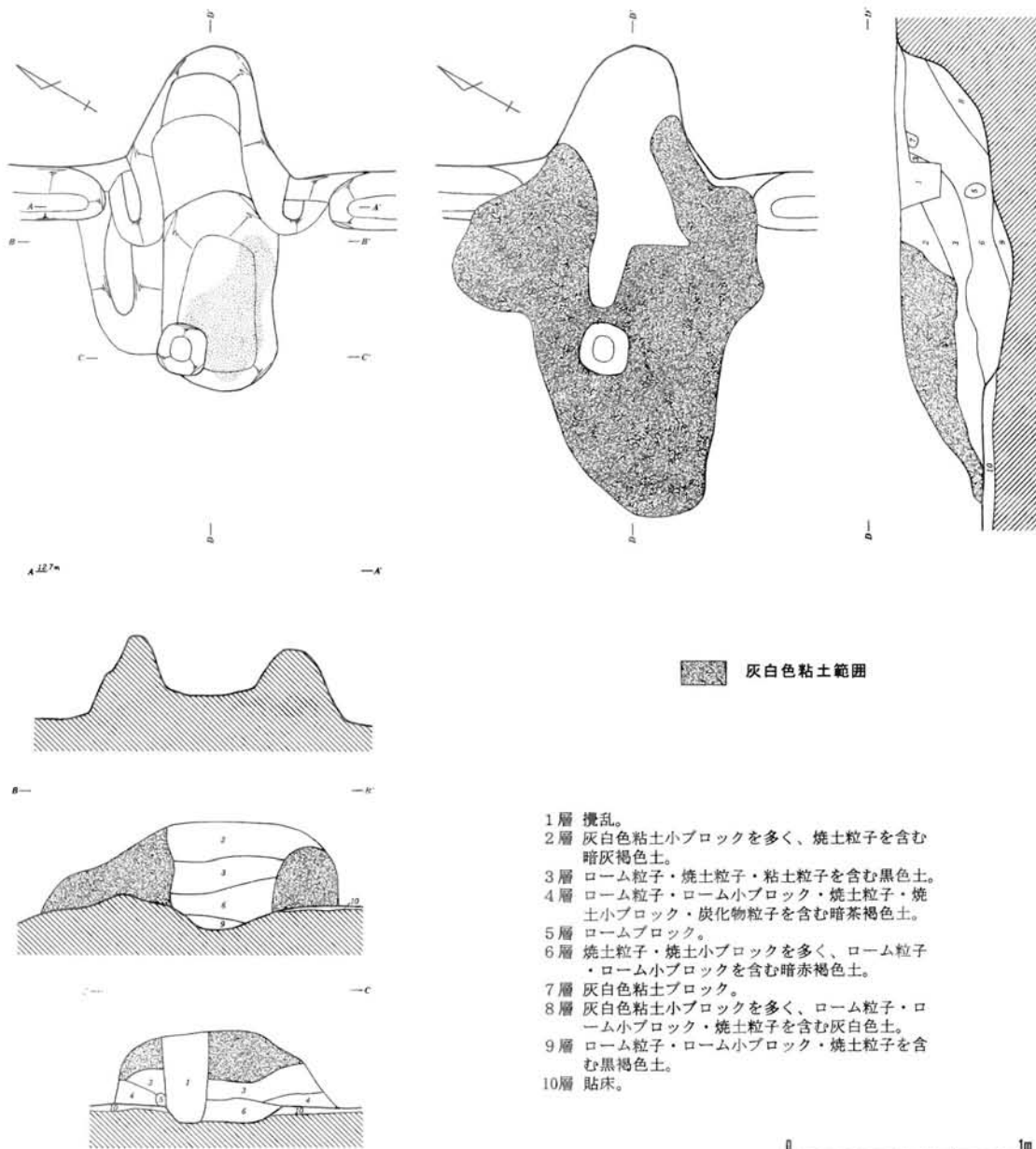


- 1層 攪乱。
- 2層 ローム粒子・粘土粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土。
- 3層 焼土粒子を多く、ローム粒子・粘土粒子を含む暗茶褐色土。
- 4層 焼土。
- 5層 ローム粒子・粘土粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土。
- 6層 灰白色粘土ブロック。
- 7層 粘土粒子・粘土ブロックを多く、ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を含む暗茶褐色土。
- 8層 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・焼土粒子を含む黒褐色土。
- 9層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、粘土粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗黄褐色土。
- 10層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
- 11層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む黄褐色土。
- 12層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
- 13層 ロームブロック。
- 14層 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。
- 15層 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土。
- 16層 焼土粒子・焼土小ブロックを多く、ローム粒子を含む暗赤褐色土。
- 17層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。
- 18層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む明茶褐色土。
- 19層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。
- 20層 貼床。

貯蔵穴



第43図 125号住居跡 (1/60)



- 1層 攪乱。
- 2層 灰白色粘土小ブロックを多く、焼土粒子を含む暗灰褐色土。
- 3層 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子を含む黒色土。
- 4層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。
- 5層 ロームブロック。
- 6層 焼土粒子・焼土小ブロックを多く、ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗赤褐色土。
- 7層 灰白色粘土ブロック。
- 8層 灰白色粘土小ブロックを多く、ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を含む灰白色土。
- 9層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を含む黒褐色土。
- 10層 貼床。

第44図 125号住居跡カマド (1/30)

〔住居構造〕126号住居跡に切られ、127号住居跡を切る。(平面形) 長方形。(規模) 6.50×5.80m。(壁高) 35~45cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 確認できた範囲では、カマドを部分を除いて全周する。上幅24~28cm・下幅8~10cm・深さ9~17cmを測る。(床面) 全体的にしっかりとしているが、特にカマド前面から住居中央にかけて良く踏み固められている。貼床が施されており、厚さは2~20cmを測る。(カマド) 北東壁の中央よりやや北に位置する。長さ148cm・幅108cm・壁への掘り込み55cmを測る。袖部はロームを馬蹄形に残し、その上に暗灰白色粘土を被覆し構築している。天井部も暗灰白色粘土で構築されていたと思われるが、カマドの前面に流れ出ている。(柱穴) 各コーナーの4本が支柱穴である。南コーナーの1本を除いた3本の柱穴は2本が重複した形をしている。深さ28~87cmを測る。(貯蔵穴) カマドの左側に位置し、平面形は長方形を呈し、規模は113×78cm・深さ64cmを測る。覆土は6層に分層される。南西側には高さ2~5cmのく字状を呈する凸堤が巡っている。(覆土) 12層に

分層され、レンズ状の堆積状態を呈する。

〔遺物〕 覆土中から土器・土製品・炭化種子（ヤマモモ） 8点が出土した。

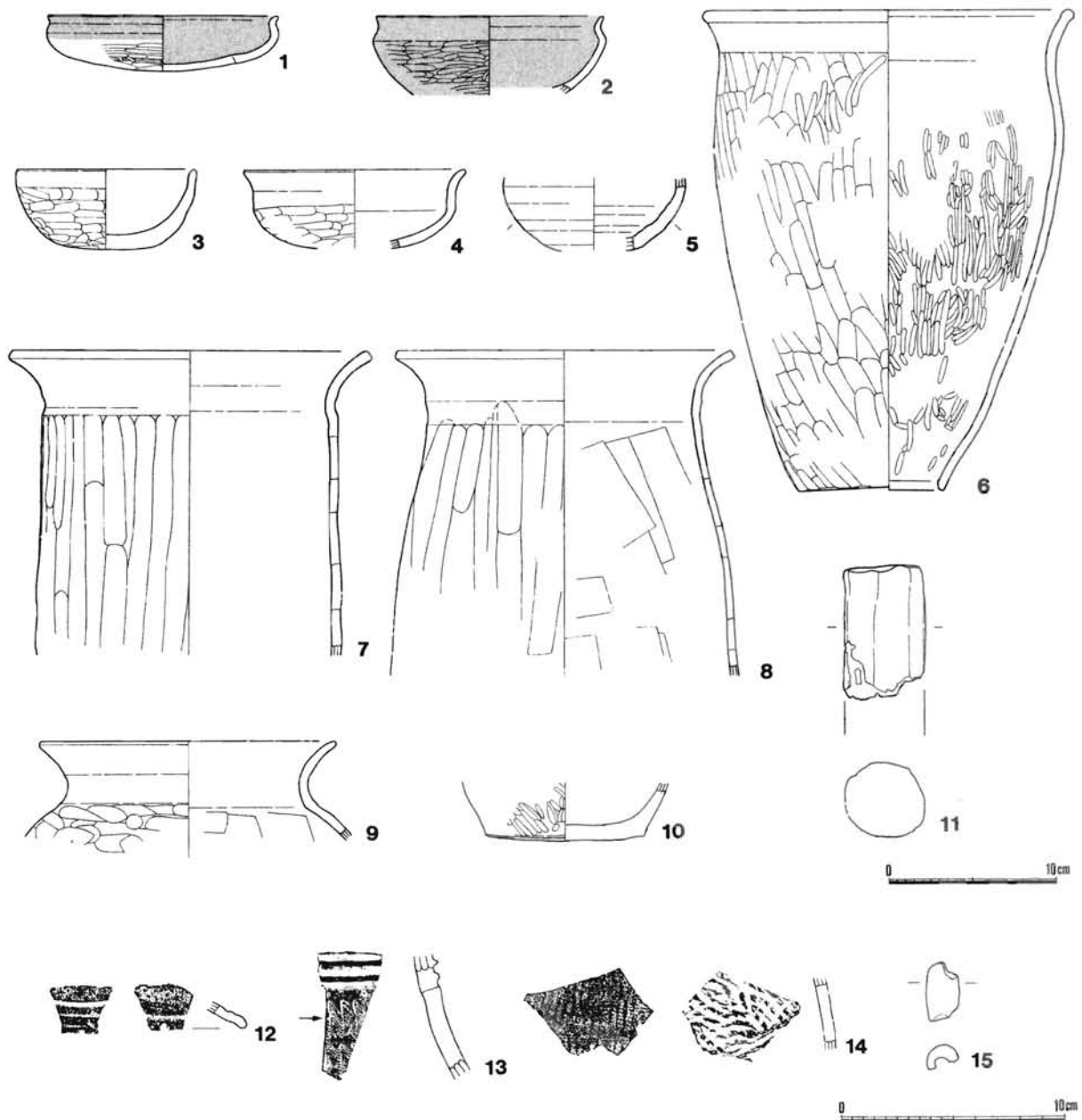
〔時期〕 古墳時代後期（6世紀末葉）。

125号住居跡出土遺物（第45図）

土師器坏形土器（1～4）

1は器高3.4cm、推定口径13.7cm。口縁部は短くツンと外反し、体部は丸く偏平である。口唇部内面には沈線は見られない。内面及び外面口縁部から体部にかけては赤彩される。胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面及び外面口縁部から体部にかけては横ナデ、以下外面はヘラ削り後ヘラ磨き調整が施される。覆土中からの出土で、遺存度は1/3程である。

2は現器高5.0cm、推定口径13.4cm。1の土器に比べ、器高が高く、体部には稜をもつ。口唇部内面には沈線は見られない。内面及び口縁部外面は赤彩される。胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面及



第45図 125号住居跡出土遺物（1/4・1/3）

び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後ヘラ磨き調整が施される。覆土中からの出土で、遺存度は1/6程である。

3は器高4.8cm、口径10.7cm。全体に半円形を呈する塊状のもので、小型であるが、器厚が分厚いため、重量感がある土器である。外面には黒斑がみられるが、色調は暗橙色を基調とし、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。床面上8～39cm浮いた覆土中からの散在的な出土で、遺存度は2/3程である。

4は現器高4.7cm、推定口径13.2cm。底部と口縁部との境には弱い稜をもち、口縁部は大きく外反する。色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には金雲母・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。北東コーナーの床面上3cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/3程である。

須恵器甕形土器（5）

現器高4.3cm。器厚が厚いため、甕底部と思われる。色調は青灰色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。底部は回転ヘラ削り調整が施される。カマド前面の床面上39cm浮いた覆土中からの出土である。

土師器甌形土器（6）

器高28.7cm、推定口径22.0cm、底径8.6cm。底部から胴部にかけては、ゆるいカーブで広がるが、胴部上半でやや膨らみをもち、口縁部は僅かに外反する。口唇部は外側にやや丸くめくれている。色調は全体に明橙色を呈し、胎土には金雲母・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面は縦方向に細長い磨きがやや粗く施される。外面は全体に粗く縦方向のヘラ削りが施されるが、その後部分的に内面同様の細長い磨きが施される。覆土中からの散在的な出土で、遺存度は1/2程である。

土師器甕形土器（7～10）

7は現器高18.2cm、推定口径21.6cm。直線的な胴部をもつ長胴甕で、口縁部は外反する。色調は明橙色を呈し、胎土には金雲母・砂粒を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は縦方向にヘラ削りが施される。カマド付近からの出土で、口縁部から胴部中位にかけてを1/2弱遺存する。

8は現器高19.5cm、推定口径20.2cm。7に比べ、やや胴部中位に膨らみをもち、器厚が薄い土器である。色調は明橙色を基調とし、胎土には砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は縦方向にヘラ削りが施される。貯蔵穴中からの出土で、口縁部から胴部中位にかけてを1/3程遺存する。

9は現器高7.0cm、推定口径17.4cm。肩部をもつ丸甕で、口縁部は大きく外反する。色調は暗橙色を呈し、胎土には砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は横方向にヘラ削りが施される。床面上15cm、28cm浮いた覆土中からの出土で、口縁部から胴部上半にかけてを1/2弱を遺存する。

10は現器高3.5cm、底径9.2cm。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には金雲母・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整が施される。北西コーナーの柱穴中からの出土で、底部のみ4/5程遺存する。

須恵器蓋形土器（12）

小破片であるため、厳密には器種不明品である。口縁部外面には沈線状の凹みが3本観察される。色調は灰白色を呈し、胎土には砂粒を含む。覆土中からの出土である。

須恵器器台形土器（13）

脚部小破片と思われる。脚部の裾部はゆるやかに外側に開くものと考えられる。2段の櫛描波状文の

上部には2条の凸帯がまわる。なお、拓本に「↓」で示した位置にはスカシ窓が穿たれている。色調は全体に濃い灰褐色を呈し、胎土には黒色・白色粒子を僅かに含む。焼成は良好である。住居南東コーナーの床面上29cm浮いた覆土中からの出土である。

須恵器甕形土器 (14)

胴部の小破片と思われる。色調は灰褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。外面は平行叩き後軽いナデ調整が施され、内面には同心円文の当て道具痕が残る。覆土中からの出土である。

土製品 (11・15)

11は支脚である。長さ7.9cm、最大幅4.9cm。基本的に細長い円筒形を呈する。南東コーナーの柱穴位置で、床面上15cm浮いた覆土中からの出土である。

15は土錘である。長さ2.5cm、最大幅2.3cm、重さ18.2g。覆土中からの出土である。

126号住居跡 (第46図)

〔住居構造〕住居西側は調査区域外にあるものと考えられる。125号住居跡を切り、129号土坑に切られる。(平面形)隅丸方形か。(規模)不明×5.40m。(壁高)39~52cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝)確認できる範囲では全周する。上幅24~30cm・下幅6~18cm・深さ11~19cmを測る。(床面)住居中央が特に良く硬化している。住居中央を除いて貼床が施されており、厚さは3~12cmを測る。(カマド)検出できなかったが、北壁にあるものと思われる。(柱穴)支柱穴4本のうちの3本が確認された。深さは49~60cmを測る。南壁際の小ピットは入口の梯子穴と思われる。(貯蔵穴)北東コーナーに位置するが、一部は調査区域外である。平面形は長方形と思われ、規模は不明×48cm・深さ38cmを測る。(覆土)24層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

〔遺物〕覆土及び床面上から、土器・土製品・炭化種子(ヤマモモ)2点が出土した。

〔時期〕古墳時代後期(7世紀後葉)。

126号住居跡出土遺物 (第47図)

須恵器坏形土器 (1・2)

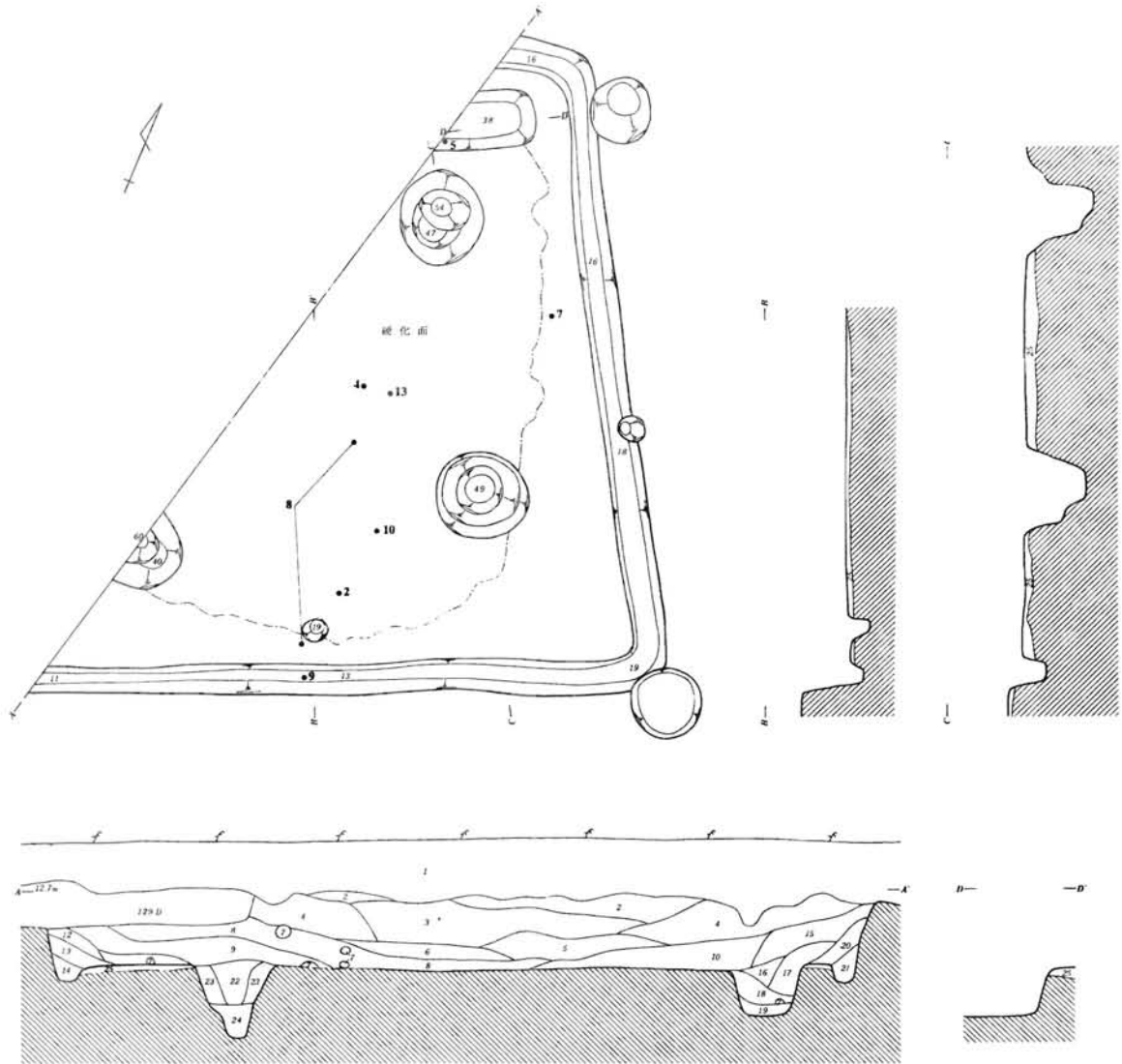
1は坏身の口縁部から底部にかけての小破片である。受部と口縁部との境には弱い沈線がまわり、口縁部は短く直立気味に内傾する。色調は灰褐色を基調とするが、外面底部は濃い灰褐色を呈する。胎土には白色・黒色微粒子を僅かに含む。覆土中からの出土である。

2は坏蓋の天井部から口縁部にかけての小破片である。全体に丸い天井部であるが、頂部付近は回転ヘラ削りによりやや平坦に作られている。天井部と口縁部との境には幅2mmの沈線がまわる。色調は内面が灰褐色、外面は濃い灰褐色を呈する。胎土には白色・黒色微粒子を僅かに含む。南壁近くの床面上からの出土である。

土師器坏形土器 (3~5)

3は器高3.6cm、口径10.2cm。底部と口縁部との境には段をもち、口縁部は直立気味に外反する。口唇部内面には沈線はなし。内面及び口縁部外面は赤彩される。胎土には砂粒・小石を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削りが施される。床面上からの出土で、遺存度は1/2程である。

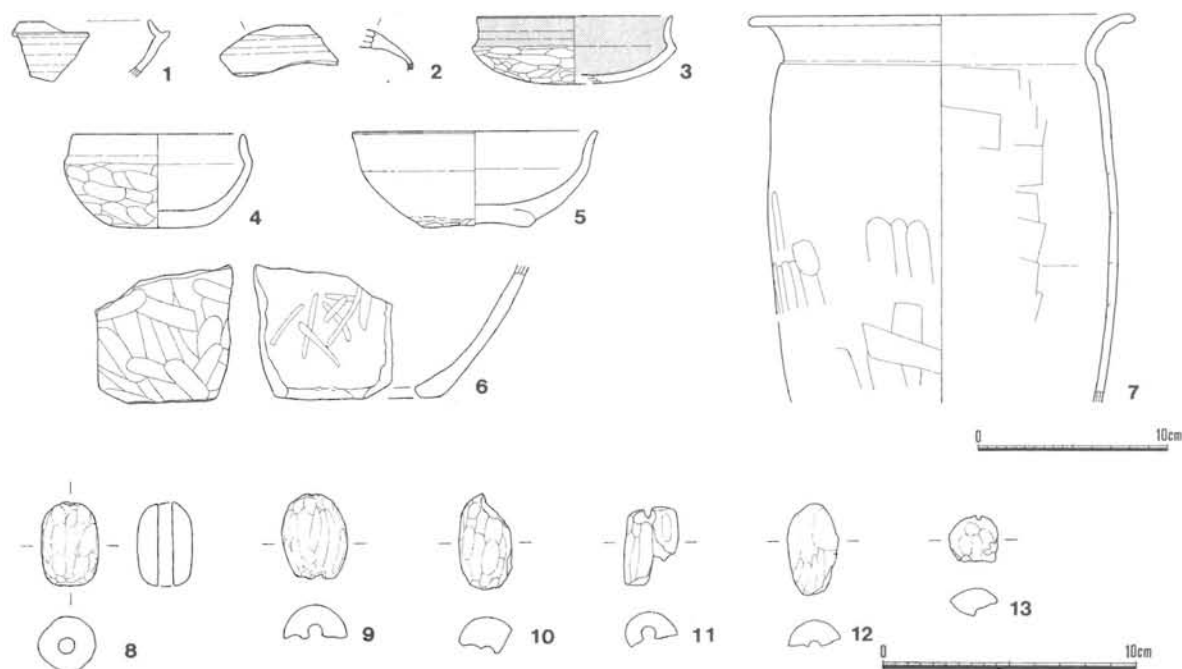
4は器高5.0cm、推定口径9.0cm。底部はやや平底気味で、底部と口縁部との境には僅かに段をもち、口縁部は直立気味に内傾する。色調は底部を中心に黒斑がみられるが、全体に黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。住居中央の床



- | | |
|---|--|
| <p>1層 表土。
 2層 ローム粒子を僅かに含む黒色土。
 3層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
 4層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。
 5層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
 6層 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子を含む黒褐色土。
 7層 ロームブロック。
 8層 ローム粒子を多く含む明茶褐色土。
 9層 ローム粒子を含む明茶褐色土（8層よりやや暗色）。
 10層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒色土。
 11層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む明茶褐色土。
 12層 ローム粒子を含む黒色土。
 13層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を含む暗茶褐色土。
 14層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。</p> | <p>15層 ローム粒子を含む黒褐色土。
 16層 ローム粒子・焼土粒子を含む黒色土。
 17層 焼土粒子を多く、ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗赤褐色土。
 18層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を含む黒色土。
 19層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む明茶褐色土。
 20層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、焼土粒子を含む明茶褐色土。
 21層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。
 22層 ローム粒子を含む黒色土。
 23層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
 24層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黄褐色土。
 25層 貼床。</p> |
|---|--|

0 2m

第46図 126号住居跡（1/60）



第47図 126号住居跡出土遺物（1/4・1/3）

面上31cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は2/3程である。

5は器高5.1cm、推定口径13.0cm、底径5.6cm。体部と口縁部との境には横ナデにより作出された稜をもち、口縁部は外反する。底部には円盤状に粘土の接合痕が観察される。色調は全体に赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削りが施される。貯蔵穴内からの出土で、遺存度は2/3程である。

土師器甑形土器（6）

底部小破片である。底部に平坦面があることから、筒抜け式ではなく、単孔式のものであろう。胎土には砂粒を含む。内面はヘラナデ後、縦方向の細長い磨きが施され、外面はヘラ削り後、軽いナデが施される。覆土中からの出土である。

土師器甕形土器（7）

現器高20.6cm、口径20.4cm。胴部は直線的に細長く、口縁部との境は口縁部の横ナデにより明瞭な段差をもち、口縁部は大きく外反する。色調は全体に黄褐色～明橙色を呈し、胎土には金雲母・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後胴部上半を中心にナデ（スリップか）が施される。東壁近くの床面上からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて4/5程遺存する。

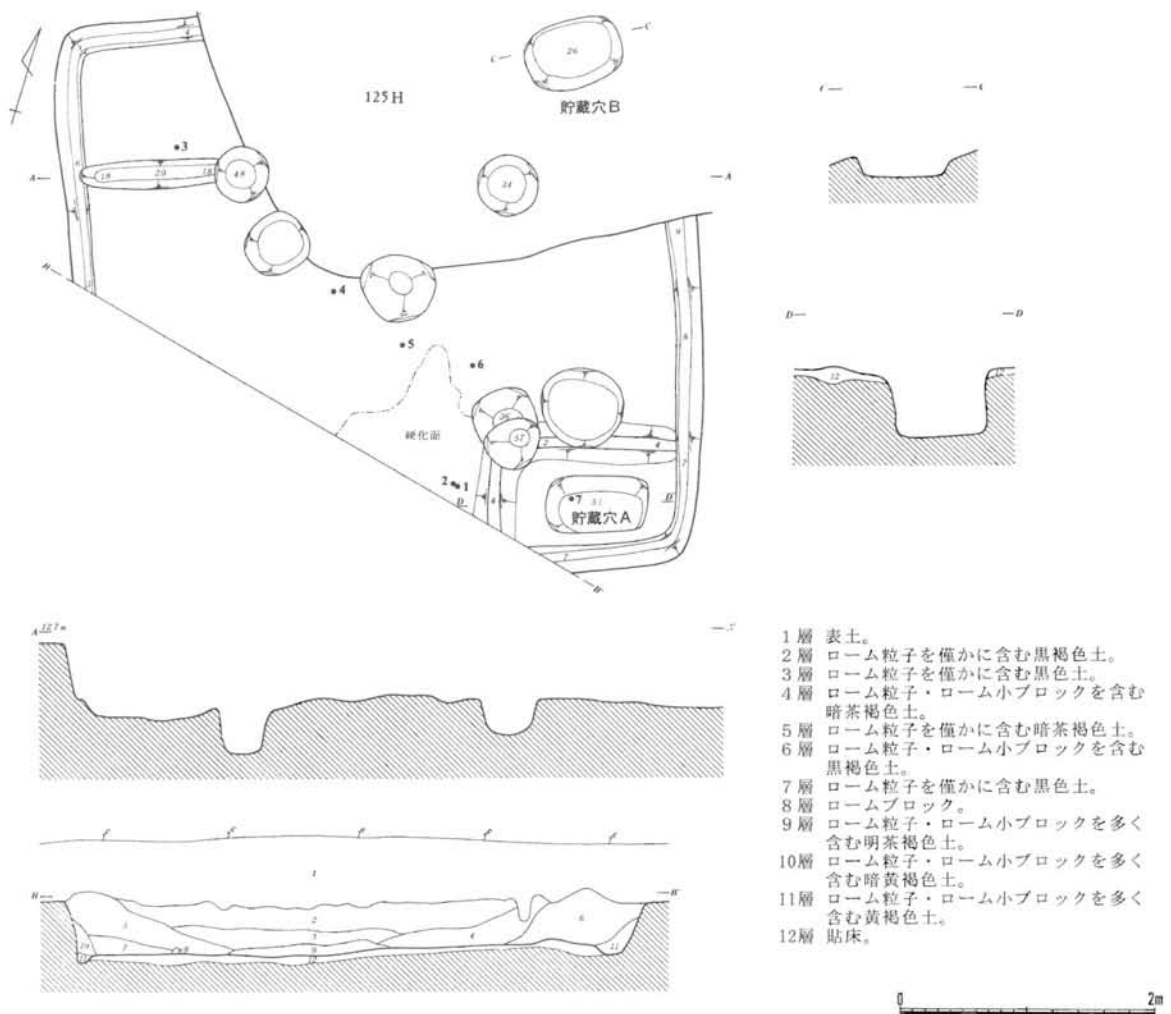
土製品（8～13）

土錘である。8は完形品であるが、他はすべて破片である。大部分がクルミ形に近く、ずんぐりしたものであるが、11はやや円筒形で細長いものである。

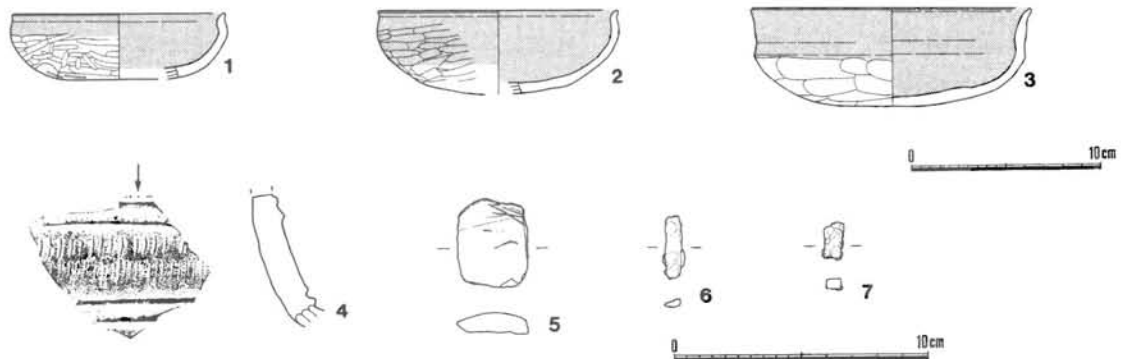
- | | |
|------------------------------|-----------------------------|
| 8は長さ3.4cm、最大幅2.3cm、重さ18.2g。 | 9は長さ3.4cm、最大幅2.6cm、重さ10.0g。 |
| 10は長さ3.9cm、最大幅2.1cm、重さ10.2g。 | 11は長さ3.0cm、最大幅2.1cm、重さ6.8g。 |
| 12は長さ3.6cm、最大幅2.0cm、重さ6.1g。 | 13は長さ1.8cm、最大幅2.0cm、重さ3.1g。 |

127号住居跡（第48図）

〔住居構造〕住居南西コーナーは調査区域外にあるものと考えられる。125号住居跡に切られる。（平面形）隅丸方形。（規模）4.95×4.63m。（壁高）28～38cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）確認できる範囲では全周する。上幅16～24cm・下幅5～12cm・深さ4～9cmを測る。西壁から住居内へ直角に延びる間仕切り溝が1本確認された。上幅20cm前後・下幅10cm・深さ18～20cmを測る。（床面）住居南側に良く硬化した面が認められた。貼床が2～10cmの厚さで施される。（カマド）検出されなかった。



第48図 127号住居跡（1/60）



第49図 127号住居跡出土遺物（1/4・1/3）

(柱穴) 主柱穴3本が検出された。(貯蔵穴) 南東コーナーと北東コーナーの2ヶ所から検出された。

〈貯蔵穴A〉は南東コーナーに位置し、45×82cmの長方形を呈し、深さ51cmを測る。周囲には高さ4cm程の凸堤が、巡っている。覆土はローム粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。〈貯蔵穴B〉は北東コーナーに位置すると思われるが、125号住居跡の貼床下より検出されたため、上部は破壊されている。残存している部分では、55×78cmの長方形を呈し、深さ26cmを測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロックを多く、炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。(覆土) 11層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

〔遺物〕 覆土中から土器・土製品・鉄製品が出土した。

〔時期〕 古墳時代後期(6世紀前半)。

127号住居跡出土遺物(第49図)

土師器坏形土器(1~3)

1は現器高3.5cm、推定口径11.2cm。体部は丸味をもち、口縁部は短くツンと外反する。全体に赤彩が施されているような赤味の強い色調を呈するが、内面及び口縁部外面は明らかに赤彩が施されており区別できる。胎土には砂粒を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後粗いヘラ磨きが施され、光沢をもつ。貯蔵穴Aの左横の床面上12cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/4程である。

2は器高4.5cm、推定口径12.7cm。1よりもやや大ぶりの土器である。この土器についても全体に赤彩が施されているような赤味の強い色調を呈するが、底部を除き明らかに赤彩が施されている。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後横方向に磨き的な幅の狭いナデが施され、光沢をもつ。

1の土器と同位置からの出土で、遺存度は1/3程である。

3は器高5.2cm、推定口径14.6cm。底部と口縁部との境には明瞭な段をもち、口縁部は直立気味に外反する。口唇部内面直下には沈線がまわる。内面及び口縁部外面は赤彩が施される。胎土には砂粒・小石を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後ナデられる。住居北西コーナーの柱穴近くの床面上からの出土で、遺存度は3/4程である。

須恵器器台形土器(4)

脚部小破片と思われる。脚部の裾部はやや屈曲し外側に開くものと考えられる。上下2条の凸帯で区画された内部には櫛歯状工具による刺突文が2段描かれている。なお、拓本に「↓」で示した位置にはスカシ窓が穿たれている。色調は全体に濃い灰褐色を呈し、胎土には白色・黒色粒子を僅かに含む。焼成は良好である。住居中央近くの床面上25cm浮いた覆土中からの出土である。

土製品(5)

3.5×2.8cmの長方形のもので、重さは8.5g。片面には布目痕が観察されることから、ここでは土製品として取り扱ったが、用途不明品である。胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。住居中央の床面上33cm浮いた覆土中からの出土である。

鉄製品(6・7)

鉄鍬の筥被部(のかつきぶ)の小破片と思われる。6は南東コーナーの柱穴近くの床面上18cm浮いた覆土中から、7は貯蔵穴Aからの出土である。

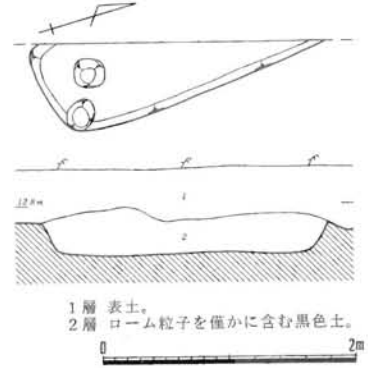
(2) 土坑

129号土坑（第50図）

〔構造〕北側は調査区域外であろう。126号住居跡を切る。（平面形）長方形と思われる。（規模）不明。（長軸方位）N-7°-W。（深さ）26cm前後を測り、坑底はほぼ平坦である。（覆土）ローム粒子を僅かに含む黒色土を基調とする。

〔遺物〕古墳時代後期と平安時代の土師器小破片が僅かに出土したが図示できるものはなかった。

〔時期〕覆土の観察から平安時代の所産のものと考えられる。



第50図 129号土坑（1/60）

（3）遺構外出土遺物（第51図）

縄文時代から弥生時代にかけての遺物が検出されている。時代的に1～6群に分類された。

第1群土器 縄文時代早期前葉の捺糸文系土器（1～3）

縦位の捺糸文Rが施される土器である。1は口縁部小破片で、捺糸文は条が細かく、2・3は胴部小破片で、1よりやや条が太いものである。すべて色調は暗茶褐色を呈し、胎土中には細砂粒のみが含まれ、精練されている。すべて稻荷台式土器であろう。

第2群土器 縄文時代早期後葉の条痕文系土器（4～7）

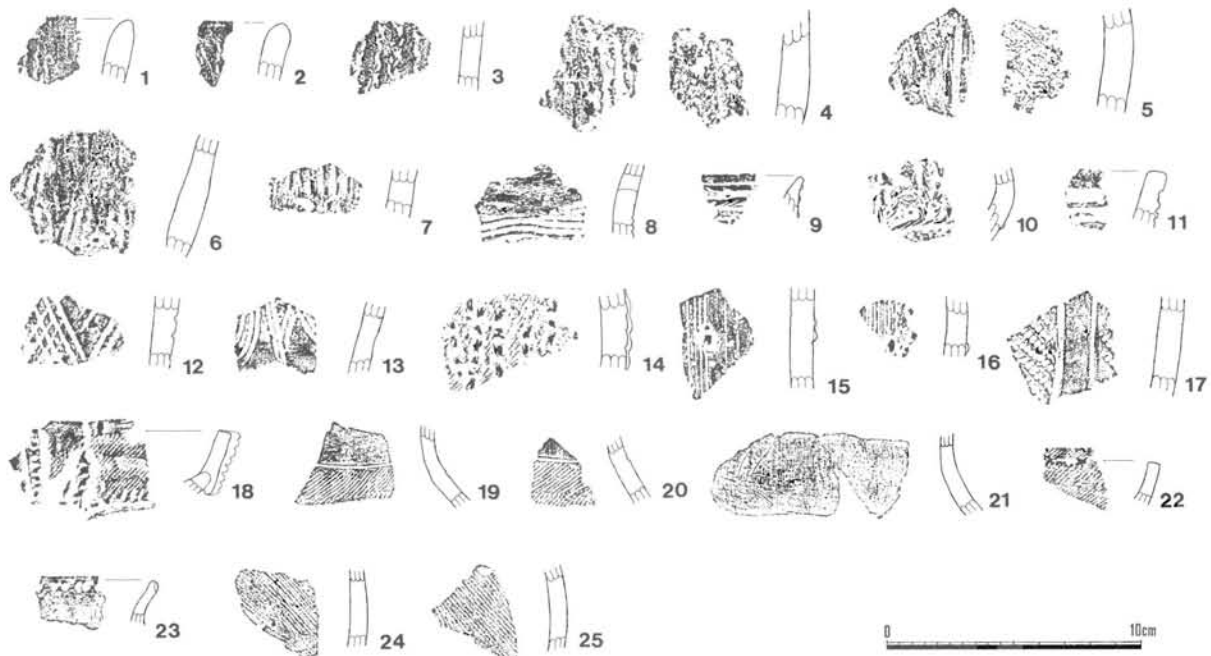
貝殻による縦位の条痕が施される土器である。4・5は表裏ともに条痕文が施されるが、6・7の裏面は摩耗により不明である。すべて胎土中には繊維を含む。

第3群土器 縄文時代前期前葉の黒浜式土器（8）

半截竹管により横位の平行沈線が描かれている。胎土中には繊維を含む。

第4群土器 縄文時代前期後葉の竹管文系土器（9～16）

9は口縁部小破片で、浮線文土器である。浮線は3mm前後の細いものである。10も浮線文土器である。11は口縁部直下に横位の半截竹管による沈線文が施される。



第51図 遺構外出土遺物（1/3）

12は半截竹管による平行沈線文により直線的な菱形文が描かれている。13は縦位にやや曲線的な沈線文が描かれている。14は半截竹管による平行沈線文を地文に結節をもつ浮線文が縦位に施される。15は縦位に施された半截竹管文による平行沈線文を地文に結節をもつ貼付文が施される。16は結節をもつ浮線文が施される。

以上、9～11は諸磯B式、12～16は諸磯C式土器であろう。

第5群土器 縄文時代中期後葉の加曾利E式土器(17)

L Rの単節斜縄文を地文とし、磨消懸垂文が描かれる。

第6群土器 弥生時代後期の土器(18～25)

壺形土器(18～21)

18は複合口縁を呈する口縁部小破片である。複合部には刻みをもつ棒状貼付文を飾り、その下端には刻みがまわる。地文と口唇部にはL Rの単節斜縄文が施される。内面は赤彩である。

19・20は同一個体と思われる。肩部付近の小破片で、L Rの単節斜縄文が2段確認できる。その上端には細沈線がまわる。無文部には縦方向のハケ目痕が残り、赤彩が施される。

21は頸部破片である。内面は横方向のへら磨き、外面は縦方向のハケ目調整後、粗いへら磨きが施される。

鉢形土器(22)

口縁部小破片である。口縁部外面及び口唇部にはL Rの単節斜縄文が施される。内面は赤彩である。

甕形土器(23～25)

23は口縁部小破片である。口唇部外面には刻みが加えられ、内外面に軽い横ナデが施される。24・25は胴部小破片で外面はハケ目調整、内面は横方向のへらナデが施される。

[参 考 文 献]

市毛 勲 1990『志木市史 通史編 上』志木市史編さん室

尾形則敏・深井恵子 1996「第4章 城山遺跡第25地点の調査」『志木市遺跡群Ⅶ』志木市の文化財第23集 志木市教育委員会

1997「第2章 城山遺跡第29地点の調査」『志木市遺跡群Ⅷ』志木市の文化財第25集 志木市教育委員会

尾形則敏 1989「第2章 城山遺跡第4地点の調査」『志木市遺跡群Ⅰ』志木市の文化財第13集 志木市教育委員会

1991「第3章 城山遺跡第7・9地点の調査」『志木市遺跡群Ⅲ』志木市の文化財第16集 志木市教育委員会

1991「第6章 城山遺跡第6地点の調査」『西原大塚遺跡第7地点 新邸遺跡第3地点 中野遺跡第7地点 中野遺跡第8地点 城山遺跡第6地点』志木市の文化財第15集 志木市教育委員会

1995「第4章 城山遺跡第20地点の調査」『志木市遺跡群Ⅵ』志木市の文化財第21集 志木

市教育委員会

1996「第3章 城山遺跡第13地点の調査」『城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点』志木市の文化財第24集 志木市教育委員会

小久保 徹 1984『志木市史 原始・古代資料編』志木市史編さん室

1986「柏城跡大堀発掘調査報告書」『志木市史 中世資料編』志木市

佐々木保俊・尾形則敏 1988『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第4集

佐々木保俊 1987『城山遺跡長勝院地点発掘調査報告書』志木市の文化財第11集 志木市教育委員会
志木市遺跡調査会 志木ロータリークラブ

1992「第2章城山遺跡第11地点の調査」『志木市遺跡群IV』志木市の文化財第17集 志木市教育委員会

1996「第2章 城山遺跡第12地点の調査」『城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点』志木市の文化財第24集 志木市教育委員会

深井恵子 1997「第3章 城山遺跡第32地点の調査」『志木市遺跡群VIII』志木市の文化財第25集 志木市教育委員会

第9章 城山遺跡第35地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

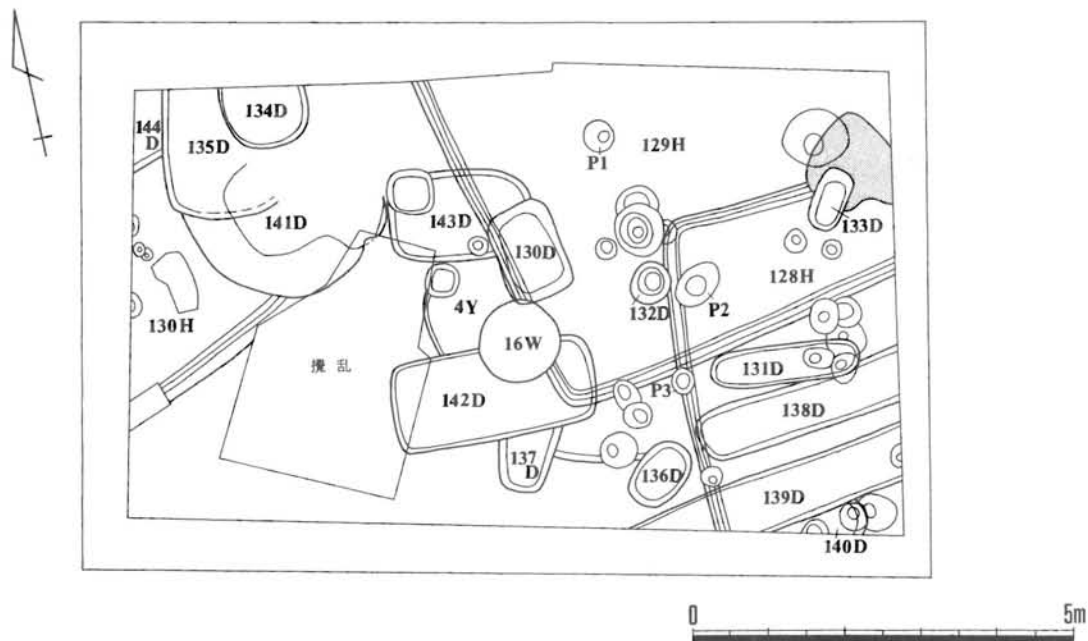
第8章 城山遺跡第34地点の調査(45ページ)を参照

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成8年11月15日に実施した。本地点は過去の調査例から遺構が密集して分布していることが予想されたため、当初から全面を対象として確認調査を実施する予定であった。調査は調査区南東隅よりバックホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、ローム面に到達する前の黒色土層中からスラッグや小型の鋳型の小破片と考えられる遺物が多数集中する地点が確認された。さらに、調査区域内のほぼ全面が何らかの遺構の覆土であると判断できたため、直接ローム面までの表土剥ぎを行わず、一旦地表から深さ約40cm前後の黒色土層中で遺構確認を行うこととした。排土については、その日のうちにすべてダンプに積載し、調査区域外に運搬した。また、今後遺構の精査等で排される残土についても、調査区域内には全く残土置場が確保できないため、定期的に搬出する予定をとることとした。

人員導入による発掘調査は18日から開始した。まず、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行った。しかし、遺構の分布状況は把握できなかったため、その後、調査区域内に2×2mのグリッドを設定し、グリッド毎に精査を開始することにした。遺物については、調査区域が狭小であるため、ドットとして記録した後、取り上げていくこととした。

21日には、130号土坑(130D)の精査を開始する。この遺構は確認調査当初からスラッグや鋳形状の



第52図 遺構分布図(1/100)

ものが多く出土している箇所であり、平面形は長方形で、粘土との境界でプラン確認ができたものである。この遺構は、鑄造関連の遺構であるものと考えられた。22日、130Dから陶器が1点ほぼ完形で出土したことから、この遺構の時期は近世（17世紀中頃から後半）のものと判明した。

27日、遺構の分布状況が依然不明であるため、併行して、サブトレンチを設定、精査し、遺構の分布状況と切り合い関係を把握することに調査の主体を置くことにした。

130Dについては、12月4日に土層観察ベルトA・Bを除去し、5日には遺物出土状態の写真撮影を行う。10日、被熱した赤色砂粒が露出、その後除去作業を終了する。11日、赤色砂粒の下部から溶解した鉄塊が出土したため、写真撮影・実測を行う。12日、鉄塊の下部からは、簧の子状に敷いてある状態で掛木が検出された。また、掛木は遺存状態は悪いが、壁際にも井桁状にあったであろう痕跡が観察された。同日、その出土状態の写真撮影・実測を終了し、一部をサンプリングする。13日、壁材の粘土を除去し、写真撮影を行う。17日、掘り方の実測を終了し、130Dの精査を完了した。130Dの精査には19日間の日数がかかってしまった。

全体の内容としては、12月10日になると、各遺構の切り合い関係も把握されつつあり、本調査区域内には鑄造関連の近世の遺構とその下層には井戸跡や土坑群などの中世の遺構、そして弥生時代から平安時代にかけての住居跡が4軒程存在することが明らかになってきた。

12日、134号土坑（134D）の精査を開始する。この土坑からも130D同様にスラッグや鑄形状の遺物が多く出土しているため、鑄造関連の遺構と考えられた。しかし、134Dについてはかなり熱を受けている状況であり、さらに炉壁が検出されたことにより、溶解炉であると考えられた。同日には平安時代130号住居跡（130H）の精査を開始する。

17日、弥生時代4号住居跡（4Y）と平安時代128号住居跡（128H）の精査を開始する。

19日には、16号井戸跡（16W）の精査を開始し、20日には古墳時代後期の住居跡（129H）の精査を開始する。

22日には、134Dの遺物を取り上げ、遺構写真の撮影を行う。また、同日129Hは遺物出土状態の写真撮影終了後、遺物をすべて取り上げ、24日には遺構の写真撮影を行った。同日、141号土坑（141D）の精査を開始する。

25日、すべての遺構の精査を完了する。なお、141Dについては、坑底面が確認できなかったが、その北側に下水用のマンホールがあり、崩落の危険性があったため、地表から約3.80mの深さまで掘り下げ、やむなく精査を中止した。141Dは中世の地下式坑と考えられる。

26日、埋め戻し作業を開始し、同日にはその作業を完了した。

第2節 検出された遺構と遺物

（1）弥生時代

4号住居跡（第53図）

[住居構造] 128・129号住居跡、130・136・137・142・143号土坑、16号井戸跡に切られる。住居西側の一部しか確認できなかったため詳細は不明である。（壁高）確認できる部分では17cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）比較的遺存の良好な北西コーナーでは、硬化面が確認できた。（柱穴）支柱穴は4本で構成されると思われるが、確認できたのは北東コーナーの1本

を除いた3本で、深さは63~69cmを測る。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土を基調とする。

[遺物] 覆土中から土器・砥石が出土した。

[時期] 弥生時代後期。

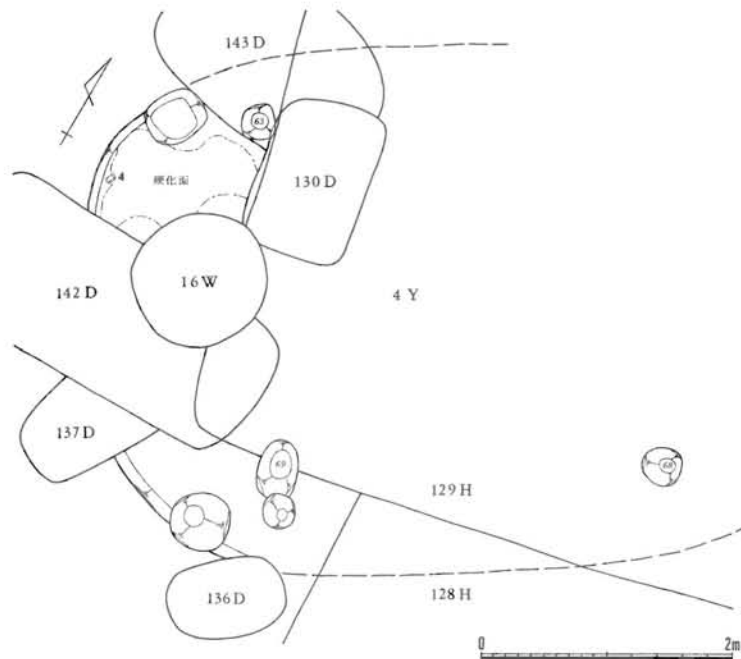
4号住居跡出土遺物 (第54図)

甕形土器 (1)

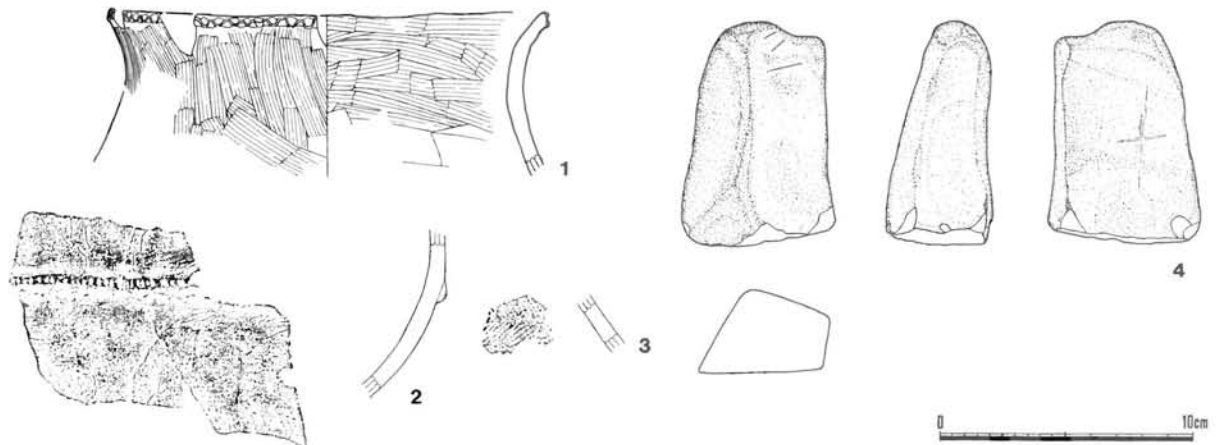
頸部のカーブはゆるやかで、口縁部は外反する。口唇部外面には上方と下方から交互に押捺が加えられる。内面及び口縁部外面はハケ目調整、以下内面はヘラナデが施される。胎土には茶褐色粒子・砂粒・小石を含む。覆土中からの出土で、口縁部から胴部上半にかけて1/3程遺存する。

高坏形土器 (2)

碗状に深みのものである。口縁部直下には布目痕をもつ押捺文が加えられた粘土帯がまわる。胎土には白色針状物質を多く含み、外面には赤彩が施される。内外面横方向にていねいにヘラ磨きが施される。



第53図 4号住居跡 (1/60)



第54図 4号住居跡出土遺物 (1/3)

いわゆる「吉ヶ谷式」の特徴をもつ土器である。覆土中からの出土で、口縁部直下から体部下半にかけての破片である。

壺形土器（3）

肩部の小破片と思われる。文様は単節斜縄文を2段に施し、羽状構成させ、その下端にはS字条結節文を描いている。S字条結節文は端末結節縄文であろう。胎土には橙色粒子（土器粒）を多く含む。覆土中からの出土ある。

石製品（4）

砥石である。最大長8.9cm、最大幅6.1cm。重さ256g。石質は砂岩。表面が平滑でややうすぼんやりとツヤのある面になっている箇所が使用面であろう。所々に刃部によると思われる細線が観察される。北西コーナーほぼ床面上からの出土である。

（2）古墳・平安時代の遺構と遺物

128号住居跡（第55・56図）

〔住居構造〕131・133・138～140号土坑、2号ピットに切られる。北東コーナー以外は調査区域外であるため、詳細は不明である。（壁高）比較的残りの良い所で、18cmを測る。（壁溝）確認できる範囲では全周する。上幅18～20cm・下幅6～8cm・深さ7～13cmを測る。（床面）床面は全体的に軟弱であるが、カマド前面に一部硬化した面が見られる。また、その床面の5cm程下からもう1枚の床面が確認され、さらに6～20cmの貼床も施されており、土層図の10～15層が相当する。（カマド）北壁に位置するが、右側の袖部は調査区域外にあり、133号土坑に一部壊されている。長さ112cm・壁への掘り込み80cmを測る。袖部は粘土を貼って構築されていると思われ、左袖部に73cm程の長さの粘土が確認できた。（柱穴）数本のピットが検出されたが、70cm程の深さのものが支柱穴と思われる。（覆土）7層に分層される。

〔遺物〕覆土中及び床面上から、緑釉陶器・須恵器・銅印・布目瓦などが出土した。

〔時期〕平安時代（9世紀末葉）。

〔所見〕床面が2枚と、柱穴も複数あることから、住居の拡張か建て替えが行われたものと考えられる。

128号住居跡出土遺物（第57図、図版18-1）

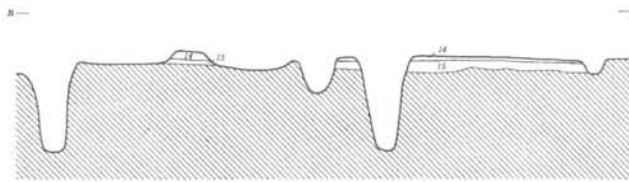
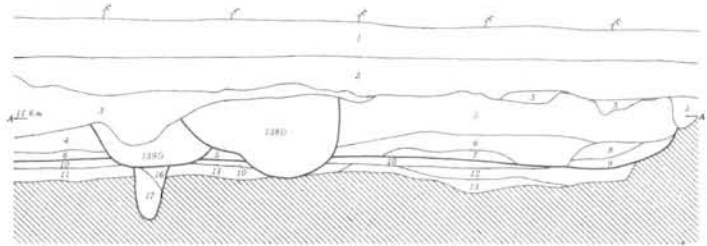
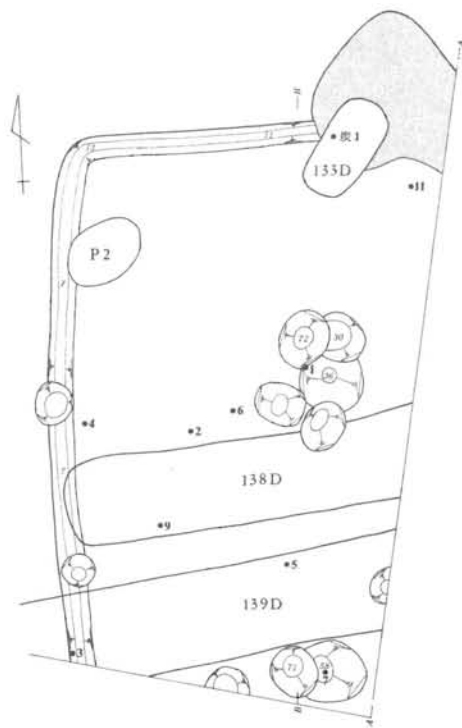
須恵器坏形土器（1～4、図版18-1）

1は器高4.1cm、推定口径12.0cm、底径7.0cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は淡橙色を呈し、胎土中には茶褐色粒子・砂粒を含む。底部には「千」の字が墨書されている。住居北西コーナーの柱穴近くの床面上19cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/5程である。

2は器高4.1cm、推定口径13.2cm、推定底径6.6cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は淡橙色を呈し、胎土中には茶褐色粒子・砂粒を含む。西壁近くの床面上10cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/5程である。

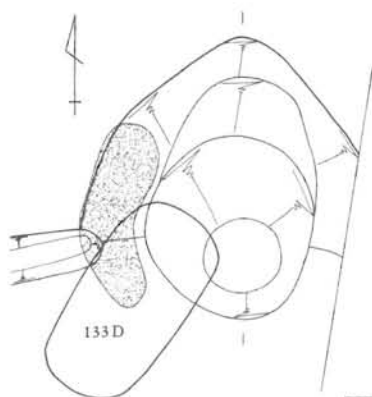
3は器高3.9cm、口径13.4cm、底径5.4cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は暗灰褐色を呈し、胎土中には砂粒・小石を多く含む。西壁の壁溝内からの出土で、遺存度は4/5程である。

4は器高5.5cm、推定口径14.8cm、底径7.0cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は灰白色を呈し、胎土中には砂粒・小石を含む。西壁近くの床面上18cm浮いた覆土中からの出土で、



- 1層 盛土。
- 2層 表土。
- 3層 近世の土層。
- 4層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒色土。
- 5層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土。
- 6層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、粘土粒子・粘土小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。
- 7層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、粘土粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗黄褐色土。
- 8層 焼土粒子・焼土小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。
- 9層 焼土粒子・焼土小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロックを含む黒褐色土。
- 10層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロック・炭化物粒子を含む黒褐色土。
- 11層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、焼土粒子・焼土小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロック・炭化物粒子を含む暗黄褐色土。
- 12層 粘土粒子・粘土小ブロックを多く、焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗黄褐色土。
- 13層 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土。
- 14層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。
- 15層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
- 16層 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒色土。
- 17層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土。

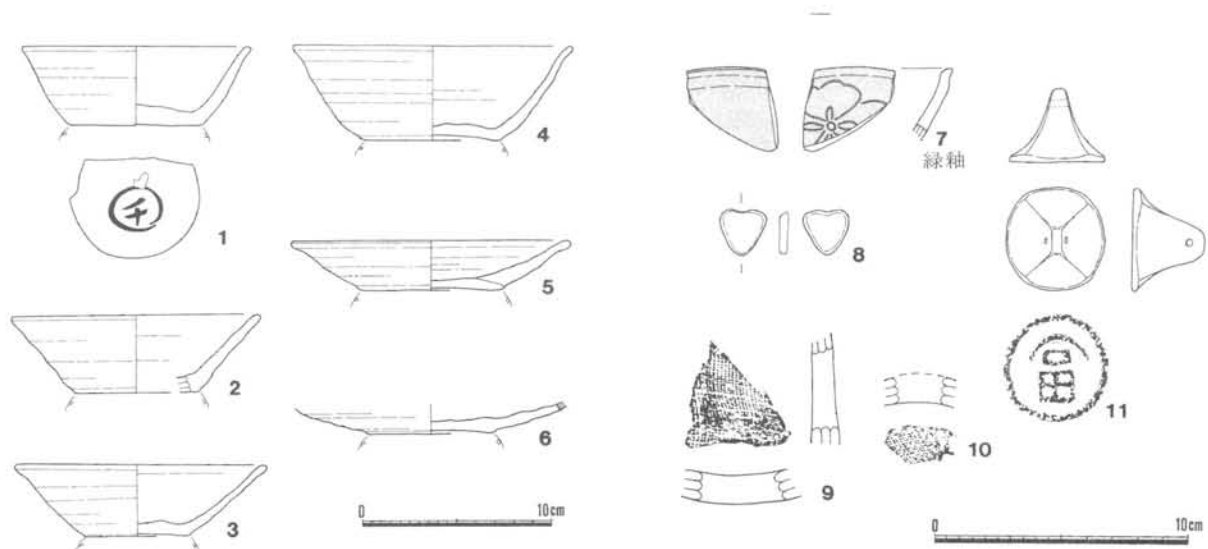
第55図 128号住居跡(1/60)



- 1層 ロームブロック。
- 2層 粘土粒子・粘土小ブロックを多く、焼土粒子・炭化物粒子を含む暗灰褐色土。
- 3層 焼土粒子・焼土小ブロックを多く、粘土粒子を含む暗赤褐色土。
- 4層 焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子を含む黒褐色土。
- 5層 焼土粒子・焼土小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロックを多く含む暗赤褐色土。
- 6層 焼土。
- 7層 灰褐色粘土。
- 8層 粘土粒子・粘土小ブロックを多く、ローム粒子・焼土粒子を含む暗灰褐色土。
- 9層 粘土粒子・焼土粒子を含む黒褐色土。

第56図 128号住居跡カマド(1/30)





第57図 128号住居跡出土遺物（1/4・1/3）

遺存度は1/2程である。

図版18-1の墨書土器は小破片であるため、墨書内容については解読できなかった。

須恵器皿形土器（5・6）

5は器高2.7cm、推定口径14.8cm、底径7.8cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は灰褐色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。住居中央よりやや西壁に近い床面上19cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/5程である。

6は現器高1.4cm、底径6.8cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は内面が灰褐色を呈し、外面は暗茶褐色を呈する。内面の一部に黒斑が見られる。胎土には砂粒を含む。北西コーナーの柱穴よりやや西壁に近い床面上10cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は底部から体部中位にかけて1/5程である。

緑釉陶器（7）

内面に陰刻花文の文様をもつ塊の小破片である。胎土は精練されており、目立った粒子は見られず、色調は灰白色を呈する。緑釉の色調は薄緑色である。住居南西コーナーの柱穴の位置で、床面上20cm浮いた覆土中からの出土である。

土製品（8）

ハート形を呈した用途不明の土製品である。縦1.7cm、横1.8cm、重さ1.3g。色調は暗茶褐色を呈し、胎土中には砂粒を含む。胎土等の全体の特徴は、いわゆる「武蔵型土師甕」に類似するものである。

布目瓦（9・10）

いずれも小破片である。色調は淡橙色を呈し、胎土中には砂粒を含む。9は西壁近くの床面上10cm浮いた覆土中からの出土である。

銅製品（11）

銅印の完形品である。高さ2.9cm、重さ93.0g。印面は直径4.2cmの円形を呈し、文字部分の鋳出しは1mm弱である。文字は一文字で「冨」であろう。鈕の形状は4稜が裾部から頂部にかけてすぼまり、断面が富士山を思わせる山形を呈する。孔は文字に対し横方向に穿たれている。カマド前面のほぼ床面上からの出土である。

129号住居跡（第58・59図）

〔住居構造〕 4号住居跡を切り、128号住居跡、130・132・133・142・143号土坑、16号井戸跡に切られる。南西コーナー以外は調査区域外にあり、詳細は不明である。（壁高）比較的残りの良い西壁で54cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）確認できる範囲では全周する。上幅18～24cm・下幅5～6cm・深さ7～14cmを測る。（床面）住居の中央付近がよく硬化していた。住居中央を除いて貼床が施されており、厚さ12～22cmを測る。（凸堤）住居南壁に高さ5cm程の馬蹄形状の凸堤があり、内側にある深さ31cmのピットと共に入口施設と思われる。（柱穴）住居南西コーナーの深さ82cmのものと入口施設と思われる凸堤に接する深さ51cmのものが該当し、主柱穴は8本の可能性がある（覆土）8層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

〔遺物〕 覆土中及び床面上から、多数の土器と炭化種子（ヤマモモ）7個が出土した。

〔時期〕 古墳時代後期（6世紀中葉）。

129号住居跡出土遺物（第60・61図）

土師器坏・埴形土器（1～25）

1～7はいわゆる「比企型坏」の祖源とする土器で、基本的な特徴として、内面及び外面体部は赤彩され、外面には幅3～5mmの磨き調整が施されている。磨き調整は光沢をもつが、細かいささら状の痕跡が観察できることから棒状あるいはへら状工具の先端の使用が考えられる。胎土については、全体に小石・砂粒を多く含み、色調は赤味の強い赤橙色を呈している。形態的には口縁部が短くツンと外反し、体部は丸味をもつものである。これらの土器はすべての点で共通した特徴を呈していることから、同一生産地の想定が可能と言える。

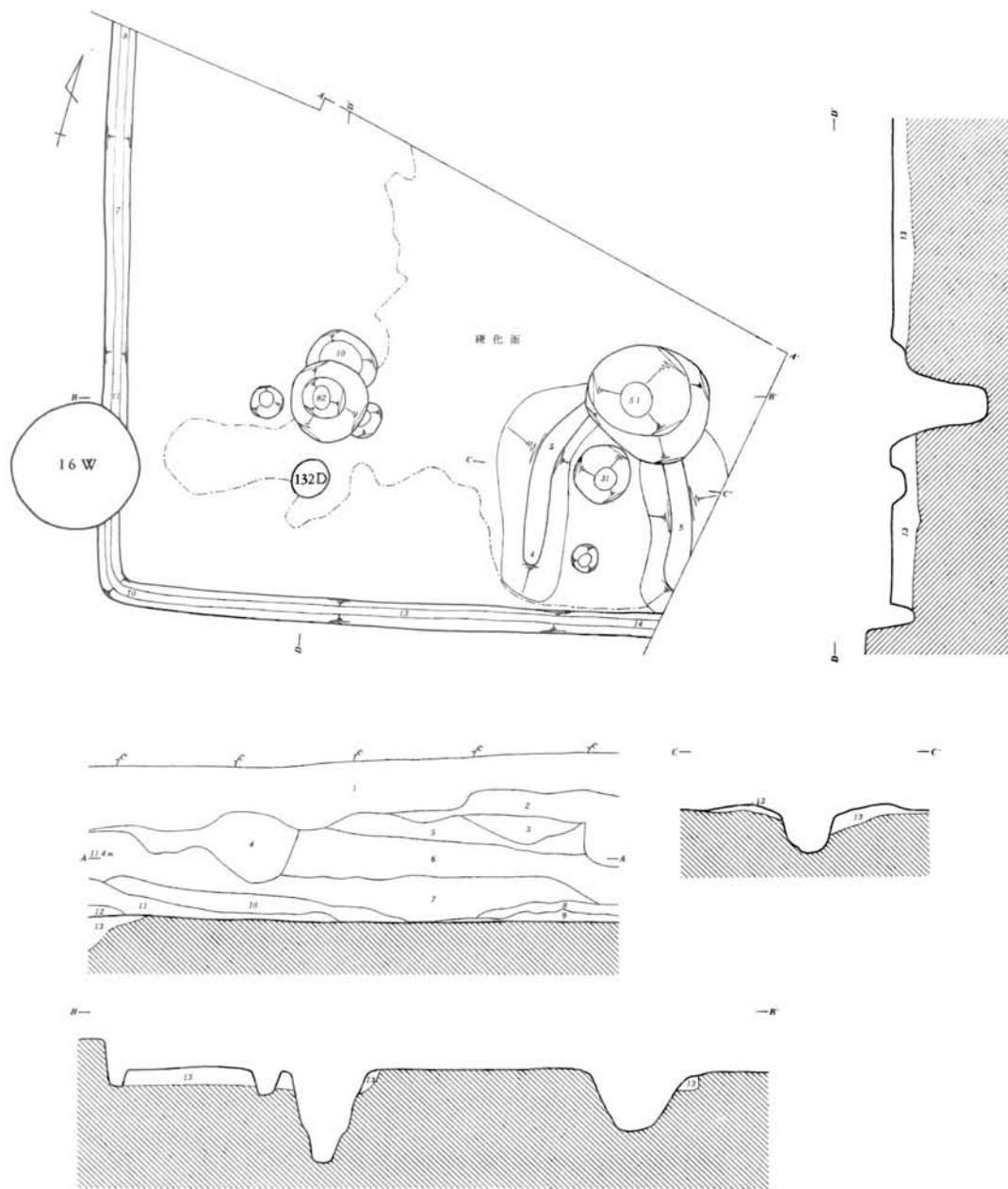
1は器高4.7cm、口径14.3cm。胎土には小石・砂粒を多く含む。内面はナデ、外面は口縁部外面が横ナデ、以下へら削り後幅3mm程の磨き調整が施される。また、外面底部には底部基盤である円盤が接合痕として観察できる。住居南西コーナーの床面上46・51cm浮いた覆土中からの出土で、ほぼ完形である。2は器高4.9cm、口径14.1cm。胎土には小石・砂粒を多く含む。内面はナデ、外面は口縁部外面が横ナデ、以下へら削り後幅5mm程の磨き調整が施される。外面底部には黒斑を有する。住居南西コーナーの床面上49cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は2/3程である。

3は器高4.6cm、口径14.5cm。胎土には砂粒を僅かに含む。内面はナデ、外面は口縁部外面が横ナデ、以下へら削り後幅5mm程の磨き調整が施される。住居ほぼ中央の床面上13cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/2程である。

4は現器高4.4cm、推定口径14.4cm。胎土には小石・砂粒を多く含む。内面はナデ、外面は口縁部外面が横ナデ、以下へら削り後幅3mm程の磨き調整が施される。覆土中からの出土で、遺存度は1/5程である。

5は現器高5.0cm、推定口径15.0cm。胎土には小石・砂粒を含む。内面はナデ、外面は口縁部外面が横ナデ、以下へら削り後幅3mm程の磨き調整が施される。住居南東の床面上25cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/4程である。この土器については、胎土の色調が赤味の強い赤橙色を呈さず、黄橙色を呈している。

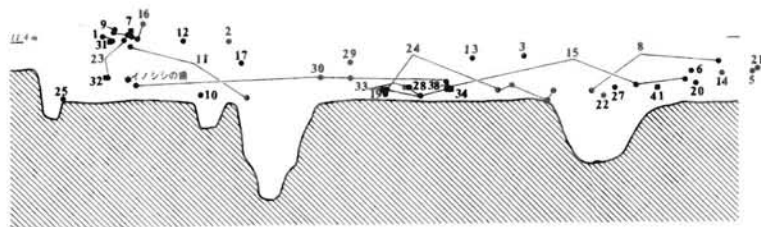
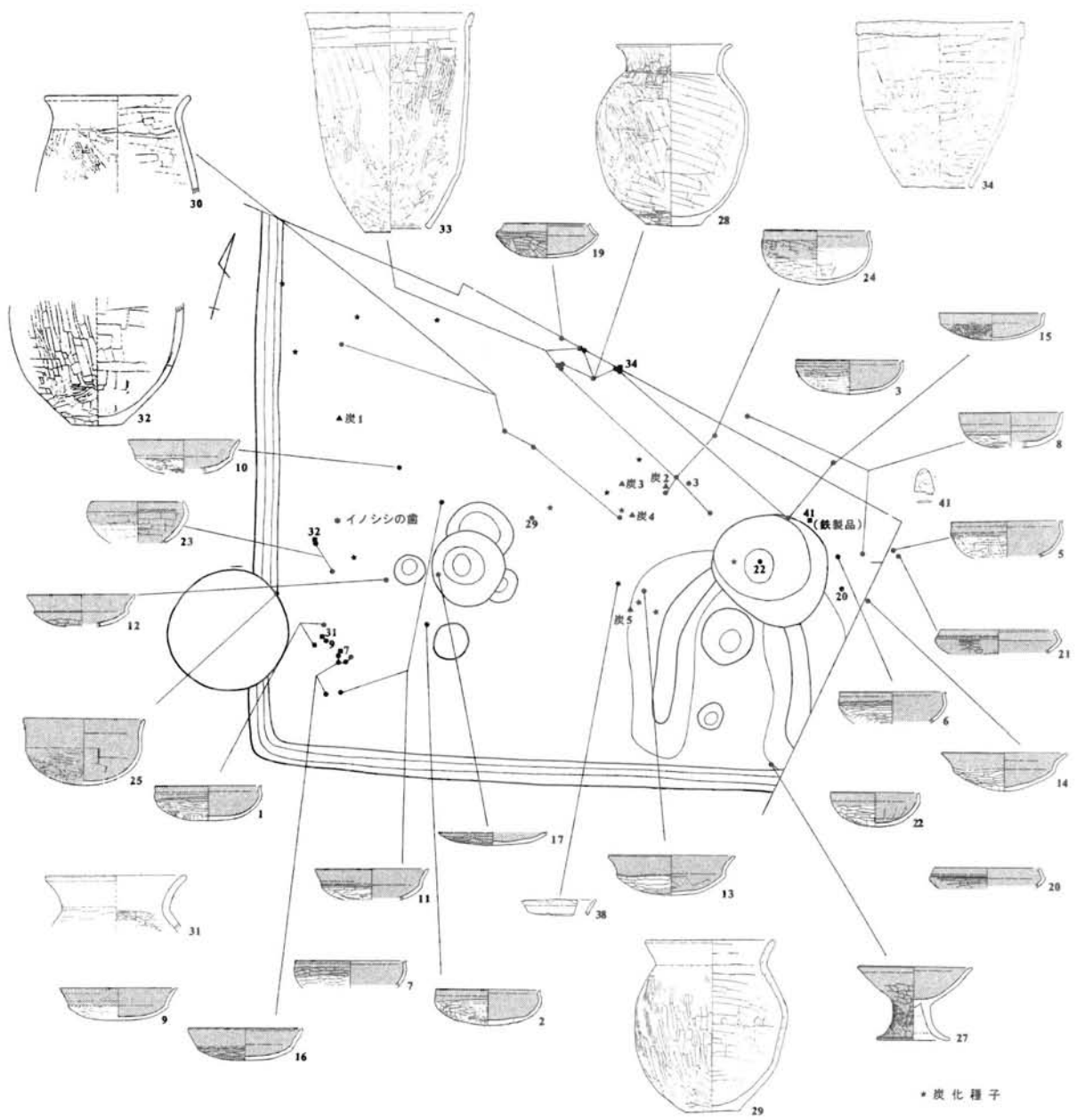
6は現器高4.2cm、推定口径14.4cm。胎土には小石・砂粒を含む。内面はナデ、外面は口縁部外面が横ナデ、以下へら削り後幅3mm程の磨き調整が施される。入口施設と思われる凸堤近くの床面上26cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/4程である。



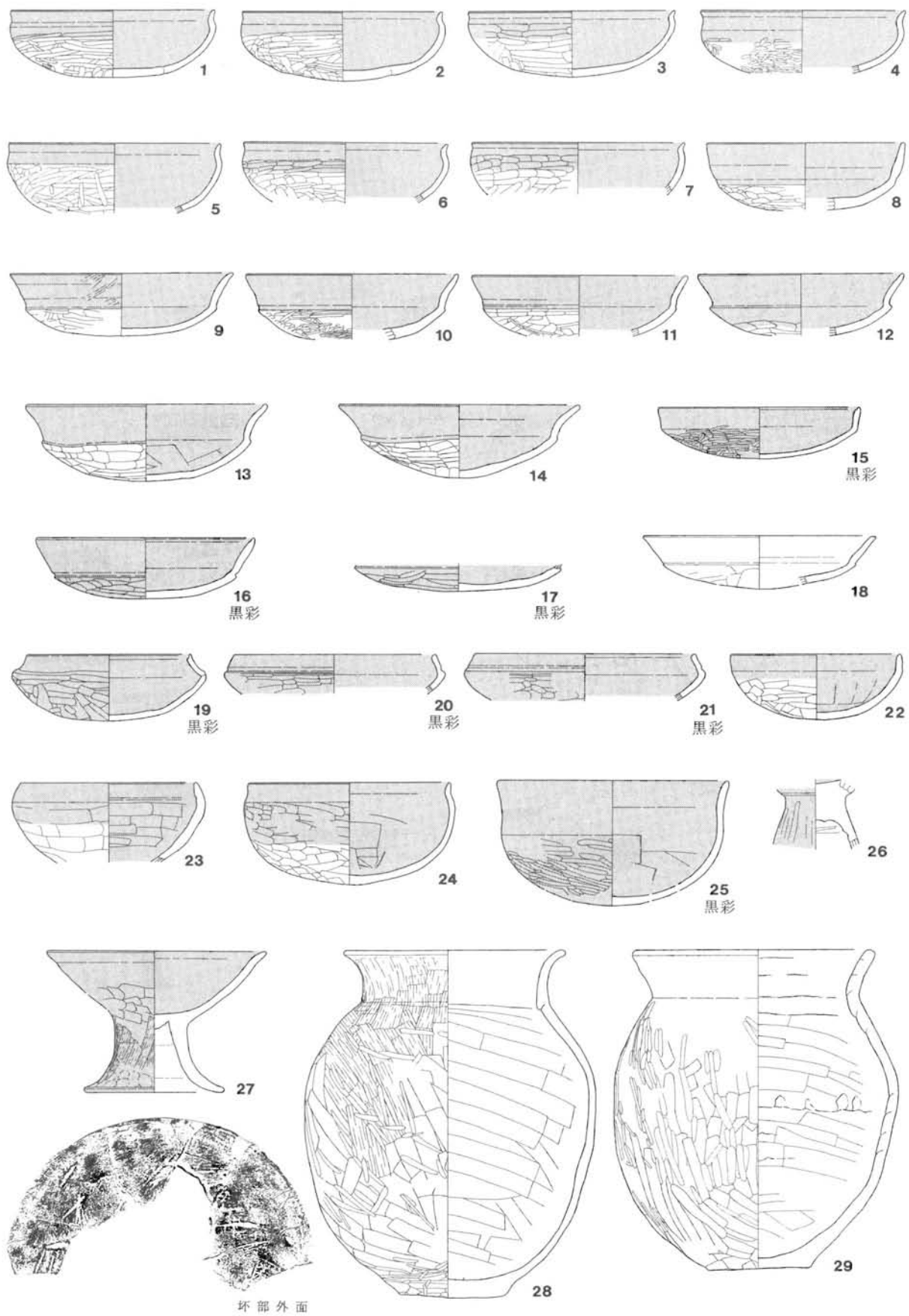
- 1層 盛土。
- 2層 表土及び攪乱。
- 3層 赤色砂粒を多く、炭化物粒子を含む暗赤褐色土。 近世の土層
- 4層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。
- 5層 ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。
- 6層 ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む黒色土。
- 7層 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土。
- 8層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、焼土粒子・炭化物粒子を含む明茶褐色土。
- 9層 ローム粒子・ロームブロックを多く含む黄褐色土。
- 10層 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土。
- 11層 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒色土。
- 12層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
- 13層 貼床。

0 2m

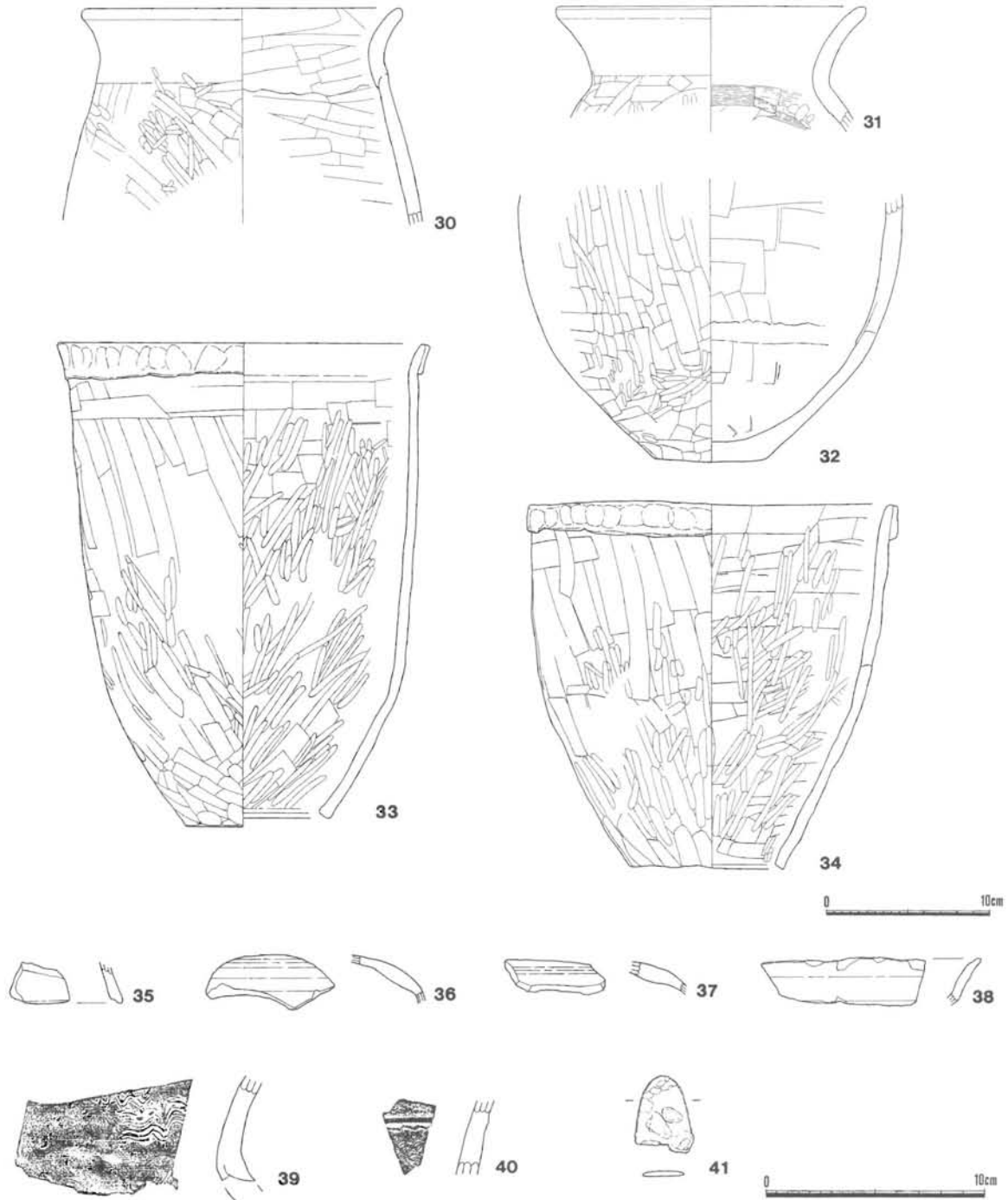
第58図 129号住居跡 (1/60)



第59図 129号住居跡遺物出土状態 (1/60・1/9)



第60图 129号住居跡出土遺物1 (1/4)



第61図 129号住居跡出土遺物2 (1/4・1/3)

7は現器高3.7cm、推定口径14.9cm。胎土には小石・砂粒を多く含む。内面はナデ、外面は口縁部外面が横ナデ、以下ヘラ削り後幅3mm程の磨き調整が施される。住居南西コーナーの床面上54cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/4程である。

8～18は底部と口縁部との境に段を有する須恵器坏蓋を模倣する土器である。8～14は内面及び外面口縁部に赤彩が施されるものを基本とし、特に9～12は胎土・調整等において、1～7の比企型坏の特徴に類似するものである。15～17は全面に黒彩が施されるものを基本とする。18は無彩の土器である。

8は器高4.8cm、推定口径14.0cm。口縁部途中に弱い稜を有する。胎土には砂粒を多く含み、色調は

黄褐色を呈する。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はナデ、外面はヘラ削り後ナデが施される。入口施設と思われる凸堤近くの30cm程浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/3程である。

9は器高4.4cm、推定口径15.8cm。8に比べ、口縁部は大きく外反し、大型化の傾向にある。胎土には小石・砂粒を含み、色調は赤味の強い赤橙色を呈している。内面及び外面口縁部は横ナデが施されるが、外面口縁部には僅かにハケ目痕が残る。外面は以下ヘラ削り後幅5mm程の磨き調整が施される。住居南西コーナーの床面上56cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/3程である。

10は器高4.6cm、推定口径15.0cm。胎土には小石・砂粒を含み、色調は赤橙色を呈する。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はナデ、外面はヘラ削り後幅3mm程の磨き調整が施される。外面底部には黒斑を有する。住居中央よりやや西の床面上6cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/3程である。

11は現器高4.3cm、推定口径15.2cm。胎土には小石・砂粒を多く含み、色調は赤橙色を呈する。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はナデ、外面はヘラ削り後幅5mm程の磨き調整が施される。住居南西コーナーの床面上25・42cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/3程である。

12は現器高4.3cm、推定口径14.5cm。胎土には小石・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はナデが施されている。外面は底部にヘラ削り痕が顕著に残るが、磨き調整が施されている。外面底部には黒斑を有する。住居南西コーナーの床面上48cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/3程である。

13・14はさらに大型化が進み、9～12と比べ、胎土・調整等の特徴も異なる土器である。これらは概して胎土には砂粒を多く含み、外面底部の磨き調整が省略され、ヘラ削り痕を顕著に残す土器である。

13は器高5.5cm、推定口径17.1cm。胎土には砂粒を多く含み、色調は黄褐色を呈する。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。入口施設と思われる凸堤の36cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/3程である。

14は器高5.2cm、推定口径17.0cm。胎土には砂粒を多く含み、色調は黄褐色を呈する。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はナデ、外面はヘラ削り後ナデが施される。入口施設と思われる凸堤近くの床面上27cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/4程である。

15は器高3.6cm、推定口径14.2cm。全面が茶褐～黒褐色を呈することから黒色土器と考えられる。底部から口縁部との境には明瞭な段をもたず、口縁部はやや外傾し、内面口唇部直下には1条の沈線がまわる。胎土には砂粒を僅かに含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後幅2mm程の緻密な磨き調整が施される。床面上8～20cm浮いた覆土中から散在的に出土し、遺存度は1/3程である。

16は器高4.3cm、推定口径15.4cm。全面が黒褐色を呈することから黒色土器と考えられる。底部から口縁部との境には明瞭な段をもち、口縁部は直線的に外傾し、内面口唇部直下には1条の沈線がまわる。胎土には砂粒を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデが施される。外面はヘラ削り後僅かにナデが施される。住居南西コーナーの床面上49～61cm浮いた覆土中から散在的に出土し、遺存度は1/2程である。

17は16と同様黒色土器と考えられる。胎土には砂粒を多く含む。底部内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。住居南西コーナーの床面上33cm浮いた覆土中からの出土で、底部のみ完形である。

18は現器高3.8cm、推定口径16.4cm。底部から口縁部との境には明瞭な段をもち、口縁部は直線的に大きく外傾し、口唇端部には凹みをもつ。胎土には砂粒を僅かに含む、色調は黄橙～明橙色を呈する。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削りが施される。覆土中からの出土で、遺存度は1/4程である。いわゆる小針型の土器と考えられる。

19～21は底部と口縁部との境に段を有する須恵器坏身を模倣する土器で、全面に黒彩が施されるものを基本とする。

19は器高4.7cm、口径11.5cm、受部径13.8cm。全面が茶褐色を呈することから黒色土器と考えられる。口縁部は内傾し、口唇端部には1条の沈線がまわる。胎土には砂粒を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、外面は以下へら削りが施される。住居北の床面上7cm浮いた覆土中からの出土で、ほぼ完形である。

20は現器高2.8cm、推定口径14.2cm、推定受部径15.6cm。全面が黒褐色を呈することから黒色土器と考えられる。口縁部は内傾し、口唇端部は僅かに平坦に面取りが施されている。胎土には砂粒を僅かに含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、外面は以下へら削り後ナデが施される。入口施設と思われる凸堤近くの床面上35cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/5以下である。

21は現器高3.3cm、推定口径15.6cm、推定受部径17.0cm。全面が茶褐～黒褐色を呈することから黒色土器と考えられる。口縁部は内傾し、口唇端部は僅かに平坦に面取りが施されている。胎土には砂粒を僅かに含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、外面は以下へら削り後ナデが施される。住居南東の床面上29cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/5以下である。

22～25は埴形土器で、22～24は内面及び外面体部に赤彩が施されるものを基本とし、25は全面に黒彩が施されるものを基本とする。

22は器高4.6cm、口径12.1cm。体部と口縁部との境には口縁部の横ナデにより僅かに稜を有する。胎土には黄褐色粒子・砂粒を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後磨きが施される。入口施設と思われる凸堤に接する柱穴内からの出土で、遺存度は4/5以上である。

23は現器高4.8cm、推定口径12.2cm。体部に最大径を測り、口縁部は内傾する。胎土には砂粒を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はナデが施される。外面はへら削り後ハケナデが施される。住居南西コーナーの床面上20cm程浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/4程である。

24は器高7.3cm、推定口径14.6cm。体部に膨らみをもち、口縁部は直立気味にやや外反する深身の土器である。胎土には砂粒を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後ナデが施される。住居中央近くの床面上2～14cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は2/3程である。

25は器高8.9cm、推定口径16.2cm。全面黒色を呈することから黒色土器と考えられる。体部に膨らみをもち、口縁部はゆるやかに外反する大型深身の土器である。胎土には砂粒を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削り後幅3mm程の磨き調整が施される。住居南西コーナーのほぼ床面上からの出土で、遺存度は1/4程である。

土師器高坏形土器 (26・27)

26は現器高5.0cm。脚部内面を除き、赤彩が施される。胎土には砂粒を含む。脚部内面はへらナデ、外面は縦方向のへら削り後横方向にナデが施される。覆土中からの出土で、脚部下半を欠損する。

27は器高10.1cm、口径15.5cm。坏部は底部から体部にかけてやや膨らみをもちながら外傾し、口縁部は僅かに外反する。脚部は短めで、裾部は弓状に大きく外反する。脚部内面を除き、赤彩が施される。胎土には小石・砂粒を多く含む。坏部の内面及び口縁部外面は横ナデ、外面は以下へら削りが施される。脚部の内面は横ナデ、外面は脚柱部がハケ目調整、裾部は横ナデが施されるが、僅かに指頭押捺痕が観察される。また、坏部外面には拓本で示したが、深い傷痕が全面に観察できる。これについては、獣類による爪痕あるいは歯型痕である可能性がある。南壁近くの床面上7cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は2/3程である。

土師器甕形土器 (28~32)

28は器高24.6cm、口径15.6cm、底径7.5cm。胴部上半に最大径を測り、口頸部は「コ」字状を呈する。胎土には砂粒を多く、金雲母・小石を僅かに含む。口縁部内外面は横ナデが施されるが、外面には縦方向にハケ目痕が残る。以下、内面はヘラナデ、外面の胴部上半から中位にかけては縦あるいは斜位のハケ目調整後粗いヘラ磨き調整、胴部下半はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整が施される。住居北端のほぼ床面上からの出土で、ほぼ完形である。

29は器高22.6cm、口径16.9cm、底径7.2cm。胴部中位に最大径を測り、口頸部は「く」字状を呈する。胎土には砂粒を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整が施される。住居南西コーナー柱穴近くの床面上33cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は4/5強である。

30は現器高13.4cm、推定口径19.4cm。胴部から頸部への移行は直線的で、口縁部は外反する。胎土には金雲母・砂粒を多く含む。内面はヘラナデ、外面の口縁部は横ナデ、以下ヘラ削り後粗いヘラ磨き調整が施される。床面上15~23cm浮いた覆土中から散在的に出土し、口縁部から胴部中位にかけてを1/2程遺存する。

31は現器高7.7cm、推定口径19.0cm。器厚が分厚く、口縁部は外反する。胎土には金雲母・砂粒を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面頸部はハケ状工具によるナデ後粗い磨き、胴部はヘラナデが施される。外面胴部はナデ後粗く磨きが施されている。住居南西コーナーの床面上45cm浮いた覆土中からの出土で、口縁部から胴部上半にかけてを1/3程遺存する。

32は現器高16.4cm、底径6.7cm。胴部は卵形状を呈する。胎土には砂粒を多く含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後胴部下半に粗いヘラ磨き調整が施される。住居南西コーナーの床面上19cm浮いた覆土中からの出土で、胴部中位以下を2/3程遺存する。

土師器甕形土器 (33・34)

33は器高29.8cm、口径23.6cm、底径8.8cm。口縁部は複合口縁を呈し、胴部は下半にやや膨らみを呈するが、全体に直線的で長胴である。口縁複合部には指頭押捺による成形痕が観察できる。胎土には砂粒を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ後縦方向のヘラ磨き調整、外面は胴部中位以上を中心にヘラナデ（スリップか）後粗いヘラ磨き調整が施されるが、下半にはヘラ削り痕が顕著に残る。住居北端の床面上10cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は4/5以上である。

34は器高22.3cm、口径22.4cm、底径9.4cm。34に比べ、短胴のものである。口縁複合部には指頭押捺による成形痕が観察できる。胎土には砂粒を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ後縦方向のヘラ磨き調整が施される。外面は胴部中位以上を中心にヘラナデ（スリップか）が施されるが、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整が施される。住居北端の床面上7cm浮いた覆土中からの出土で、ほぼ完形である。

須恵器坏形土器 (35~37)

すべて坏蓋である。35は口縁部の小破片で、口唇端部には幅2mmの沈線がまわる。色調は灰褐色を呈し、胎土には白色砂粒を含む。内外面回転ナデが施される。覆土中からの出土である。

36・37は天井部の小破片で、同一個体である可能性がある。色調は濃灰褐色を呈し、胎土には白色砂粒を含む。内外面回転ナデが施されるが、外面には回転ヘラ削り痕が残る。覆土中からの出土である。

須恵器甕形土器 (38)

口縁部から頸部にかけての小破片である。口縁部と頸部の境には段を有し、口唇部内面には幅1.5mmの沈線がまわる。色調は灰褐色を呈し、胎土には黒色微粒子を僅かに含む。内外面に自然釉がかかっている。入口施設と思われる凸堤近くの床面上12cm浮いた覆土中からの出土である。

須恵器甕形土器 (39・40)

39は頸部破片で、外面には5本1単位の粗い櫛描波状文が上下2段に施文されている。色調は器面が濃灰褐色、内面は茶褐色を呈する。胎土には白色砂粒・小石を含む。覆土中からの出土である。

40は頸部小破片で、外面には1条の凸帯と目の細かい櫛描波状文が施文されている。色調は濃灰褐色を呈し、胎土には白色砂粒を含む。床面上からの出土である。

鉄製品 (41)

用途不明の鉄製品である。長さ3.2cm、最大幅2.7cm、厚さ2.5mm、重さ73.5g。入口施設と思われる凸堤近くの床面上14cm浮いた覆土中からの出土で、完形である。

130号住居跡 (第62図)

[住居構造] 135・141・144号土坑に切られる。大部分が後世の遺構と攪乱により壊されているため、詳細は不明である。(壁高) 残りの良い所で10cmを測る。(壁溝) 確認できる範囲では全周する。上幅28cm・下幅5~10cm・深さ13~17cmを測る。(床面) 硬化した床面が2枚確認された。さらに3~12cmの厚さで貼床が施されている。(柱穴) 住居に伴うものは検出されなかった。(覆土) 6層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

[遺物] 覆土中及び床面上から、須恵器蓋・坏・長頸瓶が出土した。

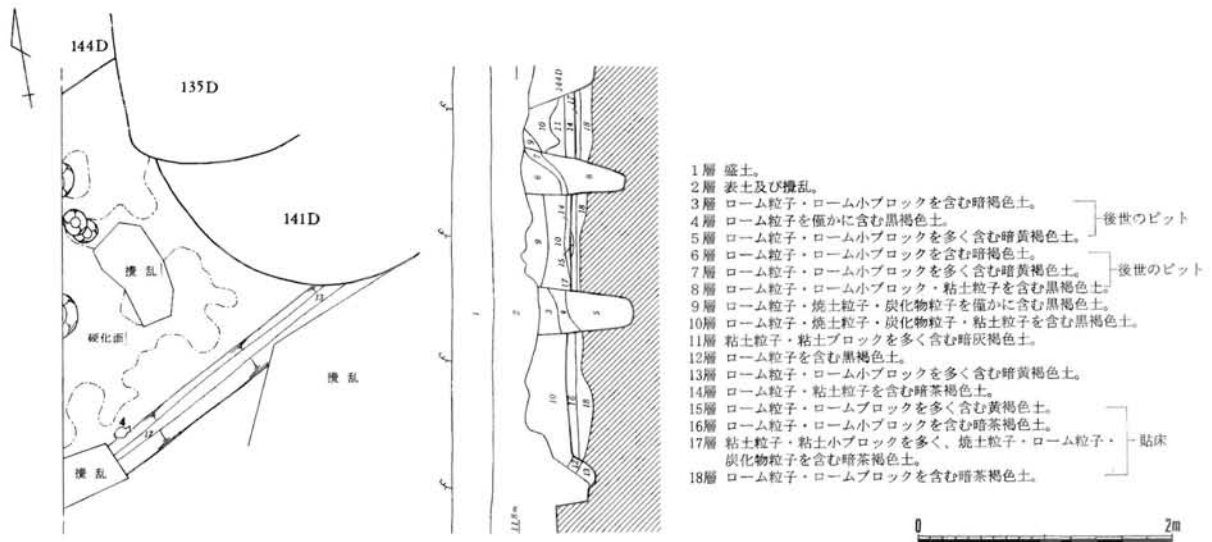
[時期] 平安時代(9世紀後半)。

[所見] 床面が2枚あることから、建て替えあるいは拡張が考えられる。

130号住居跡出土遺物 (第63図)

須恵器蓋形土器 (1)

小破片である。ほぼ水平の天井部(回転糸切り痕あり)には中央がやや突出した擬宝珠様のつまみが

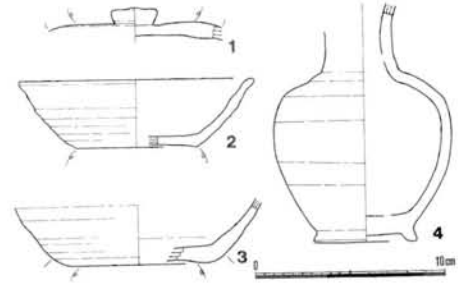


第62図 130号住居跡 (1/60)

付されている。色調は灰褐色を呈し、胎土には白色砂粒・黒色粒子を含む。覆土中からの出土である。

須恵器坏形土器（2・3）

2は器高3.6cm、口径12.4cm、底径6.4cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は明橙色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。この土器については、141号土坑の覆土中から出土した可能性があり、混入品であるかもしれない。遺存度は1/3強である。



第63図 130号住居跡出土遺物（1/4）

3は現器高3.2cm、推定底径7.2cm。口縁部を欠損する。底部には回転糸切り痕が残るが、周縁はへら削りが施される。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には砂粒・小石（大きい粒は直径8mm）を含む。覆土中からの出土で、遺存度は1/3強である。

須恵器長頸瓶（4）

口縁部を欠損する以外は完形である。現器高12.7cm、底径5.0cm。肩部に最大径をもち、頸部は細く外反ぎみに立ち上がる。底部の高台は付高台である。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には砂粒・小石（大きい粒は直径6mm）を含む。南壁近くの床面上からの出土である。

（3）中世（柏城跡関連）

中世については、後述する鑄造関連の遺構下層から検出された遺構を基本とする。ここでは、本地点が中世から近世にかけての時代には柏城跡の三の郭内であることから、柏城関連として理解することにした。なお、出土遺物については、遺構の重複状況から考えると近世を含む可能性がある。

131号土坑（第64図）

〔構造〕128号住居跡・138号土坑を切る。（平面形）隅丸長方形。（規模）193×47cm。（長軸方位）N-85°-W。（深さ）10cm。坑底はほぼ平坦で、断面形は皿状を呈する。（覆土）僅かに小石を含む暗褐色土を基調とする。

〔遺物〕出土しなかった。

133号土坑（第64図）

〔構造〕128号住居跡を切る。（平面形）隅丸長方形。（規模）86×45cm。（長軸方位）N-37°-E。（深さ）20cm前後。坑底は北西側が深く壁は急斜に立ち上がる。（覆土）ローム粒子・焼土粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕出土しなかった。

135号土坑（第65図）

〔構造〕130号住居跡、141・144号土坑を切り、134号土坑に切られる。北側は調査区域外にあると思われる。詳細は不明である。（深さ）50cm前後を測る。坑底は比較的平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（覆土）6層に分層される。

〔遺物〕陶器の小破片が1点出土した。

135号土坑出土遺物（図版18-3）

瀬戸の鉄釉鉢である。時期は15～16世紀であろう。

136号土坑（第64図）

〔構造〕 4号住居跡を切る。（平面形）楕円形。（規模）90×64cm。（長軸方位）N-50°-E。（深さ）18cm。坑底はほぼ平坦で、壁は急斜に立ち上がる。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕 出土しなかった。

137号土坑（第64図）

〔構造〕 4号住居跡を切り、北側を142号土坑に切られる。（平面形）楕円形か。（規模）不明×75cm。（深さ）確認できた部分では15～26cmで、北側が深くなっている。（覆土）上層がローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土、下層はローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土で、全体的にボソボソして粒子が粗い。

〔遺物〕 出土しなかった。

138号土坑（第64図）

〔構造〕 128号住居跡・139号土坑を切る。東側は調査区域外である。（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明×70cm。（長軸方位）N-84°-E。（深さ）土層図の観察より、近世の土層（3層）の下より60cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は北側が急斜に、南側は緩やかに立ち上がる。（覆土）4層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

〔遺物〕 出土しなかった。

139号土坑（第64図）

〔構造〕 138号土坑に切られ、128号住居跡・140号土坑を切る。東側と西側は調査区域外にあるため、詳細は不明である。（長軸方位）N-84°-E。（深さ）土層図の観察より、近世の土層（3層）の下より40cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は急斜に立ち上がる。（覆土）7層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

〔遺物〕 出土しなかった。

141号土坑（第65図）

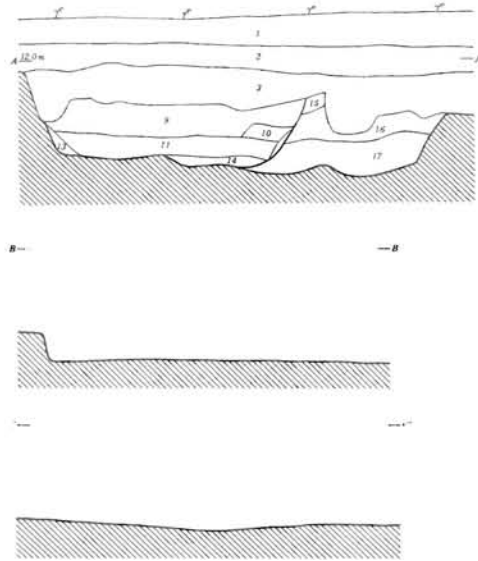
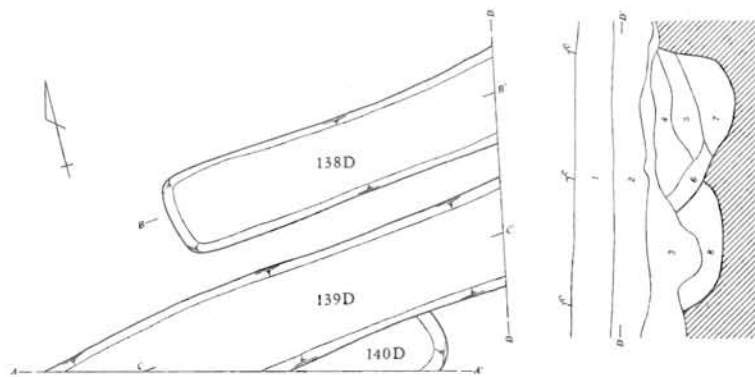
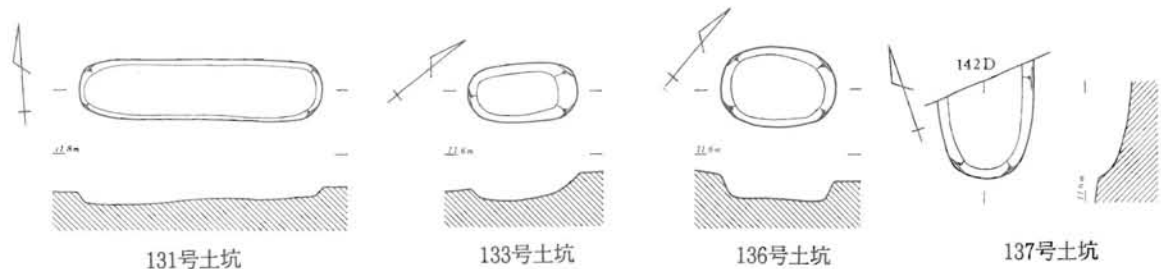
〔構造〕 130号住居跡を切り、134・135号土坑に切られる。地下式坑である。地表より3.80m程掘り下げたが、坑底面は確認できなかった。これ以上掘り下げるのは崩落の危険性があるので、調査は中止した。そのため、詳細は不明である。（覆土）確認できる範囲内では、15層に分層される。

〔遺物〕 土師質陶器・常滑甕・板碑が出土した。

〔時期〕 15世紀末葉～16世紀前葉。

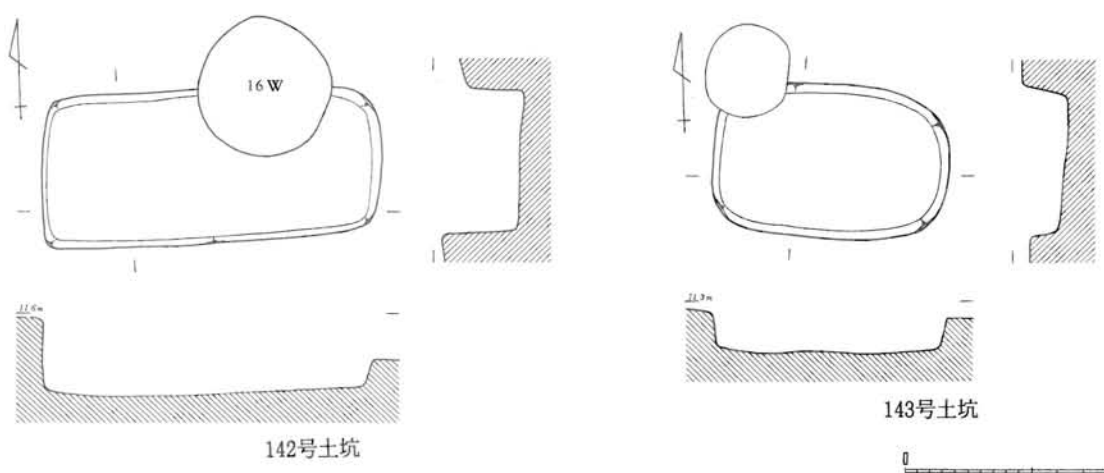
141号土坑出土遺物（第66図1～5、図版18-5）

第66図1～5は土師質陶器である。

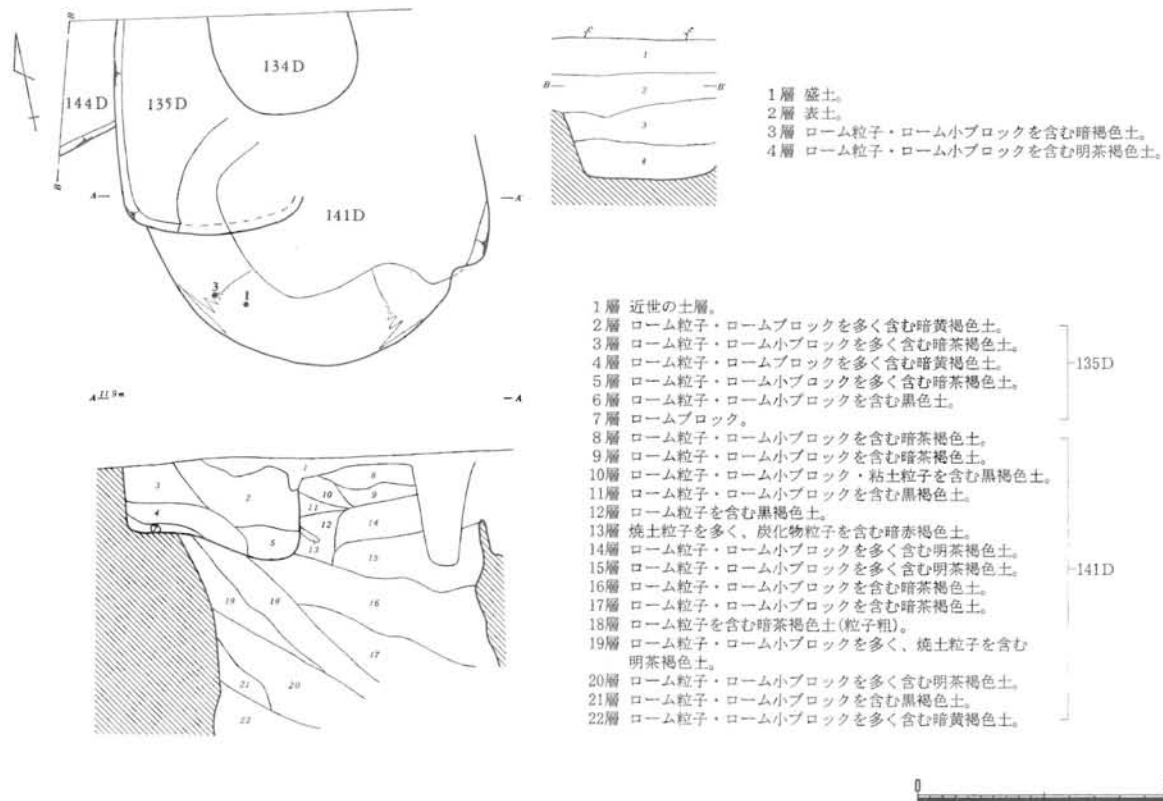


- 1層 盛土。
- 2層 表土。
- 3層 近世の土層。
- 4層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。
- 5層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。
- 6層 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土。
- 7層 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土。
- 8層 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土。
- 9層 ローム粒子・ローム小ブロック・赤色砂粒を含む暗茶褐色土(粒子やや粗)。
- 10層 赤色砂粒を含む黒褐色土。
- 11層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
- 12層 焼土粒子を僅かに含む黒褐色土。
- 13層 焼土粒子を僅かに含む黒褐色土。
- 14層 ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む黒褐色土。
- 15層 ローム粒子を僅かに含む暗茶褐色土。
- 16層 赤色砂粒・ローム粒子を含む黒褐色土。
- 17層 ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む黒褐色土。

138~140号土坑



第64図 土坑1 (1/60)



第65図 土坑2 (1/60)

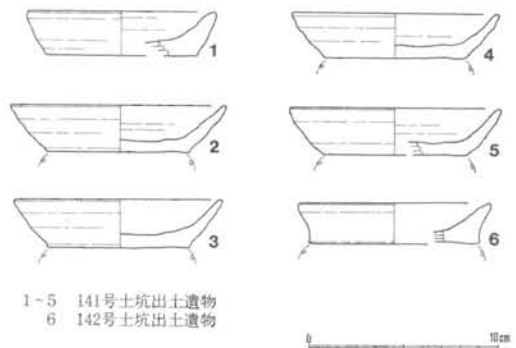
1は器高2.3cm、推定口径10.0cm、推定底径7.8cm。器厚が厚ぼったく、口縁部はやや内湾ぎみである。色調は黄橙色を呈し、胎土には細かい茶褐色粒子・黒色粒子・金雲母を僅かに含む。内外面にロクロナデが観察される。覆土中の出土で、遺存度は1/3程である。

2は器高2.5cm、推定口径10.4cm、推定底径7.4cm。1の土器よりやや薄手で、底部から口縁部にかけて内湾ぎみに開いている。色調は黄橙色を呈し、胎土には細かい砂粒・茶褐色粒子・黒色粒子を僅かに含む。内外面にロクロナデが観察され、底部には回転糸切り痕が残る。覆土中からの出土で、遺存度は1/3強である。

3は器高2.6cm、推定口径11.0cm、推定底径7.6cm。口縁部は僅かに外反する。色調は黄橙色を呈し、胎土には細かい砂粒・茶褐色粒子・黒色粒子を僅かに含む。内外面にロクロナデが観察され、底部には回転糸切り痕が残る。覆土中の出土で、遺存度は2/3程である。

4は器高2.6cm、推定口径11.0cm、推定底径7.6cm。底部から口縁部にかけて内湾ぎみに開いている。色調は黄橙色を呈し、胎土には茶褐色粒子・黒色粒子を含む。内外面にロクロナデが観察され、底部には回転糸切り痕が残る。覆土中の出土で、遺存度は1/3強である。

5は器高2.5cm、推定口径11.2cm、推定底径7.6cm。底部から口縁部にかけて内湾ぎみに開いている。色調は黄橙色を呈し、胎土には茶褐色粒子・黒色粒子を含む。内外面にロクロナデが観察され、底部に



第66図 土坑出土遺物 (1/4)

は回転糸切り痕が残る。覆土中の出土で、遺存度は1/4程である。

図版18-5の1～3は常滑甕の小破片で、時期は15世紀代であろう。4・5は緑泥片岩の小破片である。

142号土坑（第64図）

[構造] 4・129号住居跡、137号土坑を切り、16号井戸跡に切られる。（平面形）長方形。（規模）270×122cm。（長軸方位）N-88°-W。（深さ）60cm前後。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 土師質陶器が1点出土した。

[時期] 15世紀末葉～16世紀前葉。

142号土坑出土遺物（第66図6）

土師質陶器である。器高2.2cm、推定口径10.2cm、推定底径8.4cm。141号土坑の1によく似ているが、比べると器厚がやや薄く、体部下半の腰が強い。胎土には茶褐色粒子・黒色粒子・金雲母を僅かに含む。内外面にロクロナデが観察され、底部には回転糸切り痕が残る。覆土中の出土で、遺存度は1/5程である。

143号土坑（第64図）

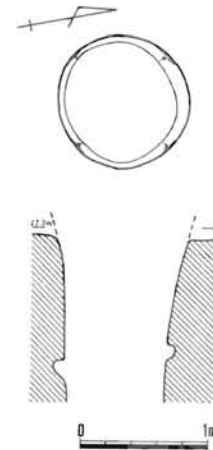
[構造] 4・129号住居跡を切り、130号土坑と後世のピットに切られる。（平面形）隅丸長方形。（規模）188×122cm。（長軸方位）N-83°-W。（深さ）32～35cm。坑底は比較的平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（覆土）142号土坑に類似する。

[遺物] 出土しなかった。

16号井戸跡（第67図）

[構造] 4・129号住居跡、142号土坑を切り、130号土坑に切られる。平面形は円形を呈し、規模は直径104cmを測る。壁面には足掛け穴と思われる掘り込みが検出された。危険防止のため、130cm程掘り下げたところで調査を中止した。（覆土）ローム粒子・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土を基調とする。

[遺物] 該期の遺物は出土しなかった。

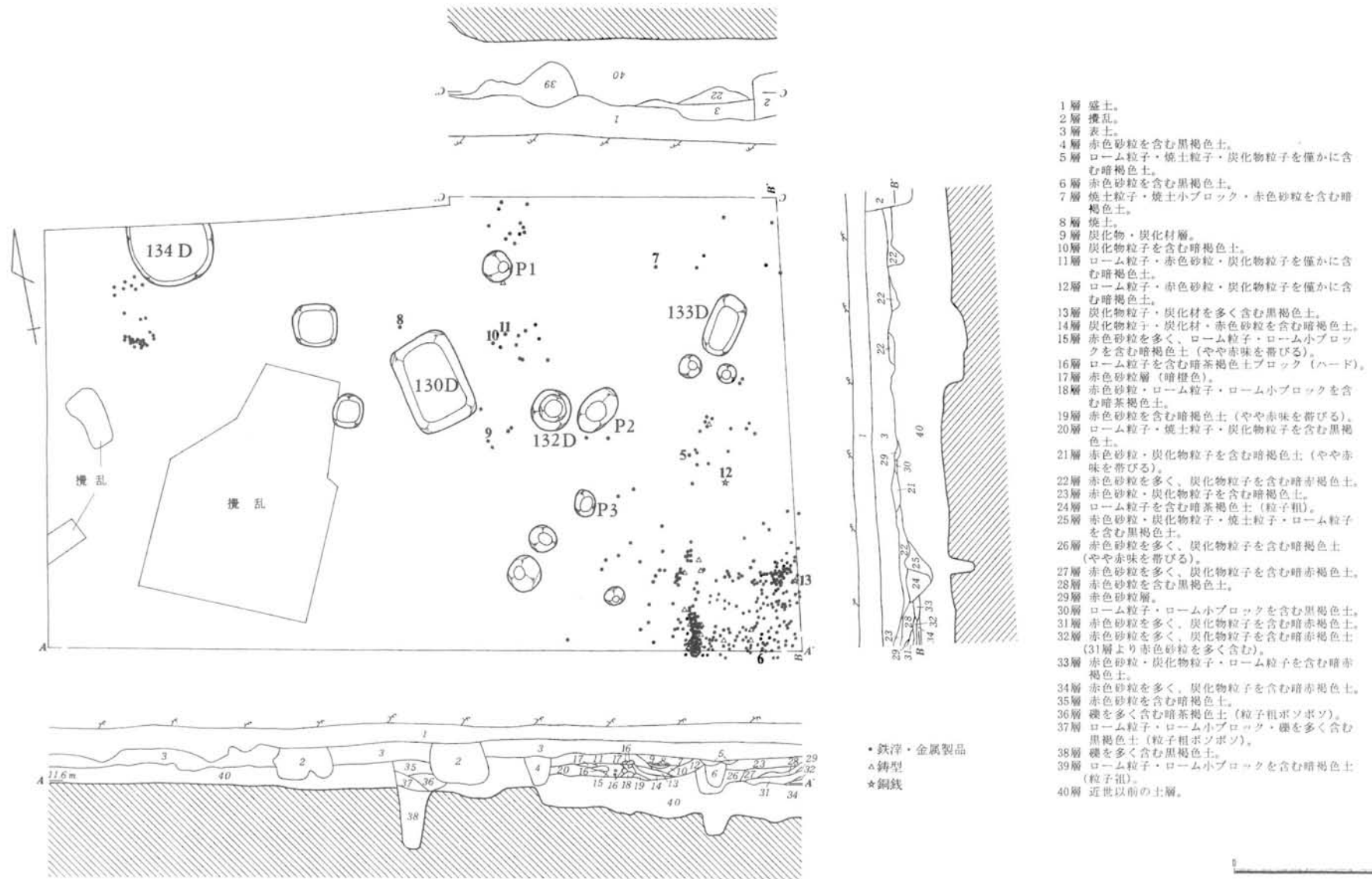


第67図 16号井戸跡（1/60）

（4）近世（鑄造関連）

近世の遺構は基本的に、鑄造関連の遺構である。表土との境には厚さ10cm前後の赤色の砂粒層が確認でき、おそらくこの層が確認できる範囲が鑄造関連の遺構であるものと考えられる。

第68図は鑄造遺構に関連すると思われる遺構配置図と遺構に伴わない部分での遺物の分布図である。まず、遺構については、明らかに鑄造土坑・溶解炉とする130・134号土坑を除き、今回のような狭小な面積での調査では、結果的には鑄造関連の遺構の詳細は不明とするしかないが、132号土坑や1号ピットのように柱穴状の掘り込みから鑄型の破片や鉄滓等が多く出土していることや部分的であるが、版築面と思われる土層が130号土坑の12・13層で確認できたことから、建物跡を伴う遺構であることは間違



第68図 鑄造関連の遺構・遺物分布図（1 / 80）

遺 構 名	実測個体数	実測外個体数	小 計
1 3 0 号 土 坑	1 4	2 5 7	2 7 1
1 3 2 号 土 坑	5	1 2 0	1 2 5
1 3 3 号 土 坑	0	1	1
1 3 4 号 土 坑	5 0	1, 2 2 0	1, 2 7 0
1 号 ビ ッ ト	0	7	7
グ リ ッ ド	0	4 4	4 4
出 土 地 点 不 明	0	2 1	2 1
合 計	6 9	1, 6 7 0	1, 7 3 9

第2表 鑄型の出土状況

いないであろう。

遺物については、小型の鑄型、金属製品、土製品、鉄滓・鉄塊などが出土している。特に、小型の鑄型については、第2表に示したとおりに総数1,739点を数え、同時にその鑄型で製作されたと考えられる鉄製品（第74図57）が出土したことは特筆すべきであろう。鉄滓及び金属製品、そして鉄塊・炉壁の総重量は62,027gであった。時期については、130号土坑の瀬戸の鉄釉碗やその他の陶磁器から判断して、17世紀中頃から後半に比定できるものと考えられる。

また、鑄造土坑や大型の溶解炉、そしてリング状の定盤、三叉状土製品などの出土により、ある程度大型製品の製作が予想されるが、それに関係する鑄型は出土していないことについては、今後解明されなければならない事項の1つであろうと考えられる。いずれにせよ、今回の調査を終了したが、様々な事象についての性格を的確に把握できなかったことは担当者の力量の無さを痛感するものであった。

130号土坑（第69図）

〔構造〕 4・129号住居跡・143号土坑・16号井戸跡を切る。（平面形）隅丸長方形。（規模）128×85cm。（長軸方位）N-14°-W。（深さ）45cm前後。（壁材）厚さ10cm前後の灰白色粘土により、全面が被覆されている。土層図の9層に相当する。（掛木）壁材の灰白色粘土を露出させた段階で、掛木が坑底面から長軸方向に検出されているが、壁面にも短軸方向あるいは垂直方向に観察することができた。掛木についてはほとんどが腐食しており、樹皮の木目様を観察できる程度であった。（覆土）基本的に1～8層が相当するもので、9～11層は壁材に用いられた灰白色粘土を基本とする。

〔遺物〕 大量の鑄型、鉄滓がほぼ覆土全域から出土している。鉄滓・鉄製品及び鉄塊に相当する総重量は4,836gである。その他、陶・磁器、砥石、土製品、鉄製品が出土している。

〔所見〕 本遺構は、鑄造土坑と考えられる。

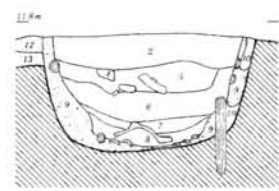
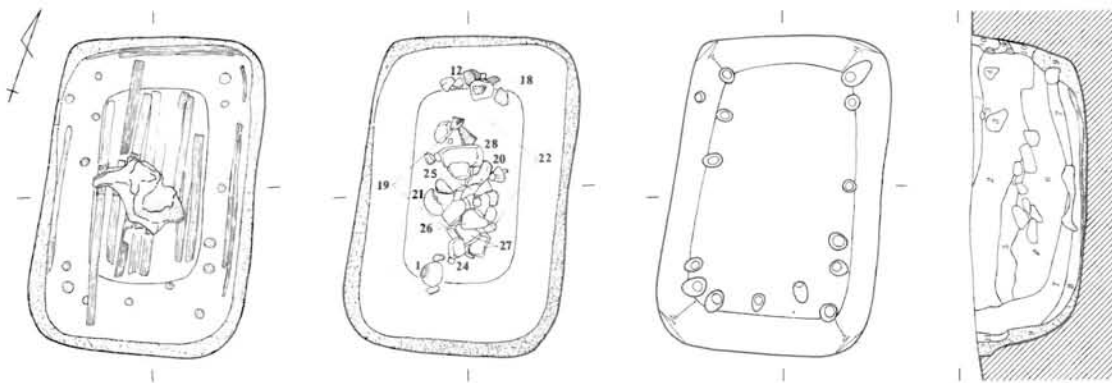
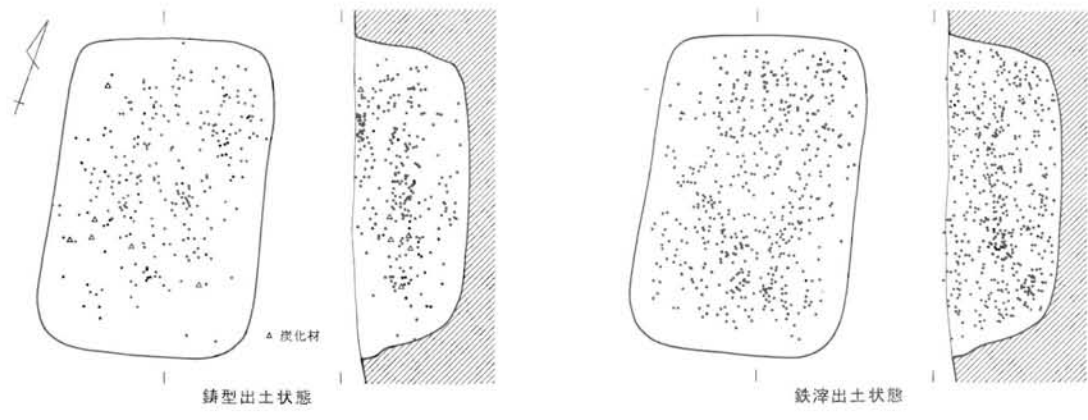
130号土坑出土遺物（第71図、図版19-1～7）

陶・磁器（第71図1、図版19-1～7）

第71図1は瀬戸の鉄釉碗である。器高6.4cm、口径10.5cm、底径5.0cm。ロクロは左回転である。底部外面の高台部はほとんどその原形を残さない程に鋭く磨耗している。意図的に道具として使用された可能性がある。口縁部を部分的に欠損する程度で、遺存度は4/5以上である。

図版19-1～7は陶器小破片である。1は鉄釉甕で、産地・時期については不明である。2は常滑甕である。3は唐津三島手鉢である。時期は17世紀前半である。4は信楽の播鉢で、時期は17世紀代である。5・6は京焼系の碗で、時期は17世紀代である。7は肥前系の白磁で、時期は17世紀後半である。

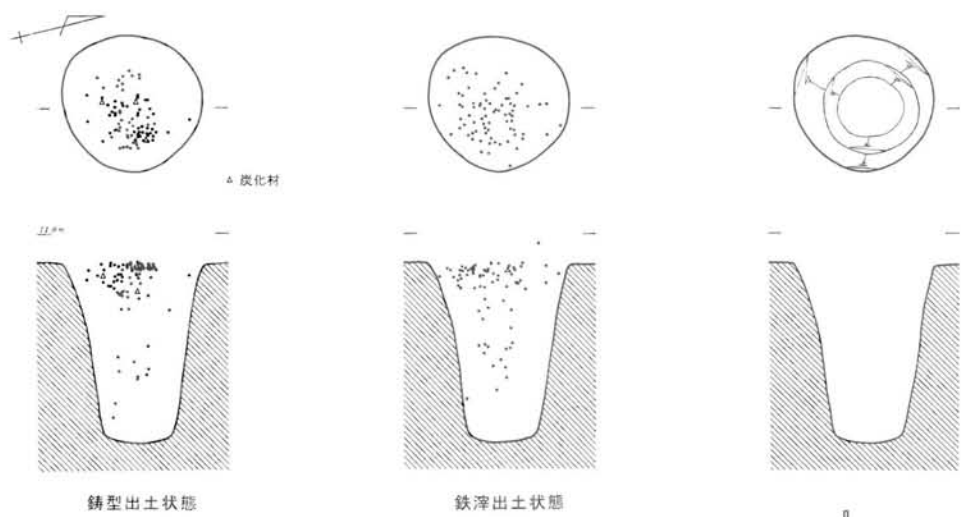
土製品（第71図2～20、24～30）



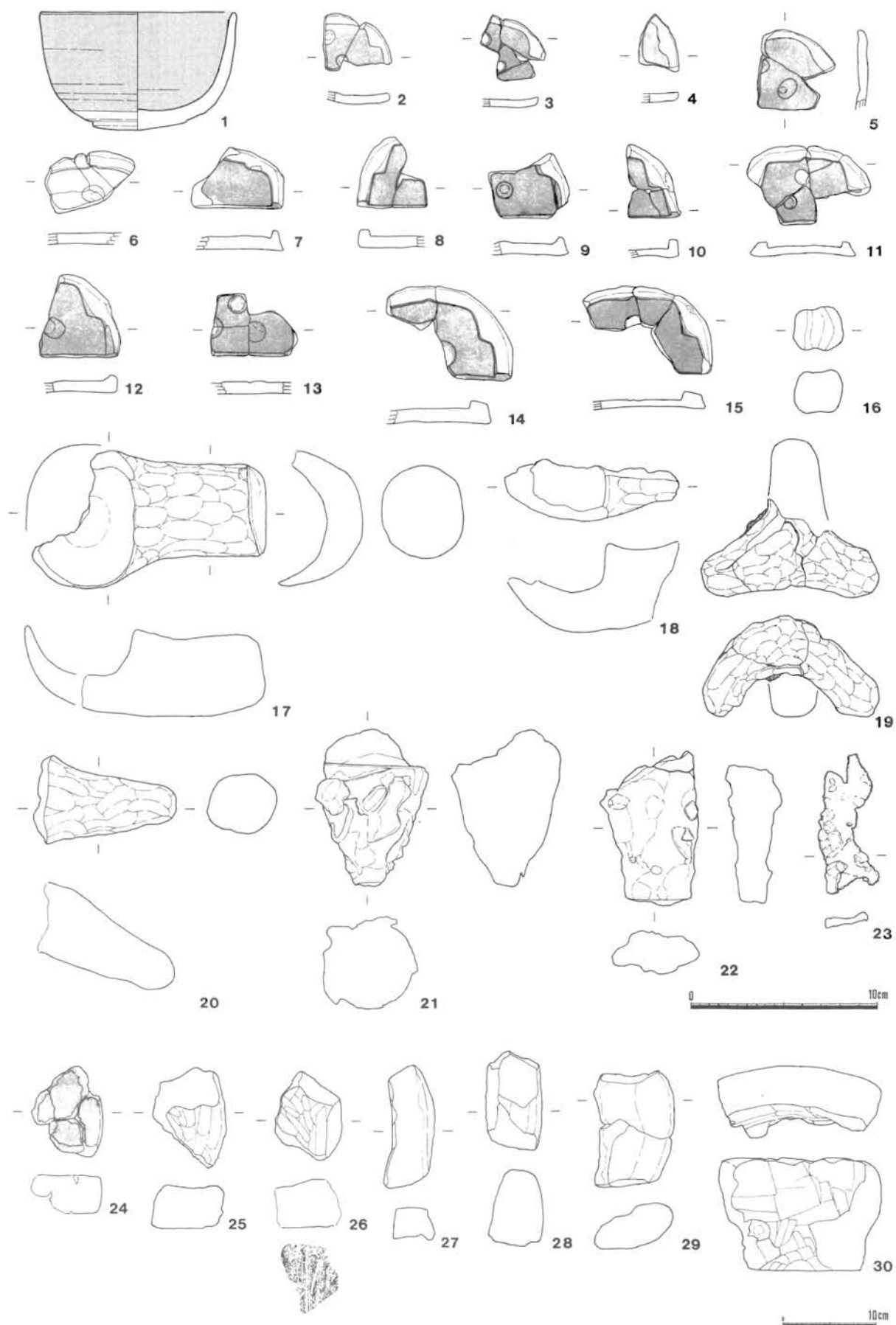
- 1層 灰褐色粘土粒子・灰褐色粘土小ブロックを多く、焼土粒子・炭化物粒子・砂粒を含む暗灰褐色土（2層よりやや暗色）。
- 2層 灰褐色粘土粒子・灰褐色粘土小ブロックを多く、焼土粒子・炭化物粒子・砂粒を含む暗灰褐色土。
- 3層 灰褐色粘土ブロック。
- 4層 灰白色粘土ブロック。
- 5層 灰褐色粘土粒子・灰褐色粘土小ブロックを多く、焼土粒子・炭化物粒子・砂粒を含む暗灰褐色土。
- 6層 焼土粒子・炭化物粒子・赤色砂粒を含む灰褐色粘土。
- 7層 赤色砂粒を多く含む暗赤褐色土（シャリシャリした感じ）。
- 8層 小石・砂粒を多く、灰白色粘土を含む砂利層。
- 9層 灰褐色粘土を含む灰白色粘土（壁材に使用された粘土）。
- 10層 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子を含む暗赤褐色土（壁材が崩れた部分）。
- 11層 灰白色粘土ブロックを多く焼土粒子・砂粒を含む灰白色土（壁材が崩れた部分）。
- 12層 ローム粒子・ローム小ブロック・礫を含む明茶褐色土。▽ 版築層
- 13層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。



第69図 130号土坑（1/30）



第70図 132号土坑（1/30）



第71图 130号土坑出土遗物 (1/3 · 1/6)

小型鑄型（2～15）

形態から蓋形（2～5）、身形（6～15）に分類可能である。また、その大きさから小（2～4）・中（5～12）・大（13～15）に大別できそうである。特に11については、134号土坑で出土した第74図57の鉄製品の大きさ・形状に類似しており、照合するとピッタリと組み合わせることができる。

鑄型の基本形は、身の部分に瘤状の突起部が3個観察され、天井部が宝珠形を呈していることから、概して木瓜（もっこう）形に近い形と言うことができようか。瘤状の突起部は、その後湯入れが行われると第74図57の鉄製品にみられるように3個の穿孔部を作りだすものである。色調は明橙色を基調とし、胎土には砂粒を多く含む。外縁部・底部には指頭押捺の成形痕が観察できる。これらの使用時の組み合わせは、下・上盤の身・蓋をそれぞれ2枚、計4枚であり、これにより1つの製品が作りだされたものと考えられる。

道具（16～20、24～30）

16は用途不明の土製品である。全長2.6cm、最大幅2.4cm、重さ13.2g。形状は中央にくぼみがまわりやや分銅状を呈する。色調は黄橙色を呈し、胎土には金雲母・砂粒を含む。

17・18はトリベである。楕円形の塊形を呈し、柄の部分と一体型である。21は遺存状態の良好で、全形が復元できるもので、現全長12.6cm、高さ4.7cm。全面にウロコ状の指頭押捺痕が観察できる。

19・20は三叉状土製品（サル）である。19は全形を復元できたもので、高さ5.5cmを測る。全面に成形痕である指頭押捺痕が観察できる。

24～30は鑄造土坑の底に固定する定盤あるいはコンニャクと呼ばれる鑄型の基礎になるものであろう。

鉄製品及び鉄塊（21～23）

21・22は湯口部分の鉄塊である。これらの出土により、鑄型の湯口に相当する形状が推測可能である。21は円錐形のもので、全長8.5cm、最大幅5.7cm、重さ562g。22は一文字状のもので、全長8.0cm、最大幅5.2cm、最大厚2.9cm、重さ236g。

23は用途不明の鉄製品である。全長7.1cm、厚さ6mm前後、重さ14.2g。

132号土坑（第70図）

[構造] 128・129号住居跡を切る。ピット状の掘り込みである。（平面形）円形。（規模）直径55cm。（深さ）72cm。（覆土）上層からかなり被熱層的な焼土を多く含む暗赤褐色土を基本とする。

[遺物] 鑄型、金属製品が多く出土している。鉄滓及び金属製品の総重量は315gである。

132号土坑出土遺物（第72図）

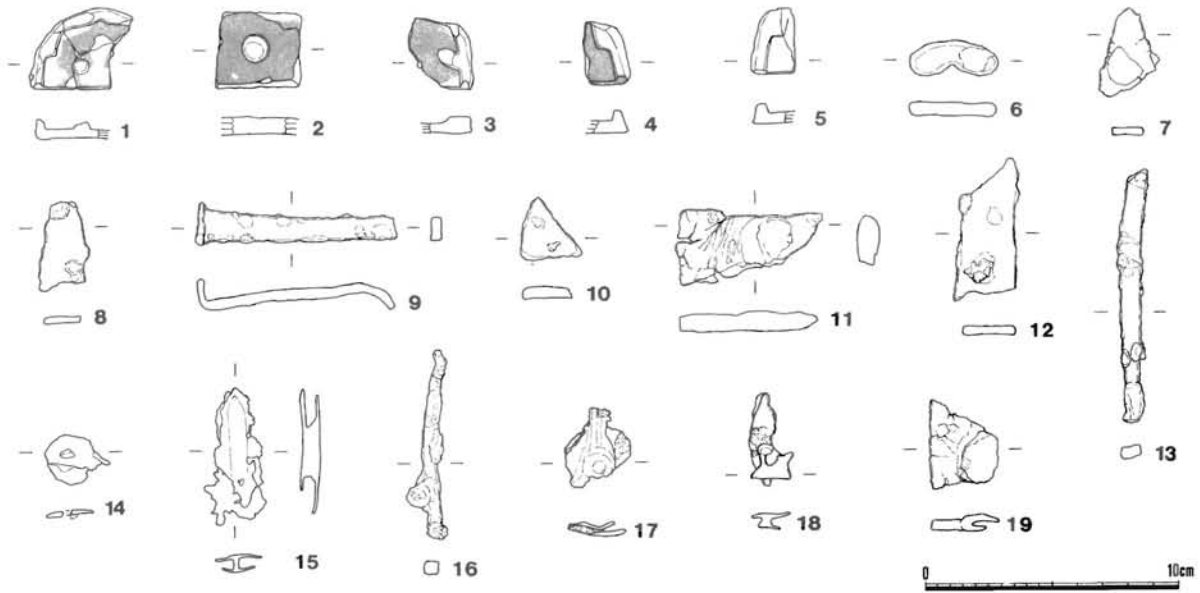
土製品（1～5）

132号土坑から出土した小型鑄型と同類のものである。1～5はすべて身形のものである。3は130号土坑の基本形としたものとはやや異なり、突出部分があるものである。

金属製品（6～19）

132号土坑から出土した金属製品は、16～19を基本とするように鉄製品と銅製品を組み合わせられて製作された特異な形状の製品である。

6～13は鉄製品である。9・13は鉄釘であろうと思われるが、それ以外は不明品である。6は落花生状のもので、全長3.5cm、幅1.0cm、厚さ6mm、重さ9.2gである。7・8・10～12は銅製品と組み合わせて使用されたものに類似する。



第72図 132号土坑出土遺物（1/3）

14・15は断面「エ」字状の銅製品である。14は円形、15は剣形を呈している。鉄製品と組み合わせて使用されたものであろう。

16～19は用途不明の金属製品である。鉄製品と銅製品を併用し、鉄製部分と銅製部分に識別できるものである。形状の特徴としては、断面「エ」字状の銅製品に板状の鉄製品が挟み込まれているものを基本とするようである。

134号土坑（第73図）

〔構造〕 135・141号土坑を切る。北側は調査区域外にあるものと考えられる。（平面形）円形。（規模）掘り込みの直径は推定117cm。（深さ）50cm前後。坑底は比較的平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（炉壁）大部分が坑内に廃棄された状態で、遺構全体から出土している。地下に構造をもつ坑底については、厚さ1.5cm前後と非常に薄い灰褐色を呈する粗い砂状の材質のもので作られている。また、坑底から15cm以上の上段になると、その材質については厚さ4cm程の土製のものが使用されている。特に坑底部分については、すべて復元できなかったが遺存状態は良好であったと言えよう。羽口に相当する部分については、検出されなかった。（覆土）3～15層の13層に分層される。全体的に赤色化した砂粒層・焼土粒子・焼土小ブロックが多く含まれていることから、かなりの高温により被熱していることが観察できる。

〔遺物〕 大量の鋳型、鉄滓がほぼ覆土全域から出土している。その他、陶・磁器、砥石、土製品、鉄製品が出土している。また、溶解炉の構造に関連する炉壁が検出されている。鉄滓・鉄製品及び鉄塊・炉壁に相当する総重量は55,300gである。

〔所見〕 本遺構は、溶解炉と考えられる。

134号土坑出土遺物（第74・75図）

土製品（第74図1～56、第75図59～62、64～68）

小型鋳型（1～56）

130号土坑同様に、形態から蓋形（1～16）、身形（17～56）に分類可能である。また、蓋形では9～

16、身形では36～56のように130号土坑で基本形としたものに含まれない鑄型が存在する。

まず、基本形のものは、その大きさから蓋形の小（1）・中（2～5）・大（6）、身形の小（17・18）・中（19～30）・大（31～35）に大別できそうである。

基本形でないものは、半円形のもの（9）、菊座様の花びら状のもの（10、43～47）、細長く直線的なもの（12～16）、細長く曲線的なもの（36～42）、突出部分があるもの（48～49）その他（51～56）というようにバラエティーが豊富である。

道具（第75図59～68）

59～61は三叉状土製品（サル）である。59は全形を復元できたもので、高さ6.9cmを測る。全面に成形痕である指頭押捺痕が観察できる。

62はトリベの破片である。円形の塊形を呈している。

64～68は鑄造土坑の底に固定する定盤と考えられる。特に、66～68は大きさを復元できるものとして貴重な資料と成り得るものであろう。

66は外径33.0cm、内径22.4cm、最大厚5.9cm、最小厚4.9cm、高さ6.4cm。外縁下半部はヘラ削り、上面にはヘラナデが施され、ていねいに仕上げられている。色調は明橙色を呈し、胎土には砂粒・金雲母を多く含む。

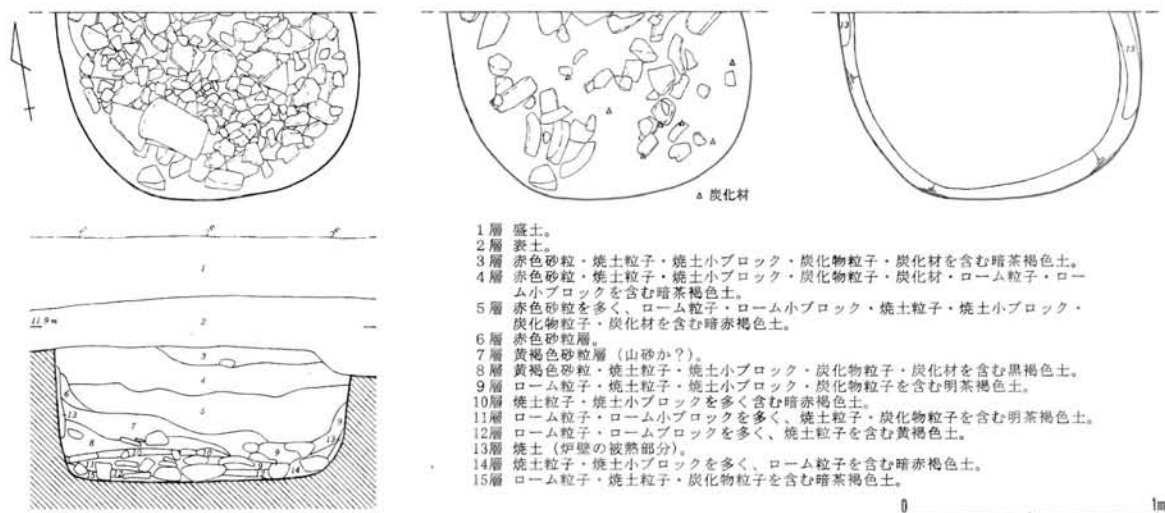
67は推定外径62.0cm、最大厚7.7cm、最小厚6.7cm、高さ7.9cm。下面には板を敷いたような柁目状の痕跡があることから、天地逆である可能性がある。上面には1条の沈線がまわっている。色調は明橙色を基調とし、胎土には砂粒・金雲母を含む。

68は推定外径43.0cm、最大厚5.9cm、最小厚4.7cm、高さ8.2cm。上面及び内外縁には1条の沈線がまわっている。また、内縁には成形痕であろう指頭押捺痕が観察される。色調は明橙色を基調とし、胎土には砂粒・金雲母を多く含む。

鉄製品（第74図57・58）

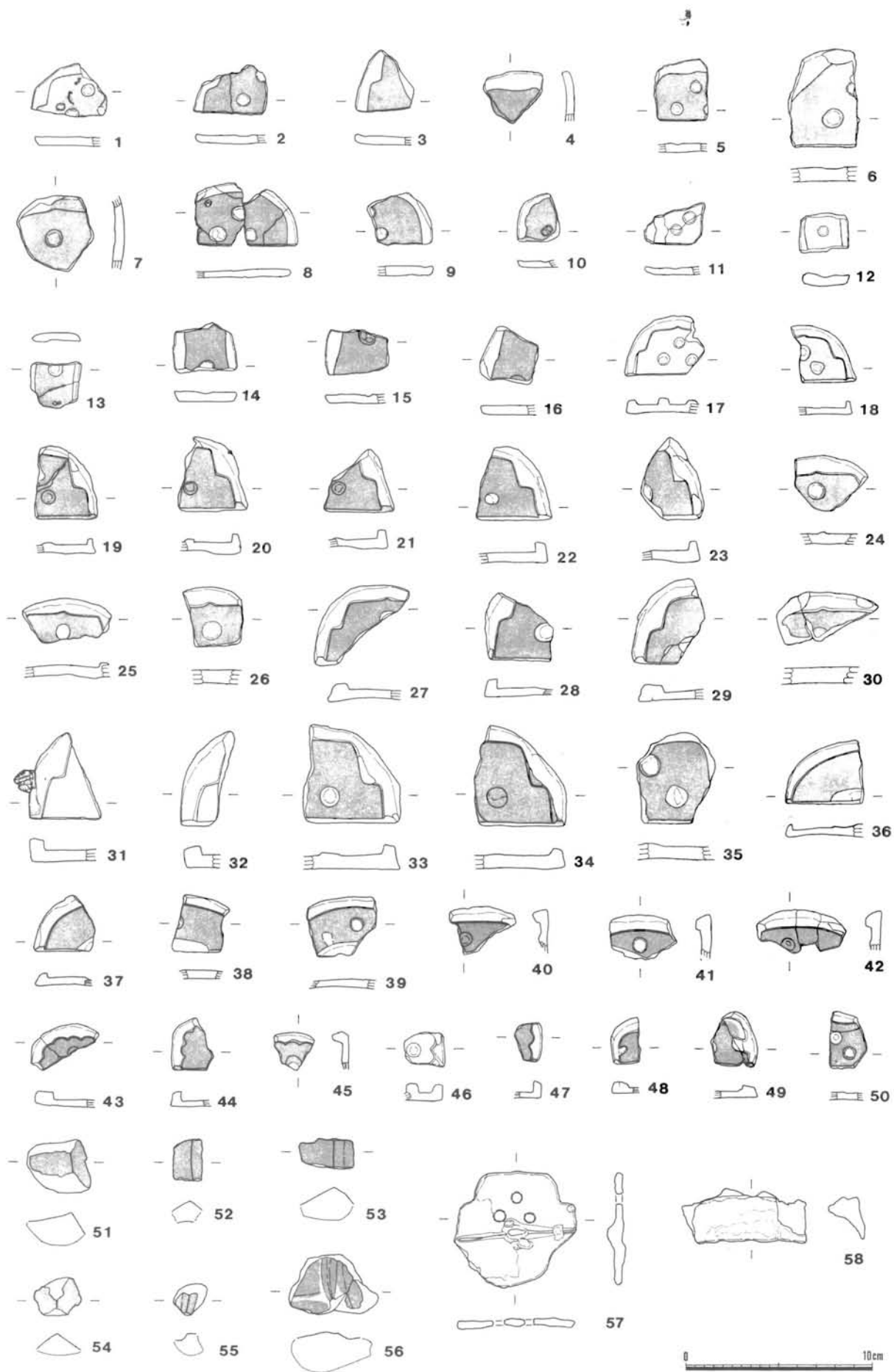
57は小型鑄型の基本形の中型で作られた製品で、失敗品であろう。最大幅6.6cm、厚さ4mm前後、重さ58.5g。表面には砂状粒子の付着が観察される。中央部の高まりは湯口部分に相当し、真一文字に鑄型の接合部の痕跡が残っている。

58は羽釜あるいは茶釜の鐙の部分で、いわゆる「綴羽（しころばね）」と呼ばれるものである。断面

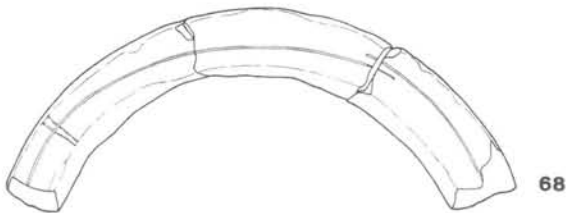
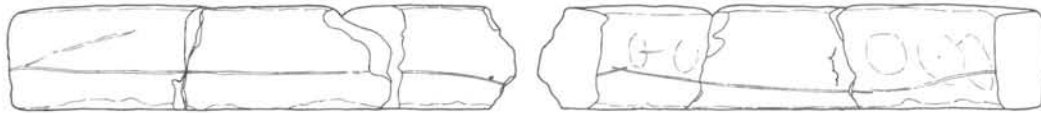
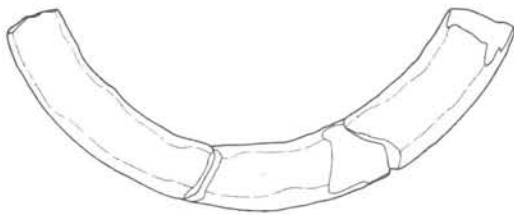
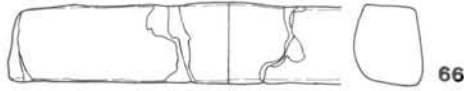
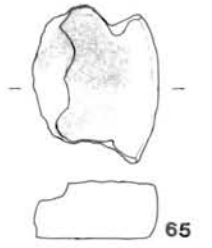
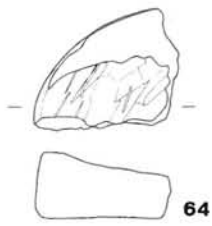
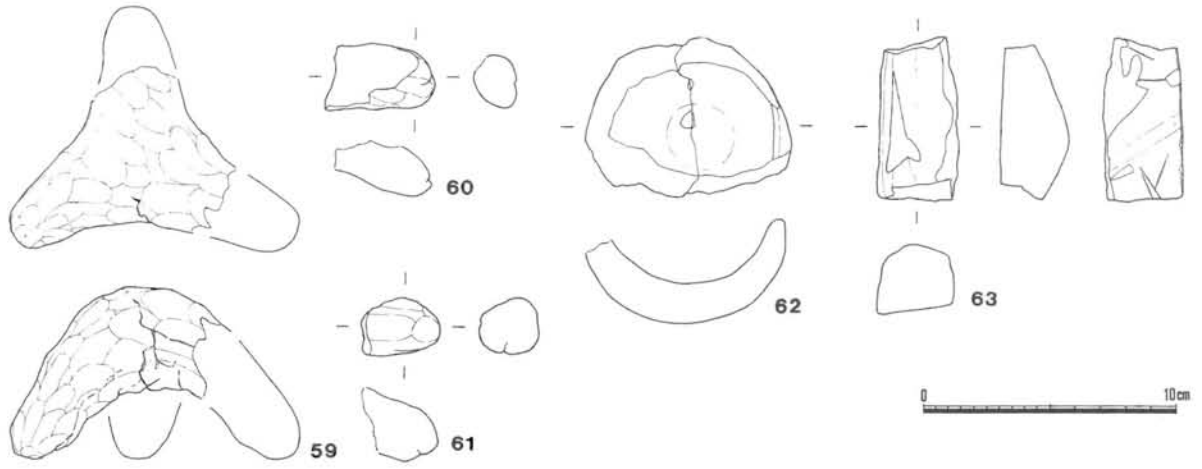


- 1層 盛土。
- 2層 妻土。
- 3層 赤色砂粒・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子・炭化材を含む暗茶褐色土。
- 4層 赤色砂粒・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子・炭化材・ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。
- 5層 赤色砂粒を多く、ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子・炭化材を含む暗茶褐色土。
- 6層 赤色砂粒層。
- 7層 黄褐色砂粒層（山砂か？）。
- 8層 黄褐色砂粒・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子・炭化材を含む黒褐色土。
- 9層 ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子を含む明茶褐色土。
- 10層 焼土粒子・焼土小ブロックを多く含む暗茶褐色土。
- 11層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、焼土粒子・炭化物粒子を含む明茶褐色土。
- 12層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、焼土粒子を含む黄褐色土。
- 13層 焼土（伊壁の被熱部分）。
- 14層 焼土粒子・焼土小ブロックを多く、ローム粒子を含む暗茶褐色土。
- 15層 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。

第73図 134号土坑（1/30）



第74图 134号土坑出土遗物1 (1/3)



0 10cm

第75图 134号土坑出土遗物2 (1/3 · 1/6)

が三角形状を呈する。接合部の厚さは1.7cmである。

石製品 (第75図63)

砥石である。全長6.3cm、幅3.2cm、重さ73.5g。下面は平滑で曲線的であることから、よく使用されているものと思われる。側面は成形痕であろうか、8mm前後のヘラ削り痕が観察される。

1号ピット (第68図)

[構造] 129号住居跡を切る。(平面形) 円形。(規模) 直径40cm。(深さ) 79cm。

[遺物] 鉄製品・土製品が出土した。鉄滓及び鉄製品の総重量は96gである。

1号ピット出土遺物 (第76図1~4)

鉄製品 (1)

羽釜あるいは茶釜の鏝の部分で、いわゆる「一文字羽」と呼ばれるものである。厚さ4mm前後である。

土製品 (2~4)

2は三叉状土製品(サル)の破片である。3・4は铸造土坑の底に固定する定盤の破片であろう。3の上面には134号土坑のものと同様に目印と思われる沈線が付けられている。

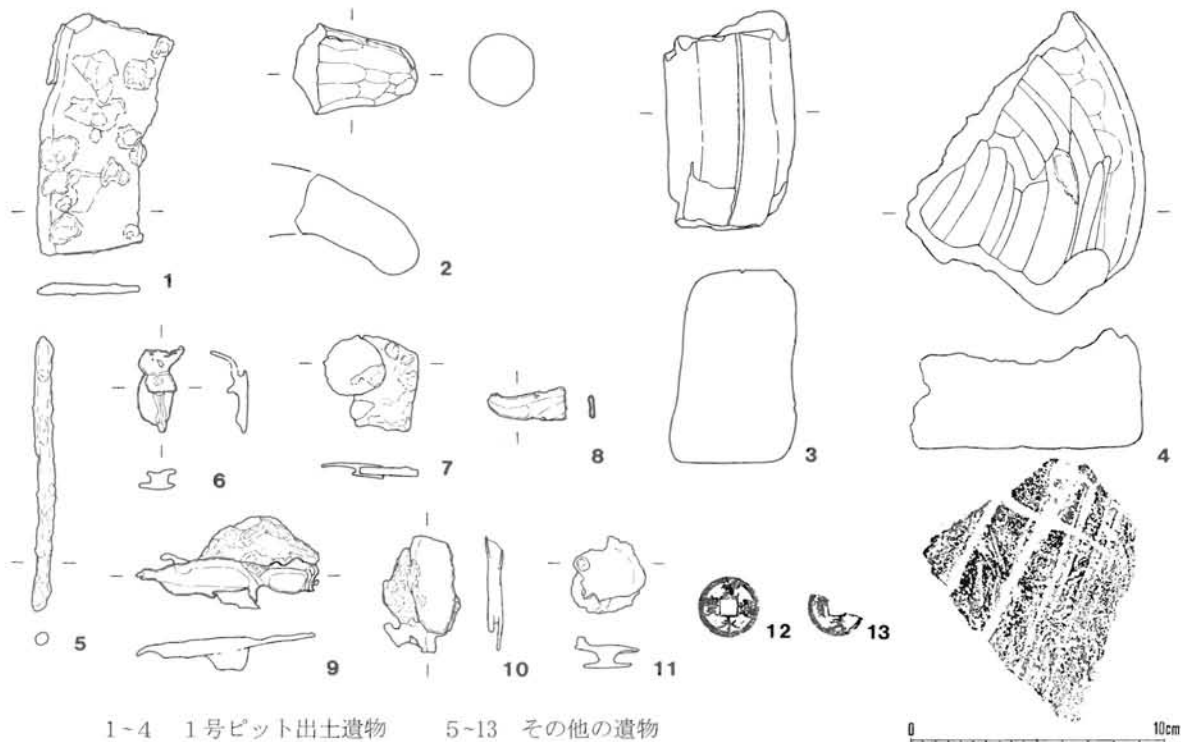
3号ピット (第68図)

[構造] 4・128号住居跡を切る。(平面形) 楕円形。(規模) 35×30cm。(深さ) 79cm。

[遺物] 陶器の小破片が1点出土した。

3号ピット出土遺物 (図版22-3)

1は鉄釉甕である。時期・産地については不明である。2は緑泥片岩の小破片である。



1-4 1号ピット出土遺物 5-13 その他の遺物

第76図 1号ピット・その他の遺物 (1/3)

その他の遺物（第76図5～13）

金属製品（5～11）

5～11は132号土坑から出土した金属製品と同様に、鉄製品と銅製品を組み合わせで製作された特異な形状の製品である。

5は鉄製品で、鉄釘であろうか。7～11は断面「エ」字状の銅製品に板状の鉄製品が挟み込まれているものを基本とするようである。

銅銭（12・13）

寛永通宝（古寛永）。12は外径2.40cm、穿径0.70cm、厚さ0.15mm、重さ4.6g。完形である。13は外径2.30cm、穿径0.60cm、厚さ0.15mm、重さ1.6g。いずれも比較的厚さがあり重量感がある。

（5）遺構外出土遺物（第77図、図版23-1～33）

時代的に縄文時代早期から近代にかけての遺物が検出されている。本地点は狭小な面積でありながら、遺構が密集しているため、各遺構出土の遺物でも混入の可能性もある。また、第7群に分類した弥生時代後期の土器については、大部分が弥生時代4号住居跡に伴うものと考えられる。

第1群 縄文時代早期後葉の条痕文系土器（1）

底部付近の小破片と思われる。内外面に貝殻条痕文が施され、胎土には砂粒を多く、繊維を僅かに含む。色調は内面が茶褐色、外面が暗橙色を呈する。

第2群 縄文時代前期前葉の黒浜式土器（2～6）

すべて胎土に繊維を含む。2・3は口縁部小破片で、2は斜行する細線により格子目状の文様、3は半截竹管により直線的な文様、4は波状文が描かれている。5・6はRLの単節斜縄文を地文とする。

第3群 縄文時代前期後葉の諸磯式土器（7～16）

7～12は半截竹管により平行線文が描出される。7は細竹管による肋骨文、8は菱形文的な直線的な入組文が施文される。9～12は横位の沈線施文を基本とし、11・12は地文に縄文が施文されている。

13～15の文様は幅広の半截竹管により横位の爪形文を基本とする。13・14は平縁の口縁部小破片であろう。15は横位の沈線施文を併用している。

16は浮線文の土器の小破片である。

第4群 縄文時代中期前葉の五領ヶ台式～阿玉台式土器（17～20）

17～19は集合沈線文が施される土器で、18は「く」字状に屈曲する口縁部の小破片で、矢羽状に集合沈線文が描出される。

20は胴部の小破片で、角押文により三角区画を主体とした横位文様帯が描出される。

第5群 縄文時代中期後葉の加曾利E式土器（21～31）

21～24は口縁部の小破片で、21は口縁部直下の隆帯に懸垂文が連結し、T字状の文様が施される。22は磨消手法の文様をもつもので、縄文はRLの単節斜縄文である。23・24は口縁部直下に単節斜縄文が施されるもので、23は羽状を呈する。

25～31は胴部小破片と思われる。25は隆帯と単節斜縄文が、26・30は縄文を地文に懸垂文が施される。27は微隆起帯によりU字状の文様が描かれる。28は沈線文により波状沈線区画文になるものものと思われる。29は口縁部と胴部の境界部であろうか。31は櫛歯状工具による条線を蛇行に垂下させている。

第6群 縄文時代後期の称名寺式～堀之内式土器（32～45）

32～38は沈線より縄文部と無文部が区別され、「図」と「地」の表現を基本とする土器である。32～35は無文部によるJ字文風の文様が描かれている。36～38は帯縄文を主体とした文様になるうか。

39・41・42は縄文部をもたない土器である。39は沈線区画内に列点が充填され、41・42は2本の沈線により懸垂文が施される。

40は口縁部直下に付されるものと思われる貼付文部分の破片である。貼付文は隆帯上に凹線を伴うO字状を呈する。

44は口縁部の小破片で、外面には刻みをもつ細い隆起線が施され、内面口唇部直下には沈線がまわる。

45・46は粗製土器であろう。45は口縁部直下に押捺をもつ紐線文が施される。46は外面口唇部に刻みをもち、外面は斜線文が施される。

第7群 弥生時代後期の土器（46～57）

壺形土器（47～53）

47～49は口縁部の小破片、50～53は頸部から肩部にかけての小破片である。

47は複合口縁を呈する口縁部破片で、複合部外面にはR Lの単節斜縄文を施した後、棒状貼付文1本（1本は欠落痕あり）が付され、複合部下端には布目痕をもつ押捺文がまわる。48は複合部外面にL Rの単節斜縄文、下端にハケ状工具による刻みが施される。47・48ともに複合部を除く内外面には赤彩が施される。49は薄い粘土帯を貼り付けることにより複合部を作出し、口唇端部にはR Lの単節斜縄文、口唇部外面には刻みが施される。内外面赤彩である。

50～52は単節斜縄文の施文後、自縄結節文が施されるもので、51・52は縄文帯の下端に3条の結節文がまわっている。赤彩は50が無文部全面、51・52は外面無文部に施され、51の縄文施文部には1ケの円形赤彩文が付加されている。53は3段の単節斜縄文により羽状構成をとる土器である。

鉢形土器（46・54）

口縁部が内湾することから鉢形土器であろう。46は単純口縁、54は複合口縁の呈するもので、いずれも外面と口唇端部にはL Rの単節斜縄文が施される。

甕形土器（55～57）

すべて内外面ハケ目調整が施され、55・56は口唇部外面に刻みをもつ口縁部の小破片、57は頸部の小破片である。

第8群 中～近世の陶・磁器（図版23-1～33）

1・2は瀬戸の志野皿で、時期は16世紀末から17世紀前あろう。

3は瀬戸の灰釉皿で、時期は15世紀代であろう。4は瀬戸の菊皿（輪花皿）で、時期は15世紀後半である。5は瀬戸の灰釉碗で、時期は17世紀代であろう。

6は瀬戸の緑釉碗で、時期は17世紀代であろう。7は瀬戸の緑釉壺で、時期は18世紀から19世紀か。

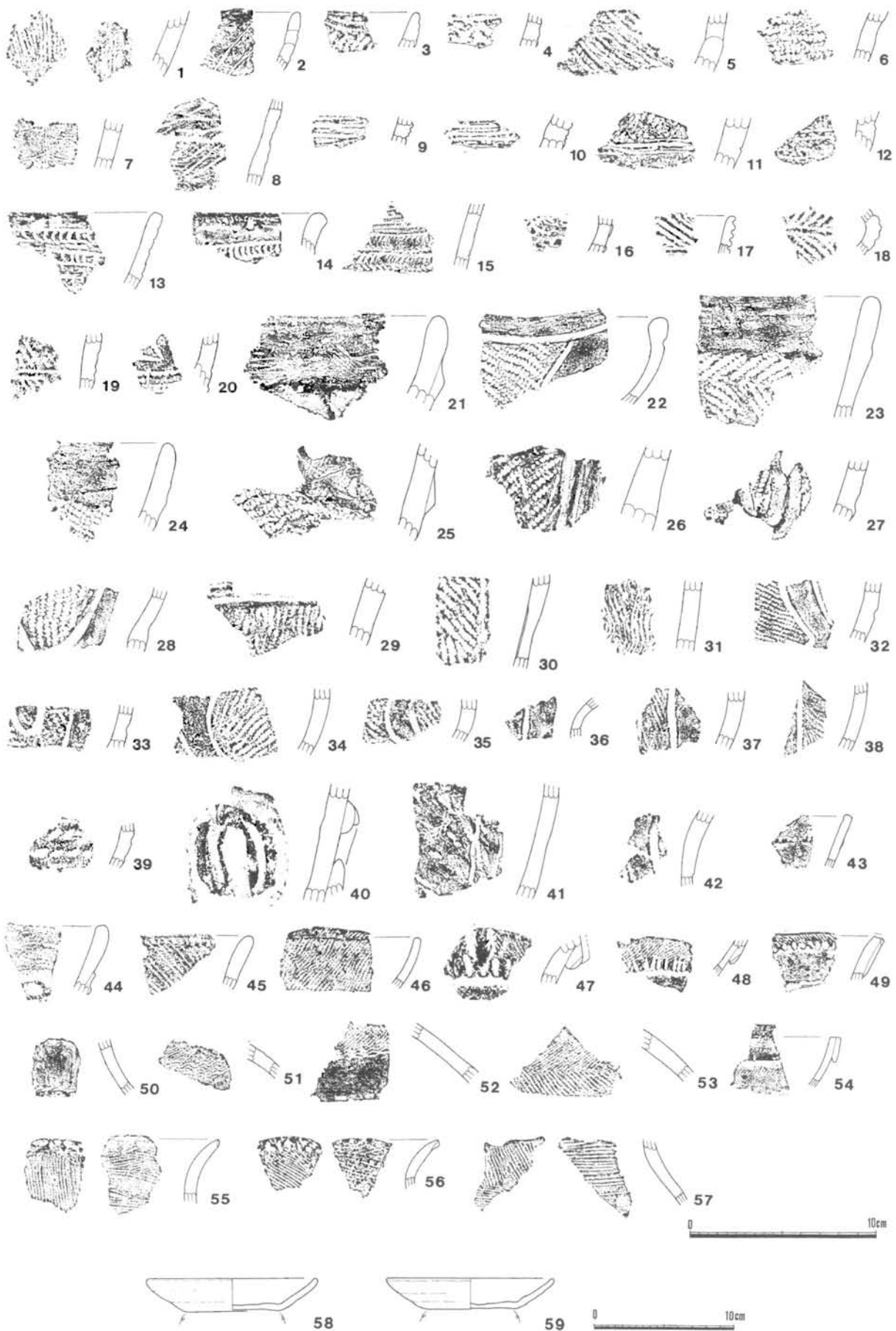
8～10は瀬戸・美濃系の鉄釉天目で、時期は17世紀代であろう。11は瀬戸の鉄釉碗で、時期は17世紀中から後半である。

12は唐津の鉄釉碗か。時期は17世紀前半あろう。

13・14は常滑甕で、時期は14世紀代であろう。14は被熱痕あり。

15～18は備前系の播鉢で、時期は16世紀から17世紀であろう。

19・20は瀬戸の播鉢で、時期は17世紀から18世紀であろう。21は瀬戸の鉄釉鉢で、時期は18世紀から19世紀であろう。



第77図 遺構外出土遺物 (1/3・1/4)

22は益子あるいは笠間の土瓶蓋で、時期は19世紀代か。

23～25は肥前系の碗である。23は草木文が描かれ、被熱を受けている。時期は18世紀前半である。24は一重網手文が描かれている。時期は18世紀後半である。26は肥前系の青白磁碗で、時期は17世紀代であろう。27は肥前系の青磁壺で、時期は18世紀後半である。

28～31は瓦器で、ほうろくである。時期は16世紀から17世紀であろう。

32は瓦磚で、型砂痕あり。表面に丸い凹みがあることから何かの道具に転用された可能性がある。時期は16世紀から17世紀であろう。

33は層状剥離を基本とする雲母片岩・緑泥片岩の破片である。

第9群 近代の遺物 (58・59)

表土剥ぎの段階で検出された土師質土器である。これらは、調査区北東端の地表面から深さ約60cmの位置、第68図の土層図Bでは攪乱とする2層あるいはその付近から2個体が上下合わさった状態で出土した。出土状況から朧衣皿である可能性がある(図版16-8参照)。

58・59はほぼ同形のもので、底部から口縁部にかけて内湾ぎみに開いている。色調は明橙色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。内外面にロクロナデが観察され、底部には回転糸切り痕が残る。

58は器高2.5cm、口径12.2cm、底径6.7cm。59は器高2.3cm、口径12.0cm、底径6.1cm。

これらの時期については、19世紀代に比定される。

第10章 西原大塚遺跡第36地点の調査

第1節 遺跡の概要

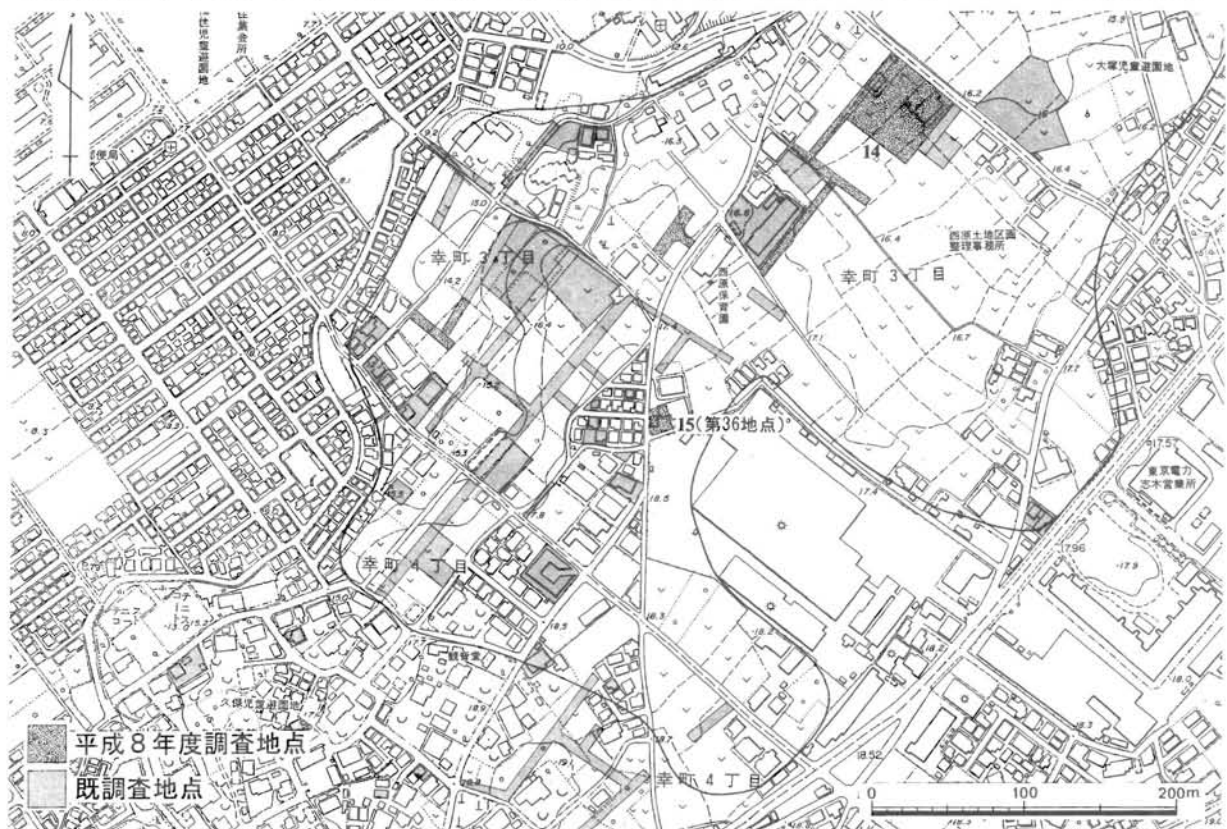
(1) 立地と環境

西原大塚遺跡は、志木市幸町3丁目一带に広がる市域最大規模の遺跡で、東武東上線志木駅から1km程西方に位置している。遺跡は、北西方向に柳瀬川を望む台地上に立地するが、武蔵野台地の北端であるため、標高が遺跡南端で約19m、北端で約13mを測るように、南から北方向にかけて序々に標高が低くなり、北側の標高約8mの低地へと移行している。また、台地から低地への移行の地形は、遺跡の西側ではゆるやかな傾斜地であるが、北側では比較的急な段差状を呈している。遺跡の現況は大部分が畑地であるが、この地区で西原特定土地区画整理事業が実施されており、今後、急速に住宅建設を始めとする各種開発行為の増大が予想される。

本遺跡は、昭和48年に第1回目の発掘調査が実施され、以後の調査により、旧石器時代、縄文時代前・中期、弥生時代後期、古墳時代前・後期、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡であることが判明してきた。特に、大規模開発である区画整理事業に伴う調査により、面的な貴重な資料の蓄積が進み、今後は総合的な研究が期待されるものである。

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成8年10月11日に実施した。調査区の長軸方向に合わせ、3本のトレンチを設定し、



第78図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

平成9年3月31日現在

バックホーで表土を剥ぐ。同時に遺構確認作業を行った結果、住居跡と思われる遺構を4基確認した。その後、遺構のプランを確認しながら、周囲の表土剥ぎを行い、翌12日にはその作業を終了した。残土は遺構の分布しない調査区南端に置くことで処理することにした。

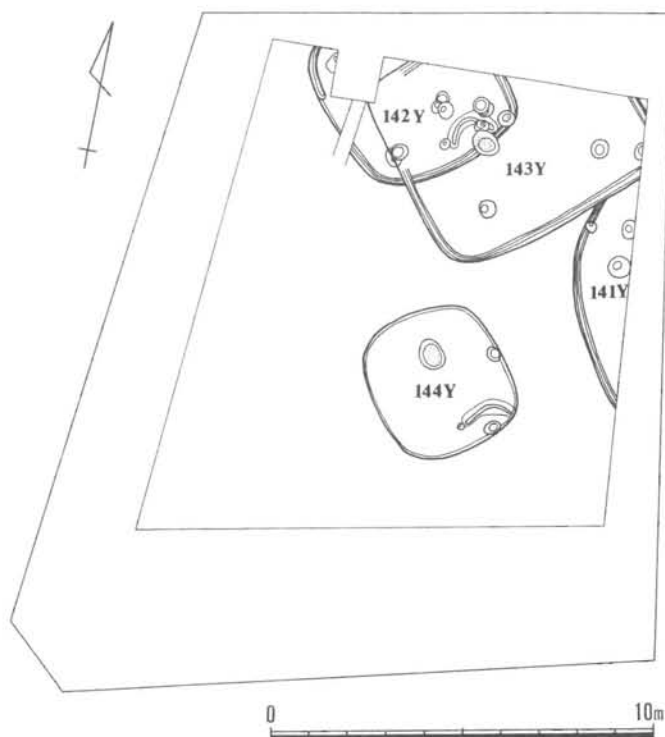
人員導入による発掘調査は10月15日から開始した。まず、午前中に調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行い、午後からは遺構の精査に入る。遺構は出土土器から弥生時代後期末葉～古墳時代初頭の住居跡(141～144Y)であることが判明した。

21日、141Yの炭化材出土状態の写真撮影を行い、142・143Yについては、遺物の出土状態をドットとして記録し、終了後順次取り上げることにした。

22日、141Yの炭化材出土状態の平板測量を行い、142・143Yは遺構の平板測量を終了する。

23日、141・142Yの遺構の平板測量を終了、24日には遺構の全体写真の撮影を終了する。その後、144Yについては、遺構の平板測量を行い、貯蔵穴の実測を終了する。

25日、141～144Yの掘り方の精査を開始し、同日にはすべての写真撮影・実測を完了する。



第79図 遺構分布図 (1/200)

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 住居跡

141号住居跡 (第80図)

〔住居構造〕143号住居跡に切られる。大部分が調査区域外にあるため、詳細は不明である。(壁高)23～30cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝)確認できる範囲では全周する。上幅8～16cm・下幅4～6cm、深さ4～7cmを測る。(床面)壁際を除いてよく硬化した床面を確認した。貼床は6～20cmの厚さを呈し、土層図の14～20層が相当する。(炉跡)西側の壁より80cm程離れたところに、炉であるかは不明であるが、床面がカリカリに焼けた部分を確認した。(柱穴)3本確認されたが、壁際の1本は後世のものと思われる。本住居跡に伴うと思われる1本は深さ48cm、残りの1本は貼床下からの検出で深さ47cmを測る。(覆土)12層に分層される。

〔遺物〕床面上及び覆土中から土器が出土した。

〔時期〕弥生時代後期末葉から古墳時代初頭。

〔所見〕壁際より炭化材が多く出土していることから、焼失住居と思われる。

141号住居跡出土遺物 (第84図1、第85図4～6)

壺形土器 (1・4)

1は現器高10.2cm、推定口径19.6cm。口縁部は幅広の複合口縁を呈し、その複合部と口唇部にはLRの単節斜縄文が施される。また、複合部には棒状浮文が約4cmの間隔を開けて付けられており、一周では推定で12個になるものと思われる。胎土には黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。調整は内外面ハケ目調整後へら磨き調整が施されるが、へら磨き調整の方向は内面が横方向で外面が縦方向である。赤彩は口縁部の複合部文様帯を除いた全面に施される。西壁近くの床面上からの出土で、口縁部から頸部にかけてを1/4程遺存する。

4は胴部付近の小破片である。外面には赤彩が施されるもので、内面は横方向のへらナデ、外面はハケ目調整後へら磨き調整が施される。胎土には黄褐色・茶褐色粒子を含む。覆土中から出土である。

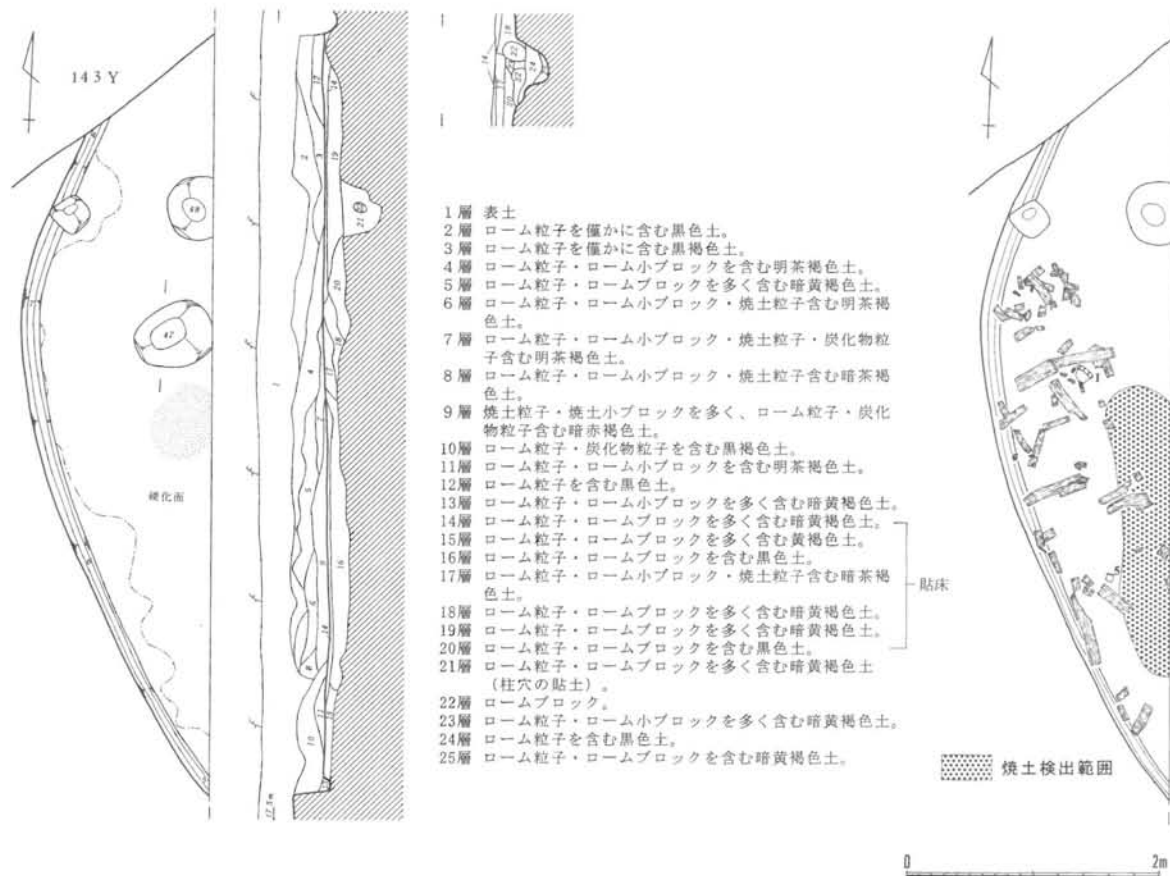
甕形土器（5・6）

5は口縁部小破片で、平坦に面取りされた口唇部の外面にはハケ状工具による刻み目が付される。内外面ハケ目調整が施される。色調は黒褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を僅かに含む。西壁近くのほぼ床面上からの出土である。

6は口縁部小破片で、口唇部外面には弱い押捺が施される。胎土には黄褐色粒子を僅かに含む。内面はハケ目調整、外面はへらナデが施される。覆土中からの出土である。

142号住居跡（第81図）

〔住居構造〕北東コーナーは調査区域外にあるものと考えられる。143号住居跡に切られる。（平面形）隅丸方形。（規模）不明×4.50m。（壁高）残りの良いところで41～45cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。



第80図 141号住居跡（1/60）

(壁溝) 西壁の中央付近で一部途切れるほかは、確認できる範囲では全周する。上幅12~20cm・下幅4~8cm・深さ4~11cmを測る。(床面) 壁際のごく一部を除き、よく硬化している。貼床が厚さ10~15cmで施されており、土層図の11~15層が相当する。(炉跡) 炉の半分は調査区域外にあると思われる。住居中央より北壁に偏って位置する。地床炉で、焼土の厚さは5cmを測る。壺の胴部を炉体土器として使用していたと思われる。(柱穴) 主柱穴4本のうち3本が確認できた。南側の2本は重複した形態を呈する。また、南壁中央付近にある小ピットは、入口梯子穴と思われる。(貯蔵穴) 南壁の南東コーナーに偏って位置し、平面形は隅丸長方形を呈し、規模は56×41cm・深さ36cmを測る。覆土は3層に分層され、土層図の8~10層が相当する。北側には、高さ3cm程の、弓状を呈する凸堤が巡っている。(覆土) 7層に分層される。

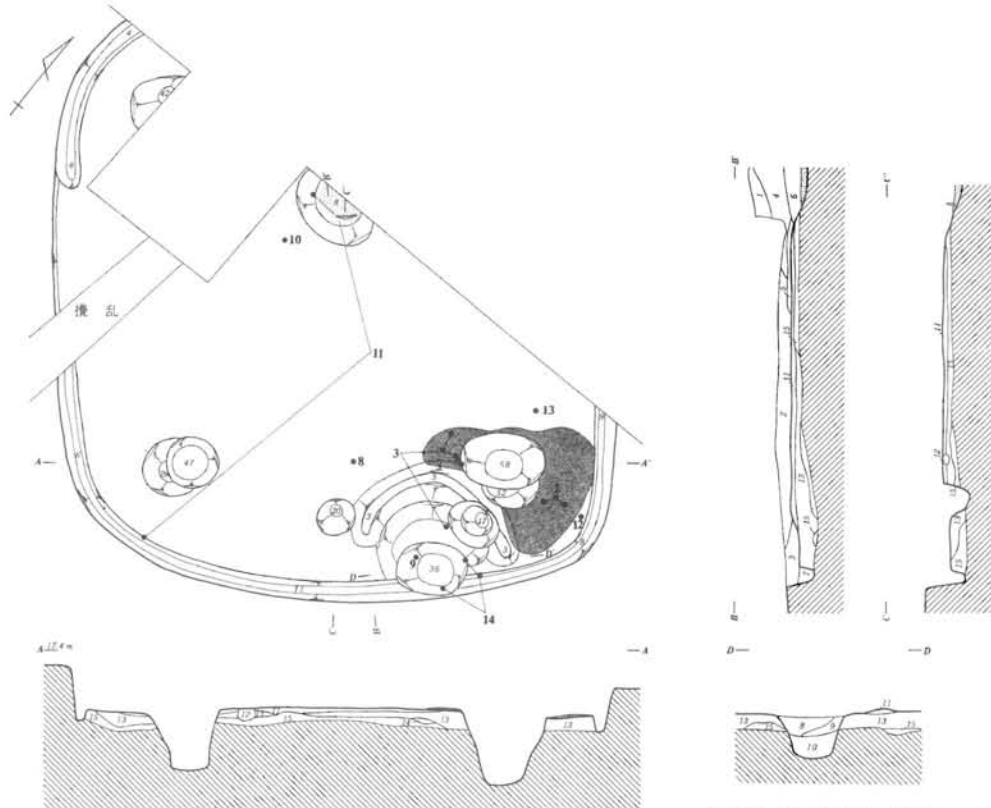
(遺物) 床面上及び覆土中から土器が出土した。

(時期) 弥生時代後期末葉から古墳時代初頭。

(所見) 南東コーナーに、赤色砂利層が3cm程の厚さで検出された。いわゆる祭壇状遺構と思われる。

142号住居跡出土遺物 (第84図2・3、第85図7~14)

器台形土器 (2)



赤色砂利層検出範囲

- 1層 ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。
- 2層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
- 3層 ローム粒子を含む黒褐色土。
- 4層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒色土。
- 5層 ローム粒子を僅かに含む暗茶褐色土。
- 6層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む明茶褐色土。
- 7層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
- 8層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。
- 9層 ローム粒子を含む黒褐色土。
- 10層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒色土。
- 11層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。
- 12層 ロームブロック。
- 13層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
- 14層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒色土。
- 15層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む黄褐色土。

貼床

0 2m

第81図 142号住居跡 (1/60)

現器高3.3cm、推定口径11.6cm。内湾気味に開く器受部である。内外面赤彩され、その後ていねいにヘラ磨き調整が施される。胎土には黄褐色粒子を多く含む。南東コーナーの赤色砂利層の直上からの出土で、器受部を1/2弱遺存する。

壺形土器（7～11）

7は口縁部の小破片で、口縁部内面には網目状撚糸文が施される。口唇部には赤彩が施され、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。覆土中からの出土である。

8は口縁複合部の小破片で、内外面にRL、口唇部にLRの単節斜縄文が施され、外面には円形赤彩文が付される。胎土には砂粒を僅かに含む。貯蔵穴近くの床面上6cm浮いた覆土中からの出土である。

9・10は頸部文様帯部分の小破片で、羽状の単節斜縄文が施される。9は貯蔵穴（10層）からの出土で、胎土には黄褐色・茶褐色粒子を僅かに含む。10は炉跡近くのほぼ床面上の出土で、外面無文部は赤彩され、胎土には黄褐色粒子を僅かに含む。

11は胴部上半の破片で、文様はLRの単節斜縄文の下端に4条1単位のS字状結節文が施される。また、単節斜縄文上には円形赤彩文が1ヶ所付され、外面無文部は赤彩される。胎土には黄褐色・茶褐色粒子を多く含む。炉跡に埋まっていたことから、炉体土器の一部と考えられる。

鉢形土器（12）

口縁部小破片である。口縁部は複合口縁を呈し、その上端と下端にはハケ状工具による刻み目が付される。胎土には黄褐色・茶褐色粒子を含む。内外面ヘラ磨き調整が施される。南東コーナーの床面上5cm浮いた覆土中からの出土である。

甕形土器（3・13・14）

3は台付甕の脚台部である。現器高6.5cm、推定口径11.4cm。胎土には砂粒を僅かに含み、内外面はヘラナデが施される。南東コーナーの赤色砂利層の直上からの出土で、脚台部を1/4程で遺存する。

13は口縁部小破片で、口唇部外面には刻み目が付される。胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。器面が摩耗しているが、ハケ目痕が僅かにみられる。南東コーナー近くのほぼ床面上からの出土である。

14は口縁部から胴部上半にかけての破片で、口縁部は「く」字状を呈する。口唇部外面には比較的細かい押捺が付され、胎土には黄褐色・橙色粒子を含む。外面及び口縁部内面はハケ目調整、内面は以下ヘラナデが施される。貯蔵穴上層とその付近からの出土である。

143号住居跡（第82図）

〔住居構造〕141・142号住居跡を切る。住居北東隅と南東隅の一部は調査区域外にあるものと考えられる。（平面形）隅丸長方形を呈する。（規模）6.42×5.66m。（壁高）13～25cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）確認できる範囲では全周する。上幅13～26cm・下幅6～12cm・深さ8～15cmを測る。（床面）南壁と東壁側に硬化した面が確認できたが、全体的には軟弱気味である。6～20cmの厚さで貼床が施されており、土層図の8～10層が相当する。（炉跡）住居中央に2ヶ所確認された。住居のほぼ中央に位置するものは、径43cmの円形を呈し、深さ9cmを測る。住居中央よりやや西壁に偏って位置するものは、径74×63cmの楕円形を呈し、深さ15cmを測る。（柱穴）支柱穴4本のうちの3本が確認できたが、北東コーナーの1本は調査区域外にあるものと思われる。北西コーナーの柱穴のみ3本の重複形態を呈している。（貯蔵穴）南東コーナーの深さ23cmの掘り込みのものが、貯蔵穴であろうか。覆土は上層がローム粒子を含む黒褐色土、中層が小砂利を含む黒褐色土、下層がローム粒子・ローム小ブロッ

クを多く含む明茶褐色土を基調とする。(覆土) 6層に分層される。

〔遺物〕床面上及び覆土中から土器の破片が散在的に出土した。

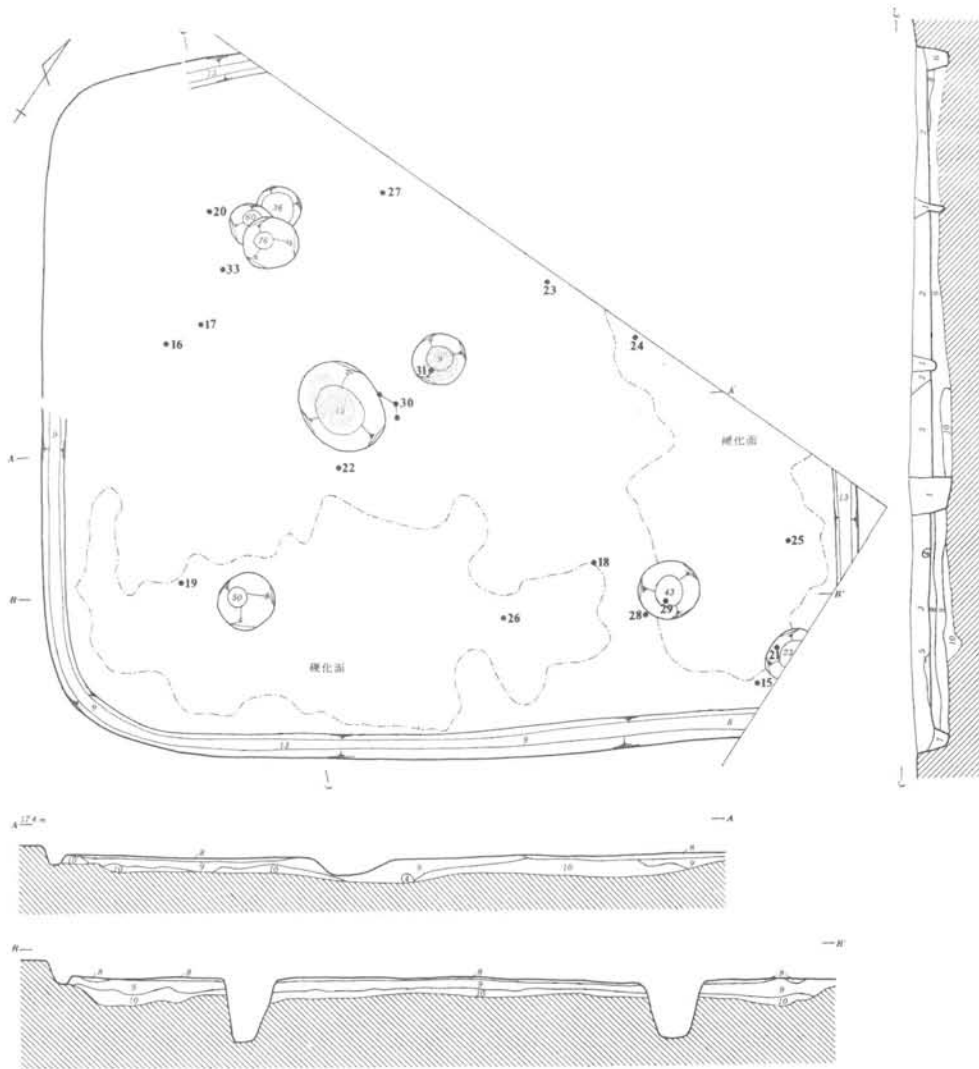
〔時期〕弥生時代後期末葉から古墳時代初頭。

〔所見〕33の土器が144号住居跡出土遺物と住居間での接合が可能になったことは注目される。

143号住居跡出土遺物 (第85図15~31)

壺形土器 (15~23)

15は口縁部小破片で、複合口縁の下端に刻み目が付される。複合部外面にはLR・RLの単節斜縄文が羽状に施され、内面はヘラ磨き後赤彩される。胎土には黄褐色粒子を含む。貯蔵穴近くの床面上からの出土である。



- 1層 攪乱。
 - 2層 ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。
 - 3層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。
 - 4層 ロームブロック。
 - 5層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。
 - 6層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
 - 7層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。
 - 8層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。
 - 9層 ローム粒子を含む黒色土。
 - 10層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。
- } 貼床

0 2m

第82図 143号住居跡 (1/60)

16は内外面ヘラ磨き調整が施される単純口縁を呈する口縁部小破片で、胎土には黄褐色粒子を含む。西壁近くの床面上12cm浮いた覆土中からの出土である。

17は端末結節縄文を伴うRLの単節斜縄文が施されるもので、無文部は赤彩されている。胎土には茶褐色粒子を含む。内面はヘラナデ後粗いヘラ磨き調整、外面はヘラ磨き調整が施される。西壁近くの床面上4cm浮いた覆土中からの出土である。

18はRLの単節斜縄文を施した後、下端に2条のS字結節縄文がまわるもので、無文部は赤彩されている。胎土には茶褐色粒子を含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ磨き調整が施される。南東コーナーの柱穴近くの床面上14cm浮いた覆土中からの出土である。

19はRL・LRの単節斜縄文が羽状に施されるもので、無文部は赤彩されている。胎土には茶褐色粒子を含み、内面はヘラナデが施される。南西コーナーの床面上からの出土である。

20・21は外面赤彩後に櫛描文が描かれる。20は8本1単位の波状文3段と直線文の直下に扇形文が描かれている。北西コーナーの床面上約7cm浮いた覆土中からの出土である。21は6・7本1単位の直線文と波状文が描かれている。胎土に黄褐色粒子を多く含み、貯蔵穴内からの出土である。

22・23は底部破片である。22の胎土には黄褐色・茶褐色粒子を多く含み、内面はヘラナデ、外面はハケ目調整後粗いヘラ磨き調整が施される。炉跡近くの床面上10cm浮いた覆土中からの出土である。23は底部に木葉痕を残し、胎土には黄褐色粒子を含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整後粗いヘラ磨き調整が施される。住居中央よりやや北側に寄った床面上19cm浮いた覆土中からの出土である。

高坏形土器 (24)

脚台部の破片で、裾部は弓状に外反する。内外面ハケ目調整が施されるが、内面はその後粗いヘラ磨き調整が施される。胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。住居中央よりやや北側に寄った床面上12cm浮いた覆土中からの出土である。

甕形土器 (25～31)

25・26は口縁部破片で、同一個体であろう。口唇部外面にはハケ状工具による刻み目が付される。胎土には砂粒を含む。内外面ハケ目調整後軽い横ナデが施されるが、内面にはその後粗いヘラ磨き調整が施される。25は南東コーナーのほぼ床面上、26は南壁寄りの床面上5cm浮いた覆土中からの出土である。

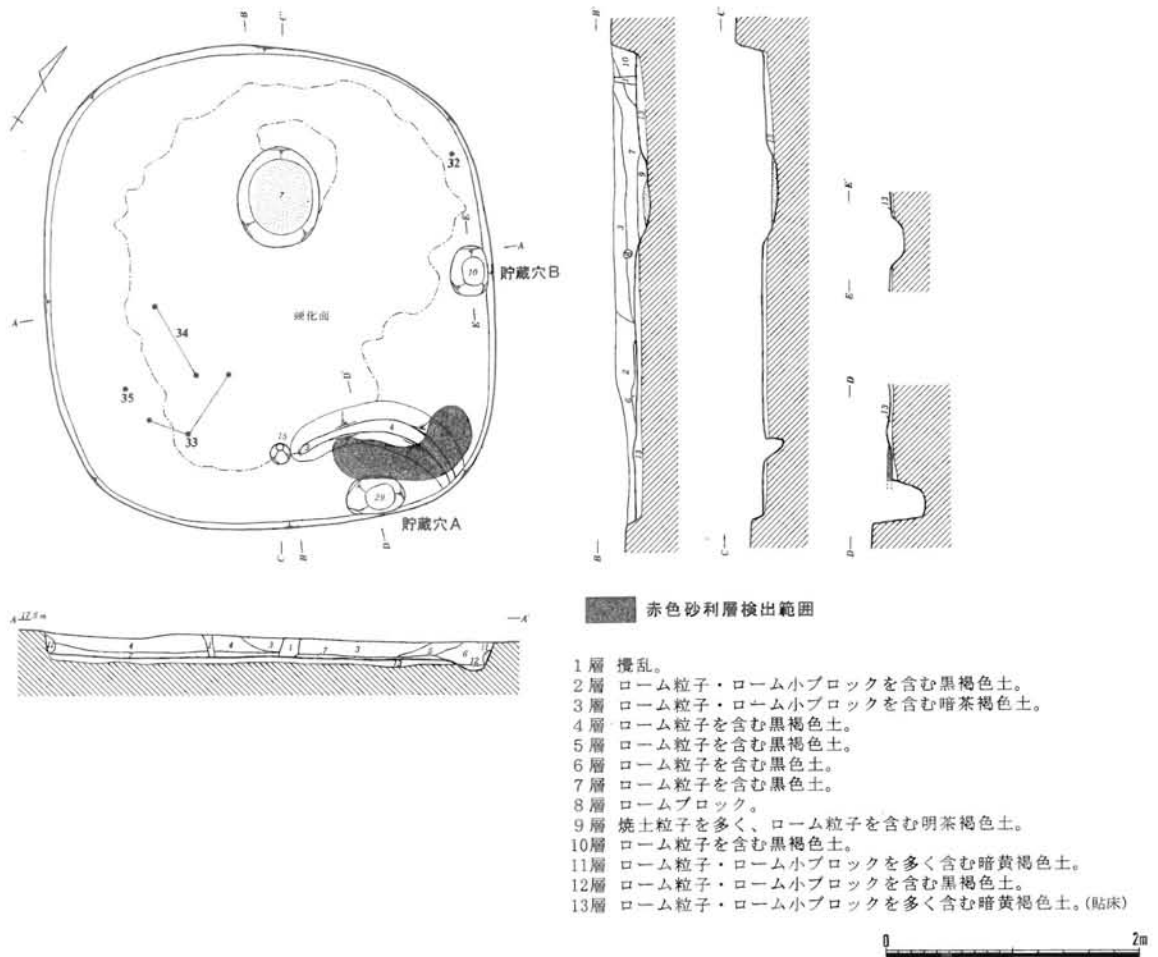
27・28は口唇部を欠く頸部破片である。27の内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施されるが、口縁部はその後軽い横ナデが施される。胎土には砂粒・小石を含む。住居中央よりやや北壁に寄った床面上7cm浮いた覆土中からの出土である。28の外面及び内面頸部はハケ目調整、内面は以下ヘラナデ。胎土には黄褐色粒子を含む。南東コーナーの柱穴近くの床面上4cm浮いた覆土中からの出土である。

29～31は台付甕の胴部下半の破片である。29の内面はヘラナデ、外面は目の粗いハケ目調整が施される。胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。南東コーナーの柱穴中からの出土である。30は脚台部との境界部に接合面が観察される。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。胎土には黄褐色粒子を僅かに含む。炉跡近くの床面上3～7cm浮いた覆土中からの出土である。31も30と同じ技法の接合面が観察される。外面及び内面下半はハケ目調整、内面上半はヘラナデが施される。胎土には砂粒を僅かに含む。住居のほぼ中央に位置する炉跡内からの出土である。

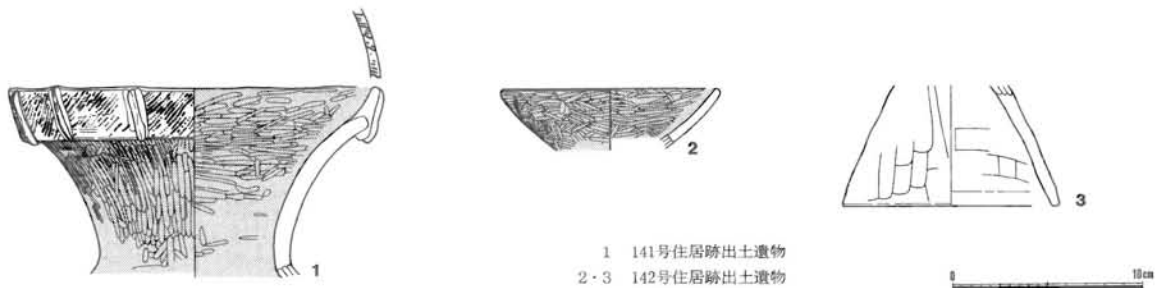
144号住居跡 (第83図)

〔住居構造〕(平面形) 隅丸長方形。(規模) 3.84×3.56m。(壁高) 9～20cmを測り、ほぼ垂直に立

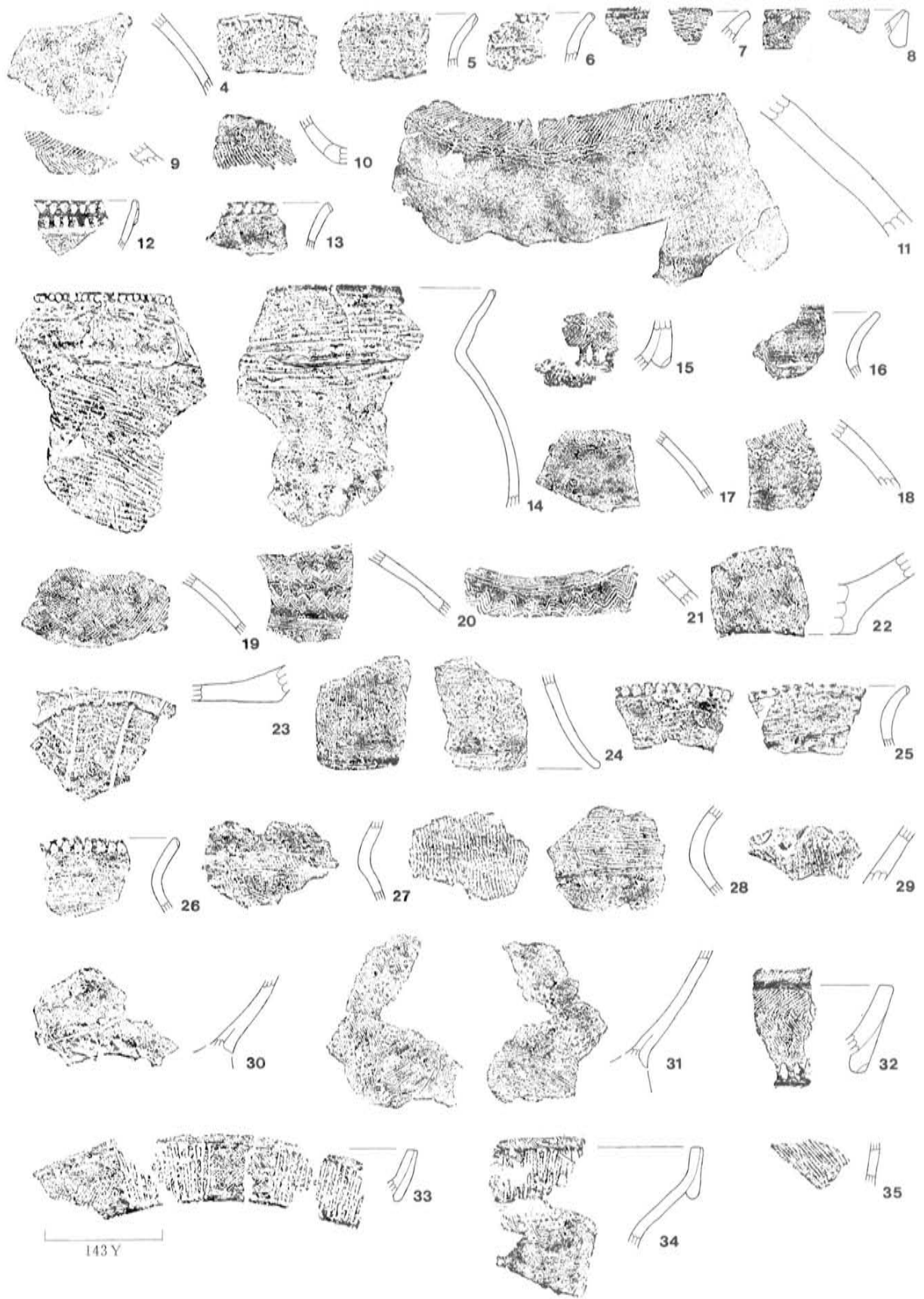
ち上がる。(壁溝) 確認できなかった。(床面) 炉跡の付近を中心に、壁際を除き良く硬化している。(炉跡) 住居中央よりやや北壁に偏って位置する。80×65cmの楕円形を呈し、深さは7cmを測る。(柱穴) 柱穴に相当するものは確認できなかったが、入口の梯子穴と思われる深さ15cmの小ピット1本が南壁寄りから検出された。(貯蔵穴) 南東コーナーのものが該当すると考えられるが、ここでは東壁中央に接するものも貯蔵穴として取り扱った。前者を〈貯蔵穴A〉、後者を〈貯蔵穴B〉とする。〈貯蔵穴A〉48×29cmの楕円形を呈し、深さは29cmを測る。北側には幅28~38cm・高さ4cmの弓状を呈する凸堤が巡っている。覆土はローム粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。〈貯蔵穴B〉40×30cmの楕円形を呈し、深さは10cmを測る。覆土はローム粒子・ロームブロックを含む黒褐色土を基調とする。(覆土) 11層に分層される。



第83図 144号住居跡 (1/60)



第84図 住居跡出土遺物1 (1/4)



4~6 141号住居跡出土遺物
7~14 142号住居跡出土遺物

15~31 143号住居跡出土遺物
32~35 144号住居跡出土遺物

第85図 住居跡出土遺物2 (1/3)

〔遺物〕 土器小破片が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期末葉から古墳時代初頭。

〔所見〕 南東コーナーから赤色砂利層が4 cm程の厚さで検出された。いわゆる祭壇状遺構と思われる。また、33の土器が143号住居跡出土遺物と住居間での接合が可能になったことは注目される。

144号住居跡出土遺物（第85図32～35）

壺形土器（32～34）

32は幅広の複合口縁を呈する口縁部小破片である。下端に刻み目を付す複合部には端末結節文を伴う単節斜縄文が3段羽状に施され、口唇部にもLRの単節斜縄文がまわる。内面は赤彩後へう磨き調整が施される。東壁近くの床面上7 cm浮いた覆土中からの出土である。

33は住居間接合が可能になった土器で、拓本右端の破片が143号住居跡出土のものである。幅広の複合口縁を呈する口縁部破片で、口唇部にはRLの単節斜縄文が施され、複合部には2段の単節斜縄文を羽状に施し地文とし、その後14・17本を1単位とした縦位沈線文が描かれる。赤彩は内面と複合部の縄文施文部に観察される。胎土には黄褐色粒子を多く含み、内面はへう磨き調整が施される。南西コーナー近くの床面上2～10cmの範囲の覆土中からの出土である。143号住居跡出土は北西コーナーの柱穴近くのはぼ床面上からの出土である。34は33の土器と同一個体で、口縁部から頸部にかけての破片である。南西コーナー近くの床面上からの出土である。

甕形土器（35）

胴部小破片で、胎土には黄褐色粒子を多く含む。内面はへう磨き調整が施される。南西コーナーの床面上からの出土である。

（2）遺構外出土遺物（第86図）

縄文時代の土器が検出されている。時代的には前期～後期にかけての土器であり、1～4群に分類された。

第1群 土器前期後葉の諸磯式土器（1）

半截竹管により直線的な文様が描かれている。色調は黒褐色を呈し、胎土には金雲母・砂粒を含む。

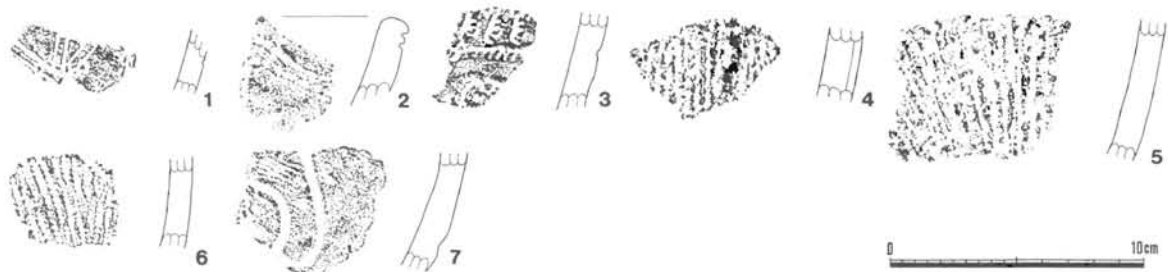
第2群 土器中期前葉の阿玉台式土器（2・3）

2は口縁部小破片である。口縁部は波状口縁を呈し、文様は半截竹管による2本の結節沈線で描かれている。胎土には金雲母を多く含む。

3は隆帯に沿って角押文が施され、その他は半截竹管による結節沈線や刺突文が描かれる。

第3群 土器中期後葉の加曾利E式土器（4～6）

いずれも胴部小破片で、4は撚糸文を地文とし、蛇行する隆帯による懸垂文が描かれている。



第86図 遺構外出土遺物（1/3）

5は地文の条線が縦位に施される。6は地文としてLRの単節斜縄文が施される。

第4群 土器後期前葉の称名寺式土器(7)

帯縄文によってJ字文が描かれており、J字文は沈線区画内にRLの単節斜縄文が充填されている。

[参 考 文 献]

- 小久保 徹・宮野和明他 1984『志木市史 原始・古代資料編』志木市史編さん室
- 佐々木保俊 1989「第5章 西原大塚遺跡第6地点の調査」『志木市遺跡群Ⅰ』志木市の文化財第13集
1991「第2章 西原大塚遺跡第11地点の調査」『志木市遺跡群Ⅲ』志木市の文化財第16集
1996「第4章 西原大塚遺跡第14地点の調査」志木市の文化財第24集
1996「第11章 西原大塚遺跡第21地点の調査」志木市の文化財第24集
1997「第8章 西原大塚遺跡第34地点の調査」『志木市遺跡群Ⅳ』志木市の文化財第25集
1998『西原大塚の遺跡 西原特定土地区画整理組合事業に伴う発掘調査概報』志木市遺跡調査会 西原特定土地区画整理組合
- 佐々木保俊・尾形則敏 1985「西原大塚遺跡第3地点の調査」『西原大塚遺跡第3地点 中野遺跡第2地点発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第1集
1987「第Ⅱ章 西原大塚遺跡第4地点の調査」『新邸遺跡第2地点 西原大塚遺跡第4地点発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第3集
1990「第2章 西原大塚遺跡第8地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集
1990「第5章 西原大塚遺跡第10地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集
- 尾形則敏 1990「第9章 西原大塚遺跡第8地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集
- 谷井 彪・宮野和明他 1975『西原・大塚遺跡発掘調査報告』志木市の文化財第4集

第11章 まとめ

ここでは、以下の3項目について、若干のまとめを行うものとする。

1. 城山遺跡第34地点の125～127号住居跡について

本地点からは3軒の住居跡が検出されているが、いずれも古墳時代後期に比定されるものである。住居跡はそれぞれ重複しており、その切り合いから、3軒の住居跡の新旧関係は127H→125H→126Hであることが判明した。これらの住居跡は、それぞれ6世紀前葉、6世紀末葉、7世紀後葉という時期の近接したもの同士の切り合いであるため、土器編年の視点から考えると細かな土器の変化が層位的に立証された貴重な資料であると評価できよう。以下、坏形土器を中心に時代順にその特徴を見てみることにする。

〈I期〉6世紀前葉…127号住居跡

本住居跡からは、土師器坏形土器3点と須恵器器台形土器1点が出土した。

1は推定口径11.2cm、2は推定口径12.7cmを測り、両者は口縁部がツンと短く外反し、底部から体部にかけては塊状を呈し、外面はヘラ磨き調整により光沢をもつ土器である。これらは、口径13cm未満のいわゆる「比企型坏」の初現段階に該当する土器と考えられる。

いわゆる「比企型坏」については、水口由紀子氏の研究成果（水口 1989a）があるが、これによると、1・2の土器はI段階（5世紀末～6世紀前半）の域を出ることはないものと考えられる。ただ、水口氏はI段階の特徴として、土器の法量の基準を口径14cm前後に規定しているが、埼玉県坂戸市桑原遺跡を分析した村田健二氏は、I-1期（5世紀第4四半期後半～6世紀初頭）については、「この段階から、棚田SJ4-4のような大型（径14.5cm）製品が認められ、一般型（径12.0cm）を含め当初から法量差の異なる2種が存在していたことが理解できる。用途別に意識して製作されたものであろう。」（村田 1992）として、比企型坏出現当初において、すでに用途による使い分けが行われていたとする見解に注目される。この大型製品と同類ものは、志木市中野遺跡第2地点3号住居跡からも1点確認されているが、この出自については、今後の資料の増加を待って検討したものと考えている。現段階では、比企型坏の出現当初の土器の法量は、本資料のような口径13cm未満の比較的中小型のものが標準であるものと考えたい。

3の土器については、口径14.6cmを測る大型の有段坏である。この土器の第一の特徴としては、前述した1・2の比企型坏の胎土・調整等に非常に類似しているものと指摘できる。こうした特徴をもつ土器は、当市では、城山遺跡23・24・51・66号住居跡から出土している。また、最近では隣市の朝霞市大瀬戸遺跡第1号住居跡（渡辺 1996）からも、こうした比企型坏と胎土・調整が類似する大型の有段坏2点が、TK10段階の須恵器と共伴しており、時期を決定する上で注目に値する。およそ、6世紀中頃に比定できるであろう。しかし、大瀬戸遺跡のものと本例の3の土器を比較してみると、大きな相違は、口縁部の開き具合にある。前者は大きく外反・外傾するが、後者は直立気味で大きく開かない。さらに、口唇部内面直下には沈線がまわるといふ特徴を加味すると、3の土器は、MT15段階の須恵器坏蓋を忠実に模倣している土器と言えることができる。

有段坏の大型化について、水口氏は、「須恵器の拡大に呼応し、土師器坏・塊類の口径も15～16cmと

大きい。I 段階に比べ、口径に対して器高が低くなる。」段階をII 段階（6 世紀後半）に比定している（水口 1989b）。しかし、もし須恵器の拡大に呼応するのであれば、陶邑編年でいうTK10・TK43 段階より前のMT15 段階に大型化の傾向がみられるはずである。千葉県君津郡袖ヶ浦町大竹古墳群第4 号墳（田形他 1991）からは、MT15 段階の須恵器甕と大型化した有段坏が、蓋と身のセットで出土している。このことから、有段坏の大型化は、須恵器の大型化よりも半世紀も遅れて顕現するのではなく、須恵器の大型化の時期と連動している可能性がある。つまり、MT15 段階の須恵器の大型化の時期は、同時に土師器坏の大型化の時期でもあるとすることができるのである。

以上、1～3 の坏形土器については、まず1・2 の比企型坏から、大まかに5 世紀末～6 世紀初頭に比定することができるが、3 の大型有段坏から、須恵器の大型化が顕現するMT15 段階の6 世紀第1 四半期に比定することが可能であると言える。そして、同時に1～3 の土器は、胎土・調整等の類似から同一場所で製作されたものであり、その場所の特定には比企型坏の中心地が深く関係したものと考えられる。

〈II 期〉6 世紀末葉…125号住居跡

本住居跡からは、土師器坏形土器4 点、土師器甕形土器4 点、土師器甕形土器1 点、須恵器坏蓋1 点、須恵器器台形土器1 点、須恵器形土器1 点、須恵器甕形土器1 点が出土した。ここでは、土師器坏形土器である1・2 のいわゆる「比企型坏」について触れることにする。

1 は器高5.0cm、推定口径13.4cm、2 は器高3.4cm、推定口径13.7cmを測り、両者は口径ではほぼ同値であるのに対し、器高では大きく異なることがわかる。また、共通して、口唇部内面直下には沈線がみられないことも特徴であろう。

埼玉県坂戸市稲荷前遺跡の分析を行なった富田和夫氏によると、1 の土器は「前代の主系列である比企型坏A1a」に分類される（富田 1992）。これについては、口唇部内面に沈線をもたず、口縁部が内屈する特徴の土器で、I 期（6 世紀末葉）に該当するものである。2 の土器については該当するものはない。

そこで、水口氏は、2 の土器を含め、こうした2 者の特徴をもつ土器について、III 段階（6 世紀末～7 世紀初頭）の第2 小期に「口径13cm 台のものが中心で、器高のさらに低いものが加わる。」としている。第3 小期の「口唇部内側に沈線がめぐるものでてくる」段階以前の特徴であることが理解できる。以上、1・2 の比企型坏の特徴は、大きく1 の土器が前段階の特徴である深身のものを踏襲しながらも、体部上半に稜をもつものに変化したもので、2 の土器は扁平なものに変化したものの、口径値そして体部には稜が出現していないという塊状の基本形は前段階の特徴を受け継いでいるものと読み取ることができる。これらの土器群は、器形的にも不安定さを基本とするが、前段階の延長上にあり、成形・調整技法の点でも外面にヘラ磨きが施されるということで、多少の退化傾向を指摘することができるが、連続する一群の中で理解が可能である。

しかし、次段階に主流となる口唇部内面に沈線をもつ土器群については、頸部に明瞭な稜が形成され、赤彩の範囲が内面及び口縁部外面に施されることや調整技法では底部外面にヘラ削り痕が顕著に残るなど、1・2 の土器と比べ、大きな変化と定型化の現象が生じている。中でも前段階で必ず行われていたヘラ磨き調整が省略され、ヘラ削り痕が顕著に残るという特徴は、製作上、一工程の省略を意味するものである。これは、つまり、土器の量産化を裏付けるものであろう。

このことから、富田氏が「前代の主系列」とする土器は、実は次段階で量産化された口縁部内面直下

に沈線をもつ土器群に控える一過性の強い土器であるものと考えられる。そして、これらの土器群は、以後その主流から外れ、7世紀の前半には姿を消すことになる。さらに、このことは、富田氏が、いわゆる「比企型坏」が「Ⅲ乃至Ⅳ期をもって型式的連続性は解体してしまう。だが、その後も胎土・色調・成形技法とも何ら変わらない土器群が存続するのも事実」とし、「続比企型坏」と類例化しているが、「連続性の解体」なる現象は、ある意味では、製品としての真価を問われる取捨選択とも言えることができ、こうした動向は、すでに7世紀に入る前の段階に行われていたものと想像することができる。つまり、比企型坏の本格的な操業は、7世紀前半の段階に口縁部内面に沈線をもつ土器をもって開始されたとも言えるのである。

〈Ⅲ期〉7世紀後葉…126号住居跡

本住居跡からは、土師器坏形土器3点、須恵器坏蓋1点、須恵器坏身1点、土師器甑形土器1点、土師器甕形土器1点が出土した。

まず、土師器坏形土器3は、いわゆる「比企型坏」である。その主たる特徴は口径10.2cmを測り、坏形土器では最も小型化した段階のものと言うことができる。

須恵器坏身・坏蓋については、小破片であるため、全形を知ることができないが、様相としては、坏身・蓋ともに小型化した傾向が看守でき、3の土器同様に最も小型化した段階のものとする事ができる。つまり、陶邑編年では、Ⅱ型式6段階、TK217段階に比定することが可能である。

以下、比企型坏と須恵器が、最も小型化した段階の土器について考えてみることにする。

比企型坏については、水口氏が、Ⅳ段階（7世紀中頃を中心とする時期）を「10cm台のものが中心となる段階と、11cm台のものが中心となる段階の、二つの小期に区分することが可能である。」ということから、最も小型化が進んだ段階をⅣ段階第2小期に比定することができる。富田氏は、稲荷前遺跡の報告中、「小型化が最も進んだ段階」をⅣ期とし、「須恵器供膳器が最も小振りとなる時期から立野遺跡に示されるやや口径の拡大した坏・蓋類を含む段階」に対応させ、7世紀3/4～4/4期にかけての年代を与えている。富田氏のこのような見解は以前、「今井G2住・八幡A1住→今井G5住→立野南2住」の土器の変遷を捉え、「今井G2住と八幡A1住では所謂『逆転期』前の坏A、蓋Aが伴い、その限りにおいては飛鳥Ⅱの器種構成といえるが既に主体は坏B、蓋Bに移行しており、飛鳥Ⅲの様相に近い」とし、「前期難波宮整地層及びその下層出土土器の関係から7世紀第3四半期に考えてよかろう。」に根底があるものである。そして、こうした富田氏の考えを支える上で、白石太一郎氏の一連の研究は重要である。白石氏は「前期難波宮の整地層ないしその下層から検出される須恵器・土師器が、大部分飛鳥Ⅰから飛鳥Ⅱでも比較的古い型式のものにかざられる」とし、「飛鳥Ⅱの暦年代を総合的に再検討すると、その暦年代を7世紀の中葉以前におさえ込むことは困難なのであって、640-670年頃に下げて考えざるをえない」と結論付けたのである。

木對和紀氏は千葉県市原市椎津茶ノ木遺跡の報告中、「飛鳥Ⅱに比定され、少なくともTK217型式期の新古の二段階に細分し得る川原寺下層及び前期難波宮整地下層ないし朝堂院東回廊出土の須恵器の新段階のものが7世紀中葉から第3四半期の前年代にそれぞれ比定することが可能であろう。」（木對 1993）としている。

以上から推測すると、飛鳥Ⅱ～飛鳥Ⅲの様相が陶邑編年では、中村編年のⅡ型式6段階～Ⅲ型式1段階、田辺編年のTK217段階に相当するものと考えられ、最近では、飛鳥Ⅱ・TK217段階の下限が7世紀後半にまで下って比定される傾向にあるように理解できる。これにより、本住居跡出土の比企型坏・

須恵器は、以上のような須恵器の研究から、7世紀後葉に比定することができる。

2. 田子山遺跡第48地点の53号住居跡出土土器の時期について

本住居跡からは、土師器坏形土器9点と土師器甕形土器5点が出土した。以下、本住居跡出土土器の時期について考えることにする。

坏形土器

坏形土器は、大きく以下のとおりに分類することができる。

A類 いわゆる「比企型坏」である(3・4)。

B類 いわゆる「続比企型坏」で、全体に塊状を呈するもの(5～7)。

1 口径11cm前後のもの(5・6)。

2 口径12cm前後で、やや深身のもの(7)。

C類 有段坏の系譜にあるもの(1・2・9)

1 口径10cm未満のもの(1・2)。

2 口径13cm未満のもの(9)。

D類 粗雑品(8)。

まず、A類については、内面及び口縁部外面に赤彩が施され、内面口唇部に沈線がまわる口径11cmを測るもので、いわゆる「比企型坏」に相当する。特に、ここで口径11cmの数値に着目すると、水口編年のIV段階「11cm台のものが中心となる段階」に比定することができる。実年代については、7世紀中頃を中心とする時期が与えられる(水口 1989)。

B類については、富田氏が稲荷前遺跡の報告中、「坏C」に分類した「小型の深塊風の形態」に相当するものである。「続比企型坏」は、富田氏によって提唱されたもので、「水口氏の言う『比企型坏』消滅する段階の土器群、具体的には坏B2類・C・D類と皿A～C類を主要構成器種とする坏類」とした土器群に対してを規定している。そして、その出現時期をIV期(7世紀3/4～4/4期)の段階としている(富田 1992)。つまり、本稿のA類についても、富田氏によれば、それは坏B2類に相当し、「続比企型坏」の範疇で捉えられものである。しかし、本稿では、敢えて「続比企型坏」を使用する場合は、本稿B類のみを規定することにしたいと考えている。それは、富田氏が「胎土・色調・成形技法とも何ら変わらない土器群」とした土器に比べ、余りにも本稿B類は、様相を異にするからである。特に、以下の2点について触れて置きたい。

① 口縁部の形態が、S字状に屈曲するもの、須恵器坏蓋に類似するものの二者に含まれない。形態は全体的に底部から口縁部にかけて、塊状を呈するものである。これについては、飛鳥Ⅱ・Ⅲとする暗文土器の出現が最近の須恵器の研究から、7世紀後半に比定され、本類の出現時期とほぼ同時であることと両者の形態が塊状を呈するという共通点から、本類についても金属器の影響下で製作された土器であるものと考えられる。

② 本類の5・6の内面底部には左回りの渦巻き状の成形痕が観察されることから、明らかにA類やその他の比企型坏には見られない特徴である。これについては、回転台の利用が考えられる。

筆者は、以前に「城山遺跡における有段坏について」の中で、口唇部内面の沈線に着目し、「比企型坏の生産を軌道にのせた主体者は、以前に模倣坏あるいは須恵器の製作に何らかの関係で携わっていたものと想定できよう」と述べたことがある(尾形 1991)。つまり、比企型坏自体の定型化した土器の

誕生が、元来須恵器の影響下で製作されたものであるならば、「鬼高系模倣坏の影響を多分に受けた」とする坏B2類を含め、富田氏が土器群で捉えたすべてを「続比企型坏」に規定するには、やや問題があるように考えられる。そのため、私見としては、「続比企型坏」を使用する場合は、金属器の影響下で製作されたであろう本稿B類とした土器に限定したいものと考えている。また、本稿A類のような須恵器あるいは模倣坏の影響下で製作されたものについては、「続比企型坏」とは区別し、依然「比企型坏」の範疇で理解したいものと考えている。

C類については、口縁部と底部との境に段を有することから、有段坏の系譜にあるものと考えられる。これについて、赤熊浩一氏が、「須恵器模倣坏の系譜を引くもの」と規定した（赤熊 1985）土器に共通するものである。この土器については、「真間式土器の成立」とした「坏B I～B IIIの存在」の中でも存在することが確認されており、具体的には「立野南2住」の段階（7世紀末葉～8世紀初頭）まで確実に存在するものと考えられる。

甕形土器

甕形土器については、特に全形を知り得る14の土器について触れることにする。この土器については、筆者が志木市田子山遺跡17号住居跡出土の甕形土器を1～4類に分類しているが、その中で3類「最大径を口縁部に測り、胴部は直線的であるが、上半にやや膨らみをもつ」に相当するものである。そして、「城山遺跡では類例がないため、城山遺跡の時期より後出のタイプのもの」としている（尾形 1996）が、現在、城山編年の再編成の時期でもあり、今後の課題になるが、城山編年最新のVII期は、7世紀後半まで下る可能性がある。

以上、本住居跡出土土器は、まず、坏形土器のA類が口径11cmを測り、まだ後出段階の特徴である口径10cm以下にはならないことから、須恵器坏形土器が最小化する陶邑編年のTK217段階以前である可能性があるものと考えられる。しかし、B類の出現や甕形土器の特徴から総合すると、本住居跡出土土器は、大まかに7世紀後半以降に比定するのが妥当であろう。

そして、ここで重要なことは、A類とした口径11cm代の比企型坏は、依然7世紀後半まで存在することである。大まかに、比企型坏の小型化の傾向は、7世紀前半の口径13cmを基準に、序々に口径12cm・11cm・10cmと小型化し、その最小化のピークが陶邑編年のTK217段階であると考えられるが、その実態は、1cm前後という僅かな単位での差の土器が、それぞれ個々に年代幅をもち、厳密には一線を引くことができない状況にあるものである。現在考えているその年代幅の大枠は、100年を5段階区分した2期（40年間）で、口径13cmのものは7世紀1・2段階、口径12cmのものは7世紀2・3段階、口径11cmのものは7世紀3・4段階、口径10cmあるいはそれ以下のものは7世紀4段階以降に比定でき、それぞれ1期（20年間）分の併存期間が存在するものと推測する。

3. 城山遺跡第35地点の鑄造関連遺構の歴史的背景について

今回検出された鑄造遺構は、鑄造土坑と溶解炉からなるものであった。ここで鑄造された製品は、多量の鉄滓が検出されていることから、主に鉄製品であったと考えられる。しかし、多量の鑄型が検出されているにもかかわらず、鑄型が細片であったため、鑄造された製品の実態を把握することはできなかった。ただし、鉄釜の鏝と考えられる製品と金具類（第74図57）の鑄型が検出されていることから、鉄釜や金具類が製作されていたものと考えられる。

遺構の性格としては、130号土坑が鑄造土坑、134号土坑が溶解炉と考えられる。また、鑄型と鉄滓は

主に調査区南東コーナー部に集中して認められ、この周辺で製品が鋳型から外されたか、鋳型の廃棄場となっていたためと考えられる。この周辺が工房址であったからであろう。しかし、今回の調査は小面積であったため、工房の広がりをつかえることはできなかった。

溶解炉は確認面から約50cm、鋳造土坑もほぼ同程度の掘り込みが認められる。従来検出されている梵鐘等の溶解炉や鋳造関連遺構が地表面に近い部分に造作されていることを考えると、これらの遺構は少し特異な状態と言えるのではないだろうか。このような構造上の問題については、近世期の同種の遺構の増加を待っての検討が必要であろう。

また、132号土坑からは鉄製品と組み合わせて使用したと考えられる銅製品が検出されている。このことから推測すると銅製品を他所にて鋳造し運搬したと考えるよりも当所にて鋳造したと考える方が妥当であろう。さらには、鉄製品と銅製品を同一の遺構で鋳造したと考えづらいため、当遺跡の近傍には銅製品の鋳造遺構が存在していた可能性も指摘される。

鋳造遺構の実年代の上限は、130号土坑から検出されている瀬戸製鉄釉丸碗や唐津系陶器の年代観から17世紀中頃を遡らないものと考えられる。下限は丸碗に施された研磨痕から、丸碗が鋳造用の道具として利用された可能性があり、また、鋳造関連と考えられる遺構から検出される陶磁器の年代観が17世紀後半までのものであることから、17世紀代におさまるものと考えられる。あるいは、一回の鋳造によるような短期間の遺構であったのかもしれない。

現在まで実施されてきた城山遺跡（柏城跡）の調査では、検出された中世の遺物のうち最も古いものが14世紀代、新しいもので17世紀初頭のものであり、仮にこの年代幅が城山に城館跡が置かれていた時代であるとするならば、今回検出された鋳造遺構は柏城跡の消滅後に設置されたものとなる。中世末期に位置付けられる柏城においては、城内に工人集団を置いていたことは十分に予想されるところである。

これは、当鋳造遺構の歴史的位置付けを考える上で重要な要素となる。当遺跡は、城山遺跡の三の郭内に位置している。当然、工人集団が配置されていても当然と考えられる位置にあたる。

前記のとおり今回検出された鋳造遺構は、近世期のものと考えられ、柏城の年代と合致するわけではない。しかし、歴史的位置付けの問題として、これらの遺構を中世からの流れの中に位置付けるのか、近世の館村の中に新たに現われたものなのかを考案していくことが、今後の大きな課題の一つとなるものであろうと考えられ。

現に三の郭の調査時に1号溝内からは、ふいごの羽口が数点出土している。この溝跡の埋没年代には、中世末から近世期までの幅が認められることから、その羽口の年代を確定することはできないが、少なくとも中世末から近世前半ごろに柏城（跡地）内で鋳造が行われていた状況は想定されるところである。

今後は、このような状況を含み、中～近世期の柏城地域の歴史的景観の復元を行うことも志木市の歴史を知るための課題となろう。

[引用・参考文献]

- 赤熊浩一・富田和夫他 1985『立野南・八幡太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集
- 尾形則敏 1991「第6章 城山遺跡第6地点」『西原大塚遺跡第7地点 新邸遺跡第3地点 中野遺跡第7地点 中野遺跡第8地点 城山遺跡第6地点発掘調査報告書』志木市の文化財第15集 埼玉県志木市教育委員会
- 1996「第10章 田子山遺跡第13地点」『城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点発掘調査報告書』志木市の文化財第24集 埼玉県志木市教育委員会
- 木對和紀 1993「縦穴住居の耐久年数からみた房総における古墳時代須恵器の出現と終焉」『市原市文化財センター研究紀要Ⅱ』財団法人市原市文化財センター
- 佐々木保俊・尾形則敏 1988『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第4集
- 白石太一郎 1982『畿内における古墳の終末』国立歴史民族博物館研究報告第1集
- 1985「8年代決定論(二) - 弥生時代以降の年代決定 -」『岩波講座日本考古学1』
- 田形孝一・藤岡孝司・能城秀喜 1991『筑田遺跡・三ツ田台遺跡・大竹古墳群』君津都市文化財センター発掘調査報告書第61集
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯跡群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
- 富田和夫 1992『稻荷前遺跡(A区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第120集
- 中村 浩 1981『和泉陶邑の研究』柏書房
- 水口由紀子 1989a「いわゆる“比企型坏”の再検討」『東京考古』第7号
- 1989b「古墳時代における土師器の一分析」『東国土器研究』第2号 東国土器研究会
- 村田健二 1992『桑原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第121集
- 渡辺邦仁 1996『大瀬戸遺跡第6・7地点発掘調査報告書』朝霞市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集 朝霞市教育委員会 朝霞市遺跡調査会

[付 編]

自 然 科 学 分 析

I. 富士前遺跡第15地点の1号住居跡出土炭化材の樹種同定

植田弥生 (パレオ・ラボ)

1. 樹種同定の方法

まず、炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で分類群のおおよその目安をたてる。次に横断面だけでは同定できない試料(アカガシ亜属・コナラ節・クヌギ節・クリ以外)については、3方向の破断面の組織を走査電子顕微鏡で観察し同定を決定する。またコナラ節やクヌギ節などでも、年輪幅の狭いぬか目や逆に年輪幅の広い試料などは実体顕微鏡下では誤同定の恐れがあるので、このような試料については走査電子顕微鏡で確認した。走査電子顕微鏡用の試料は、横断面の他に、接線断面(板目)と放射断面(柾目)は片刃の剃刀を各方向に沿って軽くあて弾くように割り平滑面を出す。この3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

2. 結果

貯穴から採取された炭化材2点(1・2)は、クリとクヌギ節であった。いずれも果実が食用となる樹種であり、貯穴から出土した点からも貯蔵との関連性が推測される。

産状から住居材の一部と考えられる炭化材26点は、コナラ節が2点、クリが2点、クヌギ節が21点、保存状態が悪く微破片で同定できなかった広葉樹1点であった(第2表)。

縄文時代では全国的にクリが住居材として多用されたが、弥生時代になるとコナラ節とクヌギ節を含むコナラ亜属の利用に変化することが指摘されている。当遺跡の結果もまさにその時代性を反映している結果であった。産状から、コナラ節2点とクリ2点はそれぞれ近い位置で出土していたことから、クヌギ節とは異なる用途や補助的に使用されていたのかも知れない(第87図)。またすべての試料で観察できたわけではないが、比較的年輪幅が広く成長のよい材が目についた。

以下に同定された樹種の材組織を記載する。

コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus subgen. Quercus sect. Prinus* ブナ科 図版26 1a, -1c. (No.10)年輪の始めに中型の管孔が配列し徐々に径を減じ、晩材部では薄壁・角形で小型の管孔が火炎状・放射方向に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にチロースがある。放射組織は単列のものと複合状のものがある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木で、カシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。材は、加工はややしにくく乾燥すると割れや狂いが出やすい。人里近くに普通の樹種で入手しやすいこともあり利用頻度は高い樹種である。

コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Q. subgen. Quercus sect. Cerris* ブナ科 図版26 2a. -2c. (No.14)年輪の始めに中型の管孔が配列し徐々に径を減じ、その後小型・厚壁の管孔が単独で放射方向に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、チロースがある。放射組織は同性、単列のもの複合状があり、道管との壁孔は柵状である。

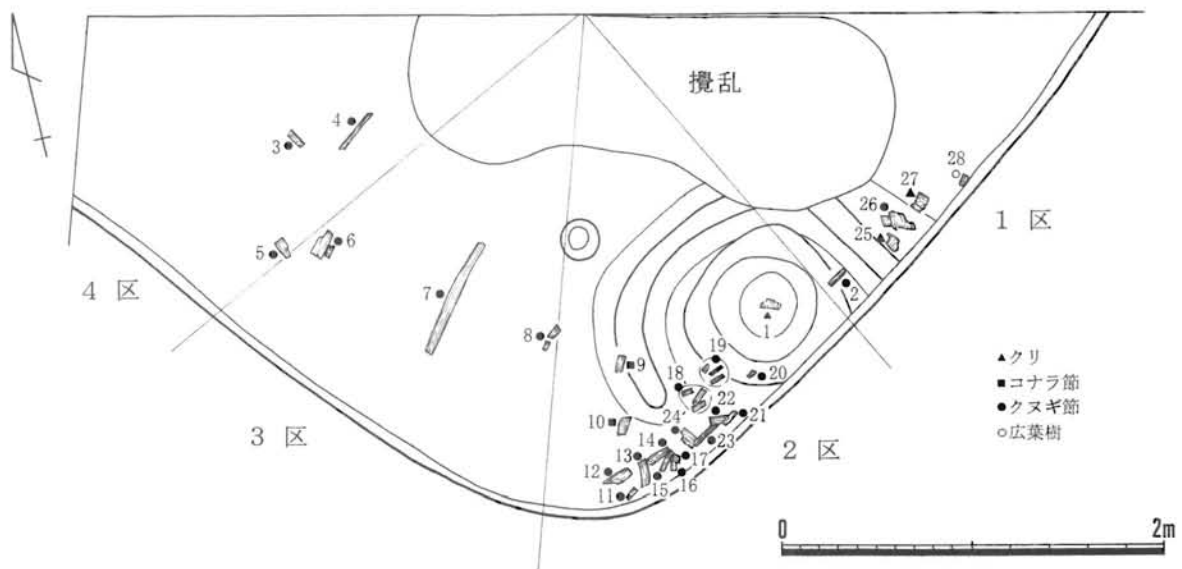
クヌギ節は落葉性のドンダリの仲間でそのうちのクヌギとアベマキが属する。いずれの種も暖帯の山

林に普通の高木で二次林にも多い。材は重厚で割裂性が良い。関東地方の発掘された住居材にはよく使用されている。現在は薪炭材として重要であるが建築材としては一般的ではない。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版26 3a. -3c. (No.1)

年輪の始めに中型～大型の管孔が密に配列し徐々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。果実は食用になり、材は加工はやや困難であるが狂いは少なく粘りがあり耐朽性にすぐれている。



第87図 1号住居跡出土炭化材の樹種分布 (1/40)

試料	樹種	備考・形状など	試料	樹種	備考・形状など
1	クリ	貯穴、幅2cmの破片	15	クヌギ節	
2	クヌギ節	IY貯穴、芯部φ1cm、2年輪	16	クヌギ節	
3	クヌギ節	芯部、径1.5cm、3年輪	17	クヌギ節	径2.0cm、3年輪
4	クヌギ節	φ3.5cm、4年輪	18	クヌギ節	
5	クヌギ節	破片	19	クヌギ節	
6	クヌギ節	φ6cm、11年輪	20	クヌギ節	
7	クヌギ節	φ2.5cm	21	クヌギ節	径2.0cm、9年輪
8	クヌギ節	径1.5cm、4年輪	22	クヌギ節	径2.5cm、7年輪
9	コナラ節	芯部	23	クヌギ節	径2.0cm、9年輪+
10	コナラ節		24	クヌギ節	
11	クヌギ節		25	クリ	1年輪幅8mm
12	クヌギ節		26	クヌギ節	年輪幅広い
13	クヌギ節		27	クリ	年輪幅広い
14	クヌギ節	φ1.8cm、3年輪	28	広葉樹	微破片不可

第3表 1号住居跡出土炭化材の樹種同定結果

II. 富士前遺跡第15地点から出土した大型植物化石

新山雅広 (パレオ・ラボ)

1. 出土した大型植物化石

大型植物化石の検討を行った試料は、富士前遺跡第15地点1号住居跡の1～4区、貯穴、AA'ベルト、ピット、3～6炭化材下、土器下①～⑥の計14試料である。これら各試料から出土した大型植物化石の一覧は第4表に示した。但し、大型植物化石を全く含んでいなかった土器下①、土器下⑥の2試料は一覧表から省いた。以下に各試料から出土した大型植物化石の記載をする。

1区：イネ、オオムギ、コムギ、ムギ類、ササゲ属、エノキグサが出土した。イネ、ササゲ属は比較的多産した。他に、虫えいも多産した。

2区：ブドウ属、オオムギ、コムギ、ムギ類、ササゲ属、エノキグサが出土した。ササゲ属、オオムギは比較的多産した。他に、虫えいも多産した。

3区：アワ、キビ、タデ属A、シロザ近似種、ムラサキケマン、キケマン、エノキグサ、シソ属、イヌコウジュ属、イヌコウジュ属またはシソ属が出土した。エノキグサが比較的多産した。他に、虫えいも多産した。

4区：イネ、オオムギ、アワ、タデ属B、シロザ近似種、エノキグサが出土した。オオムギ、エノキグサは比較的多産した。他に、虫えいも多産した。

貯穴：イネ、シロザ近似種、ササゲ属、エノキグサが出土した。イネが比較的多産した。他に、虫えい、菌核も多産した。

AA'ベルト：マメ科、エノキグサが出土した。他に、虫えいも出土した。

ピット：イネ、マメ科が出土した。他に、虫えいも出土した。

3～6炭化材下：タデ属C、エノキグサが出土した。他に、虫えいも出土した。

分類群	部位	FuO 1Y													
		1区	2区	3区	4区	貯穴	AA'ベルト	ピット	3～6炭化材下	土器下①	土器下②	土器下③	土器下④	土器下⑤	
ブドウ属	炭化種子		2												
イネ	炭化胚乳	11(8)			1(1)	5(6)		1							
	炭化穎	(1)													
オオムギ	炭化胚乳	4	7		5									1	
コムギ	炭化胚乳	1	2												
ムギ類	炭化胚乳	1	1												
アワ	炭化胚乳				1										
	炭化穎果			1											
キビ	炭化胚乳			1											
アワまたはキビ	炭化胚乳												1		
タデ属A	果実			1											
タデ属B	果実				1										
タデ属C	果実														
ギシギシ属	果実													1	
シロザ近似種	種子			2	1	1				1					
ムラサキケマン	種子			2											
キケマン	種子			1											
ササゲ属	炭化種子	11	15(2)			1									
マメ科	炭化種子						4	1	1			7(1)	2		
エノキグサ	種子	(1)	1	17	6(2)	(1)	1								
シソ属	果実			(2)											
イヌコウジュ属	果実			1											
イヌコウジュ属またはシソ属	果実			1											
虫えい		15	12	9	10	10	1	1	2	1				1	
菌核						4									
不明		19	1	11	15	2									

第4表 大型植物化石一覧表 (数字は個数、()内は半分または破片の数)

土器下②：虫えいのみが出土した。

土器下③：エノキグサのみが出土した。

土器下④：アワまたはキビ、エノキグサが出土した。

土器下⑤：オオムギ、ギシギシ属が出土した。他に、虫えいも出土した。

2. 栽培・利用状況

出土したもののうち、栽培植物と考えられるものは、イネ、オオムギ、コムギ、ムギ類、アワ、キビ、アワまたはキビ、ササゲ属（アズキ、リョクトウの類）、シソ属である。これらは弥生時代には既に食用とされていたものと考えられる。他に、ブドウ属も食用として利用可能である。エノキグサは比較的多くの試料から出土し、一部の試料では多産したが、付近の畑地ないし路傍といった幾分乾き気味の所に生育していたものと考えられる。虫えいは周辺の森林から供給されたのであろう。

3. 主な大型植物化石の形態記載（図版27）

イネ *Oryza sativa* Linn. 炭化胚乳、炭化穎

扁平な楕円形、穎の表面には規則的に配列する独特の顆粒状突起があり、破片であっても同定可能である。なお、イネの炭化胚乳は完形で保存状態が良いものについては、長さとの幅の計測を行った。その結果を第5表に示す。

オオムギ *Hordeum vulgare* Linn. 炭化胚乳

縦長の菱形に近い楕円形。下端は尖り気味。

コムギ *Triticum aestivum* Linn. 炭化胚乳

丸こく、側面観、上面観とも楕円形から円形。ムギ類としたものは保存状態が悪く、オオムギともコムギとも区別し得なかったものである。

長さ (mm)	幅 (mm)	長さ/幅	試料
5.0	2.8	1.79	1区
4.4	2.4	1.83	1区
4.8	2.8	1.71	1区
3.4	2.2	1.55	1区
4.6	2.6	1.77	1区
4.6	2.6	1.77	1区
3.4	2.0	1.70	1区
4.6	2.4	1.92	貯穴
4.2	3.0	1.40	貯穴
3.6	2.4	1.50	貯穴
4.2	2.2	1.91	貯穴
4.8	2.6	1.85	ピット
4.3	2.5	1.73	平均
5.0	3.0	1.92	最大
3.4	2.0	1.50	最小

第5表 イネ炭化胚乳計測値一覧表

アワ *Setaria italica* Beauv. 炭化胚乳、炭化穎果

卵形で片凸レンズ形、先端部はやや平坦である。腹面基部には細長い幅の狭いへそがある。背面の胚部分の長さは果実長の2/3程度。

キビ *Panicum miliaceum* Linn. 炭化胚乳

先端部はやや尖り気味。腹面基部には幅の広いうちわ形のへそがある。胚部分の長さは果実長の1/2程度。保存状態が悪いものは、アワまたはキビとした。

タデ属A *Polygonum* A 果実

卵形で表面は網目模様。長さ2.3mm、幅1.5mm。

タデ属B *Polygonum* B 果実

黒色の卵形で、断面はやや丸みを帯びた三角形。

タデ属C *Polygonum* C 果実

黒色でかなり丸みを帯びた2面の卵形。

ササゲ属 *Vigna* 炭化種子

子葉内面の初生葉と幼根が確認できず、これ以上の同定には至らない。長さ4.0mm程度、幅3.0mm程度。

シソ属 *Perilla* 果実

側面観は円形、上面観は楕円形。表面は網目模様。大きさ1.7~1.8mm。なお、大きさ1.3mmのものをイヌコウジュ属、大きさ1.6mmのものをイヌコウジュ属またはシソ属とした。

虫えい

虫えい（虫こぶ）は、葉などに昆虫が産卵寄生した結果できるもので大きさ、形は様々である。断面の中央には小さな穴がある。

[参考文献]

吉崎昌一 1990「北海道恵庭市柏木川11遺跡の植物遺体」104-113『柏木川11遺跡』

Ⅲ. 中道遺跡第41地点の23号住居跡出土炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

1. 樹種同定の方法

まず、炭化材の横断面（木口）を手で割り実体顕微鏡で分類群のおおよその目安をたてる。次に横断面だけでは同定できない試料（アカガシ亜属・コナラ節・クヌギ節・クリ以外）については、3方向の破断面の組織を走査電子顕微鏡で観察し同定を決定する。またコナラ節やクヌギ節などでも、年輪幅の狭いぬか目や逆に年輪幅の広い試料などは実体顕微鏡下では誤同定の恐れがあるので、このような試料については走査電子顕微鏡で確認した。走査電子顕微鏡用の試料は、横断面の他に、接線断面（板目）と放射断面（柾目）は片刃の剃刀を各方向に沿って軽くあて弾くように割り平滑面を出す。この3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子(株)製JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

2. 結果

14試料の樹種同定の結果は、クリが最も多く8試料、トチノキが4試料、コナラ節が1試料、ススキ属類似が1試料であった(第6表)。

以下に同定された樹種の材組織を記載する。

コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus subgen. Quercus sect. Prinus* ブナ科 図版28 1a. -1c. (炭6)

年輪の始めに中型の管孔が配列し徐々に径を減じ、晩材部では薄壁・角形で小型の管孔が火炎状・放射方向に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にチロースがある。放射組織は単列のものと同複合状のものがある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。材は加工はややしにくく乾燥すると割れや狂いが出やすい欠点があるが、人里近くに普通の樹種で入手しやすいこともあり利用頻度が高い。

クリ *Castanea crenata Sieb. et Zucc.* ブナ科 図版28 2a. -2c. (炭5)

年輪の始めに中型～大型の管孔が密に配列し徐々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火



第88図 23号住居跡出土炭化材の樹種分布 (1/40)

試料	樹種	形状など備考	試料	樹種	形状など備考
炭1	クリ		炭8	クリ	
炭2	クリ		炭9	クリ	φ2.0cm、4年輪
炭3	クリ		炭10	トチノキ	
炭4	クリ	φ2.5cm、9年輪	炭11	トチノキ	
炭5	クリ	φ3.0cm、8年輪	炭12	ススキ属類似	φ0.6cm、集積
炭6	コナラ節		炭13	トチノキ	
炭7	トチノキ		炭14	クリ?	保存悪い

第6表 23号住居跡出土炭化材の樹種同定結果

炎状に配列する環孔材。上記のコナラ節と組織は類似するが、クリの放射組織は単列同性であり複合状の放射組織はない。

北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。果実は食用になり、材は加工がやや困難であるが狂いは少なく粘りがあり耐朽性にすぐれている。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科 図版28 3a. -3c. (炭10)

小型の管孔が単独または2～数個が複合して散在する散孔材。道管の壁孔は交互状に接合して配列、穿孔は単一、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は単列同性で層階状に配列し、道管と放射組織の壁孔はやや大きく、円形で交互状に密在する。

トチノキは北海道以南の温帯の谷間に生育する落葉高木である。材は軽軟で緻密で加工し易く木理は不規則で耐久性は低く狂いがやすい。容器などによく使われている。

ススキ属類似 cf. *Miscanthus* イネ科 図版29 4a. (炭12)

直径6mmの草本性の稈の破片である。稈の外周には2～3層の厚い厚壁細胞からなる表皮系がある。維管束が散在する不整中心柱である。維管束は2～4層の厚壁細胞に取り囲まれている。稈の外周に近い維管束は小さくて密に分布しており、厚い厚壁細胞層に取り囲まれている。維管束は同心円状ではなく比較的疎らに散在している。このような特徴からススキ属に類似していると同定した。

ススキ属は大型になる多年草で一般にはカヤ(茅)と呼ばれ、約7種ある。日本全土の平地から山地の陽地に普通に見られ刈って屋根を覆く材料とされてきたススキのほかに、オギ・カリヤス・トキワススキなどがある。ほかに稈の太くなるイネ科の草本があるが、現時点では稈の組織から種を識別することはできていない。

3. まとめ

23号住居跡からはクリが最も多く検出された。千野(1991)は建築材樹種の資料から、縄文時代に多用されていたクリの利用は弥生時代や古墳時代になるとコナラ亜属に変わり、再び平安時代では縄文時代のようにクリ材を利用した住居遺構が増えることを指摘している。当遺跡でもクリがコナラ節より多く検出され同様な傾向が見られた。また、当遺跡から出土したクリ、トチノキ、コナラ節はすべて果実が食用となる樹種であった点も興味深い。

[参考文献]

千野裕道 1983「縄文時代のクリと集落周辺植生—南関東地方を中心に—」『東京都埋蔵文化財センター研究論集Ⅱ』財団法人 東京都埋蔵文化財センター P. 25-42 図版1-4

IV. 中道遺跡第41地点から出土した大型植物化石

新山雅広(パレオ・ラボ)

1. 出土した大型植物化石

大型植物化石の検討を行ったのは、23H(平安時代23号住居跡)の1試料である。出土したのは、イ

長さ(mm)	幅(mm)	長さ/幅	長さ(mm)	幅(mm)	長さ/幅
5.2	2.4	2.17	5.0	☆2.0	★2.50
4.2	☆2.0	2.10	4.6	2.2	1.77
5.0	2.2	2.27	4.6	★2.8	☆1.64
4.8	2.2	2.18	4.4	☆2.0	2.20
4.8	2.2	2.18	4.6	☆2.0	2.30
★5.4	2.4	2.25	4.6	2.4	1.92
4.8	2.2	2.18	4.8	2.2	2.18
4.8	2.6	1.85	4.8	☆2.0	2.40
4.2	2.2	1.91	4.4	☆2.0	2.20
4.4	2.4	1.83	4.6	2.2	2.09
4.2	☆2.0	2.10	☆4.0	2.2	1.82
4.8	2.4	2.00	5.0	2.6	1.92
4.6	2.2	1.77	4.6	2.2	1.77
4.8	☆2.0	2.40	4.4	2.4	1.83
4.8	2.4	2.00	4.8	2.2	2.18

第7表 イネ炭化胚乳計測値一覧表 (★:最大、☆:最小)

ネ(炭化胚乳)が約10,000個、アワまたはキビ(炭化胚乳)が1個であり、他に虫えいも1個出土した。イネは大量に出土し、塊状になったものもあった。この塊状イネは、小さなもので約160個、大きなもので約740個のイネが集合したものと推定された。イネについては、比較的保存状態の良い任意の30個の長さ、幅の計測をしたが(第7表)、平均は長さ4.67mm、幅2.24mm、長さ/幅2.06であった。

2. 形態記載(図版30)

イネ *Oryza sativa* Linn. 炭化胚乳

イネはやや扁平な楕円形で穎の表面には規則的に配列する独特の顆粒状突起がある。

アワまたはキビ *Setaria italica* Beauv. or *Panicum miliaceum* Linn. 炭化胚乳

出土したものは、やや保存状態が悪く、胚部分の長さやへその形態が不明瞭であり、アワかキビか区別し得なかった。

虫えい(虫こぶ)

大きさ、形は様々で断面は中央部に穴がある。

V. 城山遺跡第35地点から出土した炭化材の樹種同定

植田弥生(パレオ・ラボ)

1. はじめに

ここでは、出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。試料は、古墳時代129号住居跡(129H)出土の5点、平安時代128号住居跡(128H)カマド出土の1点、近世130号土坑(130D)出土の9点、近世

132号土坑（132D）出土の3点、134号土坑（134D）出土の7点である。

古墳時代と平安時代の住居跡から出土した炭化材は主にクヌギ節であったが、近世の土坑から出土した炭化材は針葉樹も含み多種多様な落葉広葉樹が検出されたがクヌギ節は含まれていなかった。

2. 炭化材樹種同定の方法

まず炭化材を手で割り新鮮な横断面を実体顕微鏡下で観察し、分類群のおおよその目安をつける。次に横断面だけでは同定できない試料（アカガシ亜属・コナラ節・クヌギ節・クリ以外の試料）については、3方向の破断面組織を走査電子顕微鏡で観察し分類群を決定する。またコナラ節やクヌギ節などでも、年輪幅の狭いぬか目や逆に年輪幅の広い試料では見分けが難しく実体顕微鏡下では誤同定の恐れがあるので、このような試料については走査電子顕微鏡で確認する。走査電子顕微鏡用の試料は、横断面の他に、接線断面（板目）と放射断面（柁目）は片刃の剃刀を各方向に沿って軽くあて弾くように割り平滑面を出す。この3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子(株)製JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

3. 結果

同定結果の一覧を第8表に、検出された樹種を遺構ごとに第9表にまとめた。

古墳時代129号住居の炭化材は、炭1・4・5がクヌギ節、炭2がコナラ節、炭3がマメ科であった。平安時代128号住居カマド炭1は、クヌギ節であった。

近世の3基の土坑からは複数の分類群が検出された。130号土坑からは、ヒノキ属とリュウブが各2点、マツ属・クスノキ科・ヤマザクラ・カエデ属が各1点、木質1は木質部は残っていなかった。132号土坑は、クマシデ節が2点、カバノキ属が1点であった。134号土坑は、カバノキ属2点、クロベ・イヌシデ節・ヤマザクラ・カエデ属が各1点、そして樹皮が1点であった。

以下に同定の根拠となった組織観察結果を記載する。

マツ属 *Pinus* マツ科 図版31 1a. -1c. (130号土坑炭5)

早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の量が多い針葉樹材。垂直と水平の樹脂道は発泡して不明瞭であるが、放射断面において分野壁孔が窓状であり放射組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管があることからマツ属と同定された。マツ属複維管束亜属の材は放射仮道管内壁に鋸歯状の肥厚があり、単維管束亜属は肥厚がなく平滑である。当試料の放射仮道管内壁には鋸状の肥厚がほとんど見られなかったが、組織の状況は良いとはいえず劣化した可能性もあるので、同定はマツ属に留めた。

単維管束亜属はいわゆる5葉松で主に標高の高い山中に生育し、複維管束亜属はアカマツとクロマツが属し低地から丘陵・低山地に生育する。

クロベ *Thuja standishii* Carr. ヒノキ科 図版31 2a. -2c. (134号土坑炭5)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材の移行は緩やかである。分野壁孔は小さなスキ型で一分野に2～4個ある。

クロベは本州・四国の温帯上部の山中に生育する常緑高木であり、特に中部地方以北に多く分布する。材は耐朽性・切削性・割裂性にすぐれる。

ヒノキ属 *Chamaecypris* ヒノキ科 図版31 3a. -3c. (130号土坑木質2)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。分野壁孔はヒノキ型が観察され、一分野に1~2個である。ヒノキまたはサワラと思われるが分野壁孔が一部でしか観察できないのでヒノキ属としておく。

ヒノキ属は本州の福島県以南・四国・九州の温帯に分布し、山中のやや乾燥した尾根や岩上に生育するヒノキと、ヒノキより分布域は狭く東西南部から中部地方の沢沿いの岩上に生育するサワラがある。材は耐朽性・切削性・割裂性にすぐれる。

クマシデ属クマシデ節 *Carpinus sect. Distegocarpus* カバノキ科 図版32 4a. -4c. (132号土坑炭3)

小型の管孔が単独または2~数個が放射方向に複合して散在する散孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は横棒数が10本前後の階段穿孔である。放射組織は同性に近い異性、1~3細胞幅であり、集合放射組織は観察されなかった。このような形質からクマシデ属のサワシバとクマシデを含むクマシデ節と

遺 構	試 料	樹 種	時 代	形 状
129号住居	炭1	クヌギ節	古墳時代	樹芯部、みかん割状、r1.5cm、7年輪+
129号住居	炭2	コナラ節	古墳時代	破片
129号住居	炭3	マメ科	古墳時代	破片
129号住居	炭4	クヌギ節	古墳時代	破片
129号住居	炭5	クヌギ節	古墳時代	破片
128号住居	カマド・炭1	クヌギ節	平安時代	φ7.5cm、29年輪+
130号土坑	炭1	カエデ属	近世	破片
130号土坑	炭2	クスノキ科	近世	樹芯部、r1.5cm、11年輪+
130号土坑	炭3	ヤマザクラ	近世	樹芯部、半割状、φ2cm、14年輪
130号土坑	炭4	リョウブ	近世	破片
130号土坑	炭5	マツ属	近世	破片
130号土坑	炭6	リョウブ?	近世	破片
130号土坑	炭化材	ヒノキ属	近世	破片
130号土坑	木質1	不可	近世	木の輪郭に土が詰まっていた
130号土坑	木質2	ヒノキ属	近世	薄片
132号土坑	炭1	カバノキ属	近世	破片
132号土坑	炭2	クマシデ節	近世	φ8mm、3年輪、樹皮付
132号土坑	炭3	クマシデ節	近世	破片
134号土坑	炭1	カエデ属	近世	破片
134号土坑	炭2	イヌシデ節	近世	放射径2.8cm、15年輪
134号土坑	炭3	カバノキ属	近世	φ0.5cm、樹皮付
134号土坑	炭4	クロベ	近世	破片
134号土坑	炭5	樹皮	近世	破片
134号土坑	炭6	カバノキ属	近世	破片
134号土坑	炭7	ヤマザクラ	近世	放射径1.5cm、13年輪以上

第8表 城山遺跡第35地点出土炭化材の樹種同定結果

同定した。

クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus sect. Eucarpinus* カバノキ科 図版32 5a. -5c. (134号土坑炭2)
放射組織が集合する部分と2～数個の小型の管孔が放射方向に複合し配列する部分とがある放射孔材。道管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は単一である。放射組織は方形細胞が混じるがほぼ同性、1～3細胞幅である。集合放射組織があり、穿孔は単一であることから、イヌシデ節と同定した。

クマシデ属は暖帯および温帯の山地に生育する落葉高木または大形低木である。イヌシデ節には山野に普通のイヌシデとアカシデ、乾いた山稜に生育するイワシデがある。クマシデ節には山地の谷沿いに多いサワシバとクマシデがある。いずれの材も丈夫で有用である。

カバノキ属 *Betula* カバノキ科 図版32 6a. -6c. (134号土坑炭3)

樹芯に三角形に近い輪郭の髄がある細枝である。小型の管孔が単独または2～数個が放射方向に複合した管孔が散在する散孔材。道管の壁孔は非常に小型で密在し、穿孔は15～20本前後の階段状である。放射組織は異性、1～2細胞幅である。この様な形質からカバノキ属と同定した。階段穿孔の横棒数はやや多く、放射組織の細胞幅は狭いが、細枝であるためと考えられる。

温帯から寒帯の山地の陽地に生育する落葉性の高木または低木で、約9種がある。本州以南に分布するミズメ、岐阜県以東に分布し崩壊地に二次林を形成するシラカンバ、高山に多いウダイカンバなどがある。

コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus*, subgen. *Q.* sect. *Prinus* ブナ科 図版33 7a. -7c. (129号住居炭2)

年輪の始めに大型の管孔が配列しやや急に径を減じ、晩材部では薄壁・角形で小型の管孔が火炎状に

遺構 分類群	古墳住居		近世土坑		
	129号	128号カマド	130号	132号	134号
マツ属			1		
ヒノキ属			2		
クロベ					1
クマシデ節				2	
イヌシデ節					1
カバノキ属				1	2
コナラ節	1	1			
クスギ節	3				
クスノキ科			1		
ヤマザクラ			1		1
マメ科	1				
カエデ属			1		1
リョウブ			2		
樹皮					1
不可			1		
合計	4	1	9	3	7

第9表 城山遺跡第35地点出土炭化材の遺構別出土樹種

配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にチロースがある。放射組織は単列と複合状のものがある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。材は乾燥すると割れや狂いが出やすい欠点がある。

コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Q.* subgen. *Q.* sect. *Cerris* ブナ科 図版33 8a. -8c. (129号住居炭5)

年輪の始めに大型管孔が1層配列し、その後小型・厚壁の管孔が単独で放射方向に配列し広放射組織をもち、接線状・網状の柔組織が顕著な環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は同性、単列と集合状がある。

クヌギ節は落葉性のドングリの仲間のうちのクヌギとアベマキが属する。いずれの種も暖帯の山林に普通の高木であり、二次林の構成樹でもある。関東ではクヌギ、瀬戸内海沿岸地方にはアベマキが多い。材は重厚で割裂性が良い。関東地方の発掘された住居材にはよく使用されている。現在は薪炭材として重要であるが建築材としては一般的ではない。

クスノキ科 Lauraceae 図版33 9a. -9c. (130号土坑炭2)

小型の管孔が単独または2~3個が放射方向に複合して散在する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は主に単一であるが横棒数の少ない階段穿孔も見られた。放射組織は方形細胞を含む異性、1~3細胞幅、上下端に大きな油細胞があり、道管との壁孔は大きい。管孔が大きく、油細胞の出現頻度の高いクスノキやタブノキ以外の樹種であるが、分類群を確定することはできなかった。

クスノキ科は葉や材に油細胞があるのが特徴で、暖帯に広く分布し主に常緑の高木または低木であるが、温帯域に生育する分類群には落葉性の樹種も含まれる。

ヤマザクラ *Prunus jamasakura* Sieb. et Koidz. バラ科 図版34 10a. -10c. (130号土坑炭3)

小型の管孔が年輪の始めにやや密に分布し、その後放射方向・接線方向・斜状に複合し全体的にうねるように分布している散孔材。道管の壁孔は対列状または交互状、穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は平伏細胞と方形細胞からなる異性、約3細胞幅、道管との壁孔は小型で密在する。

ヤマザクラは暖帯から温帯の丘陵から山地に成立する落葉広葉樹林の代表的な構成要素である。材は粘り気があり強く、保存性も高い。

マメ科 Leguminosae 図版34 11a. -11c. (129号住居炭3)

年輪の始めに中型の管孔からなる孔圏部が実体顕微鏡下で見られたが、脆い試料であったため横断面作成の時にくずれてしまい写真では晩材部の管孔の一部しか捉えられていない。早材の孔圏から晩材部へは管孔の径が徐々に減じて行き、年輪界では小型~非常に小型の管孔が塊状・放射状の複合する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は同性、4細胞幅の紡錘形である。以上の形質からマメ科と考えられるが、属を確定することはできなかった。

カエデ属 *Acer* カエデ科 図版34 12a. -12c. (134号土坑炭1)

小型の管孔が単独または2～3個が複合して散在し年輪界は不明瞭な散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は同性、1～4細胞幅、道管との壁孔は交互状で孔口はやや大きい。

日本全土の暖帯から温帯の丘陵から山地の谷間に多く生育し、落葉広葉樹林の主要構成樹である。材は堅く緻密で割れにくく、保存性は中程度である。

リョウブ *Clitra barvinervis* Sieb. et Zucc. 図版35 13a. -13c. (130土坑炭4)

やや小型～中型の管孔がおもに単独で散在し、管孔の分布数は疎らで年輪の中央部に多い散孔材。年輪始めと年輪界で管孔の径はやや小さい。道管の壁孔は交互状、穿孔は階段数の多い階段穿孔である。放射組織は異性、単列と4細胞幅の紡錘形のものが多い。

北海道南部の暖帯から温帯下部の山中に普通の落葉高木である。

樹皮 bark 図版35 14a. (134号土坑炭5)

材組織は見られず、柔細胞や厚壁細胞から構成されている。広葉樹の樹皮と思われるが不明である。

4. まとめ

古墳時代の129号住居からはクヌギ節がやや多く、そのほかにコナラ節やマメ科が検出された。平安時代の住居跡のカマドから出土した材もクヌギ節であった。

近世の3基の土坑は鉄屑を伴う製鉄関連の遺構である。130号土坑と134号土坑から出土した炭化材は発掘状況から製鉄用燃料材の一部と考えられている。通説によると近世では製鉄用燃料材にはナラやマツの木炭が良いとされているが、当遺跡の結果はこの通説とは異なり複数の落葉広葉樹と小数のマツ属・ヒノキ属・クロベの針葉樹が検出された。当遺跡出土の落葉広葉樹は、里山の落葉広葉樹林や二次林に普通に見られる樹種がほとんどであり、遺構周辺に成立していたこのような林から様々な樹種を製鉄用燃料材として使用していたと思われる。遺跡発掘の試料から近世の製鉄用燃料材の樹種調査報告はあまり知られていないが、古墳時代や奈良時代の製鉄用燃料材の樹種は関東地方や福島県や富山県では蓄積されている。それによると、主な樹種はいわゆるナラ類と総称されるクヌギ節やコナラ節そしてクリの3種類であるが、ほかに多種類の落葉広葉樹と小数のモミ属・マツ属などの針葉樹が報告されている(山田 1993、パリノ・サーヴェイ株式会社 1995a、1995b、1995c、島地・林 1983a、1983b、林 1988)。当遺跡では近世においても、古墳時代から奈良平安時代と同様な樹種利用に傾向が見られた。今後さらに、発掘試料に基づく近世の製鉄用燃料材の実際が明らかになることが待たれる。

なお132号土坑の3試料は、柱穴と思われる地点から出土しており製鉄関連施設の建物跡の柱材の可能性が考えられている。同定されたカバノキ属とクマシデ属は、建設材としての利用も知られている樹種である。

[参考文献]

山田昌久 1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—川材から見た人間・植物関係史。植生史研究」特別第1号植生史研究会 P. 242

パリノ・サーヴェイ株式会社 1995a「原町市長瀨遺跡・大船迫A遺跡・前出C遺跡における炭化材

- 同定」『原町火力発電所関連遺跡調査報告V』福島県教育委員会（財）福島県文化センター P.1271-1304
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1995b「原町市烏打沢A遺跡・烏井沢B遺跡・大船迫A遺跡から出た炭化材の樹種」『原町火力発電所関連遺跡調査報告書VI』福島県教育委員会（財）福島県文化センター P.621-632
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1995c「いわき市タタラ山遺跡・駒入遺跡・馬場A遺跡出土炭化材の樹種」福島県教育委員会（財）福島県文化センター P.196-206
- 島地 謙・林 昭三 1983a「出土木炭の樹種」『県民公園太閤山ランド内遺跡群調査報告(2)』富山県教育委員会 P.57-60図版37-39
- 島地 謙・林 昭三 1983b「出土木炭の樹種」『都市計画街路七美・太閤・高岡線内遺跡群発掘調査概要』富山県教育委員会 P.68-76
- 林 昭三 1998「椎土遺跡出土木炭の樹種」『椎土遺跡・塚越貝坪遺跡発掘調査概要』小杉町教育委員会 P.41-48

VI. 城山遺跡出土動物遺体

西本豊弘（国立歴史民俗博物館）

城山遺跡第35地点の129号住居跡（129H：古墳時代後期）より動物遺体が検出された。この動物遺体はイノシシの上顎第3後臼歯左側で、最前部は少し摩耗しており、おそらく2～3才程度の個体と推測される。

長さ：32.3mm，前幅：19.6mm。

なお、図版36は新山（パレオ・ラボ）が作成した。

圖 版



1. 調査区近景



2. 確認調査風景



3. 64号住居跡遺物出土状態



4. 64号住居跡遺物出土状態



5. 64号住居跡



6. 64号住居跡カマド



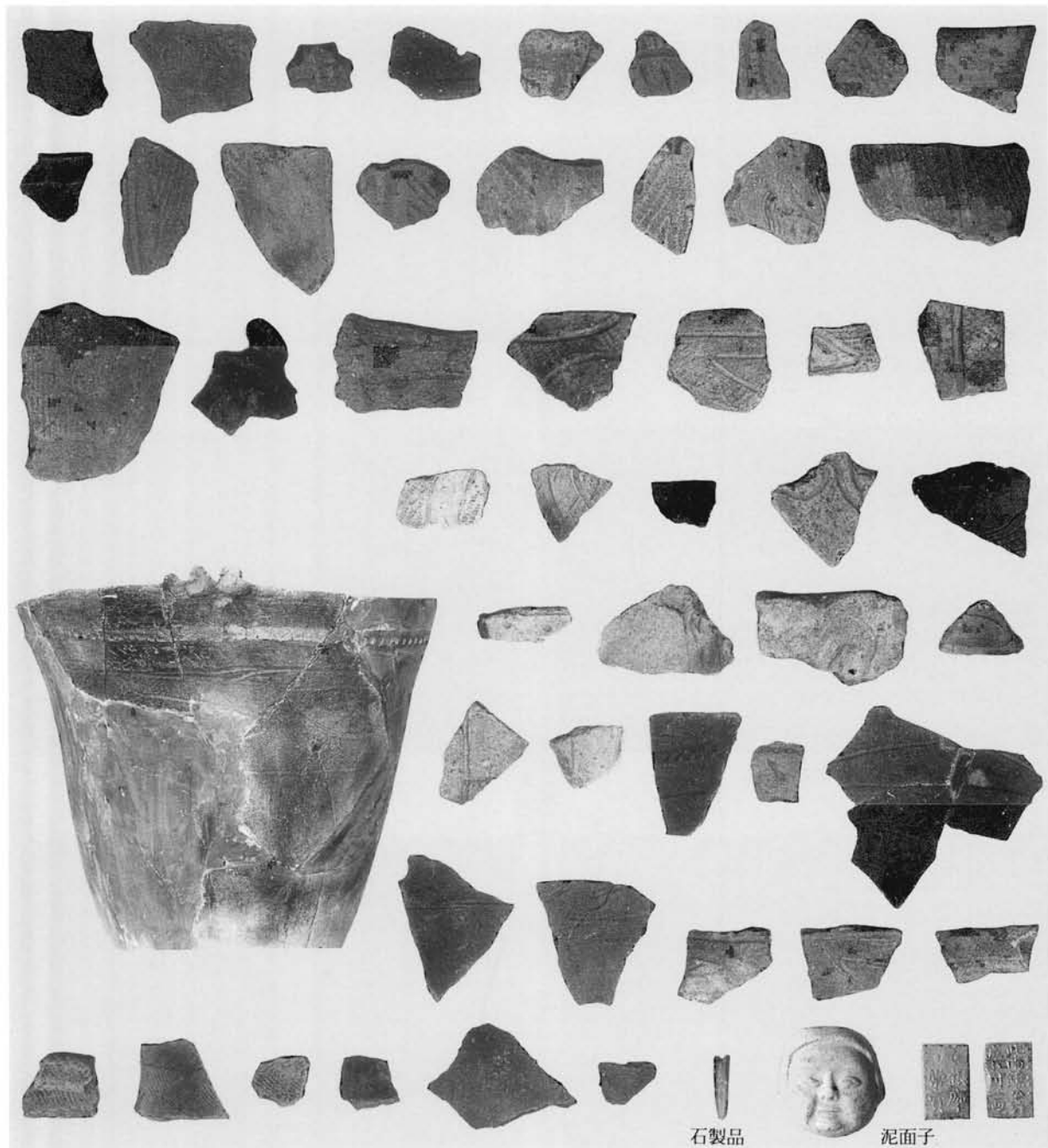
7. 64号住居跡カマド（掘り方）



8. 2号井戸跡



1. 64号住居跡出土遺物



2. 遺構外出土遺物



1. 調査区近景



2. 発掘調査風景



3. 1号住居跡遺物出土状態



4. 1号住居跡遺物出土状態



5. 1号住居跡遺物出土状態



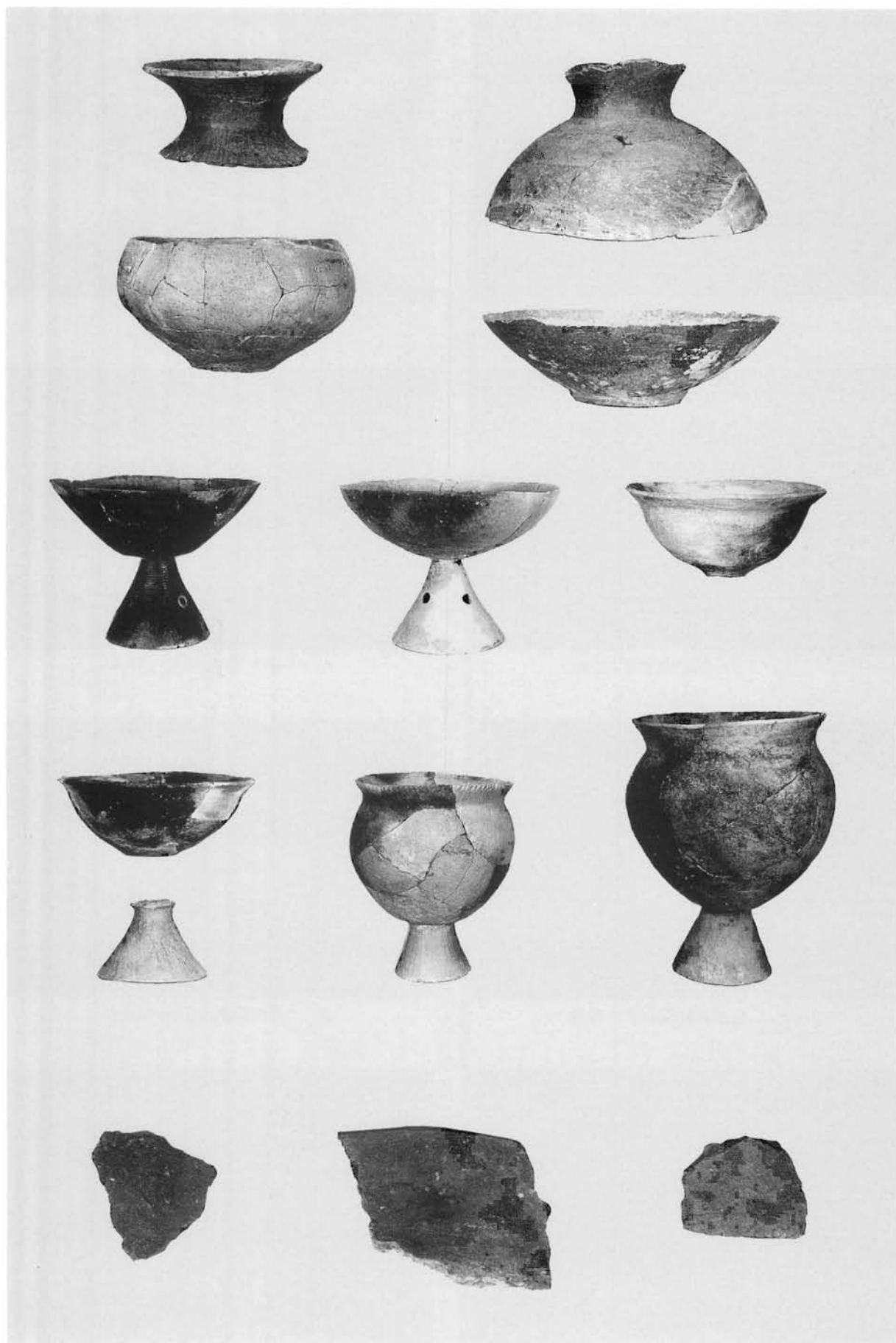
6. 1号住居跡遺物出土状態



7. 1号住居跡



8. 1号住居跡貯蔵穴



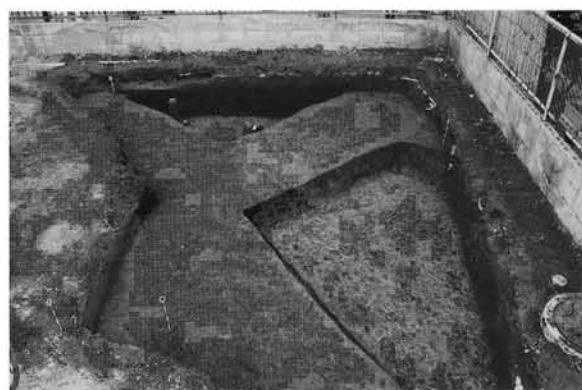
1号住居跡出土遺物



1. 確認調査風景



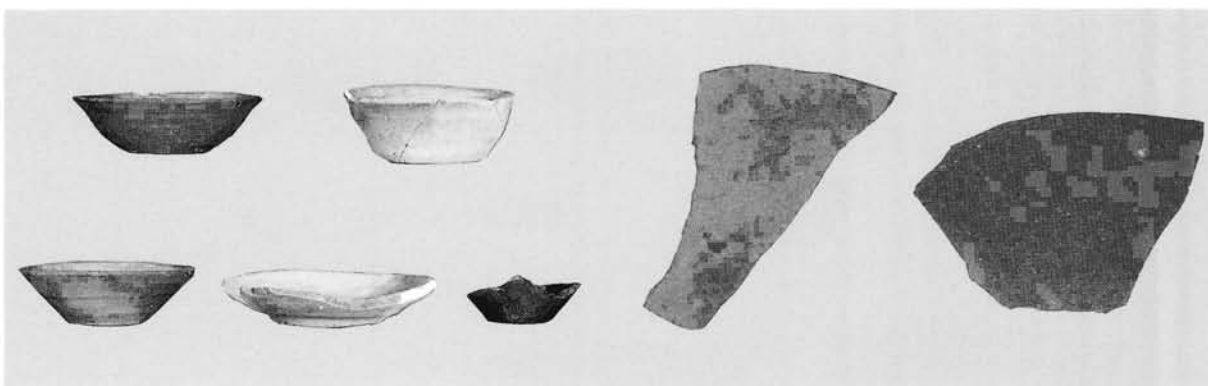
2. 発掘調査風景



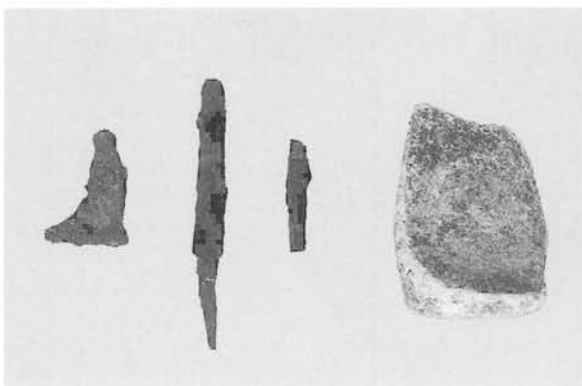
3. 調査区全景



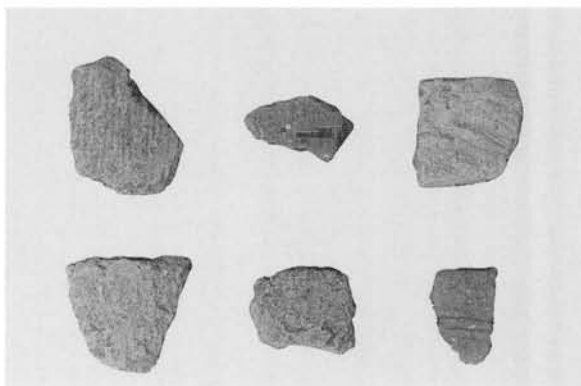
4. 51号住居跡遺物出土状態



5. 住居跡・遺構外出土遺物



6. 住居跡出土鉄製品・石製品



7. 遺構外出土遺物



1. 発掘調査風景



2. 53号住居跡遺物出土状態



3. 53号住居跡遺物出土状態



4. 53号住居跡カマド



5. 53号住居跡出土遺物



1. 調査区全景



2. 発掘調査風景



3. 205・206号土坑



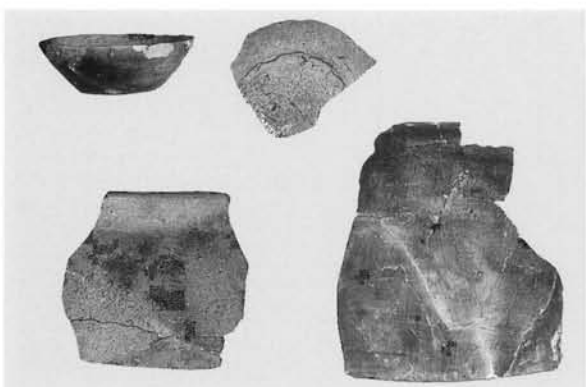
4. 54号住居跡



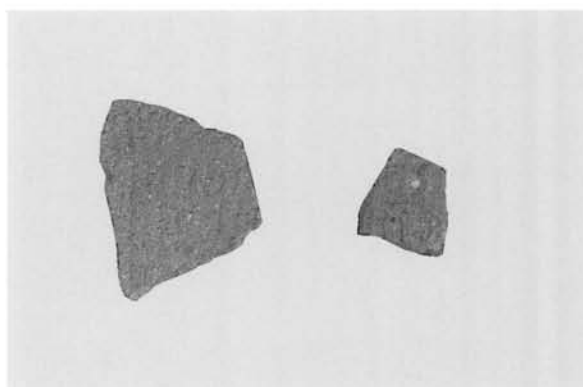
5. 55号住居跡・204~206号土坑



6. 55号住居跡貯蔵穴



7. 55号住居跡出土遺物



8. 遺構外出土遺物



1. 確認調査風景



2. 発掘調査風景



3. 23号住居跡遺物出土状態



4. 23号住居跡遺物出土状態



5. 23号住居跡遺物出土状態



6. 23号住居跡遺物出土状態



7. 23号住居跡炭化種子出土状態



8. 23号住居跡カマド（掘り方）



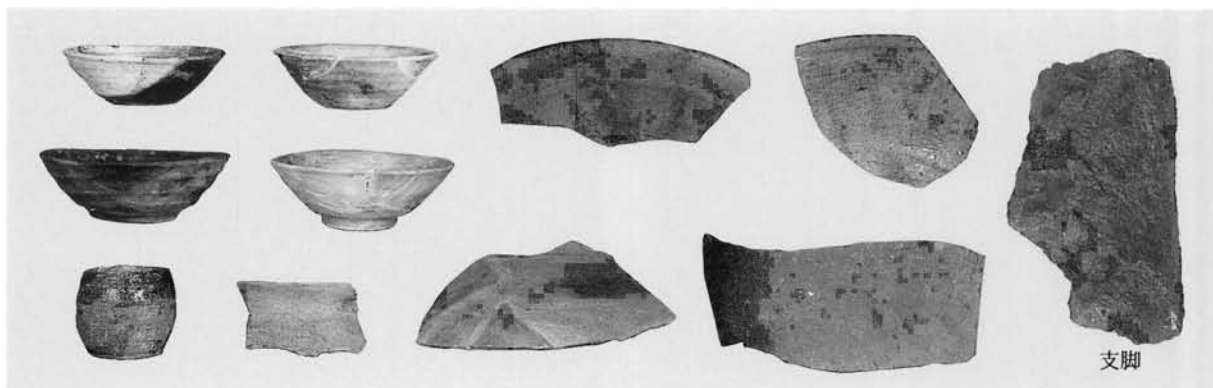
1. 16号溝跡



2. 16号溝跡



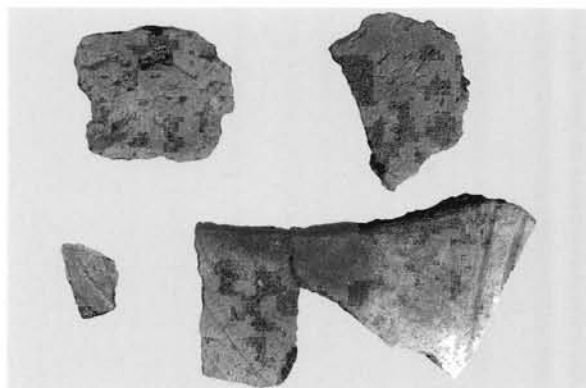
3. 16号溝跡土層断面



4. 23号住居跡出土遺物



5. 1号ピット出土遺物



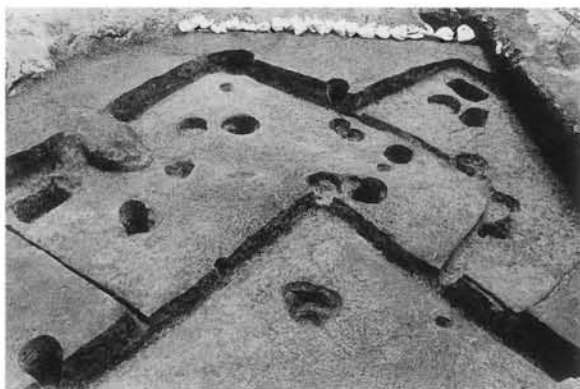
6. 遺構外出土遺物



1. 調査区近景



2. 確認調査風景



3. 調査区全景



4. 125号住居跡貯蔵穴



5. 125号住居跡カマド（掘り方）



6. 126号住居跡貯蔵穴



7. 126号住居跡遺物出土状態



8. 127号住居跡遺物出土状態



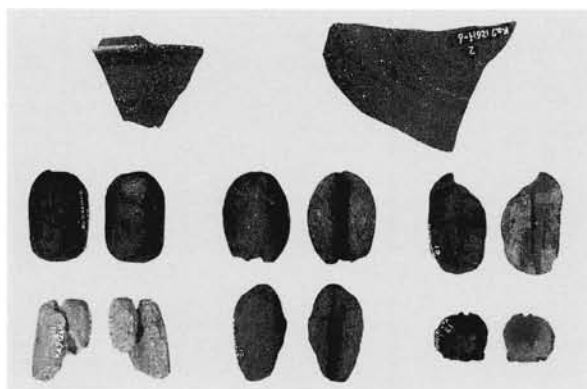
1. 125号住居跡出土遺物



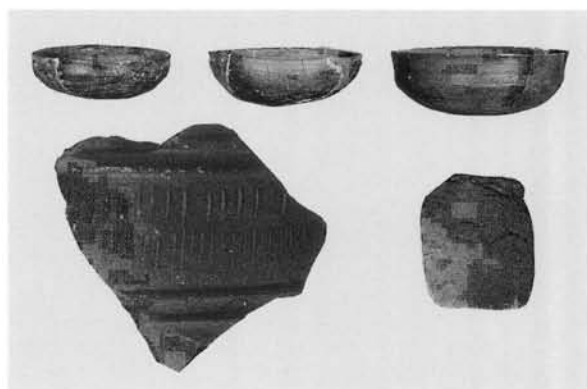
2. 125号住居跡出土遺物



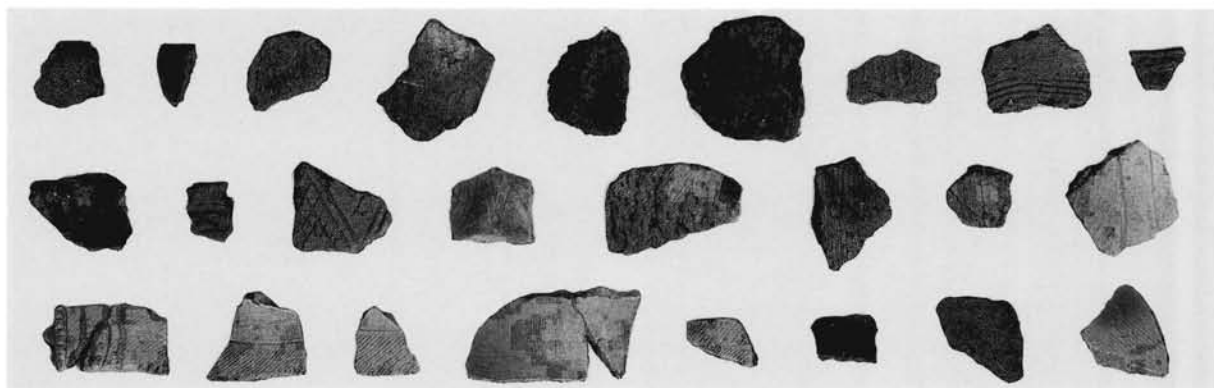
3. 126号住居跡出土遺物



4. 126号住居跡出土遺物



5. 127号住居跡出土遺物



6. 遺構外出土遺物



1. 確認調査風景



2. 129号住居跡発掘風景



3. 129号住居跡遺物出土状態



4. 129号住居跡遺物出土状態



5. 129号住居跡遺物出土状態



6. 129号住居跡



7. 128号住居跡



8. 128号住居跡カマド



1. 130号住居跡



2. 130号住居跡遺物出土状態



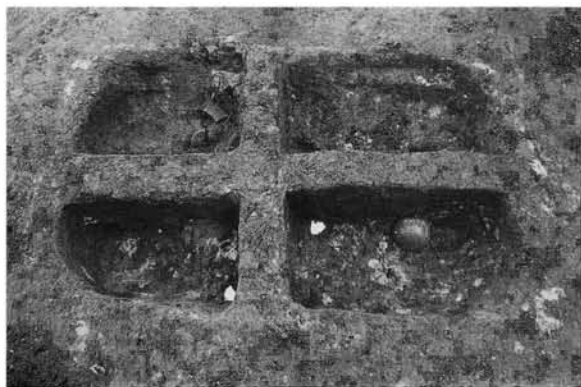
3. 142号土坑



4. 16号井戸跡



5. 130号土坑（精査前）



6. 130号土坑遺物出土状態



7. 130号土坑土層断面



8. 130号土坑土層断面



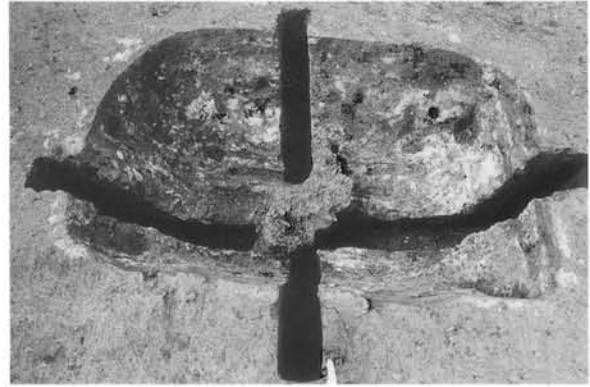
1. 130号土坑遺物出土状態



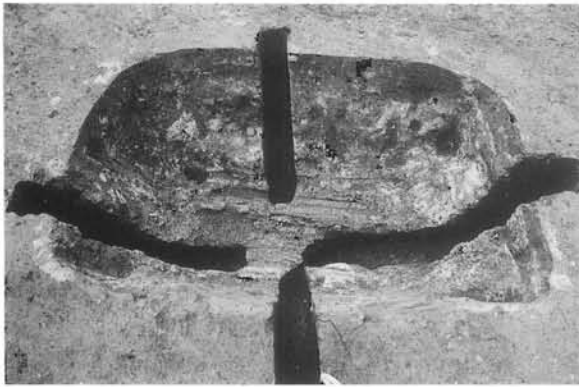
2. 130号土坑遺物出土状態



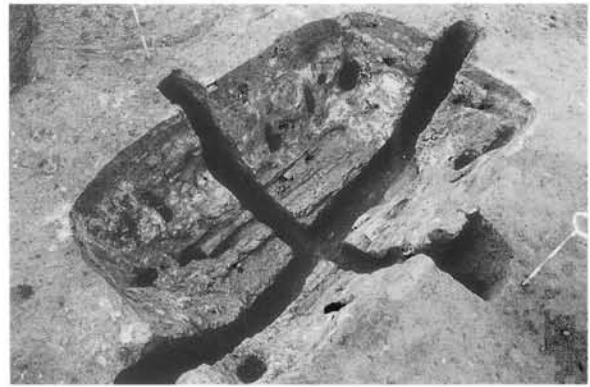
3. 130号土坑遺物出土状態



4. 130号土坑鉄塊出土状態



5. 130号土坑粘土露出状態



6. 130号土坑掛木出土状態



7. 130号土坑掛木出土状態



8. 130号土坑掘り方



1. 134号土坑遺物出土状態



2. 134号土坑遺物出土状態



3. 134号土坑遺物出土状態



4. 134号土坑遺物出土状態



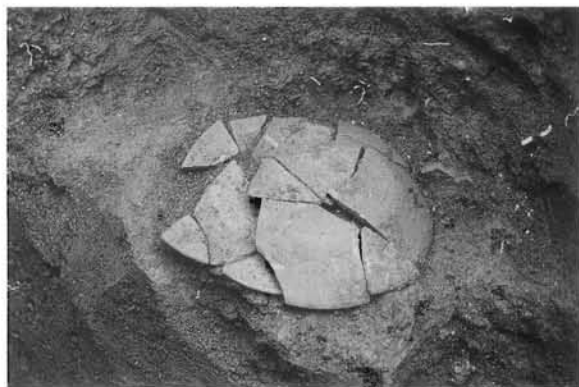
5. 134号土坑発掘風景



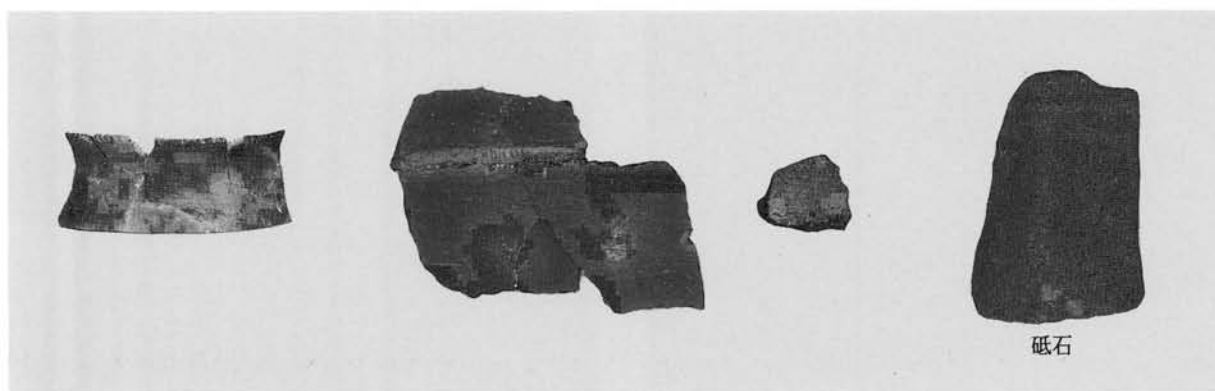
6. 134号土坑土層断面



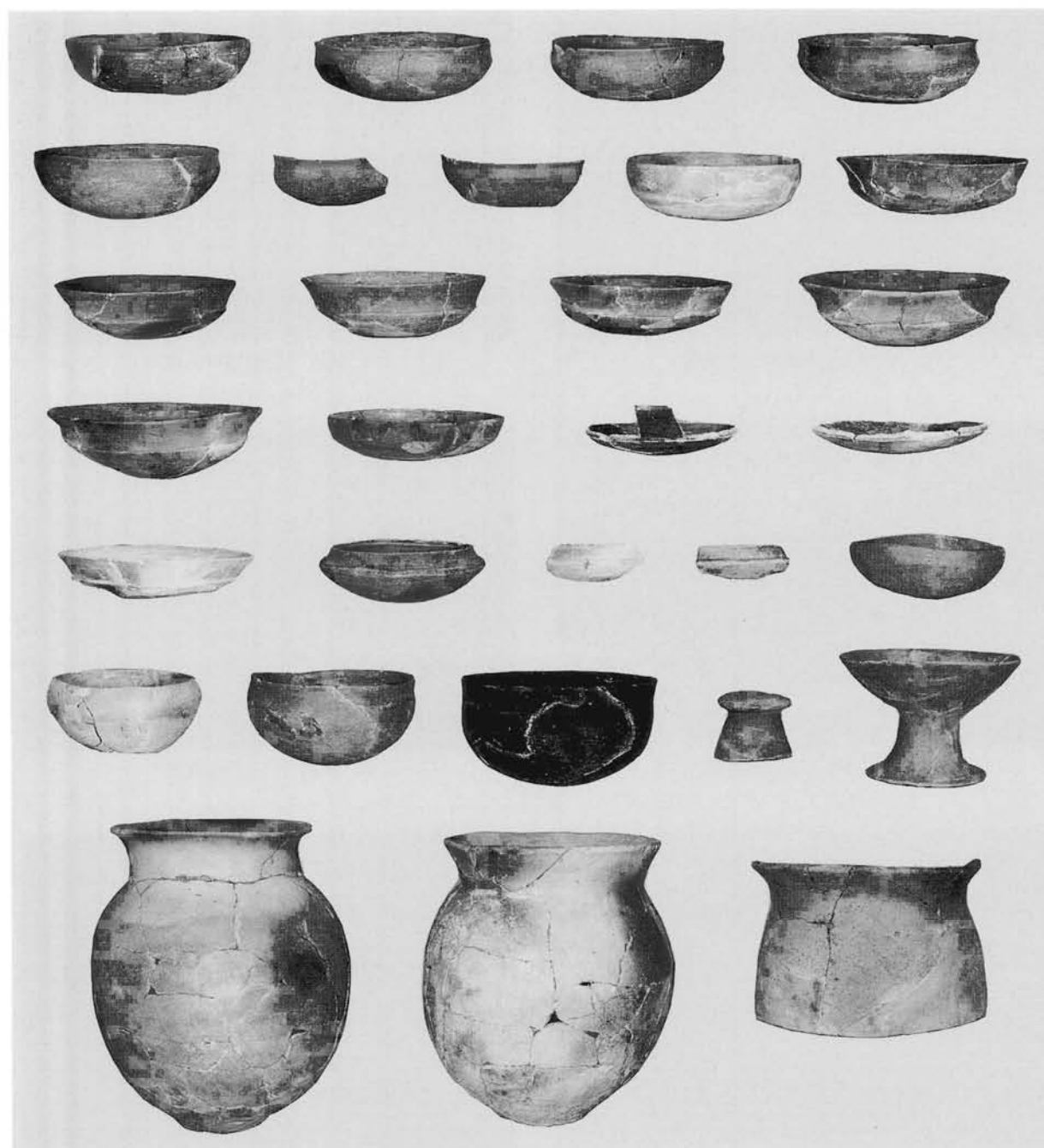
7. 134号土坑掘り方



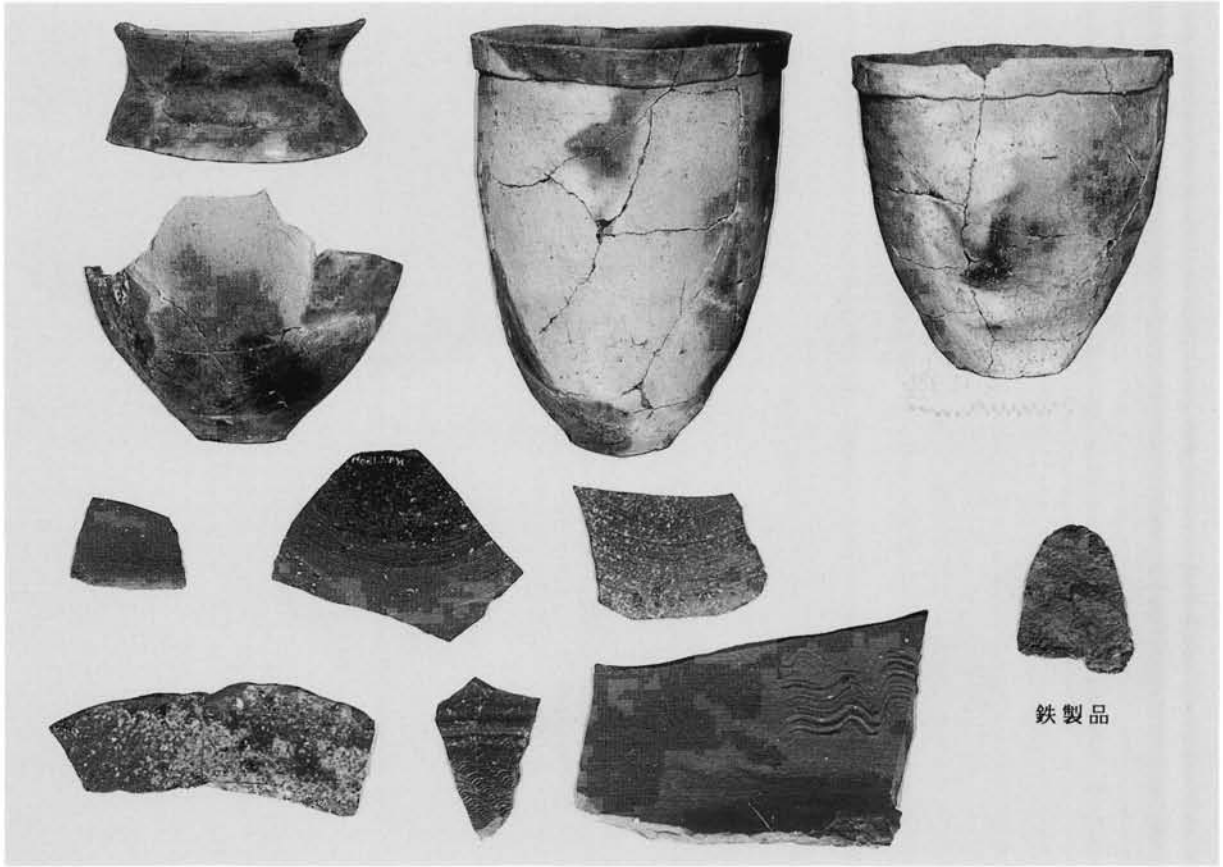
8. 土師質土器出土状態



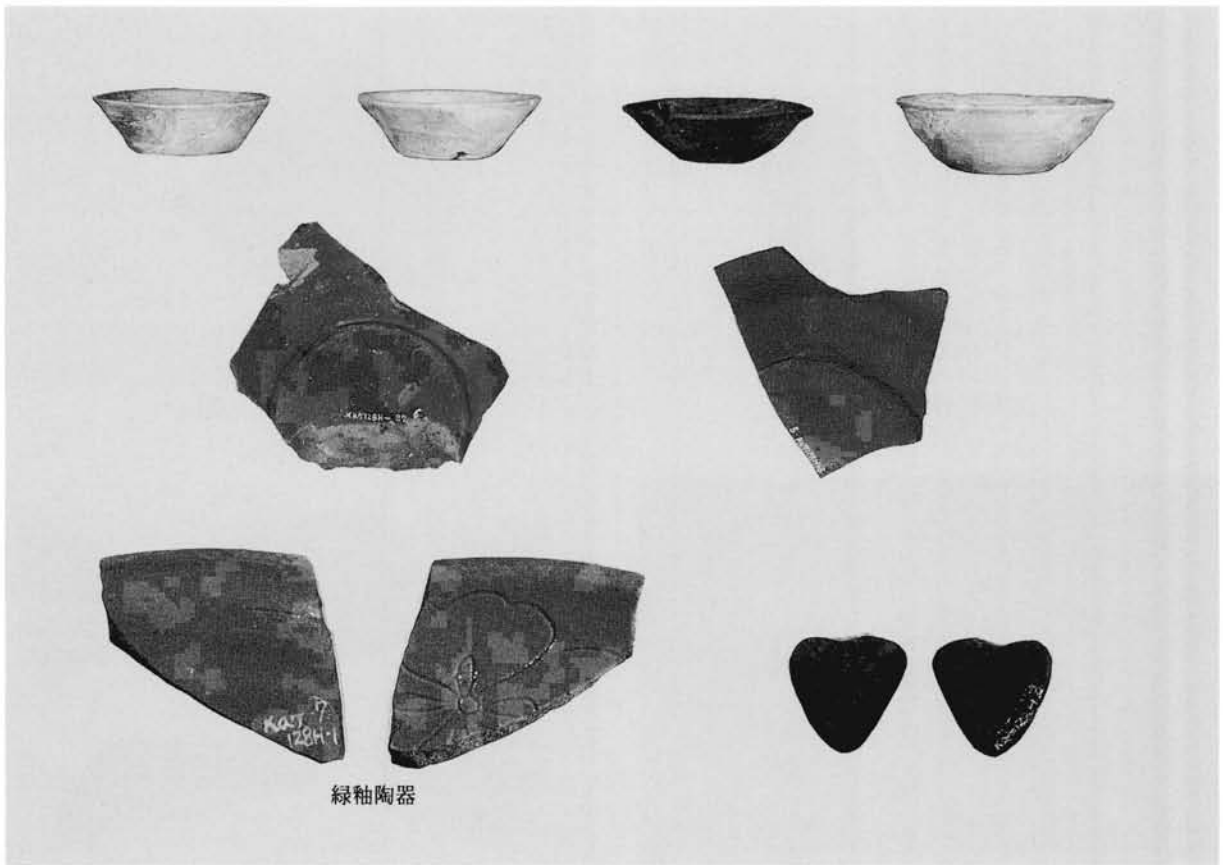
1. 4号住居跡出土遺物



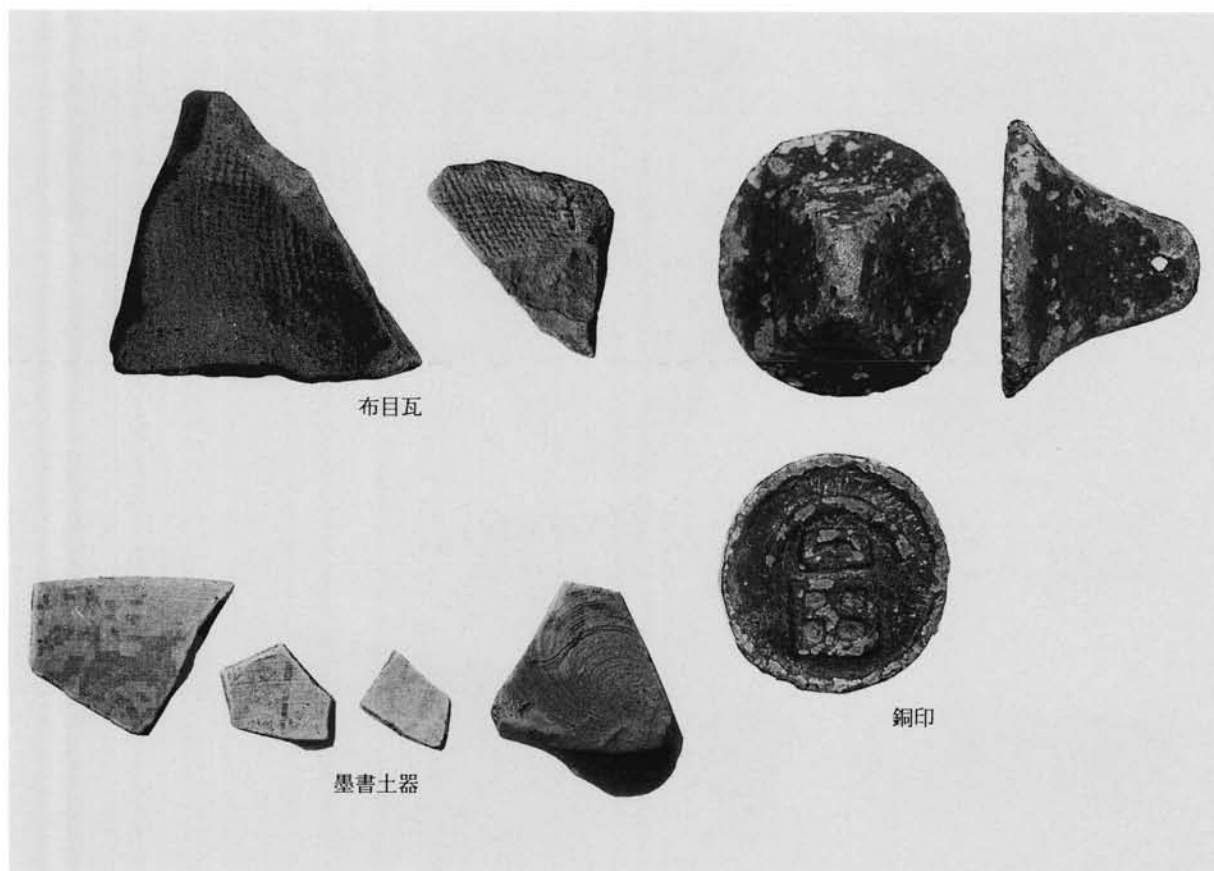
2. 129号住居跡出土遺物



1. 129号住居跡出土遺物



2. 128号住居跡出土遺物



1. 128号住居跡出土遺物



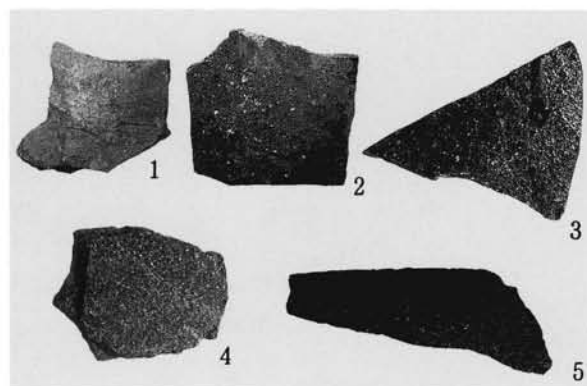
2. 130号住居跡出土遺物



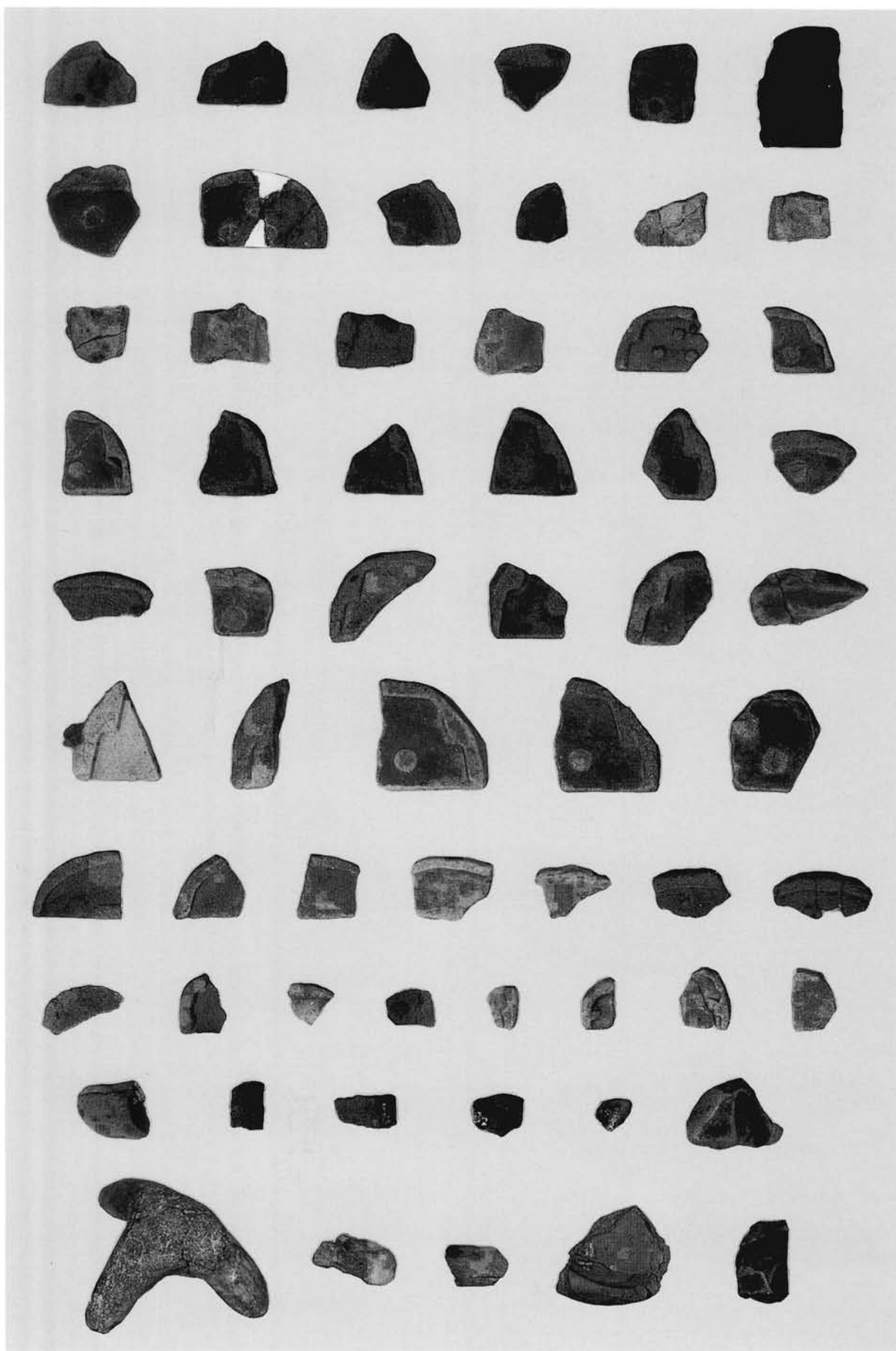
3. 135号土坑出土遺物



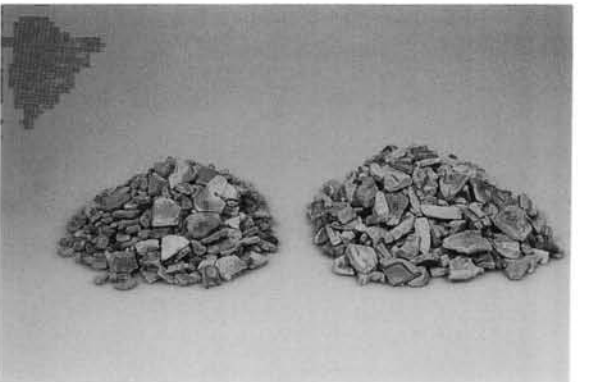
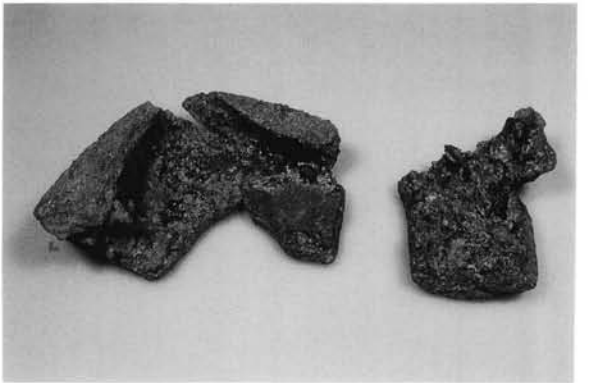
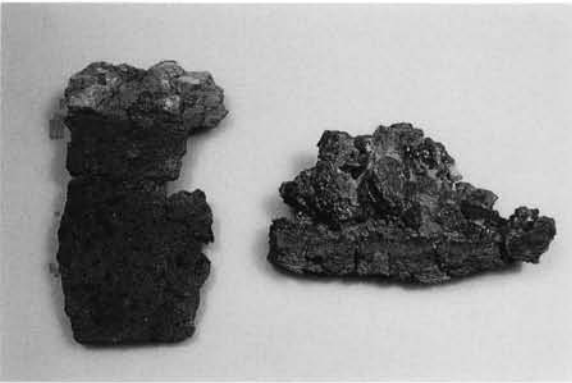
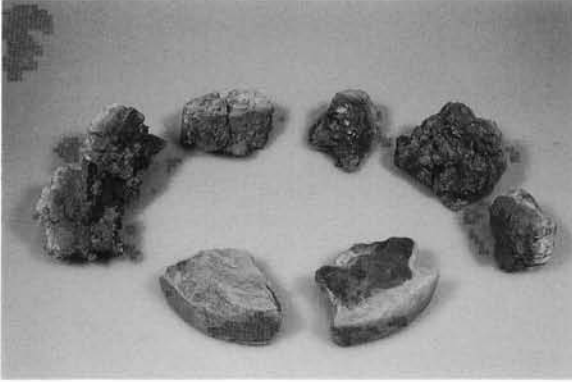
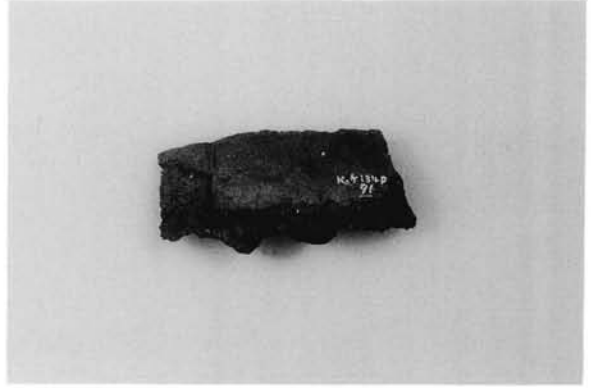
4. 141号土坑出土遺物



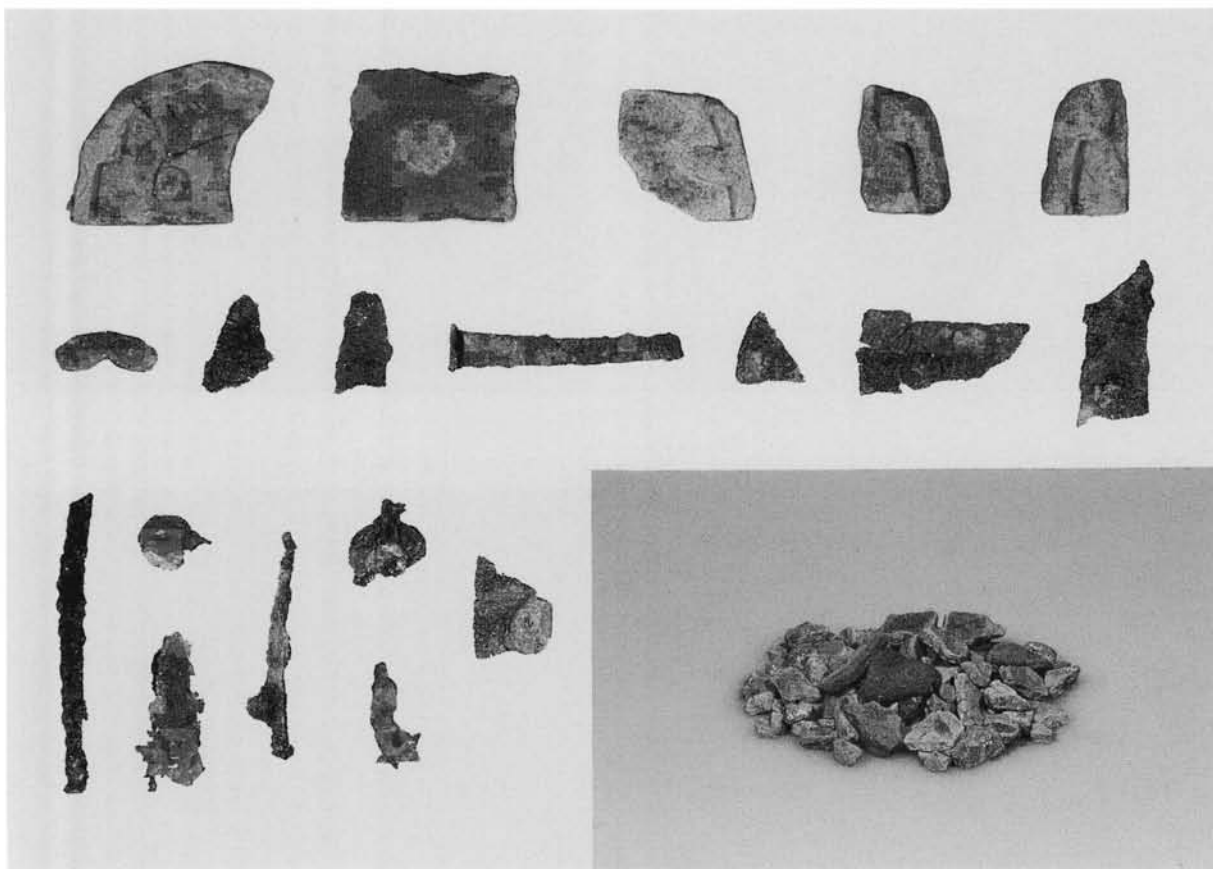
5. 141号土坑出土遺物



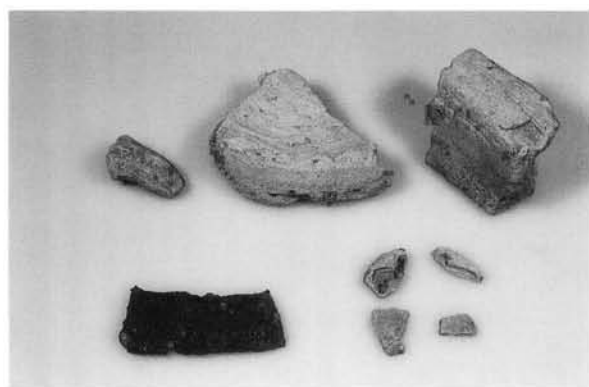
134号土坑出土遺物



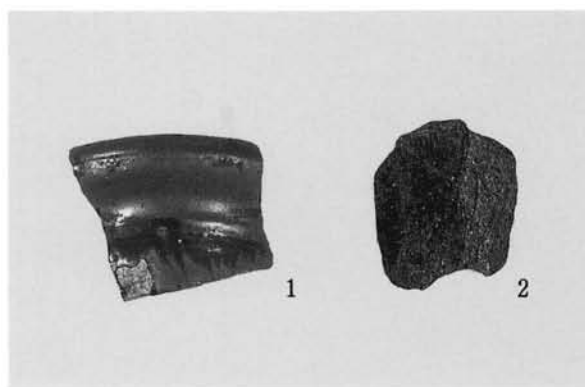
134号土坑出土遺物



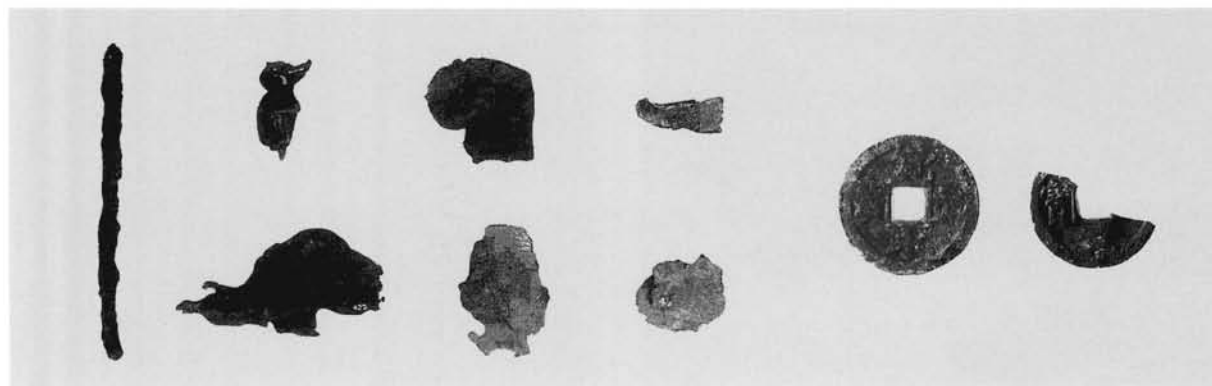
1. 132号土坑出土遺物



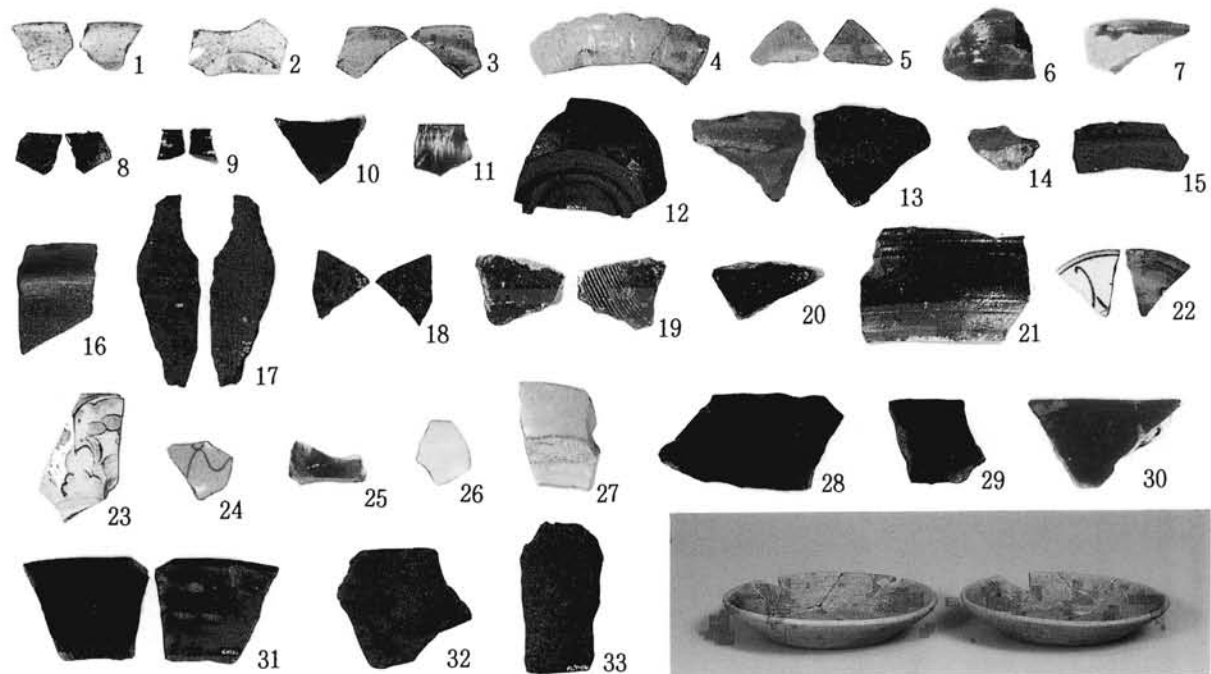
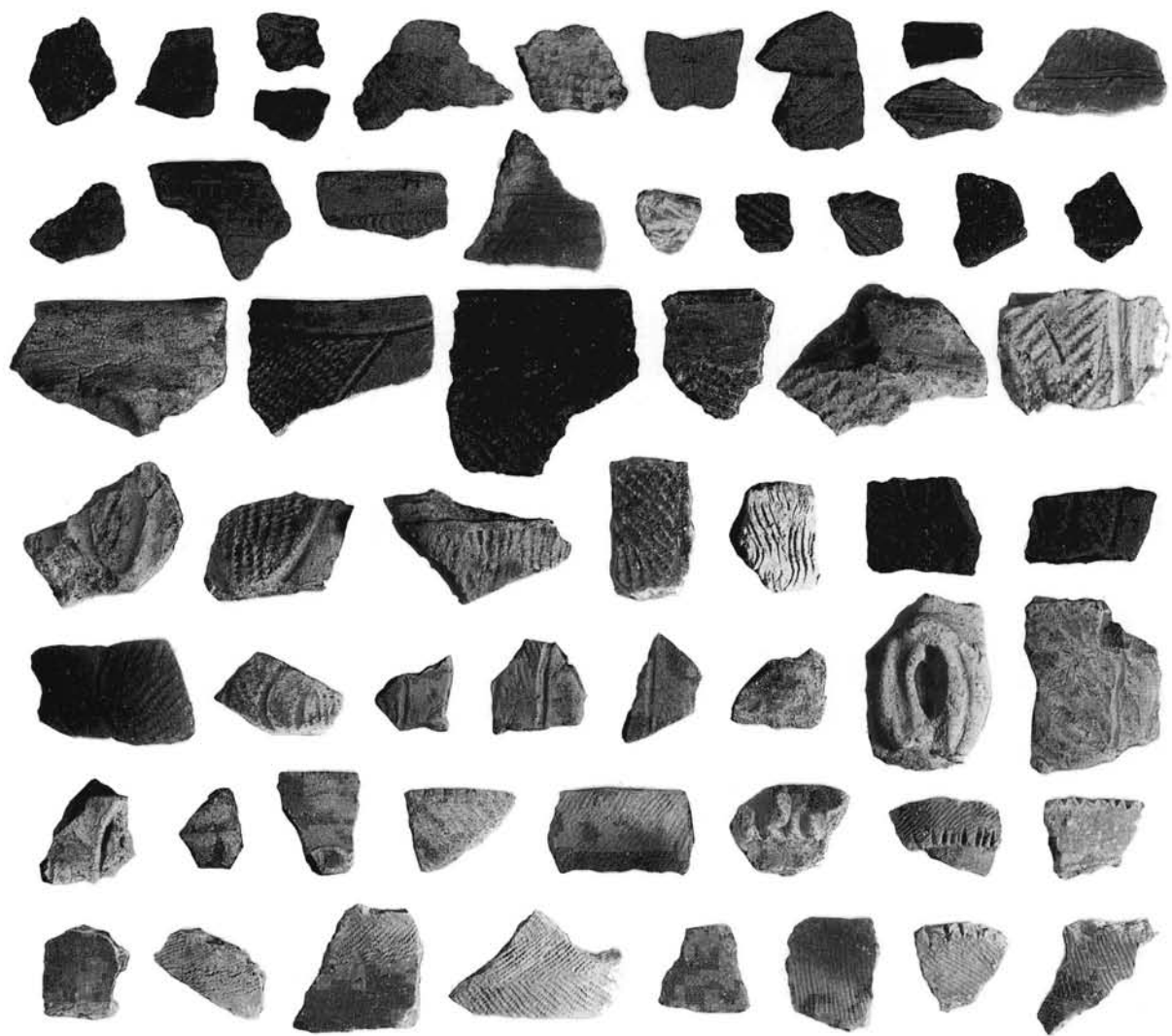
2. 1号ピット出土遺物



3. 3号ピット出土遺物



4. その他の遺物



遺構外出土遺物



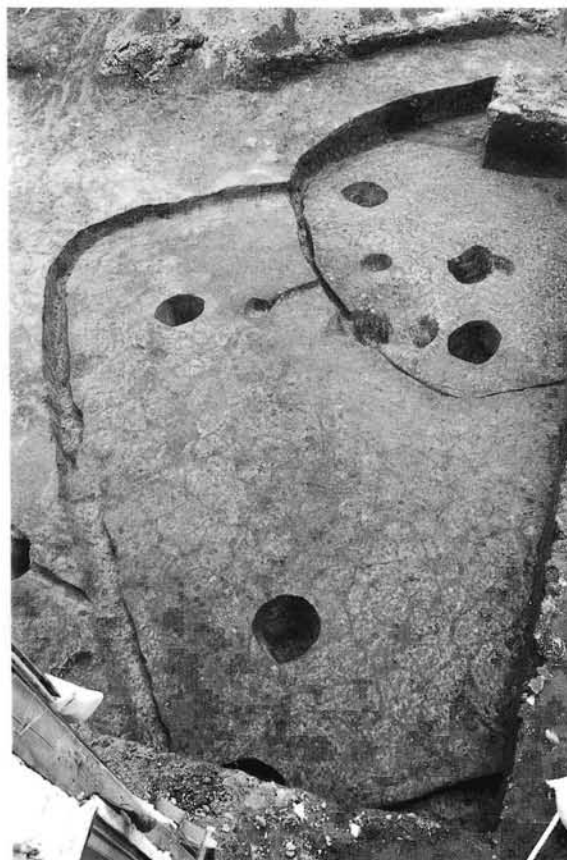
1. 調査区全景



2. 141号住居跡炭化材出土状態



3. 141号住居跡遺物出土状態



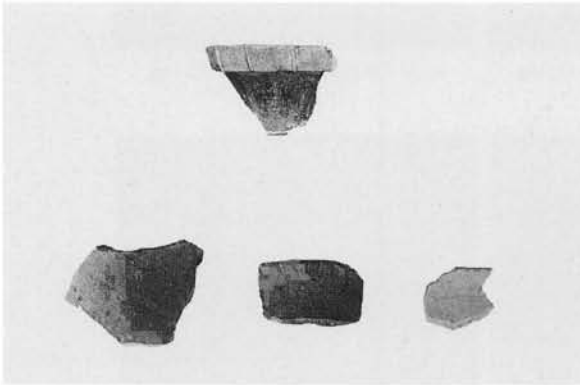
4. 142・143号住居跡



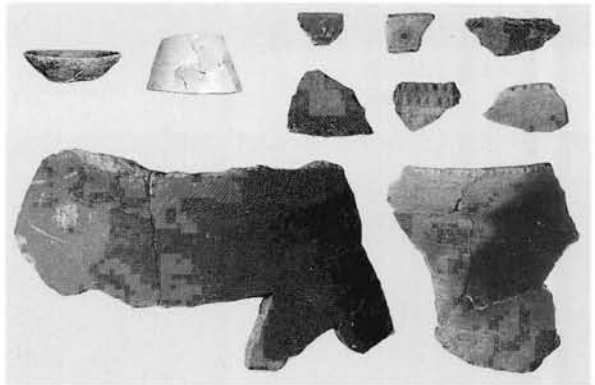
1. 144号住居跡



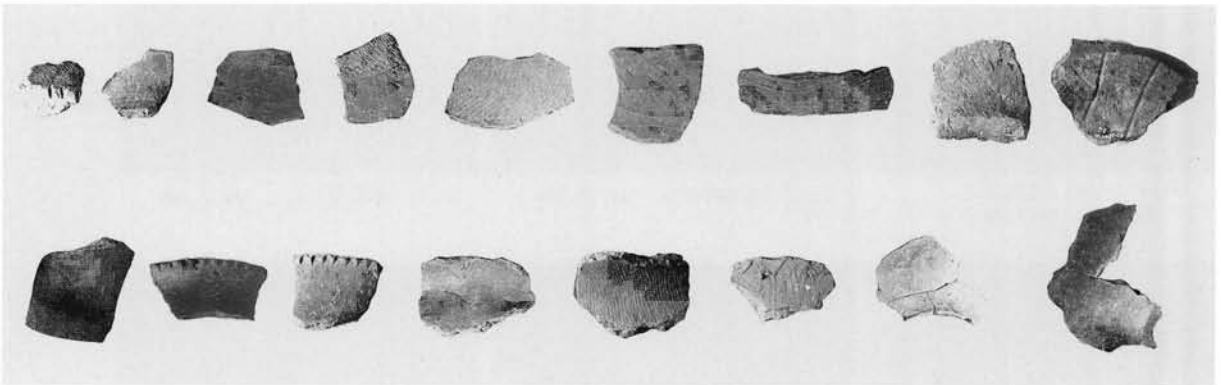
2. 144号住居跡貯藏穴A



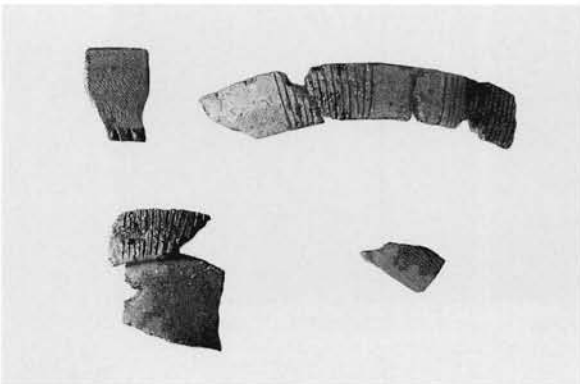
3. 141号住居跡出土遺物



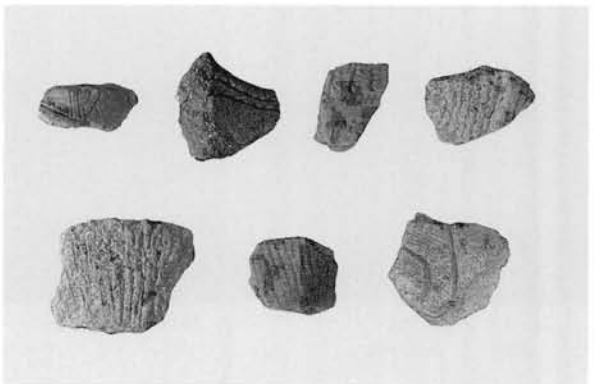
4. 142号住居跡出土遺物



5. 143号住居跡出土遺物



6. 144号住居跡出土遺物



7. 遺構外出土遺物

1号住居跡出土炭化材



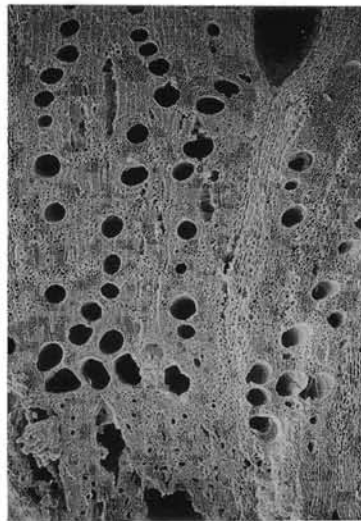
1a.コナラ節 (横断面)
No.10 bar:1mm



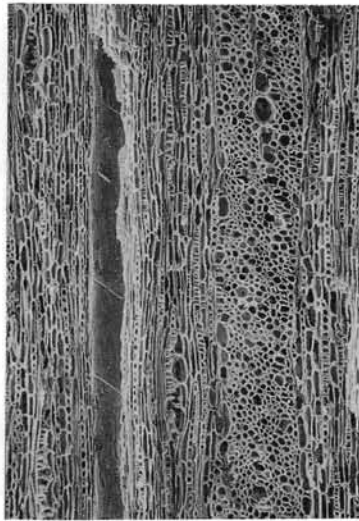
1b.同 (接線断面) bar:0.1mm



1c.同 (放射断面) bar:0.1mm



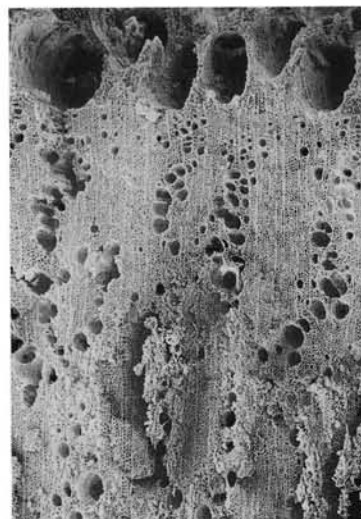
2a.クヌギ節 (横断面)
No.14 bar:1mm



2b.同 (接線断面) bar:0.1mm



2c.同 (放射断面) bar:0.1mm



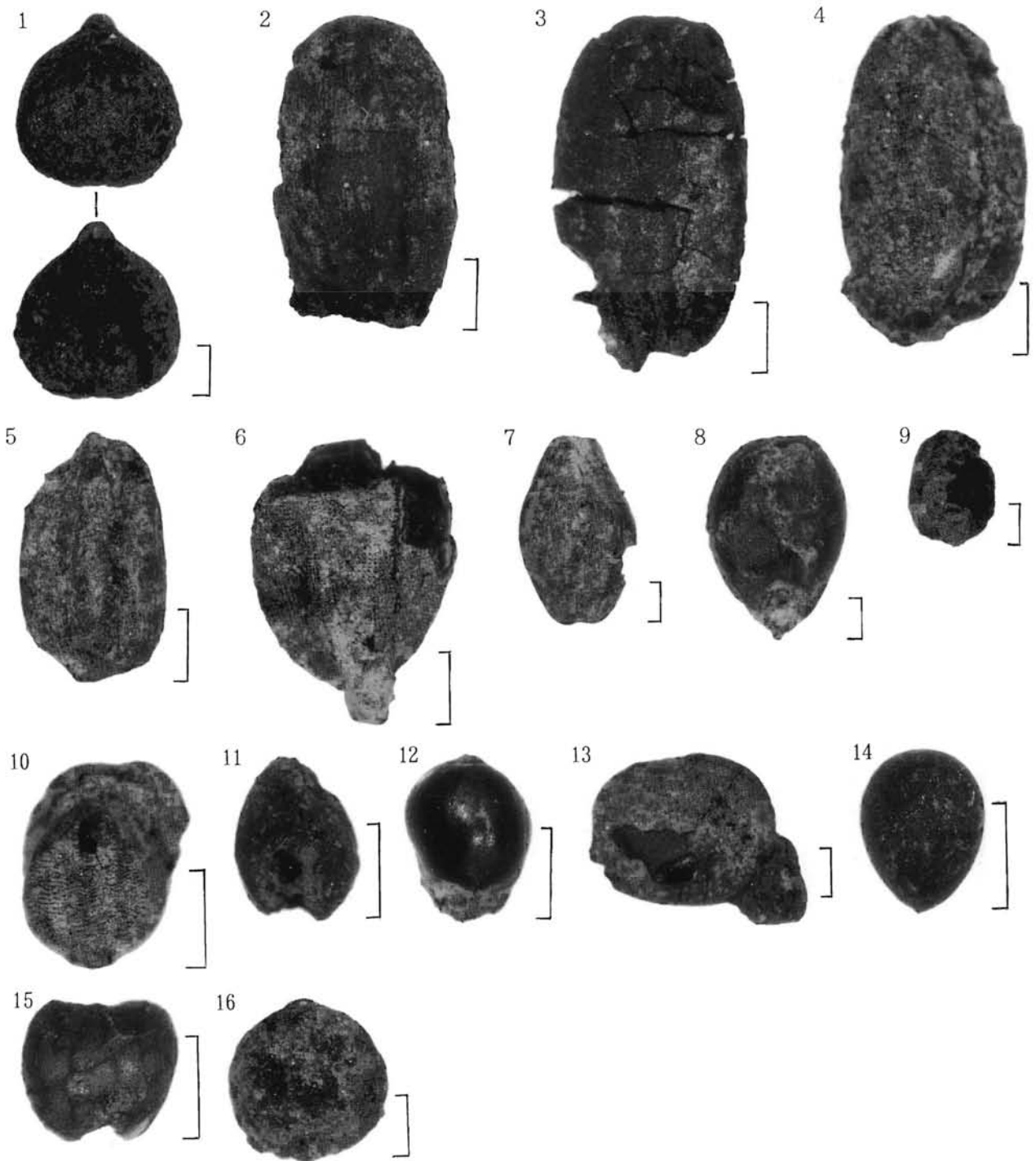
3a.クリ (横断面)
No.1 bar:1mm



3b.同 (接線断面) bar:0.1mm



3c.同 (放射断面) bar:0.1mm

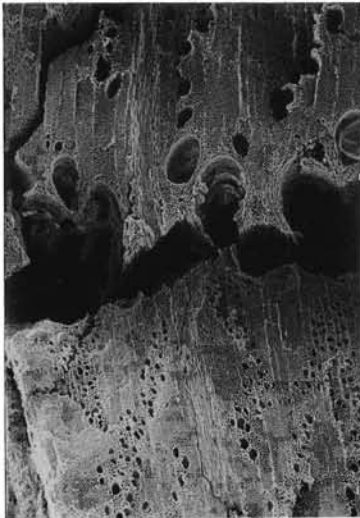


出土した大型植物化石 (スケールは1mm)

1. ブドウ属、炭化種子、Ⅱ区 2~5. イネ、炭化胚乳、Ⅰ区 6. イネ、炭化穎、Ⅰ区 7. オオムギ、炭化胚乳、Ⅱ区 8. オオムギ、炭化胚乳、Ⅳ区 9. コムギ、炭化胚乳、Ⅱ区 10. アワ、炭化穎果、Ⅲ区 11. キビ、炭化胚乳、Ⅲ区 12. タデ属C、炭化果実、3~6炭化材下 13. ササゲ属、炭化種子、Ⅱ区 14. エノキグサ、種子、Ⅲ区 15. シソ属、果実、Ⅲ区 16. 虫えい、Ⅲ区

23号住居跡出土炭化材（1）

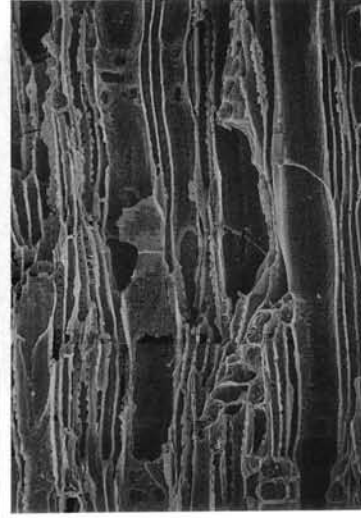
図版28
中道遺跡第41地点



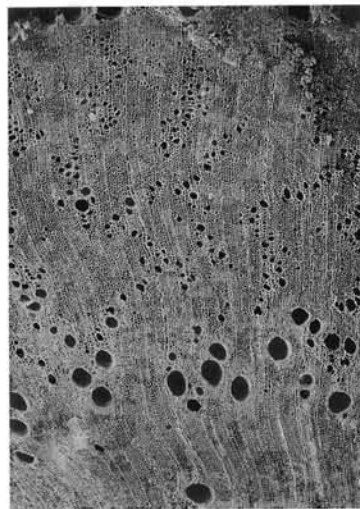
1a. コナラ節（横断面）
炭6 bar:0.5mm



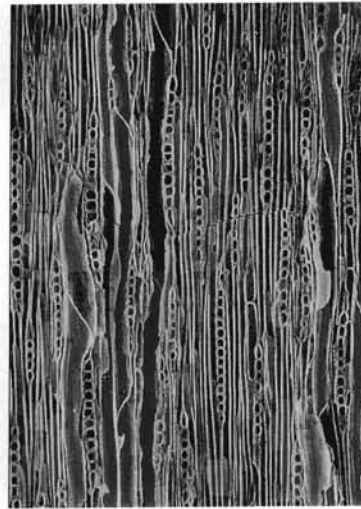
1b. 同（接線断面） bar:0.1mm



1c. 同（放射断面） bar:0.1mm



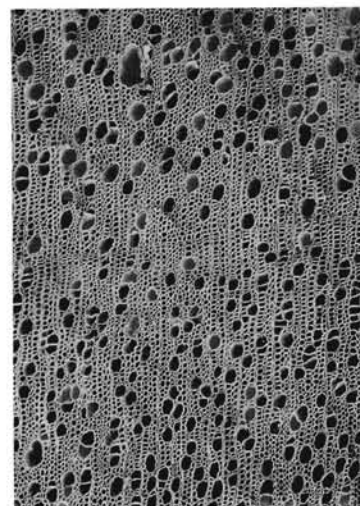
2a. クリ（横断面）
炭5 bar:0.5mm



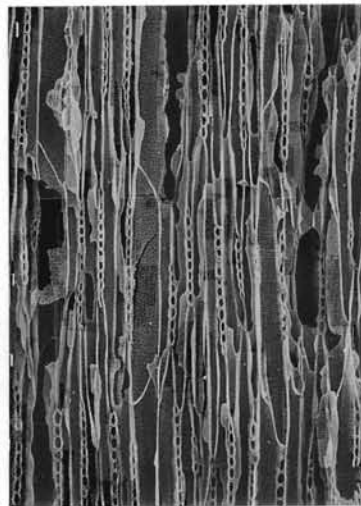
2b. 同（接線断面） bar:0.1mm



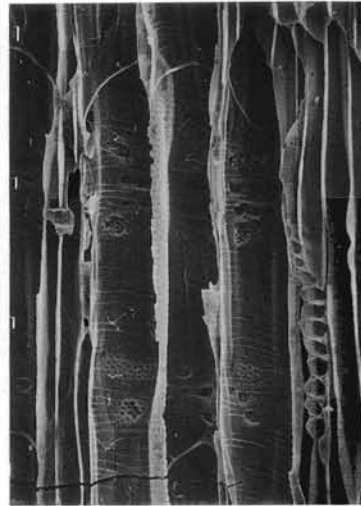
2c. 同（放射断面） bar:0.1mm



3a. トチノキ（横断面）
炭10 bar:0.5mm

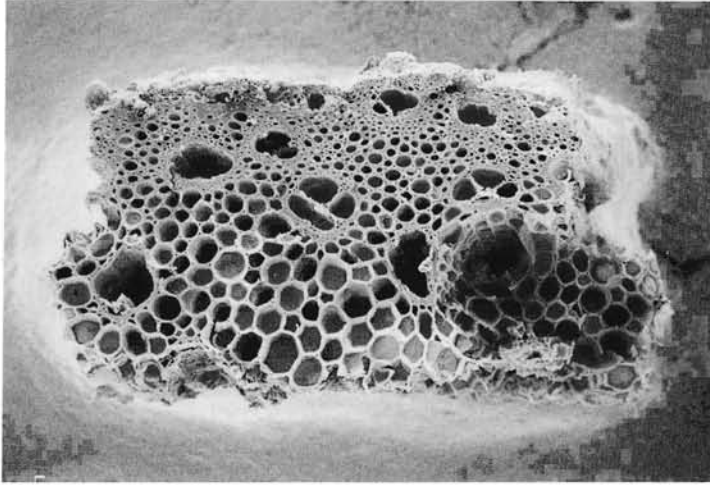


3b. 同（接線断面） bar:0.1mm

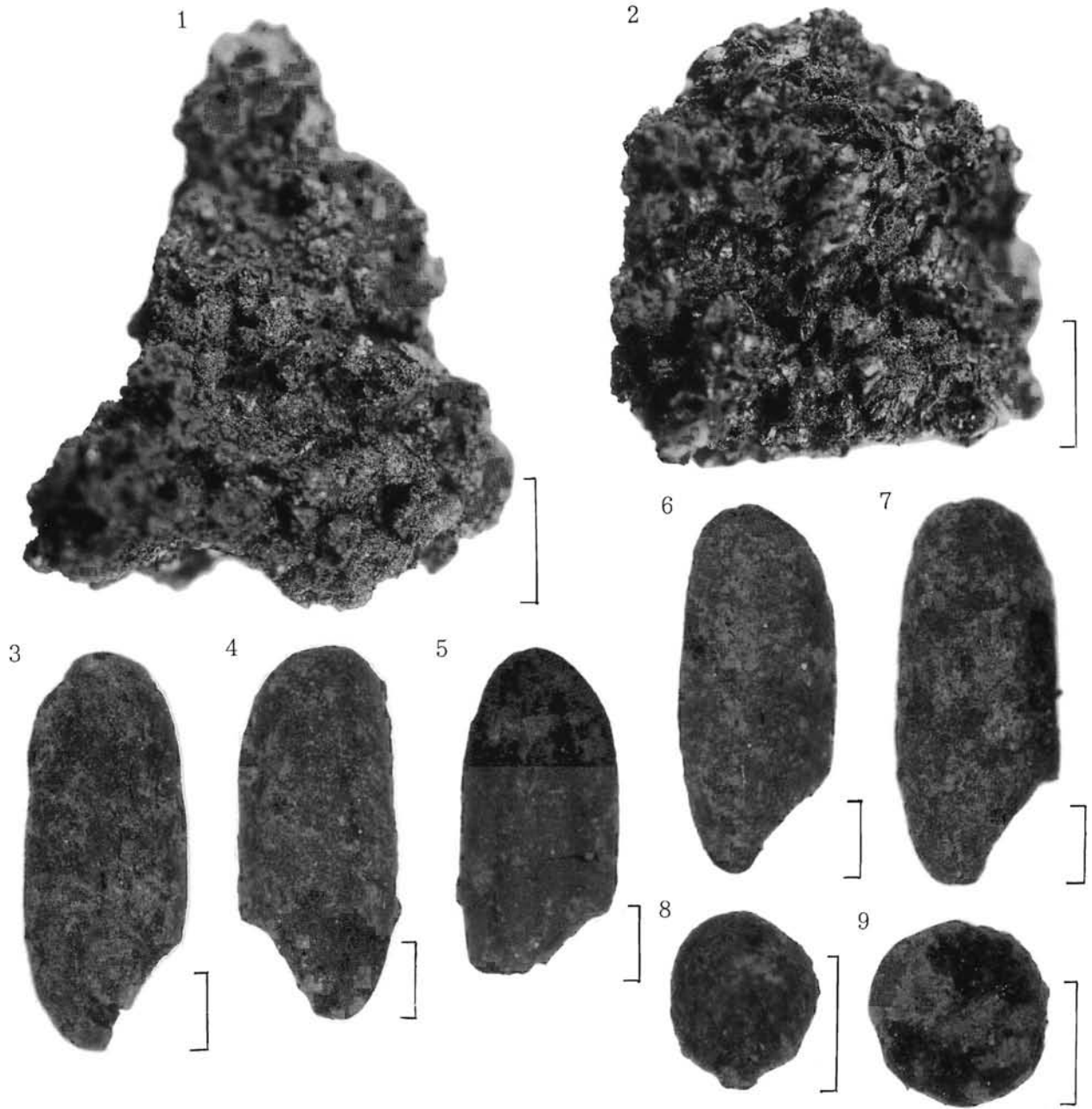


3c. 同（放射断面） bar:0.1mm

23号住居跡出土炭化材（2）



4a. ススキ類似（横断面）
炭12 bar : 0.5mm

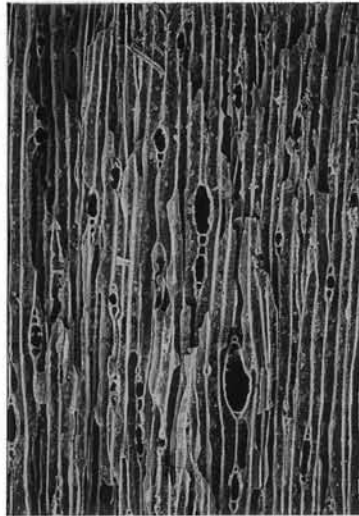


出土した大型植物化石（スケールは1、2が1 cm、3～9が1 mm）
1、2. イネ、炭化胚乳（塊状） 3～7. イネ、炭化胚乳 8. アワまたはキビ、炭化胚乳 9. 虫えい

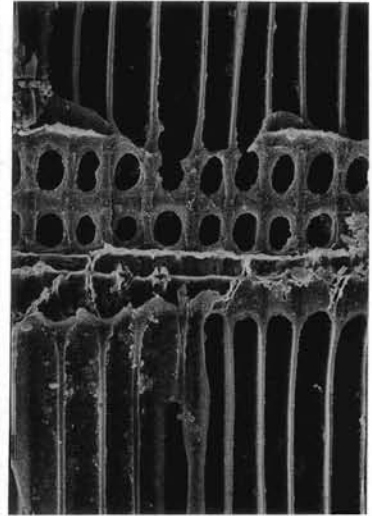
出土炭化材 (1)



1a. マツ属 (横断面)
130号土坑 炭5 bar:0.5mm



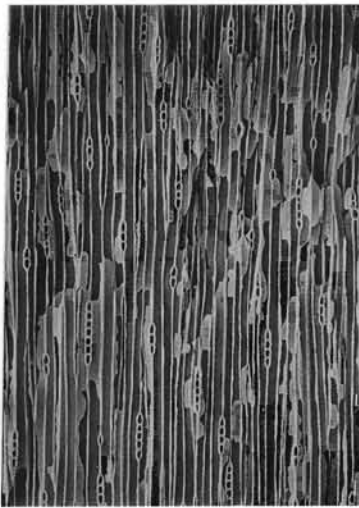
1b. 同 (接線断面) bar:0.1mm



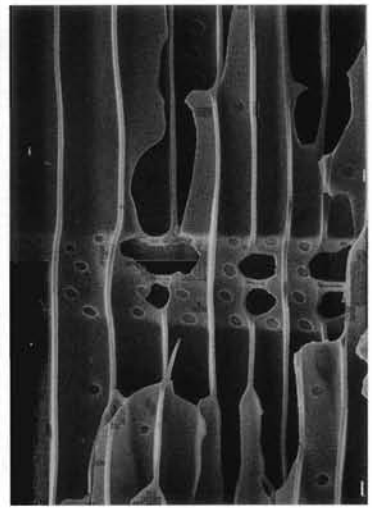
1c. 同 (放射断面) bar:0.05mm



2a. クロベ (横断面)
134号土坑 炭4 bar:0.5mm



2b. 同 (接線断面) bar:0.1mm



2c. 同 (放射断面) bar:0.05mm



3a. ヒノキ属 (横断面)
130号土坑 木質2 bar:0.5mm



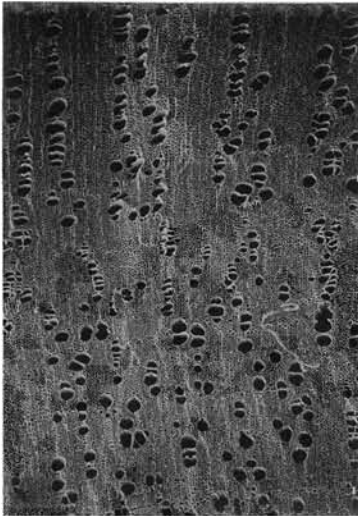
3b. 同 (接線断面) bar:0.1mm



3c. 同 (放射断面) bar:0.05mm

出土炭化材(2)

図版
32
城山遺跡第35地点



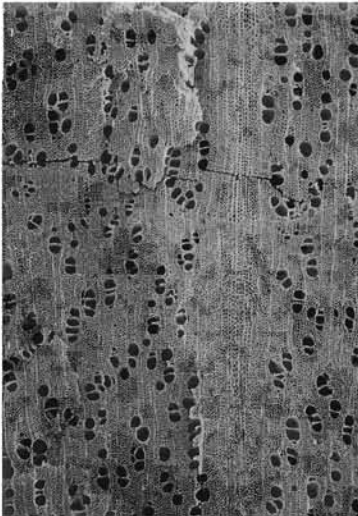
4a.クマシデ節(横断面)
132号土坑 炭3 bar:0.5mm



4b.同(接線断面) bar:0.1mm



4c.同(放射断面) bar:0.1mm



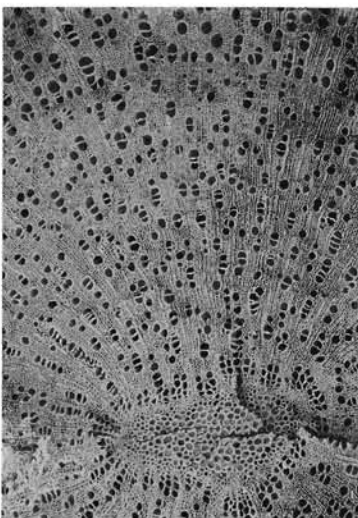
5a.イノシデ節(横断面)
134号土坑 炭2 bar:0.5mm



5b.同(接線断面) bar:0.1mm



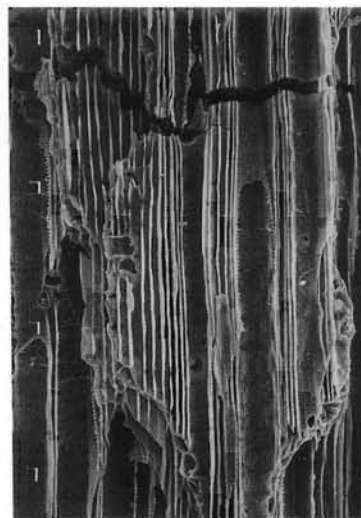
5c.同(放射断面) bar:0.1mm



6a.カバノキ属(横断面)
134号土坑 炭3 bar:0.5mm

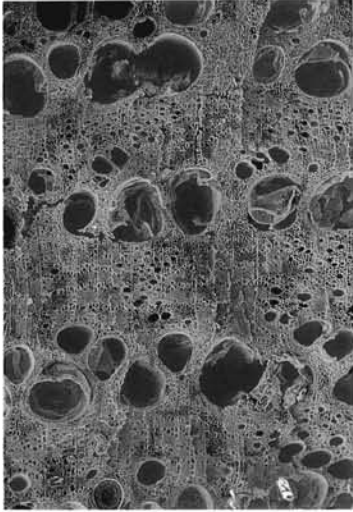


6b.同(接線断面) bar:0.1mm

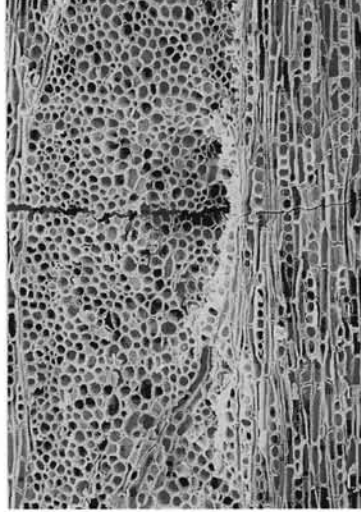


6c.同(放射断面) bar:0.1mm

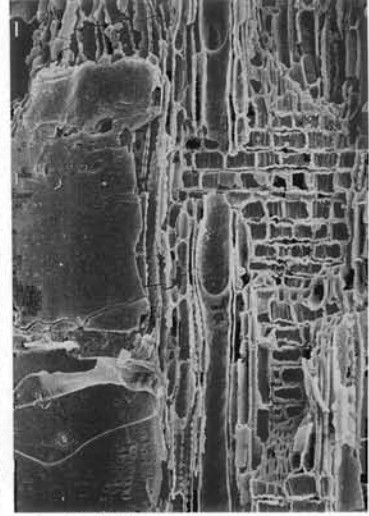
出土炭化材(3)



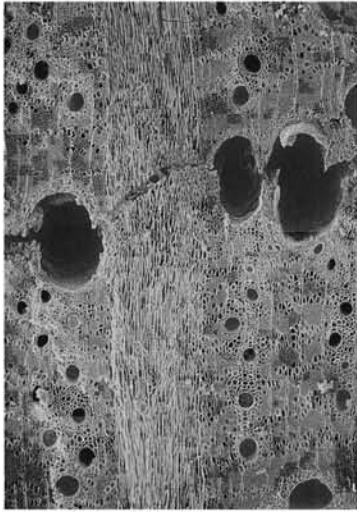
7a.コナラ節(横断面)
129号住居 炭2 bar:0.5mm



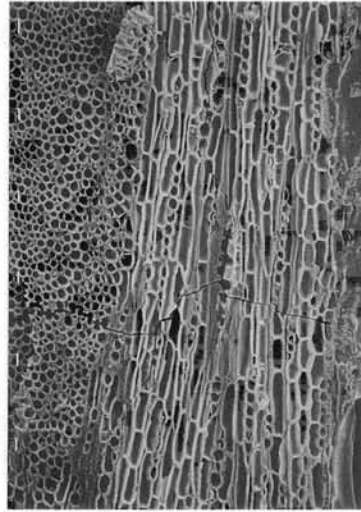
7b.同(接線断面) bar:0.1mm



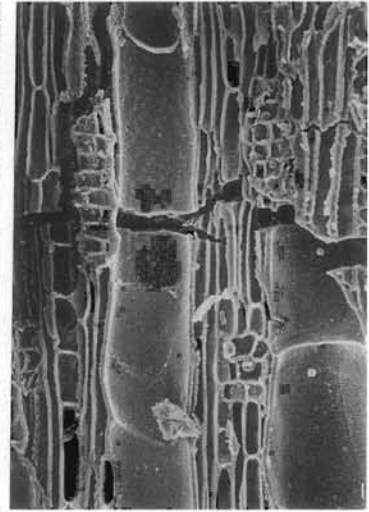
7c.同(放射断面) bar:0.1mm



8a.クヌギ節(横断面)
129号住居 炭5 bar:0.5mm



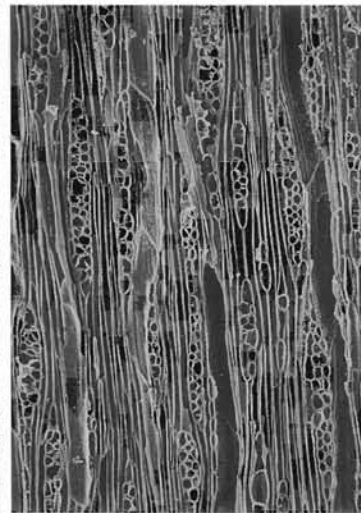
8b.同(接線断面) bar:0.1mm



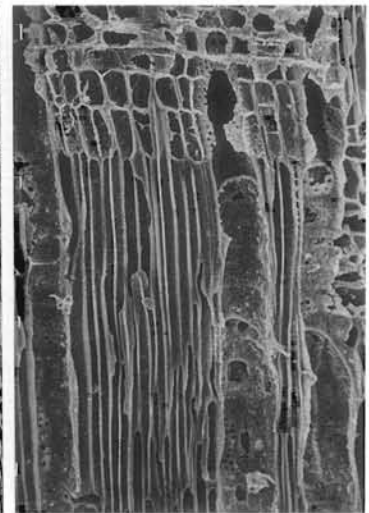
8c.同(放射断面) bar:0.1mm



9a.クスノキ科(横断面)
130号土坑 炭2 bar:0.5mm

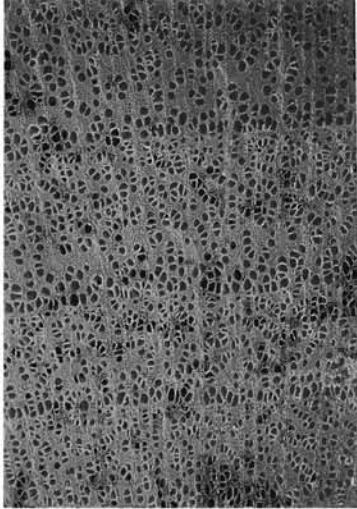


9b.同(接線断面) bar:0.1mm



9c.同(放射断面) bar:0.1mm

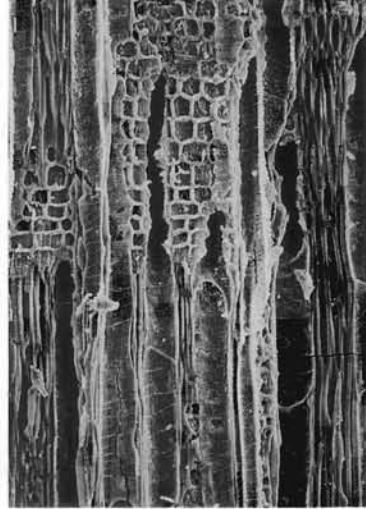
出土炭化材(4)



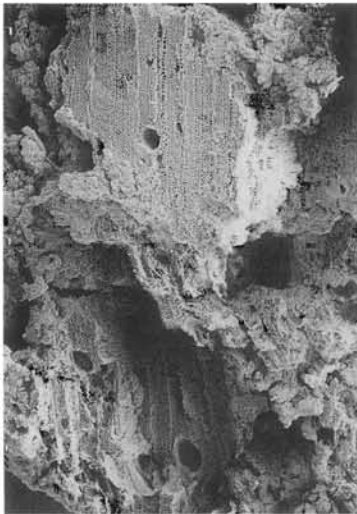
10a. ヤマザクラ (横断面)
130号土坑 炭3 bar:0.5mm



10b. 同 (接線断面) bar:0.1mm



10c. 同 (放射断面) bar:0.1mm



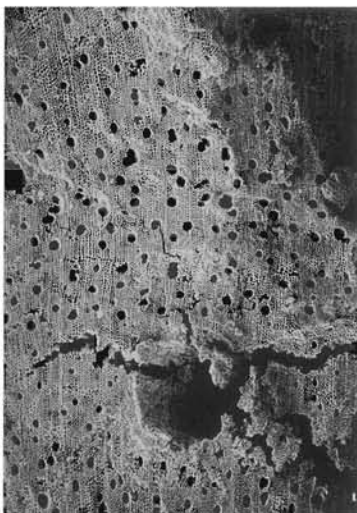
11a. マメ科 (横断面)
129号住居 炭3 bar:0.5mm



11b. 同 (接線断面) bar:0.1mm



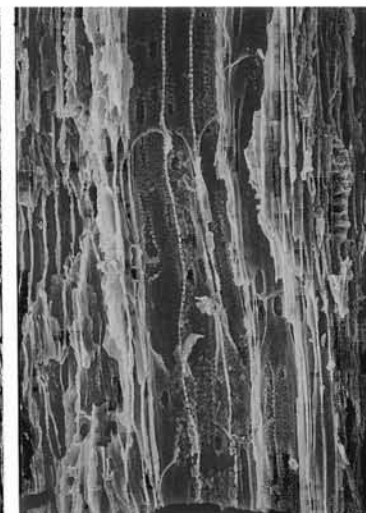
11c. 同 (放射断面) bar:0.1mm



12a. カエデ属 (横断面)
134号土坑 炭1 bar:0.5mm

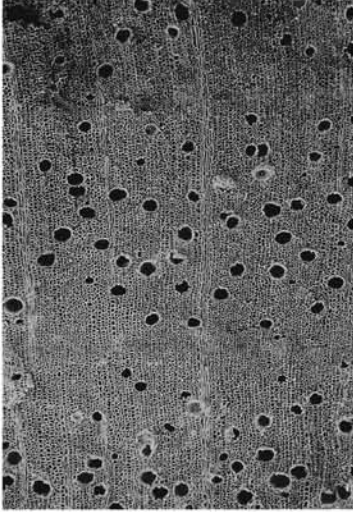


12b. 同 (接線断面) bar:0.1mm



12c. 同 (放射断面) bar:0.1mm

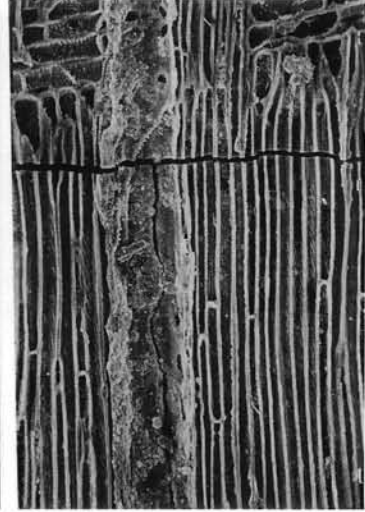
出土炭化材 (5)



13a. リヨウブ (横断面)
130号土坑 炭4 bar:0.5mm



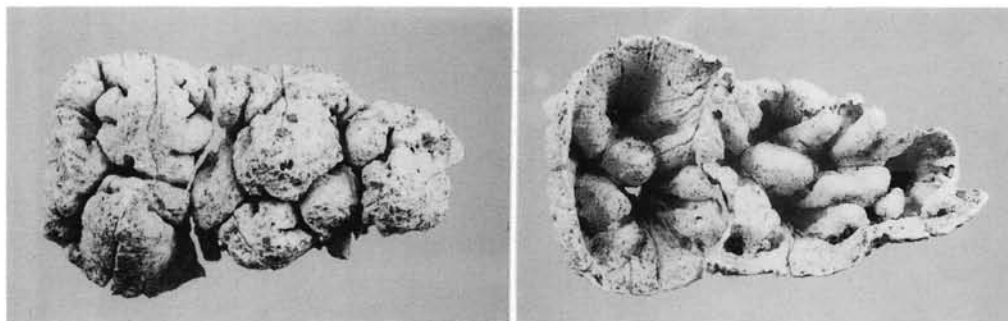
13b. 同 (接線断面) bar:0.1mm



13c. 同 (放射断面) bar:0.1mm



14a. 樹皮 (横断面)
134号土坑 炭5 bar:0.5mm



129号住居跡出土動物遺体（イノシシ上顎第3後臼歯左側 bar：1cm）

報 告 書 抄 録

ふりがな	しきしいせきぐん								
書名	志木市遺跡群 9								
副書名								巻次	
シリーズ名	志木市の文化財							巻次	第27集
編著者名	尾形 則敏 深井 恵子								
編集機関	埼玉県志木市教育委員会								
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 Tel 048 (473) 1111								
発行年月日	1999 (平成11) 年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯 (° ' ")	東経 (° ' ")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
なかのいせき 中野遺跡 (第43地点)	しきしかしわちょう 志木市柏町 1丁目1509-4	11228	002	35° 49' 48"	139° 34' 34"	19960530 ～ 19960607	212.06	個人専用住宅	
ふじまえいせき 富士前遺跡 (第15地点)	しきしかしわちょう 志木市柏町 3丁目1859-4	11228	011	35° 49' 38"	139° 35' 07"	19960603 ～ 19960611	239.63	個人専用住宅	
たごやまいせき 田子山遺跡 (第47地点)	しきしかしわちょう 志木市柏町 2丁目1733-4	11228	010	35° 49' 38"	139° 35' 10"	19960612 ～ 19960619	114.32	個人専用住宅	
たごやまいせき 田子山遺跡 (第48地点)	しきしかしわちょう 志木市柏町 2丁目1374-31他	11228	010	35° 49' 38"	139° 35' 10"	19961204 ～ 19961216	74.15	個人専用住宅	
たごやまいせき 田子山遺跡 (第49地点)	しきしかしわちょう 志木市柏町 2丁目1732-13	11228	010	35° 49' 38"	139° 35' 10"	19970109 ～ 19970117	133.47	個人専用住宅	
なかみちいせき 中道遺跡 (第41地点)	しきしかしわちょう 志木市柏町 5丁目2952-4	11228	005	35° 49' 34"	139° 34' 17"	19960625 ～ 19960702	154.44	個人専用住宅	
しろやまいせき 城山遺跡 (第34地点)	しきしかしわちょう 志木市柏町 3丁目2640-1	11228	003	35° 49' 45"	139° 34' 18"	19960712 ～ 19960801	162.00	個人専用住宅	
しろやまいせき 城山遺跡 (第35地点)	しきしかしわちょう 志木市柏町 3丁目2620-1	11228	003	35° 49' 45"	139° 34' 18"	19961115 ～ 19961225	84.40	個人専用住宅	
にしはらおおつかいせき 西原大塚遺跡 (第36地点)	しきさいわいちょう 志木市幸町 3丁目3146-3の一部	11228	007	35° 49' 16"	139° 34' 00"	19961011 ～ 19961025	248.75	個人専用住宅	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
中野遺跡 (第43地点)	集落	縄文時代 平安時代 時期不明	遺物包含層 住居跡 井戸跡	2軒 1基	堀之内Ⅱ式土器 土師器、須恵器 なし				
富士前遺跡 (第15地点)	集落	古墳時代前期	住居跡	1軒	土器		脚台部に凹線文を施す元屋敷式の高坏が出土した。		
田子山遺跡 (第47地点)	集落	平安時代	住居跡 土坑	2軒 1基	土師器、須恵器 土師器				
田子山遺跡 (第48地点)	集落	古墳時代後期	住居跡	1軒	土師器				
田子山遺跡 (第49地点)	集落	平安時代 近世以降	住居跡 土坑 土坑	2軒 1基 3基	土師器、須恵器 土師器・須恵器小片 なし				
中道遺跡 (第41地点)	集落	平安時代	住居跡 溝跡	1軒 1本	土師器、須恵器、灰軸陶器、炭化種子 土師器、須恵器		火災住居から炭化材と炭化種子(イネ)が出土した。		
城山遺跡 (第34地点)	集落	古墳時代後期 時期不明	住居跡 土坑	3軒 1基	土師器、須恵器、土錘				
城山遺跡 (第35地点)	集落	弥生時代後期 古墳時代後期 平安時代	住居跡 住居跡 住居跡	1軒 1軒 2軒	土器 土師器 土師器、須恵器、灰軸陶器、緑軸陶器 銅印「冨」の文字		今回の調査では、近世の鋳造関連の遺構を検出することができた。特に130・134号土坑についてはそれぞれ、鋳造遺構、熔解炉と考えられる。また、平安時代の128号住居跡からは、銅印が発見された。		
	城跡	中・近世	土坑 井戸跡	15基 1基	陶・磁器、鋳鉄鋳物、鋳型、土製品 スラッグ、磁石、熔解炉の炉壁				
西原大塚遺跡 (第36地点)	集落	弥生時代後期	住居跡	4軒	土器				

志木市の文化財 第27集

志木市遺跡群 9

発 行 埼玉県志木市教育委員会

埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号

発行日 1999（平成11）年3月31日